樹葉針

十週年記念號

第六號

東京商科大學一橋山岳部

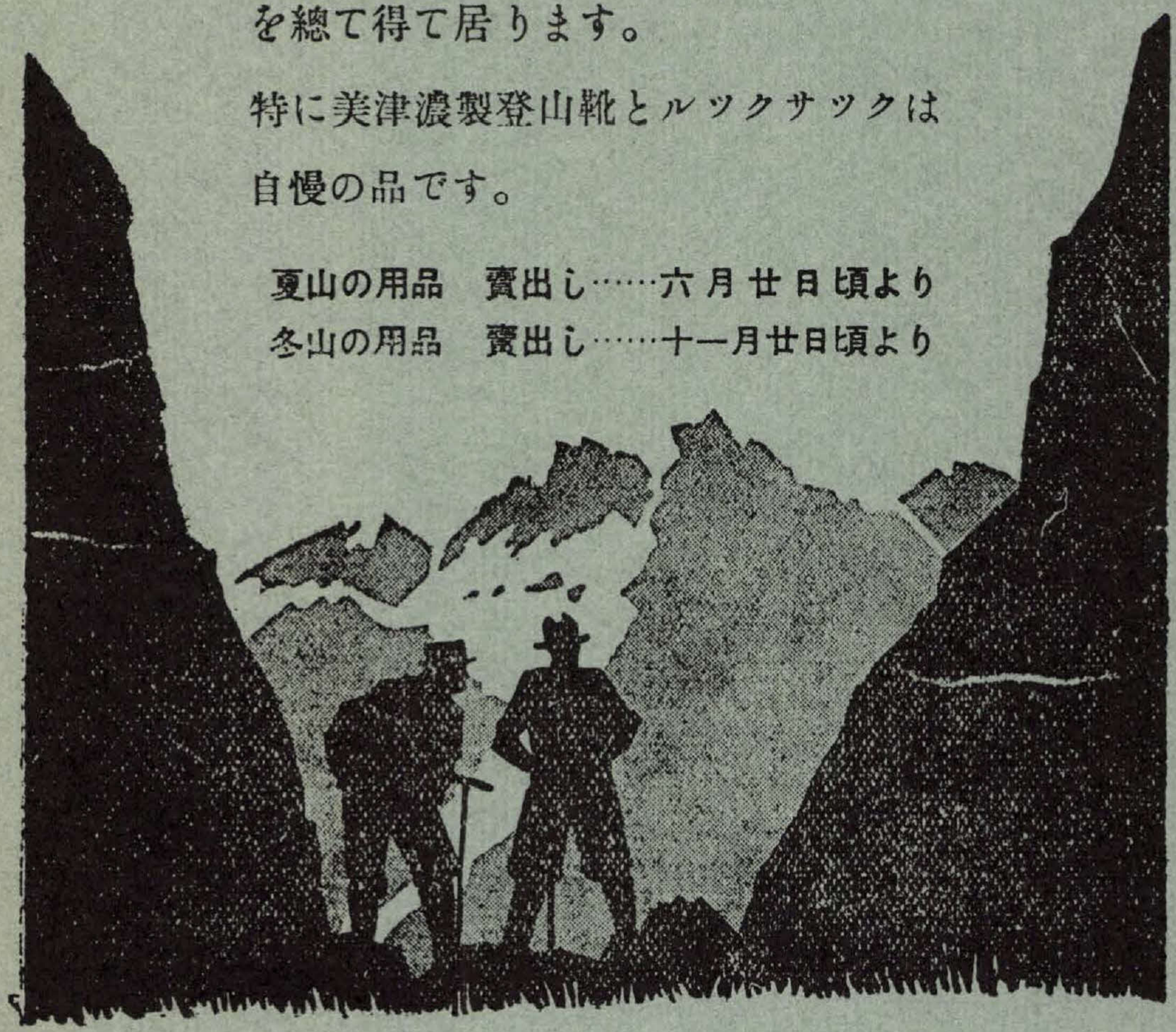
MIZUNO MOUNTAIN GOODS

山の用品は美津濃

四季常に各山の用品が取揃つて居ります。各大學山岳部及び各聯盟の御愛用を總て得て居ります。

特に美津濃製登山靴とルツクサツクは自慢の品です。

夏山の用品　賣出し……六月廿日頃より
冬山の用品　賣出し……十一月廿日頃より



大阪　淀屋橋
東京　小川町
神戸　元町通

美津濃

名古屋大須門前
京都　四條通
大阪南　日本橋

OSAKA TOKYO KOBE KYOTO NAGOYA

樹葉針

第六號

1930——1932

十週年記念號

針葉樹　第六號目次

紀　文

シルク・ド・ガバルニ……田中　薫……三
漂泊に於ける山と人との關聯……芋川　稔一……一〇
春の赤石岳……園山德三郎……四
"Vom Leben auf der Alm"……吉澤一郎……五
鹿島鎗岳……堀岡　清……六
北信三日の山旅……吹原不二雄……七
北ノ又川入り……高見要……九

雜　記

早春の麓……小川竹夫……一〇八

記錄

『山十夜』……村尾金二……一一〇
山で拾つた話二つ……丸茂平造……一一三
Tの死を憶ふ……吉澤一郎……一二七
乘鞍を越えて飛騨へ……鈴木英雄……一三一
北海道方面……一三六
東北地方面……一四二
上越國境・日光方面……一四五
上信國境方面……一七三
東京附近及富士山方面……一八一
秩父方面……一八九
八ケ岳・美しケ原方面……一九一

妙高山・火打山方面……一九三
北アルプス……一九四
南アルプス……二三六
木曾駒ケ岳……二四三
四國……二四三
スキー練習……二四四

山小屋

報……二五三

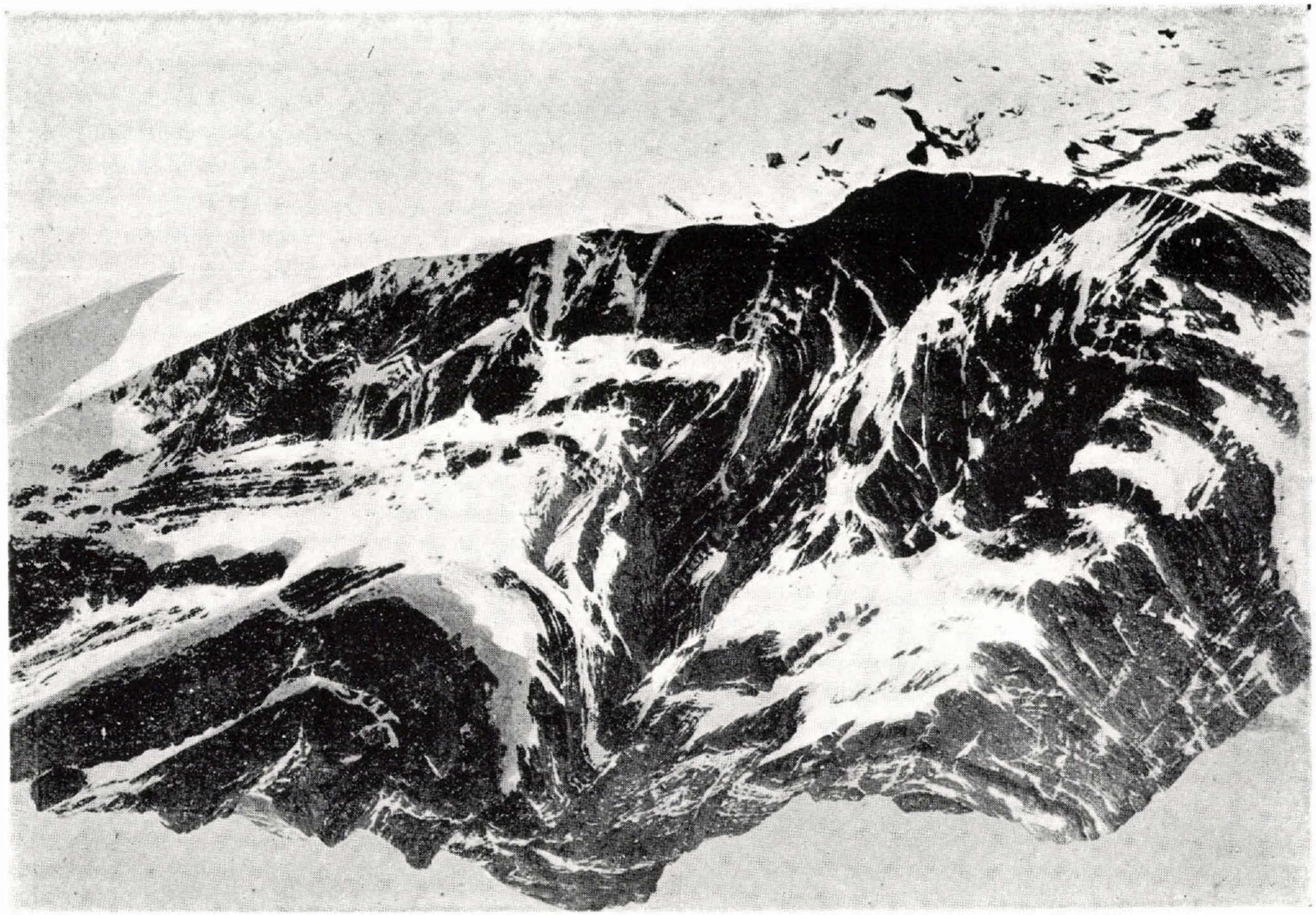
寫眞

ピク・ド・マルボレ……田中薫口繪
爺小屋より劔岳……磯野計藏口繪
見座沼より乘鞍岳を望む……堀岡清口繪

コル・デ・サラデトよりブレシュ・ド・ローランを仰ぐ……田　中　薫……六
爺小屋より南望……磯　野　計　藏……一三
火打山と焼山……吹　原　不二雄……一八
中ノ岳……鈴　木　英　雄……二九
奥手稲山の家……堀　岡　清……一三六

地　圖

ガバルニ附近圏谷と氷河の分布……田　中　薫……八
笹ケ峰牧場附近……吹　原　不二雄……八〇



見座沼より乘鞍岳を望む　　堀岡　浩

紀文

シルク、ド、ガバルニー

田中薫

同じく山に行くとチロールやピレネーに行くのとでは其處に非常な氣持の上の相違があつた。私は日本の山が好きで歐洲でも日本の山歩きの氣分を求めたから、私にはアルプスに行くよりも寧ろピレネーあたりを歩く方が自然であつた。一九二九年のイースターの休みに私は古びたカーを驅つて夢の様な南フランスの春をピレネーの雪山へ近づいて行つた。此の一文は幾多の快い思出を伴ふ此のピレネー行の一節である。

一

諸家のピレネー紀行の中によく「シルクのピレネー」と云ふ言葉が見える。それ程ピレネーを特色づけるものはシルクである。北に向つて次ぎ〳〵と大きな口を開いて並んでゐる大規模な圏谷（シルク――カール――サーカス）の配列である。その中で最も有名で旅人の誰もが必ず訪ねるのは此の山脈の略中央に當るガバルニーのシルク Cirque de Gavarnie である。

遠く雲霞の間にピレネーの連亘を望む邊りに、カトリックの靈場で、年々六十萬人からの巡禮を集めるルルド

Lourdes といふ不思議な町がある。此処から山に入る。ルス Luz の町を經ぐる邊りから斜陽は綠の牧場を横ぎつてポプラの影を長く曳いた。ルルドからの電車もルスで終つて之から先は山陰、谷奥へと一條の淋しい白路が通じてゐる。人通りは全く絶えて狹いけれども緩い勾配の嶮に快いドライブであつた。白つぽい土壁のスレート葺の家が點々が簡つて行く夕闇の中に、にじんで妙に眼の底に浸みわたる。山峽の春は未だ淺く暮れては風は急に肌寒くなつた曲折の山道を登る頃は冷めたい星の光を仰いでゐた。ガバルニーの村に入り、橋をわたつて漸く急になつた曲折の山道を登る頃は冷めたい星の光を仰いでゐた。右手の低い處にあるホテル・デ・ボアイヤジュールといふ山宿に着いたのは八時頃であつた。主人はアンリ・ベルジュールといふ良いお爺さんで、フランス流のセツカチなお世辭も云はず只ニコ〳〵と迎へて呉れる。英人の好みに投ずる清潔な家。天井に丸太を見せた黒つぽい造作。純白のリネンもピンと洗濯がきいてゐるし、ファイヤープレースには赤々と薪の火が燃え盛つてゐた。一目で英國人と判る愛嬢が三人、白髪の上品な老紳士が二人夕食後の靜かな讀書に耽つてゐるところであつた。案内された一室二床の四十法も高くなく、ルション邊りで受けた輕い失望は跡形もなく消えて心からピレネーを禮讃したい氣持になつて眠りに落ちた。

日本でピレネーに憧れた頃讀んだエミー・オークレーの「ピレネーの丘の上の町」Amy Oakley: Hill-Towns of the Pyrenees といふ本の著者も其の挿畫を描いた夫君と共に此の宿に長滯在してゐたのであつた。此の人にはアルプアリチームを描いた Cloud Land of France と云ふ好著がある。その挿圖は感心せぬが、山民の生活を風景描寫

の中に生かしてゐる思ひ遣りの深い筆はアメリカ旅行者の最上級の代表と云ふ可きであらう。

二

昨夜半明に見たシルクの壁の氷雪は脅威的な壓力を以つて此の村の小さな人の營みを押し潰す様に峙つてゐる。朝早く馬に乘つて、其の上に淺くデブリに根を托して松の若木が繁つてゐる。その松の枝越しに氷雪の壁友と二人露しげき牧草の原を打たせて行く。シルクから流れ出す川水が淺く綠草の上に氾濫してゐるのを幾度か馬は蹄をぬらして渡つて行く。平がつきU字谷の壁が兩側から迫り立つ處に來ると新しいモレーンの堆積が小山をなして、その前からシルクの底に降りる道がある。ほとんど直立する大岩壁には小さな瀧が懸つてゐるが、これが有名なガバルニーの瀧の冬の姿である。絶えず落下するアバランシュが漏斗狀のラビネンツークの下に綺麗な扇狀のデブリの小山をいくつも作つてゐる。疊を積み上げた様な水平の岩層が飽くまで重々しい壓力を示して、上へ上へと重つてゐる。シルクの中部は甚だしい褶曲が山體の腹を斷ち割つた切口の様に現れて、此の大きな包括力に富んだ眺めが妙にうつろなおそろしい感を與へてゐる。スとは餘程異つた趣がある。數あるピレネーのシルクを一つ一つ訪ねて見たらば、どんなに興味が深いことだらう。見上げる左の壁の直上にはピク・ド・マルボレ Pic de Marboré（三二五〇メートル）が聳え、强風の爲め盛んに雪煙を擧げてゐるが、此の谷底は全くの無風帶で足許にはもう陽光に育まれて櫻草の一種が咲き出して、我々もともすると快い眠りにさそはれやうとした。

その午後急ぎポアチエの大學に歸る友をルスの停車場に送り届けて私は再び薄暮の山道をガバルニーへと登つて來た。一日の快晴の果て、空は綠がゝつたクリーム色にさえて、その下にテイヨンの少し傾けて疊を重ねた様な峯が薄桃色の雪をつけてヌツと出てゐるのを認めて私は思はず立ち止つた。シンと靜まつた空氣をふるはせて、カラン〳〵といふ鈴の音がするやがて白い羊の群が巨岩の上に現れそ。足懸もない様な岩壁を器用な足取りでわたつて行く此の可憐な動物を眺めて、何んでも山家育ちは強くて清新だと思つた。

人も動物も自然に對する營みは此處ではアルプス邊りよりずつと激しいものである。それはピレネーの谷々に發達してゐる。驚く可き急崖上の灌漑やアンドラ邊りの山の葡萄畑等を見れば一種涙ぐましくさへなるであらう。

三

日歸りで展望の利く處に定めし荒寥たるスペインの山々が展開するであらう。

こう思つて様子を聞いて見たい。國境に立つならば定めし荒寥たるスペインの山々が展開するであらう。

レは完全な山靴を要する。最高峯モン・ペルドウはスペイン側にあつて日歸りは六ケ敷しい。ビク・ド・マルギ

けなら此處が良からうといふ處は一つしかなかつた。それはシルクの上の西佛境上に聳立する屏風の様な岩の連續

がほんの僅か窓の様に開かれた處でスペインへの小さな乘越である。ブレシユ・ド・ローラン Brèche de Roland (二

八〇四メートル)といふ。往時密輸入者や山賊が横行したといふロマンチツクな場所であるといふが、今は夏場なら何んでもない散歩區域であらう。二三日前英人が登つてゐるので雪の様子もよく判つてゐるといふから、此れに

コル•デ•サラデトよりブレシユ•ド•ローランを仰ぐ　　田　中　薫

登つて見ることゝする。スキーの用意はしてゐたからスキー靴がある。これにネイルを打たせ、ロンドンを發つ時リリー・ホワイトで氣紛れに買つた日本の金カンジキの様なものを用意に持つて行くことにした。

朝四時に起されて窓外を窺ふと昨夜の月はかくれて空の模様は甚だ悪い。生溫い風がビュウ〳〵とスペイン側から吹きおろしてゐる。天氣は變つたが夕方まではもつといふので四時半にガイドと二人で出掛ける。シルクの道から右に折れて牧場の斜面をドンドン右手にからんで行く。氣溫が馬鹿に高く早くも汗がダラ〳〵と首筋を流れる。一時間ばかり登つたと思ふ頃シルクは深い谷底のほのかな曉闇の底に沒して眼八分にマルボレーの美事な褶曲のある巨大な山容が茜色に萠え始める。

此の道はスペインへ越す峠ポル・ド・ガバルニー Port de Gavarnie の本道で淺く開いた殘雪の多い谷である。雪解水の小川を渡つて峠道に別れ左手にテイヨンの氷河指して雪の急斜面を登り出す。雪は固くてカンジキが役に立つ、氷河の眞下に着いて始めて朝日を受ける。氷が青く光る。見上げると三千メートル臺のテイヨンの長尾根が青空に白く一線を劃し、その向ふから白い斷雲が幾つも〳〵强風にあほられて湧き上つて來る。更に登ると一つの鞍部に出る。Col des Sarradets と云つて一寸立山の雄山澤の上の様な感じ、シルクの上の棚になつた雪原（フィルン）が眼の前に打ち開く。ガバルニーの大氷河が長々と南佛の平野さして延びてゐた頃盛んにその源を養つたフィルンである。此處からはマルボレーの山容は眞正面になつて褶曲の美を滿喫することが出來る。右手に急な雪庇のあるアレトを三十分程の登りで目的地に達する。十時である。

シルクを繞つて西はテイヨンからカスク、ツール・デユ・マルボレ、ピク・ド・マルボレと續いてゐる三千米臺の山々は最上部に水平層を戴き、それが所々斧目を入れた様に浸蝕され風蝕されてゐる。カスクやツール・デユ・マルボレ等はメサの形をさへして城の様に聳えてゐる。私の立つてゐる邊は矢張りその斧目に當つてゐて上に開き根元につぼむ楔狀の岩壁の屹立で殊にスペイン側は根元の脆弱な岩層が甚だしくむしばまれて廊下の様にゑぐれてゐる。

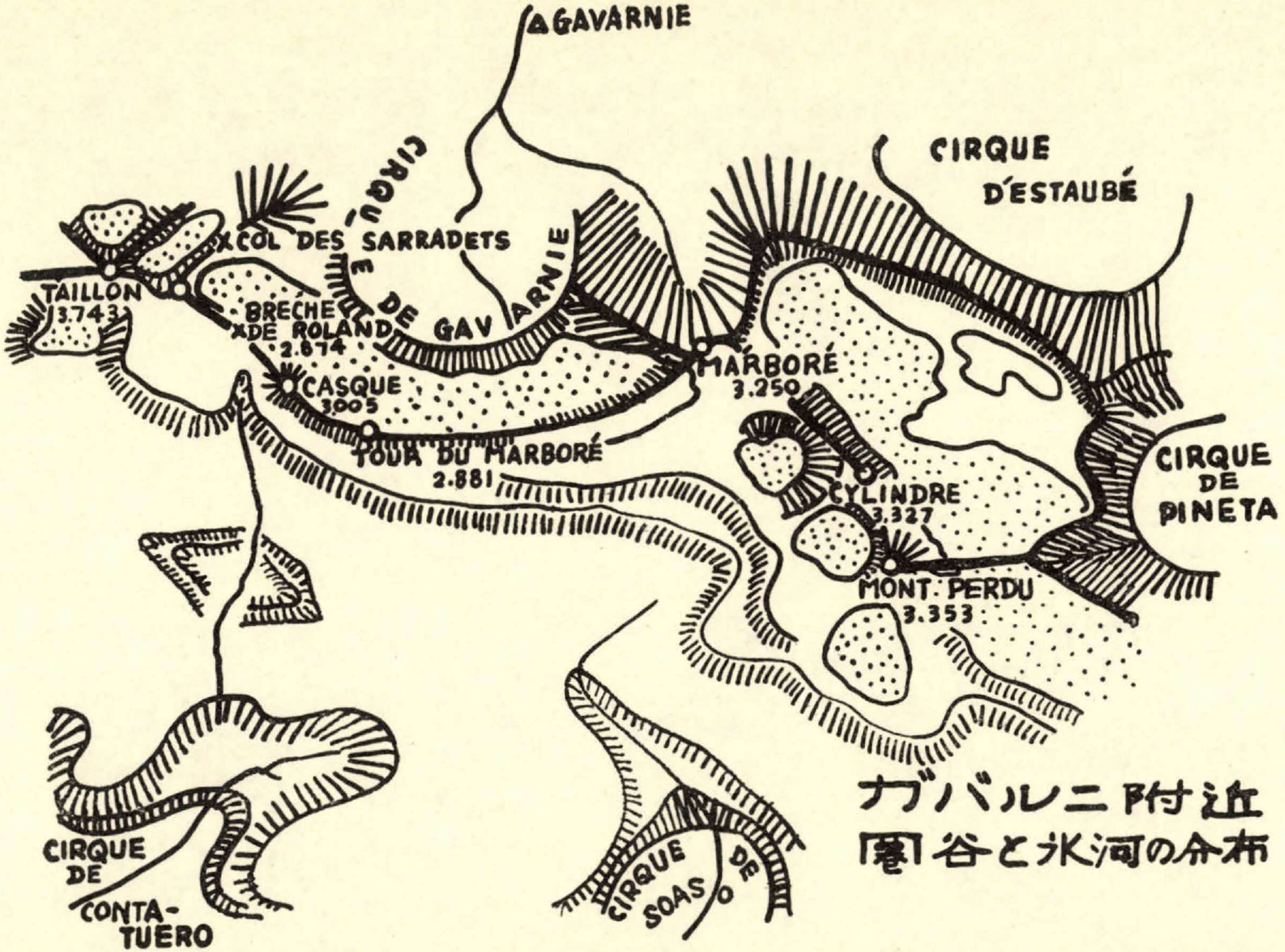
氷の膨脹と共に崩れる岩片が斷えずカサコソと音を立てゝ、耳元に落ちる。時々氷柱の破片や、相當大きな岩片がビユーとうなりを立てゝ落下するから此の自然の廊下から餘り頭を出してはゐられない。

岩は赤味を帶びて高く碧空に立ち鬼の住む古城の様な不氣味さがある。

フランス側は雪が多く遠くカウトレーの奥山、ピツク・ド・ビニエマールの山塊の眺めが美しい。流石潤つた谷々の豐な眺めである。これに引きかへスペイン側は思つた程の奇はないが雪も少く乾燥した何んといふ荒れ果てた風景であらう。背斜層の模型的に山頂に現れてゐる峯々や、緩傾斜の生地を流水が自由に造つてゐる沙漠地の様な峽谷の數々は全く墓場の様に沈默を守つてゐるのであつた。

此の岩窓を目がけて吹き込んで來るスペインの生溫い風をさけて十二時までまどろみ、同じ道を、グリセードして一時間の後には今朝の峠道に降りてしまつた。

午後の日に溫むシルクの下の牧場の道はバスが着いたと見えて三々伍々杖を曳く人々で賑はつてゐた。その中に



ガバルニ附近
圏谷と氷河の分布

はからずも英國人の二人の友達を見出して我々はいたく奇遇をよろこんだ。

四

翌朝我々は山を降りた。丁度日曜であつた。古風な此の邊の村人は黒づくめの昔風のコンチユームをつけて教會に集つて行くのであつた。長い黒布をスツポリ頭から被つて、ぞろ〳〵と連れ立つて行くのは老婆である。頬を林檎の様に紅くした若い娘さんは黒の着物を裾短に着、髪に大きく黒のリボンを結んでゐた。それが上品で却つて若々しく美しかつた。

春の日は一日一日と温む。山を出て行く村々の牧場には早や黄色の水仙がそこ〳〵に咲き出して甘い五月が近づいてゐた。

ガバルニーの參照地としては左の如き美しき良圖がある。

F. Schrader: Massif de Gavarnie et du Mont Perdu. 1:20,000. 1914.

（一九三二、一月）

漂泊に於ける山との關聯

——日本的なる山登りへの一試考察——

芋川稔

一、まへがき
二、登山の歴史への反省
（一）狩獵的登山
（二）宗教的登山
（三）科學的登山、漂泊的登山及び遊技的登山
（四）登山の歴史への一反省
三、特殊なる仕方に於ける山と人との關聯
四、漂泊の心より見たる登山の歴史

一　まへがき

登山への行き方として二つ考へられる。其の一は、「我々は只山へ登りさへすればよいのだ」と云ふ考を持つ人達の傾向であり、其の二は、單に登高行爲のみではなく其の背後に或る登山への思考、登山意識への思索を認める傾向である。此の二の行き方の中、何れがヨリ勝れたるものであるかは、今此處で問題とはしないが、第二の登山に就て考へると云ふ傾向は、必ずしも登高能力の低き者達のみの玩弄物とは言へない。或る場合にはむしろ、二の登山への思考があつて初めて、正しき登山行爲がなされると言へるかも知れぬ。

却説、又今日登山の社會性なるものが一般に認められる。併しかゝる一般性の半面には、登山の個別性も亦見逃す事は出來ない。Aにはの登山があり、Bにはの登山がある。そして其等の登山は、眞摯なる山岳への「働きかけ」である限り、何れもが眞實の山登りであると言へやう。

登山への思考が一應許され、しかも登山の個別性が認められる以上、其の人々によつて夫々異つた登山への思考が存在し、其等の思考の間には種々の差異があるにも拘らず、其等には一つ一つ充分な存在理由がある。そしてこの一小文も亦、私自身にとつては——假令、其處には如何に多くの一知半解と、獨りよがりの獨斷とが包まれて居やうとも——眞摯な登山への一思考である。

この拙文が私一個の登山への思考である以上、又其處には私の不明によつて獨斷を多く包んではゐても、こ

れが眞に自分自身のものである以上、勢ひこの文中で思考の對象とする山は、單に日本に於ける山として歐洲アルプスでもなければヒマラヤでもない。私の不才不明を以てしては、到底海を越えて氷と雪と岩のみの山岳に迄も思を馳せる事は出來なかつたし、又敢て廣汎な思考の領域を求めて、自分に曖昧な世界に迄も借りて考究を進め度くはなかつた。

登山への思考の第一歩は先づ自分自身の登山を反省する事から始まると言へる。そして私自身は今迄、日本の山によつて育てられて來、今後とても、私にとつて實際に問題となる山岳は日本の山岳であらう。この事は、一部の「總てはヒマラヤのために！」と叫ぶ人達から見たならば、如何に退嬰的に見えるであらうか。だが、これは動かす事の出來ぬ現實である。我々は先づ現實の登山をしつかり把む必要がある。

併しだからと云つて、私は決して歐洲アルプスの、ヒマラヤの登山を無視するのではない。だが此等は私自身にとつては——今、やつと自分の登山に一の反省を與へつゝある——餘りにも大きな問題であつて、其はむしろ今後に課せられた問題である。其故この一文は、むしろ病的とも云へるヒマラヤ禮讃者達にとつては、時代に取り殘された登山者の戲言とも聞えやう。私は甘んじてこの批難を受ける。だが私にとつては、今は日本に於ける登山を考へる事が精一杯である。

山を對象とする限り、我々は現實に山にぶつからなければ眞に其の山を理解する事は出來ない。すら見た事のない私にとつては、架空的に海外の氷雪の山を對象として登山を論ずる事は、今日出來ない。一度も氷河を

如何に地味であり、ヨリ狭隘な島國根性であらうとも、日本の山を對象として今登山を考へる事は、借り物的要素を少しも含まぬ、最も自分に忠實な態度であると信じて、決してヒマラヤ禮讃者達の批難嘲笑を恐れはしない。只私の恐れるのは、自分の不明より導き出された數多くの獨斷である。だが之は、自分の反省を繰返す事と、數多くの山の先輩の假借なき批判とによつて匡正して行く事としやう。

二　登山の歴史への反省

極く通俗的な意味に於て登山の歴史が考へられる場合には、狩獵的登山より宗教的登山へ、宗教的登山より近代的登山への推移の認容せられるのが普通である。かくの如き登山觀を、我々は能く多數の機關誌、部報等の初頭に掲げられる發刊の辭や、お座形の卷頭文に見出す事が出來る。併し今は、登山の本質に觸れる事のヨリ少い、かゝる輕薄な形式的な登山の歴史を考へやうとするからである。

乍併、登山を其の發展段階によつて形式的に、狩獵的登山、宗教的登山、近代的登山の三者に分類する事は（何故この分類が形式的であるかは後述する）あながち登山に對する初心者のみの持つ考ではないらしい。勝れたる登山家によつて、かゝる登山の歴史觀を聽く事も亦決して稀ではない。其の一の例として、我々は次に船田三郎氏の

『狩獵制度、封建的、宗教的社會、獨裁制を標榜した社會、それから商業資本主義を基礎とするブルジョア社會の發展にまで、それ等が最も様々な形式で登山にも反映しないではゐなかつた。それ等の様々な形式は數種の根本的タイプに總括することが出來る。」（一）

そしてかゝる前提の下に氏は登山を夫々の歴史的な社會現象に對應して、原始的社會に於ては狩獵的登山、封建的宗教的或は僧侶的社會に於ては儀式的封建・宗教登山、商業資本主義社會の出現と發達と同時に科學的登山或は漂泊者的探檢登山が發生し來つたと述べてゐる。そして最後には

『商業資本主義から工業資本主義に至る發達が漸次進展につれ、共に發達し來た階級對立と、その社會的鬪爭の意識が、次第に尖鋭化されて登山に於いても亦、新しい様式を喚起せねばならなかつた。而して困難なる山岳登攀への鬪爭として必然的に遊技的登山者が登場し、その實踐行動の分野として、岩登と稍々遲れてスキー登山との二大兩翼が新らしい登山形式のもとに展開されたのである。』（二）

とて、最も新らしき登山形式としての岩登りとスキー登山とに說き及んでゐる。

以上を要するに、氏に依れば登山は夫々の社會狀態に對應して、（一）狩獵的登山、（二）儀式的封建・宗教登山、（三）科學的登山或は漂泊者的探檢登山、（四）遊技的登山、（岩登り、スキー登山）の四者に歴史的に分類されてゐる。

（一）船田三郎著「岩登」三頁

（二）同書　五——六頁

（一）狩獵的登山

先づ、原始時代に於て行はれたと云ふ狩獵的登山に就いて考へて見やう。原始時代とは如何なるものか。今假りにモルガンの「古代社會」に依るならば、極く通俗的に言はれてゐる原始時代と云ふものをば、彼は野蠻時代と未開時代との兩者に分けて居り、其の各々を下層、中層、上層の三者に細分してゐる。そしてこの六の時代の狀態を次の如く述べてゐる。

『野蠻時代下層狀態　人種の嬰兒期から、次期の開始まで。
野蠻時代中層狀態　魚類の食用及び火の使用知識の獲得から、次期の開始まで。
野蠻時代上層狀態　弓矢の發明から、次期の開始まで。
未開時代下層狀態　土器製作技術の發明から、次期の開始まで。
未開時代中層狀態　東半球に於ては、乾燥煉瓦と石材との使用と共に、灌漑による玉蜀黍及び植物の栽培から、次期の開始まで。
未開時代上層狀態　鐵器の使用と共に、鐵の鑛石を鎔かす方法の發明から、次期の開始まで。』（一）

この六の時代に於いて、原始民族に依つて狩獵が一般的に行はれたと見られるのは、野蠻時代の上層期のみであ

る。即ち、野蠻時代の下層期には、人類の一部分は樹上に住み、その原始的住居たる熱帶的又は亞熱帶的森林中に住んでゐた。そして彼等の食物は果實、胡桃類、草根等であつた。次の中層期には、魚類の食用が始まり、他方火の使用知識を獲得してからは、彼等は魚類を火で焙る事に依つて此處に新なる時代が始つたのである。併し此の狩獵は、決して彼等にとつて生活の糧を得る主要なる方法ではなかつた。未だ彼等は狩獵民族と言はれる可きものではなかつた。

併し次の野蠻時代の上層期は弓矢の發明によつて開始された。この時代こそは、狩獵が一般的となり、彼等はまことに狩獵民族と呼ばるべきであつた。併しこの時代も過ぎて次の未開時代に入ると、先づ下層時代には、動物の馴致及び飼用と植物の栽培とが始められ、中層期には、東西兩半球に於いて夫々其の土地の條件に從つて前期の傾向を益々助長し、上層期に入れば鐵の使用が始まり、やがては今日我々の住む文明時代に進み來つたのである。

以上に依つても略解る樣に、原始時代に於いては狩獵は決して一般的なるものではなかつた。野蠻時代の上層期に於いて、弓矢の發明によつて其は一時は一般的なる勞働部門とはなつたが、次の未開時代に至れば、動物の馴育、植物の栽培によつて狩獵の一般性は解消してしまつた。であるから——我々は再び登山の問題に戻つて——「原始時代には狩獵的登山が」と輕卒に斷言する事は出來ない。

又、此處に別の問題がある。よしや、原始時代の凡てを通じて一般に狩獵が行はれなかつたにしろ、其の或る一

時期には、確に狩獵が普通の勞働部門であつた。この時代に於いてこそ、狩獵的登山が行はれたのであらうか。併し彼等狩獵者達は其の獲物を獲得せんが爲めに山に登つたであらうか。今日でこそ、つては、狩獵者達は平原に彼等の獲物を見出し得ないが爲めに——狩獵者達は、其の半面に勝れたる山案内人としか。彼等は其の周圍に容易に獲物を見出し得たに違ひない。て登山者の資格を具有してゐる程に、よく山に登り山の中に生活してゐる程に、文明の光に浴さぬ原始時代に於いても、かつたであらう、猶ほ彼等は山深く分け入らねばならなかつたであらう最適の住處たる山岳と呼ばるゝには餘りに低き丘陵に登る事はあつても、彼等は決して餘分の勞力を費して山岳に登高を試みた事は無かつたに相違ない。

併し、若し彼等原始人達の生きる可き道が唯狩獵のみであつたならば、人口の增加と狩獵道具の改良とに依つて、彼等の弓矢を以て活躍すべき世界は次第に平原より奥地へ奥地へと進められて、やがては、其の迄も及んだかも知れない。だが彼等は時代が進めば進む程、狩獵のみを以て其の生活の手段としたのではない。動物の馴育、植物の栽培は牧畜農業の新部面の展開となり、專門的に狩獵のみによつて生きて行く者は全民族中の極く一小部分に過ぎなくなつてしまつた。彼等は其の獲物を追つて山岳に迄も深入りする必要はなかつた。彼等を取り卷く廣漠の原野は、充分なる獲物を彼等に提供し得た。

此處で我々は日本の原始時代に於ける日本原始民族と狩獵との關係

は如何であつたか。元來島國である我國に於いて、原始人にとりて最も手近かな經濟活動の舞臺は海であつた。此の事、即ち原始日本人は狩獵よりも漁獵にヨリ關係が深かつたと云ふ事は、神話時代の傳說が海と魚とに關する事柄を多く含んでゐる事に依つて、これを推知する事が出來やう。又我國に於いて後に肉食が禁止され、牧畜の發達の不充分であつた事は、假令其の直接の原因が佛教思想の影響に負ふ所が大であるとは云へ、其の根底には原始時代より我が祖先が狩獵に緣の遠かつた事を證明してゐる。以上によつて、我國に於ては原始時代の狩獵なるものゝ意義が非常に薄いものである事を知り得た。原始日本人は、多く其の國土の四方を取り卷く海に活躍をしたが、獲物を追つて原野を、森林を駈け巡つたとは思へない。まして、今日我々の登山の對象となれる山岳にまで、彼等が足を踏み入れたとは考へられない。

原始時代に於て狩獵制度の存在した事は認められてゐる。世界的に云へば（モルガンに從へば）野蠻時代の上層狀態は、狩獵が普通に一般的なる勞働部門であつた時代であり、我國に就て云へば、農業が一般的なる經濟活動となる迄は、漁獵と平行して他方に狩獵の行はれた事が認められてゐる。併し、だからと云つて、之等の狩獵が行はれたと言ひ去る事は出來ない。よしや、彼等の一人が野獸を追ひつめて山岳に迄も至り、遂には山巓に立つて——原始時代の山巓が如何に素晴しきものであつたか——其の眼下の莊嚴な眺望に彼が心うたれたにしても、其は單なる偶然であつて、之を以て一般的に狩獵的登山と呼ぶ事は出來ない。

登山の歷史の第一歩として、最も原始的な登山の形式として、今日迄無造作に考へられ來つた狩獵的登山に對し

ては、かくて疑問符を附せざるを得なくなつて來た。狩獵制度が一般に考へられてゐる程には原始時代にとつて重要なる要素ではなく――殊に我國に於て然りである――其の上、狩獵と山岳との結合は不幸にして 狩獵的登山の存在を裏書きする程に緊密であつたと云ふ事は決して出來ない。そして、今日遠き原始時代に對して、狩獵的登山の存在を證すべき積極的なる根據を求むる事が不可能である以上、我々は登山の歷史の第一歩として今日まで考へられ來つた狩獵的登山に對しては、悲觀的なる結論に到達せざるを得ない。

我々のこの考察の窮極の目的は狩獵的登山にあるのではない。今はこの問題に永く止つてゐる事は出來ない。次に來る登山形式、宗教的登山に考究を加へる事としやう。

（一）モルガン著「古代社會」（改造文庫）上卷　三二――三三頁

（二）宗教的登山

『封建的・宗教的或は僧侶的社會に於いては支配階級は、又は支配階級の寄生的存在である神官僧侶の手を通じて平原の上高く屹り聳立つ山岳に依つて宗教的儀式的意識のもとに、支配階級の尊嚴と神聖とを通例、他の階級に強ひてゐた。かくして登山は儀式的封建・宗教登山。』（一）であつたと云ふ。中世歐洲に於けるキリスト教の勢力、又日本に於ては奈良朝時代より平安朝時代に至る佛教の社會的勢力の實に偉大であつた事は言ふ迄もない。か〻

る宗教が絶大なる社會的勢力を保持してゐた時代には、登山は自ら所謂宗教的登山であつたと云ふ事が一般に認められてゐる。そして其の最も典型的なるものとして我國の修驗道が擧げられてゐる。以下この修驗道に就き考察を進め、延いては宗教的登山とは如何なるものであるかに言及する事としやう。

先づ修驗道の宗祖として一般に認められてゐるのは役小角である。彼は人皇三十四代舒明天皇の六年正月朔日に大和葛城に生れた。十六歳の時、初めて修行の爲めに葛城金剛山に入り、十七歳の時には箕面山に入り、次に廿歳の時、紀伊の熊野から大峰へ駈け入り大誓願を發し、大峰小笹山上に於て一百日の苦行を滿し、次に吉野から大峰へ駈け入り、七十五日の修行を終へて熊野に出でた。かく彼は研鑽觀行に餘念がなかつたが、三十二歳の時に至つて斷然家を捨てゝ葛城山に入り、藤葛を衣とし、木實を食ひ、常に不動明王及び孔雀明王の神呪を誦して爾後三十餘星霜の間岩窟に住し、或は秘術を盡して海上を涉り、或は五色の雲に乘つて至る所の靈山を遍歷修行して、鎭護國家、萬民豐樂を祈つたとの事である。その後讒を以て文武天皇の三年に伊豆に流されたが、大寶元年放免せられて京師に還り、益々其の道を修めたので彼の徒弟は諸國に蔓延し、靈地を開創し或は葛城大峰等に入りて苦行を修め、かくて修驗道は盛大を極むるに至つたとの事である。勿論我々は以上の彼の傳記の中には多分の傳說的臭味を感じないではないが、彼が日本に於ける山岳修行の先驅者であり、諸山開闢の先鞭として數多くの峰頭を駈け巡つた業蹟を忘却する事は出來ない。

かく役小角によつて起された修驗道は、其の後當山派と本山派との二派に分れた。前者の祖である聖寶は、宇多

天皇の御宇の眞言の徒であつた。彼は博く諸宗に渉り修練を好んだが、大和金峰山の嶮徑が役小角の後、榛莽寒りて行路のなくなつてゐたのを葛藟蘿を攀ぢて之を踏み開いた。又本山派の祖增譽は堀河天皇の御宇の天台の徒であつた。抖藪を愛し、聖蹟を歷尋し、大峰葛城の嶮に修練し、寛治四年には後白河上皇が紀伊の熊野に行幸ありし時先達を奉仕した。

却說、役小角、聖寶、增譽等を其の代表的人物とする修驗道其のものは如何なるものであつたか。之は決して一個の獨立せる宗派を形成してはゐなかつた。この事は聖寶が眞言の徒であり、增譽が天台宗の僧侶であつた事に依つても知る事が出來る。（獨立せる一派を成さなかつたと云ふ事に就ては、又別の問題として後述する）又この修驗道には種々なる定規があつた。彼等修驗者達は、決して、山へ登り度いと云ふ一時的の氣持などにかられて山に入つたのではない。彼等が入峰修行せんとする時は、二十一日、五十日乃至一百日の間、精進水行等を行つて心身を清淨ならしめ、法華經乃至心經を初め大日咒、慈救咒等を專讀し、每日神變尊前に於て三時の勤行をつとめねばならなかつた。又入峰の期日には各々所屬の先達の室に集り、人數、席次、所役等を定め、入峰の室に集つて各自の所役に基き出達の勤行を修し、席次に從つて列次を整へて出發する。宿所に到着するや小柴を立てゝ先づ結界して入宿の作法を行ひ、次に初夜作法、入宿灌頂あり、新客等に對しては先達から入峰修行の資格を授り誓誡を受けねばならなかつた。又彼等の入峰中の修行には三時勤行、閼伽、小木等あり、入峰中の新客は懺悔、業秤、水斷穀斷、正灌頂、相撲延年、出成作法等の實に煩雜なる法義を修行せねばならなかつた。以上の如き修行

を終へてから出峰して法要を勤めて初めて一連の山岳修行が終るのである。

修驗道には右の如き煩雑なる作法があつた外に、入峰の時期に對しても種々なる拘束があつた。先期間等に依つて晦山伏（十二月三十一日より翌年四月八日迄）夏中當行（四月八日より七月十四日まで）御影供峯（ミエクホ）（四月八日より五月九日まで）御影供峯（ミエクホ）（五月下旬より六月六日まで）秋峯（アキミネ）（七月六日より十九日まで）春峯（ハルミネ）、花ケ分れてゐた。

我々は此處で、再び宗教的山登と修驗道との關聯に考究を戻す事としやう。人々は、狩獵的登山の場合には、餘りにも輕卒に狩獵と山岳とを結び附けてしまつた。だから果して原始時代の狩獵者達が山へ登つたかどうかも疑問であるに拘らず、一の登山の形式として狩獵的登山なるものを作り上げてしまつた。併し今、この宗教的登山の場合にはどうか。修驗道の僧侶達は確に嶮徑を攀ぢて數多くの峰頭を極めた事が認められる。この意味に於て修驗道と山岳との關係は、原始時代の狩獵と山岳との關係よりも遙に緊密であつたと云へやう。併し、だからと云つて我々は直に登山の一形式としての宗教的登山なるものを首肯する事は出來ない。修驗者達が山へ登つたのは事實であるが、其の入峰は修行の爲めの入峰であつて一の修行の方便に過ぎなかつた。修驗こそ彼等の窮極の目的であつた。この事は前述せる種々の煩雑なる入峰に關する定規等によつても其の一班を知る事が出來やう。若しも山其のもの、言ひ換へれば入峰其れ自身が彼等修驗者達の唯一の目的であつたならば、入峰に關する煩雑な拘束は必要としなかつたであらう。しかも修驗道には種々なる法義が存在してゐた。か

ゝる煩雑な拘束も亦彼等の窮極の目的への一の關門として必要であつた。彼等は其の苦行への一過程としてかゝる拘束に縛られる事を自ら求めたのである。しからば何故に山岳が彼等の修驗の一方便として選ばれたかと云へば、山岳は彼等の自ら望み求める苦行に最もよき舞臺であつたからである。平安朝時代、奈良朝時代、或はヨリ溯つた時代の山岳は修驗道にとつて如何に恰好の修行場であつた事であらうか。かくて、山岳は修驗道の修行場に過ぎなかつたと言へる。山岳其自身は何等本質的に修驗道と結び附いてはゐなかつた。彼等は、本質的に山其のものに觸れる事も時としてはあつたかも知れぬ。併し修驗道の嚴格な苦行は、決して永く彼等をして其の氣分に浸しては置かなかつた。彼等の修行は、山の本質を深く味はしむるには餘りにも餘暇がなかつたであらう。

山岳が單に彼等の修行場に過ぎなかつたと云ふ事は、修驗道が決して獨立せる一派の宗教ではなかつた事實によつても知られる。それは、何時も大抵は眞言や天台の中での特殊の行法や集團が盛になつた時代には、或る程度まで其寺院の集團として之等の宗派に附屬した形になつてゐた。この點に特有な教義が編成され、又獨自の傳法、血脈なるものが信じられたが、それでも統制上にはやはり天台や眞言の勢力に支配されてゐたむしろ內部的な抗爭對立の方が激しかつた位である。かくて、修驗道は各宗の僧侶が其の個人的の意志に基いて專修する道行に外ならなかつたのである。各宗の僧侶達が其の時々の修行の目的の爲めに入峰した。かゝる個別的な事實の集積せられたるものが所謂修驗道であつたとも云へる。言ひ換へれば、修驗者達の宗教的最高目的の追求は、山岳と必然的に結び附けられてゐたのではない。

山岳は唯、彼等に最もよき修道場を提供したに過ぎぬ。

以上に依つて略其の外貌を知り得た修験道は、決して宗教的登山（この言葉に就ては後述する）ではなく、強ひて其に名を附するならば其は山岳修行（山岳に於ける修行）を其の主要なる勤行とする宗教であつたのである。宗教的登山ではなくして山岳宗教であつた。

だが、以上と異つた觀點から修驗道を見る事が出來るではあつたが、決して其は唯單たる、印度や支那に起つた思想を其の儘取り入れた輸入佛教ではなくして、其の根底に我々は、山岳や森林に關する日本固有の民族的信念を見出す事が出來る。かゝる根底があつたればこそ、其は決して獨立せる一宗派ではなくして常に天台、眞言二宗の勢力下にあつたとは云へ、能く其の生命を永らへて全國的に普及され、今日も猶ほ存續してゐるのである。この修驗道の根底に流れる日本的なる一の信念を考察の對象とするならば、我々は又自ら別の方面から、日本的なる登山への考究の緒を見出す事が出來やう。だが之は別の機會に改めて考へる事とする。

いづれにもせよ、我々はこゝで修驗道を以て宗教的登山と云ふ事は出來ぬとの結論に到達した。それは宗教的登山ではなくして、山岳宗教であつた。

（一）船田三郎著「岩登」三——四頁

（三）　科學的登山、漂泊的登山及び遊技的登山

第三の登山の形式として船田三郎氏は科學的登山或は漂泊者的探檢登山（註）を擧げてゐる。『商業資本主義社會の出現と發達と同時に、過去の形式に於いて、その類似を持たない明確に一線を引くことの出來る 新らしい登山形式が發生して來た』（一）との事である。

（註）　この漂泊者的探檢登山と云ふ名稱を、同氏は初期の日本アルプス 登山時代の登山形式に適用してゐるが、併しこの名稱は、まるで異つた意義を有する漂泊と探檢なる二の言葉を併せ冠してゐるものであつて、明確な言葉の意味は解り難い。併し若しも、初期の日本アルプス登山時代の登山形式を指すものであるとしたならば、其れは漂泊的登山と云ふだけで充分であらう。勿論其の頃とても探檢的の意味の登山はあつたであらうが、其の爲めには氏は別に科學的登山なる名稱を使つてゐる。多くの場合（例へばヒマラヤに於ける如きものを除けば）探檢的登山は科學的登山の内に含まるべきものである。

氏は第三の登山形式として 科學的登山と漂泊的登山（氏は 漂泊者的探檢登山と云ふが、前註の如き理由に依つて、單に漂泊的登山と呼ぶ方がヨリ適切であると信ずるので探檢なる言葉を省いた。）とを併せ擧げてゐる。併しこの二を一括して一の登山形式を代表せしむる事には首肯しかねる。

日清、日露の二度の戰役の後、先進諸外國よりの素晴しき資本主義の滔々たる流が、科學的知識の開發と相俟つて、今まで長い間顧られなかつた數多くの山岳に向つて科學者を驅つた事は、明治末期の、日本山岳會の設立を中心としての輝ける彼等の山に働きかけた數々の業蹟に依つて實證せられる。當時の科學者、中にも植物學者、地質

學者、地形學者達が、日本アルプスを初め其の他の未だ顧られなかつた峰々に對して試みた、次からはまことに目覺しきものがあつた。當時唯一の山岳雜誌であつた日本山岳會の機關誌「山岳」に續々と掲載せられた山岳記事は、彼等の山に對する働きかけを、今日如實に我々をして感ぜしめる。又かくの如き科學者と山岳との實際的な結び附きがあつたばかりでなく、他方に、當時の登山觀にも亦山岳と科學とを結び附ける思想はあつた。日本山岳會設立主旨書にかく云つてゐる。

『動物植物も次第に下界の物と趣を殊にし、木邦中央の高山大岳にして、蝦夷千島産の物を見ること、尠きにあらず、其他仰いで星辰を窺ひ、俯して地質を察する等、山に入らずんば、研究し能はざるもの甚だ多し。』（二）

即ち、當時高山大岳は科學者にとつての未知のよき寶庫であつた。であるから、彼等科學者達は燃える 知識慾に驅られて未知の世界を次から次へと追求して行つた。彼等にとつて、當時我國に於ける深山幽谷は最もよき 研究室であつたのである。

彼等が未知の世界へ未知の世界へと其の研究慾を充さんが爲めに進み入つた事は、原始時代に原始人達が、其の獲物を追つて奥地へ奥地へと深入りして行つたのと餘りにもよく似通つてはゐないか。彼等が其の最もよき 研究室を高山大岳に求めた事は、又餘りにも、よく修驗者達が山岳に其の最もよき修行場を求めたのに似通つてはゐないか。

かくて彼等も亦其の數多くの日本に於ける登山史上の業蹟にも拘らず、眞の登山者ではなかつた。彼等と山岳と

の間には本質的なつながりはなかつたと云へる。この事は當時登山界に少なからぬ業蹟を殘したにも拘らず、今日は既に山岳に對しては何等の情熱をも持ち合してゐない科學者のゐる事によつて知られる。併し人は言ふかも知れぬ。「當時の科學者にして、今日も猶ほ山と離れられぬ人達がゐるではないか。彼等は今も猶ほ山岳に對する情熱を抱き續けてゐるではないか」と。勿論、當時の科學者達にして今日もなほ山に對する情熱の變らぬ人達のゐる事は確だが、この事實は、科學と登山の本質との必然的なる結び附きを物語つてゐるのではなく、却つて、科學以外に、登山と本質的に結び附いてゐる何ものかゞ彼等に存在してゐる事を示してゐるのだ。若し單なる科學者であるならば、一應其の研究の成果を擧げ得たならば、再び多くの骨折りを要する山岳への交渉は打ち切つたに違ひない。しかも彼等が猶ほ山を去り得ない事實は、彼等が單なる科學者ではないのだ。此處に登山の本質、山岳と彼等との本質的な「つながり」を見出し得はしないであらうか。

再び前に戻つて、要するに科學的登山も亦、其が山岳を單に彼等の研究室として利用したに過ぎず、其處に何等の本質的なる「つながり」のなかつた事によつて、眞の登山ではなかつた事を知り得た。とは云へ、彼等科學者達の山岳に對する數々の業蹟を此處で忘却する事は出來ぬ。それは、假令其の背景となつた山岳其のものゝ規模の差異により、必然的に其の業蹟の大いさに違ひがあつたとは云へ、歐洲アルプスに於て所謂登山の黄金時代を惹起せしめた英國其の他の數多くの科學者達の業蹟にも比すべきものであると云へやう。

そして、彼等に依つて新に作り上げられたる山岳への働きかけは、其が假令眞の登山ではなかつたにもせよ、船

田三郎氏の言の如く、其は當時の社會狀態、資本主義制度の輸入と、後の其の發展とに必然的の關係を有するものであつた。

以上述べ來つた樣な所謂科學的登山と共に、漂泊的登山なるものを船田三郎氏は擧げてゐる。氏に依るならばこの漂泊的登山なるものも亦科學的登山と共に、當時の社會と必然的なる相關々係を有するものとされてゐる。併し乍ら果してさうであらうか。

假令其が完全なるものではなかつたにもせよ、所謂德川三百年は鎖國の時代であつた。其が一度明治維新によつて破れ、其の明治維新なるものが社會經濟史的に如何なるものであるかは兎も角として、歐米諸先進資本主義國との關係は年と共に深くなり、日淸日露の兩役は、日本の資本主義をして急激なる發展をなさしめるに大いに役立つた。かゝる時代に科學者達が山岳に走つた事は前述の如くであり、其がその時代に必然的な關係を有する事も亦前に述べた通りである。併し、漂泊的登山が科學的登山と同樣其の時代に對して必然性を有してゐたとは考へられない。何となれば其の事は、漂泊的登山者達は決してこの時代に初めて現れて來たものでもなく、(註)そして又、彼等の流れをくむ登山者達が今日も猶ほ數多く存在してゐる事に依つても知る事が出來やう。この事實は、科學的登山が當時初めて科學の勃興と相伴つて發生し、其の後、科學的知識の追求が或る程度に迄到達した時、其の一の團體が消滅してしまつた事實と比べて考察する時に、漂泊的登山が決して當時代にのみ必然的なつながりのあるものではない事をよく證明してゐやう。

（註）この時代より以前から既に漂泊的登山者が居たと云ふ事に對しては、積極的なる數多くの根據はない。其の意味で此處には可成りの獨斷が含まれてゐると言へやう。だが今、私が敢てこの獨斷をなすのは、此の時代より以前に既に多く存在してゐた漂泊者、例へば西行、芭蕉の如き人達と、漂泊的登山者達との間にヨリ密接なる關聯を認め得ると信じてゐるからである。この事に就いて後に詳述するであらう。

併し今は之以上、漂泊的登山に關して考へる事は止めやう。今は只、漂泊的登山なるものが決して船田三郎氏の言ふ「商業資本主義社會の出現と發達と同時に、過去の形式に於いて、その類似を持たない明確に一線を引く事の出來る新らしい登山形式」ではなかつた事を頭に入れて置くだけにしやう。何となれば、この漂泊的登山なるものは、別に改めて考究を續けるに充分な重要なる問題である。

最後に、我々は船田三郎氏が第四の登山形式として擧げた遊技的登山を考へなければならなくなつた。そしてその所謂實踐行動の分野としての岩登りとスキー登山とを考へてみなければならぬ。だがこの二つの登山形式は、今現に我々の目前に於て盛に行はれてゐる登山形式であつて、其は此處に縷々と述べるまでもなく、明確に其の事實を何人に依つても摑み得るものであるから、此處には其の登山形式への考察は省略する事とし、我々はこゝで今一應登山の歷史を振り返つて其を全體的に通觀する事としやう。

（一）船田三郎著「岩登」　四頁

（二）「山岳」第一年第一號　山岳會設立主旨書　二頁

（四）登山の歷史への一反省

今迄、我々は最も普通に考へられてゐる登山の歴史なるものに就て考へ來つた。狩獵的登山、宗教的登山、科學的登山、遊技的登山等に就て夫々其の特徴、的登山、或はヨリ詳細に考へるならば狩獵的登山、宗教的登山、科學的登山、遊技的登山等に就て夫々其の特徴、換言すれば其の背景をなす社會との關聯を歴史的に考へて來た。

元來、或る一の事象を歴史的に考察するのは如何なる目的のためか。少くとも私は、登山を歴史的に考へる事によつて、即ち夫々の時代に於ける互に相違せる登山の形式の中から自ら一の一貫せる縦の糸を求めて、其の糸を手繰つて、或る一の登山の中核をなす何ものかを求めんとした。かゝる目的から、今一應、一般に考へられてゐる登山の歴史に一瞥を加へてみたのである。だが其の登山の歴史的發展の中には、何等の一貫せる事は出來なかつた。彼等は言ふ、原始人は狩獵の爲めに山に登つた。宗教的眞理を追求して宗教家は山に登つた。科學者も其の研究慾を充さんが爲めに山岳を攀ぢた。そして現代の登山は岩登りとスキー登山とであると言ふ。かゝる個々バラ〳〵の事象を並べ考へてみて何になら うか。

今私は、狩獵的登山、宗教的登山、科學的登山、遊技的登山等を個々バラ〳〵の事象と云つた。併しこの言葉に對して私は批難を受けるかも知れない。「其等は決して個々バラ〳〵の事象ではなく、凡てが山岳に結び附いてゐる。かゝる種々なる歴史的事實は、其の各時代に夫々必然的なる登山の形式である」と。斯様な批難に答へる爲めに、私は此處で、如何なるものを登山となすかに就て一言しなければならなくなつた。

山へ登りさへすれば其が登山であると考へる人は今日恐らく居ないであらう。其程この事は自明の事實である。しかも猶ほ、如何に多くの人達に依つて此の解り切つた事が忘れ去られてゐる事であらうか。今日獵師が山へ其の獲物を求めて登つたからと云つて其が登山であると言ふ人はゐない。而も猶ほ、「原始時代には狩獵的登山が」と、何の疑もなく多くの人達によつて斷言せられてゐる。同じ事實が原始時代には登山でないと云ふのか。今日も猶ほ、我々はよく山に所謂行者を見出す事が出來る。併し我々の中誰一人として彼を登山者とは呼ばぬ。しかも猶ほ、多くの人達は宗教的登山なるもの、存在を何の疑もなく認めてゐる。全く同じ事實が、單に其の背景をなす時代の如何によつて、或る時代には登山であり他の時代には登山でないと言ふのか。科學的登山に就ても同樣の事が云へるであらう。只最後の遊技的登山に關しては、之が最も新しき產物であり現代にのみ特有のものである爲め、歷史的に比較すべきものを我々は持ち合してゐない。

いづれにもせよ私は次の事を感じる。「登山」とは確に「山に登る」と書くには違ひないが、山に登りさへすれば其等が凡て登山であるかと云ふと、あながちさうは云へぬ。であるからこそ、一連の、狩獵的登山、宗教的登山、科學的登山、遊技的登山の發展段階説に私は首肯出來なかつたのである。（但し其の人が、單に山岳へ如何なる形式で働きかけたか、其の形式の歷史的變遷を穿鑿せんとする爲めならば、斯くの如き登山發展段階説も一應首肯される事であらう。）この一系列の間には——確に夫々の現象には山岳が結び附いてゐるが——何等の根底的な本質的なるものを、其の一貫せる形に於て見出す事は出來なかつた。

以上を要するに、人々は登山と山岳との結び附きを餘りにも重大に考へ過ぎる事によつて、遂には自分達の考究の最終目的が登山――山岳への人の働きかけ――であるにも拘らず、餘りにも山岳其のものに囚はれ過ぎてしまつたと云へる。

『まことの登山は一朝にして生れ來つたものではなく、徐々と進化し發展し來つたものである。そして登山を今日の盛大に迄至らしめた最大の推進力は山の愛に外ならない事は明瞭であるが、されば、其を今日の盛大に迄至らしめた最大の推進力が山の愛であるとは云へぬ。山はかつて恐怖ではあつても決して愛ではなかつた。この論者も亦、「山の愛」なる魅惑的言辭に――それだけに又皮相的な空虚なる言辭に――迷はされてしまつたと云へやう。

山登りは、山と人との關聯、山への人の働きかけであつて、山登りの問題は決して山其のものゝ問題ではない。しかも如何に多くの人達が登山を考察する場合に山に囚はれてゐる事であらうか。山其のものは單なる地表の凸點に過ぎぬ。其は道端の砂利の堆積と何等異る所はない。併し其の地表の凸點に對して人が働きかける時、其處に登山の問題が發生し來るのである。

だが私はヨリ嚴密なる意味の登山を考へる。單に登山が山と人との關聯であるならば、所謂狩獵的登山も宗教的登山も、又科學的登山も凡て山と人との關聯である以上、登山でなければならぬ。併し私は單なる山と人との關聯に登山の意義を求める事はしない。其の關聯の仕方の特殊なるものに登山の意義を求めんとすればこそ、前述の如

く狩獵的登山をも、宗教的登山をも、又科學的登山をも眞の登山とは認めなかつたのである。

かくて、私は特殊なる仕方に於ける山と人との關聯に登山の意義、本質とも云ふべきものを求めた（この特殊なる關聯の仕方に就ては後に述べる）。であるからこそ、一般に登山の歴史的諸形態として認められてゐる狩獵的登山、宗教的登山、科學的登山及び遊技的登山なるもの〻間に何等の一貫せるつながりを見出す事が出來ず、其等を個々バラ〳〵の事象として默殺するの餘儀なきに至つたのである。其等の諸形態は、確に地表の一凸點たる山を對象とせる現象であり、又山と人との關聯には相違ないが、特殊なる仕方に於ける山と人との關聯にこそ登山の意義が存する以上（かく私は信じてゐる）、其等の諸形態の間には、何等歴史的なる登山の發展を見出す事は出來ない。

（一）神戸商大山岳部機關誌「やま」第二十四號　三頁　（我國古代の山岳思想に就て――三好毅一氏）

三、特殊なる仕方に於ける山と人との關聯

私は特殊なる仕方に於ける山と人との關聯に登山の意義、本質とも云ふべきものを求めると云つた。此處で私は自分の責任上、其の特殊なる仕方とは如何なる事柄を意味するか闡明せねばならなくなつた。

考察の第一歩として我々は先づ第一に、自分達の目前に現に見る事の出來る眞の登山とは如何なるものであるかを正しく認識する事は我々にとつて比較的容易な事でもあり、又かくの如き現實に把握する事の出來る眞の登山こそは、私の云ふ特殊なる仕方に於ける山と人との關聯の最も手

近な實例であるからである。以下我々は常に頭の中に幾人かの勝れたる眞の登山家の、山岳人の風貌を描きつゝ考究を進めて行く事としやう。

先づ眞の登山とは最も一般的には――假令其の言辭が如何に皮相的なるものであつて、少しく登山を深く考へんとする者にとつては空虚以外の何ものでもないにせよ――山に登らんが爲めに登るものであると云はれてゐる。又山へ登らないではゐられないから登ると云ふ登山こそ、眞の登山であると云はれてゐる。之等の言葉は、其の登高行爲の目的が、例へば植物の採集とか地形地質の調査とか氣象の研究とかにあるのでもなく、又新鮮な高山岳の空氣を吸ふ事に依つて健康を得んとするものでもなく、或は又、未踏の峰頭に攀ぢる事によつて其の征服慾を充足せんとするにあるのでもない事を暗に表現してゐる。勿論、山に登る事によつて附隨的に科學的知識の探求が遂げられ、又科學的知識は眞の登山に於て決して無視せらるべきものではない。又、登山によつて我々は健康を増進する事も出來、其の健康が如何に山岳への我々のアルバイトにとつて重要であるかも云ふ迄もない。又、眞の登山家の輝かしき初登攀に於て、彼等の征服慾が充分に滿されたであらう事は勿論である。併し眞の登山の目的はかゝる所に存在するものではなくして、(註)其の目的は――「登らんが爲めに登る」なる言葉が、非常に摑み所のない皮相的なものに聞えながら、しかも猶ほ、其の中に可成りに深遠なる思想を包含してゐるのと丁度同樣に――容易に言ひ表す事の出來ぬ精神的なる奥所に存在するのである。併し、だからと云つて我々は、容易に明確に表現する事の出來ぬ眞の登山の目的を、其の儘にボンヤリと抱き續ける事は出來ない。我々は出來るだけ、其の目的が如何

なるものであるか深く穿鑿しなければならぬ。

（註）　科學的知識の探求が登山の眞の目的でない事は、所謂科學的登山者なる者が眞の登山家でない事に依つて知られる。明治より大正へかけて、我國の登山史上に輝かしき業蹟を殘した多くの科學者達が、彼等の山との關聯が一時的なるものであつた事によつて、やがては山より離れ去つてしまつた事實と、其の當時より變る事なく今も猶ほ山に働きかけてゐる科學者では無く、彼等が山に關する限りに於て、彼等は科學者であるよりは寧ろ山岳人であると云ふ事實とは、能く、眞の登山の目的が科學的知識の探求以外に存する事を指示してゐる。

肉體の健康を獲得せんが爲めに、體育の爲めに山に登るのが眞の登山であると考へる人達は恐らく今日は居ないであらう。又若し、征服慾の充足こそが眞の登山の目的であるとしたならば、今日日本に登山は存在しないであらう。又よしや今日存在したにしても、やがて何年かの後には——傳說的な天變地異のない限り——全く存在しなくなつてしまう筈である。ヒマラヤ、歐洲アルプスに比較する時、日本の山岳は餘りにも貧弱である。征服慾の充足の前には日本の山々は餘りにも平凡である。併し我々は日本に於て眞の登山が存在する事を信じ、何年かの後にも猶ほ決して消滅し去つてしまはうとは思はない。此の事は、征服慾の充足が眞の日本に於ける登山の最高目的でない事を明に述べてゐる。

登山の目的を見極める爲めには、先づ第一に登山の動機を考へる事が一番捷徑でもあり、又一番安全な徑でもある。

『何が我々をして山岳へ登らしめるか。』此の命題の中には二の世界が對立してゐる事を見逃してはならぬ。其の一は我々が平生、そして一生涯の大部分を其の中で生活する人間の社會であり、他の一は山岳が其の中に嚴然と聳立してゐる自然の世界である。人間の社會と自然の世界との對立、人生と自然との對立、之は最も平凡な何人にも自明な事實であるが、其だけに又拔き去る事の出來ぬ根源的な事實でもある。であるから「何が我々をして山岳へ

登らしめるか」との命題は、「何が我々をして人間の社會から自然の世界へ行かしめるか」と云ふ他の命題に置き換へる事が出來やう。

今日多くの山登りを思索する人達は、「自然に親しむ爲めに山へ登る」との言葉を、最も淺薄なる幼稚な登山觀として享受する事を敢てしない。彼等はースキー登山、岩登り等によつて代表せられる所謂スポーツ的登山に餘りにも目を奪はれてゐる彼等は――「自然に親しむ爲めならば山へのみ登る必要はない。自然は海岸にも原野にも存在してゐる。都會を去る事さまで遠くなき郊外にすら數多くの自然を見出す事が出來るではないか。」と反駁するに違ひない。併しながら、若し彼等の言を猶ほ普遍するならば、都會の中にすら、例へば塀と塀に圍まれた一坪の瘠地の庭に、或は又高層建築上の人工庭園の中にすら自然が見出せやう。此の場合彼等は單に土があり樹木がありさへすれば其處に自然があると考へる。併し今私が人間の社會と對立して考へる自然の世界とは、單にかゝる形式的な自然ではない。ヨリ深い自然である。であるからこそ、我々は山へ登つて單に純白の氷雪を、深綠の樹木を、紅紫の高山植物を、雄渾の岩石の表情を眺め見る事のみによつて滿足はしない。我々が海岸にも原野にも滿足せずして山岳にまで深入るのは、このヨリ深き自然の世界へ沒入せんが爲めである。そしてヨリ深き自然の世界へ沒入すればする程、それは人間の社會からヨリ遠く隔つた事になる。

人間の社會から立ち去る、換言すれば人間としての人生との必然的な關聯から拔け出す仕方としては、漂泊、怠惰、冒險、遊技等が一般に考へられてゐる。そしてその中の漂泊こそは、人間の社會から立ち去つて自然の世界へ

彷徨ひ込む狀態である。

以上を要約すれば、「何が我々をして山岳へ登らしめるか」の問題は「何が我々をして人間の社會から自然の世界へ行かしめるか」の命題を經て、遂に「人間の漂泊性の問題」へと進展し來つたのである。かくて私は、登山の動機は人間の漂泊性にあると獨斷を下すに躊躇しない。

『ある關聯の中にあるものはその關聯の何たるやを知らざることしばしばである。或ものを知るためにはわれわれはそのうちにあると共に外にあらねばならぬ。世の營みの中に躊躇するものはその營みが何を意味するかを知らぬ、活動の中にあるものはその活動が何たるかを知らぬ、傳統の中にあるものはその傳統が何たるかを知らぬ、傳統の中に立つて見ねばならぬ、或は時に小高きところに登つて展望せねばならぬ。それのそれ以外のものとのつながりを知らねばならぬ。生の關聯の中に活動するものはしばしその活動から離れて自らを省みねばならぬ。もしくは眞に生の關聯の中へ入らうとするものは先づそのもろもろの關聯を一應眺めておかねばならぬ。』（一）此處に漂泊の意味がある。

今日一般の傾向として、餘りにも登山を過大視してはゐないであらうか。登山にとつては、其が過小視せられる事と同樣に過大視せられる事も亦好ましくない。登山が我々にとつて——人間の社會の一員として生きて行く我々にとつて——第一義的なるものであるかの如く說かれる事がしばしばある。併し人生の問題は餘りにも微小である。凡ては我々が人間としてこの社會に生きて行かねばならぬと云ふ不可避的事實の法廷に

於て批判せられねばならぬ。であるから、人生の問題が第一義的であるに對して、山登りの問題は第二義的或は第三義的でしかあり得ないと云へる。今、假令、登山其のものゝ中に積極性と消極性との二分野を區別しても——スキー登山、岩登り等近代的登山を積極的なる登山とし、中山性の山岳を其の舞臺としてゐる「山旅」と云ふ一のタイプを消極的登山と呼ぶ事がよく行はれてゐる——其は結局、ヨリ狹き意味に於ける積極消極の區別であつて、登山そのものが既に消極的なるものである事は如何ともなし難き事實である。勿論ある幾人かの人は其の一生涯を登山の爲めに捧げたであらうが、そして、彼にとつてはまさしく登山が其の生き方の第一義的なるものではあつたらうが、かゝる例外的な一事を以てしては登山全體の一般的なる消極的性質を否定する事は出來ない。

玆にもう一度煩はしさを避けず繰返すならば、人生の問題が積極性を有するに對して登山の問題は遙に消極的なるそれであり、漂泊は、人生への我々の必然的なる關聯から——假令それが一時的ではあるにもせよ——遊離せる狀態であつて、之亦、我々が積極的に生きて行く事實に對して消極的なるものと云へやう。此處に登山と漂泊との結び附きが見出せる。

或る關聯の中にある者は其の關聯の何たるやを知らぬ。世の營みの中に羅齪たる者は世の營みが何を意味するやを知り得るのである。其の方法は或は漂泊であり或は怠惰から、又世の營みから拔け出す事にある。遊離した狀態にあつて初めて、今迄自分が其の中に在つた關聯の何たるやを知り得るのである。其の故、昔はよき職人となるためには修業の漂泊に出で、又よき武士となるためには武者修業として漂泊せ

ねばならなかつた。又かゝる意味に於てこそ或る詩人の云つた「私は本を讀まない秋の日を悔みはしない。私は何一つ作り出さなかつた怠惰な日を悲しみはしない。怠惰なる秋の日は私に王侯以上の富を與へる。」なる言葉も亦決して空虚なる誇張では無い。

積極的な人世への生き方に對して、其の半面に消極的な一時的な人世からの遊離があり、その目的のために漂泊せんとして我々は山へ登る。併し人世の煩はしさを避けて自然の世界へ彷徨ひ込む事が漂泊であり、その目的のために漂泊界は山岳にのみ限らるべきではない。漂泊者の典型として我々が今日猶ほ誇り得る西行、芭蕉は、決して山岳へ深入りはしなかつた。彼等の漂泊は單に旅であつた。併し歴史は次第に漂泊の世界を狹めて、今日では最早や西行、芭蕉の旅の足跡を丹念に追つても漂泊の目的は達せられないと云ふ事は、即ち人間の社會が次第に擴張せられ、其の半面に自然の世界が其に反比例して狹められた事をあらはしてゐる。文化の波が如何に自然を破壞して其の飽く事なき浸蝕を續けるかは、時々刻々我々が今猶ほ目の前に見る所である。斯くの如く漂泊の世界が狹められると同時に、人間の漂泊への要求は益々募つて來る。何となれば時代が進んで人間の社會、人世の諸雜事が煩雜になればなる程、我々は永く其の中に安住を續ける事は出來なくてしまう。（註一）人世の煩雜に耐へかねて人々は漂泊の世界へと逃れ出さずには居られない。（註二）

（註一）極く平易に云へば昔は世の中が住みよかつた。と云ふのは、煩雜な俗事に煩はされる事が比較的少なかつたし、人々

は一方に人間の社會に足を突込みながら他の足を自然の世界に置く事も出來た。其故、漂泊は極く限られた人々のみによつて特に行はれたのである。併し今日では餘りにも我々の周圍が煩雜化し、餘りにも自然とかけ離れてしまつたので、多くの人達にとつて漂泊は必要不可缺のものとなつてしまつた。

（註二）　此の事は、今日の所謂實業登山者なるもの〻夥しき數によつて知る事が出來る。土曜の夜から日曜へかけての山歩きや、稀に二日續きの休日を利用しての登山は、彼等に缺く可からざるものとなつてゐる。彼等にとつてかゝる山行は、稀の休日を寢て過してしまう事に比したならば如何に素晴しきものであらうか。

そして彼等は僅に取り殘されてゐる漂泊の世界を海岸でもなく、平原でもなく、山岳に求める。何となれば、彼等は人間の社會から出來るだけ離れて自然の世界に沒入したいからである。

かつては人間の社會と何等の交渉のなかつた自然其の儘の荒磯も、今日では都會人を吸收して華美な海水浴場と化し、其處には都會と何等異る所なく貸別莊が軒を並べてゐる。廣漠たる原野にも亦自然は次第に其の姿を隱して、一度一本の鐵道線路が果から果へ貫かれるならば、忽にして新しい別の世界を生じて、嘗て昔の旅人の殘した數々の遺蹟は何時かかへり見られなくなつてしまう。だが唯一つ山岳は、頑强に文化の魔手を拒んで今尙ほ其のまゝの自然の世界を我々に提供して呉れる。そして彼等漂泊せんとする者達は、山岳に初めて其の目的地を見出し得て、山岳こそは最適の彼等の彷徨地となるのである。

（一）「思想」　第五十五號　一二—一三頁　（漂泊——谷川徹三著　「生活・哲學・藝術」　一六頁　谷川徹三氏）

四、漂泊の心より見たる登山の歴史

私は、登山とは山と人との特殊なる仕方に於ける關聯であると云つた。そして其の特殊なる仕方とは、以上の說明によつて略說き盡した如く漂泊せんが爲めの山への働きかけである。漂泊こそは登山の動機であり、又其の目的でもあると云へる。

先に私は一般に考へられてゐる登山の歴史觀、即ち狩獵的登山、宗教的登山、科學的登山、遊技的登山を夫々の歴史的形式と認めて、其の間に歴史性を求める說を否定した責任上、此處で私自身、其に代るべき如何なる登山の歴史觀を持つてゐるかを述べなければならぬ。

「何が我々をして山岳へ登らしめるか」の問題は「何が我々をして人間の社會から自然の世界へ行かしめるか」なる命題と置き換へる事が出來、この命題の中核をなすものは人間の漂泊性の問題である。其故に登山の中心問題は漂泊の問題であると云へる。

單に地表上の一凸點たる山岳が存在しても其處には登山の問題は起り得ない。其の一凸點に人が働きかけ、しかも其の働きかけ方が特殊なる仕方に於て行はれる時に初めて登山の問題は發生するのである。そしてその特殊なる仕方とは、原始人に於けるが如く其の食料を得んが爲めでもなく、修驗者の如く其の修行場を求めんが爲めでもなく、其は甚だ漠然とはしてゐるが、人々が彼等の研究材料を發見せんが爲めでもなく、科學者の場合の如く彼等の

日常生活から遊離して別の世界へ沒入せんが爲めに山に入る、其の仕方である。漂泊せんが爲めに人が山に働きかける其の行爲こそ登山と云へる。其故登山の問題に於ては、山岳よりはむしろ山岳へ働きかける人間の心にこそヨリ重大な意義が認められる。

かく考へる私には其故、今日普通の登山の歴史とは山岳の歴史であり、其の前景として附隨的に其處へ足を踏み入れた人々の動きをちつかせてゐるに過ぎないと考へられる。そして私の考へる登山の歴史とは——山岳よりも山岳への人の心、換言すれば漂泊の心にヨリ重きを置くが故に——漂泊の歴史であり、山岳はむしろこの場合附隨的でしかあり得ない。

故に此處で強ひて今日の登山が歴史的に如何なる形式をとつて來たかを考へるならば、其は先づ第一に旅であり、(註)次には旅の山への延長である山旅であり(船田三郎氏が漂泊者的探檢登山として科學的登山と並び擧げられたものは恐らくこの山旅であらう)、そして現代に於てはこの漂泊的色彩の濃い山旅と、スキー登山と岩登りを其の代表的なる形式とつて、アルピニズムと呼ばれるスポーツ的登山とが並び存してゐる。

(註) 勿論旅が最も古き形式とは云へぬ。例へば旅の前身は修驗道の中にも見出す事が出來る。卽ち修驗道は一の山岳宗教ではあつたが其の反面に我々は、山岳や森林に對するヨリ濃き宗教的色彩に塗りつぶされて表面に現はれてはゐないが、日本個有の民族的信念を見逃す事は出來ない。之は、修驗道が既成宗教とは別の存在として今日に迄も永く其の生命を保つてゐる事によつても知る事が出來る。この山岳や森林に對する心こそ、旅の前身と見られるが、此處では、一の作り上げられたる形式としては今便宜上、第一の形式として旅を擧げる事とした。

此處で我々はしばらく枝道へ入つて、山旅とスポーツ的登山との關係を考へる必要がある。

スキー登山、岩登りはスポーツ、冒險の問題として、漂泊と同じく人世からの一の遊離の形式として考へられるが、之は又自ら別の問題として今は考へない。

一般には山旅は消極的なるものであるとし、スキー登山、岩登りには積極性が認められてゐる。この區別が皮相的であるのは云ふ迄もないが、假令皮相的であるにもせよかゝる區別の出來ると云ふのは、其の人の考へ方が淺薄である事を示してゐる。彼等は餘りにスキー登山、岩登りを狹い意味に解してゐるため、積極消極の區別を認めざるを得なくなつてゐるのである。スキーを、或はアイゼンを履いて氷雪を登る時のみがスキー登山のみが岩登りの問題の凡てゞはない。若しさうであるとしたならば、都會の眞中で高層建築物の壁を攀ぢ登るのこそ最高の岩登りではないか。

山旅とスキー登山、岩登りとの間には其の様式にある程度の差異のあるのは勿論だが、其の山岳への心を窺つてみる時、案外兩者の間には其の様式の相違にも拘らず多くの類似點を見出し得るのである。山旅が其の根底に旅の要素を多分に包含してゐる事は今更ら云ふ迄もない。そしてスキー登山、岩登りにも亦、この旅の要素が豫想外に多い事が知られる。スキー登山に就て云ふならば、スキーを履き始めてから再びスキーを脫ぐ時迄のみがスキー登山の凡てゞはない。岩登りを主要な目的とする登山に於ても、岩場にかゝつてゐる時のみが其の登山の凡てゞはない。猶、之を普遍して

て考へれば、彼等が或はスキーを擔いで、或はザイルを肩にして都會の家を出る時、既に其等の登山は開始せられてゐる。猶ほ我々が問題を廣く解するならば、幾人かの山友達の間に於ける山行の相談からが登山の開始であると云ふ事も出來る。

そして、スキー登山家も岩登り登山家も共に單なるスポーツマンではなくして、彼等も亦山旅登山家と同様、漂泊に憧れる一種の旅人である。其故に、彼等も亦よく旅の心に動かされ旅の心を理解する。「そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず。もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かへて、三里に灸すゆる」旅立つ前の何とはなしに落着かぬ旅への氣持をスポーツ的登山家も山行の前には必ずや味ふに違ひない。只一部のスポーツ的登山家は單にそれが近代的魅力を多く帶びてゐると云ふ理由によつて餘りにもスポーツ的方面にのみ惹き附けられてしまつて、彼等をして山岳に深入らしめた特殊なる理由を忘れ去つてゐるに過ぎない。

かく考へる時は、現代と全く相反するが如く見える二の登山の傾向も、結局氷炭相容れぬものではなくして、共に旅から歴史的に發展し來つたものと云へる。そして、スポーツ的登山とは一時的にスポーツ的色彩を帶びてゐるに過ぎずして、このスポーツ的色彩は、其の登山にとつての不可缺の特色となるものではない。

此處で私は結論として、私自身の信ずる登山の歴史を次の如く繰返して述べやう。

人間の社會から自然の世界への遊離たる漂泊を動機として、先づ旅と云ふ形式が發生した。そして其の旅は次第に其の平面的な世界を狹められて、ヨリ以上の勞力を必要とはするが止むなく立體的に其の狹められた世界を開拓

しなければならなかつた。この頃から漂泊的登山が始つた。そしてその發展せる形態として今日山旅と呼ばれる形式が存在してゐる。又今日ではこの山旅と並んでスポーツ的登山と云はれるものが行はれてゐるが、其は或る特殊なる山岳に適應して發生した一の登山の技術であつて、其の根底には猶、山旅と決して相反する事なき歴史的に一貫せる漂泊の心が潜んでゐる。特殊なる山岳をのみ對象としてゐるスポーツ的登山は、假令其の登山動作が如何に活潑であつても、結局消極的存在として、一貫せる登山の歴史の主演役者とはなり得ないものである。（了）

——一九三二・六・一——

春の赤石嶽

園山徳二郎

昭和五年の末頃から出來るなら大聖寺平の計畫で部員のSと自分は初春の赤石、惡澤、聖をやる事に極めて居た。根據地に就いては、いと考へてゐた。つまり、廣河原の小屋から晴天の日に我々は惡澤岳に登り、別に人夫に木炭石油その他を持たせて荒川小屋を發掘させ、我々は可能な限り其處へ一泊乃至二泊して赤石、聖を企てたのであつた。慾を言へば際限は無いが、その代りどんな荒天でも廣河原乃至椹島へ退却し得ると信じて居た。殊に椹島には特異な情緒を感じて居た。所が、三月の試驗時、Sが俄の病で山旅どころではなくなつてしまつた。それは致命的な故障であつた。そこで自分は計畫が潰れる不快を糊塗する爲に、又一つには病勢を待望する爲に關西へ久方振の一人旅を試みた。丁度京都では試驗に惱んでゐた、今は既になき、石戸宏君を訪ねて解剖の譜記をとんでもない山話に引張つてしまつた。南を未知な彼は机上の頭蓋骨を凝視しながら自分の計畫を聞いてゐた、提案は即座に一決して自分は急いで歸京した。

轉地療養中のSを思ひIを思ひ中々に眠れなかつた。辰野で丁度入れちがひの汽車から下り立つたIと白い齒を見せて二人は無意味に笑ひ合つた。それは寒い夜明だつた。天氣は素晴しく晴渡つてゐて、プラツトフオームの亞鉛屋根には雀が默つて膨んでゐた。

伊那大島で下車して、ルツクサツクは踏切前の運送屋の土間に引ずり込んだまゝ、飯盒だけをぶらさげて歩き始める。北條坂までの單調な道も、せかず急がず、振返つて木曾駒の白い姿を見つめたり、莨をのみ乍らの行手の鹽見を眺めたり、晝寢をやつた赤石の寫眞が吊り下げてある。主婦は手織の機をやめて迎に出て來る。古風な唐辛子の吊看板の蔭から挨拶する男も居る。暫くは上り口に腰を据えて茶を啜つたり一服したりしながら大河原の洩落談に耳を傾ける。久原鑛業が綺麗に引拂つてからの大河原市場はひどい寂れ方で、トロは全部取去られ、その日は氣永に夜更まで語り合つた。よく氣の付く主婦の計ひで、暫く汽車に乘り疲れた人夫相手の小料理屋も店を閉し、單なる山間の集散地に還つた大河原は、それだけに燻つたよい登山口となるであらう。四五日前に結婚したばかりだといふ案內の森上金光さんは都合が惡くて明日の出發は出來ないとの事なので、自分は、車中Sを思ひIを思ひ中々に眠れなかつた。それは寒い夜明だつた。

翌日は飯田から出張した醫者に齒の治療をして貰つてから、せめて小澁湯までと思つて午後の三時近く丸川を出た。昨日程ではないにしても麗かに晴渡つた歩きよい日であつた。釜澤の部落で、たつた一輪のタンポポの蕾を見付けた時には、泌々と春を感ぜられて嬉しかつた。少くとも伊那大島以

來初めての花であつたのだから。普請中の小澁湯に着いたのは六時半で、童顔稚聲の主人が「お客さんお泊かな」と鋸を引き乍らの挨拶も嬉しい。しかし驚いたのは其處の部屋で、五寸もある疊のつぎ目から出て來る夥しい 挟虫？には全く辟易した。食事中にも味噌汁の中で溺死する。我々の髪の毛の中で戸惑ひする。疊と言はず 板壁と言はず物恐ろしい襲撃であつた。夜が明けて、寢潰した虫の死骸を眞面目になつて二人で勘定し始めたもの丶 馬鹿々々しくなつて止めてしまひ顔見合せての苦笑も可笑しい。朝湯に入つて不味い飯に降參して、再び湯に浸つて居る所へ金光さんがやつて來た。見るからに逞しい男だ。話の結果、荒川小屋使用の件は惜氣もなく斷念して、先づ廣河原を根據と極める。チラチラ降り始めた小雪も問題にせず、零時半に此處を出て荒涼たる河原に下り立つ。小澁川の水量は著しく減つてゐて豫ての不安は一掃された。雪の上を濡れた草鞋で歩くのは痛い程冷いので却つて渡渉する水の中がらくであつた。渡渉も僅々七回で深さは膝關節。危ふ氣ながら丸木橋も處々にあつて溯行も簡單になつたものだ。高山の瀧あたりから上は積雪も多くなり、左右兩岸も相當な雪量を持つて居る。三四ケ所小さな雪崩が出て居たが、氣になる程のものではない。廣河原の小屋に着いたのは四時であつた。積雪は小屋の周圍で三四尺、舊小屋跡あたりで六七尺。小屋は明るくて綺麗で、樂書もしてない。

たちまち火が燃えて三人は默りこくつたまゝ銘々の仕事を始める。徑一尺もある立派な燃料が續々と運び込まれる。この夜の小屋内の最低氣溫は七度だつた。

翌四月六日は小一日雪が降り續けて約五寸の新雪を見た。既に荒川小屋使用を斷念してゐた三人はなす事もな

く、煙たい小屋の中で燻つて居た。夜に入つてから風が強くなつて寒くなつた。時折無氣味な雪崩の音が聞えると、急に默つて火を見つめる。パチンと火のはねるのも佗しい。

翌日も餘りいゝ天氣ではなかつたが大聖寺ヅルネを檢分に十時から出かけた。小屋から直ぐあの急な尾根に取付いて見ると、ガリ〳〵に凍りついてゐる。シニタイグァイゼンを付けて息切のしない程度で登つた。尾根筋についてゐる雪は極めて少い。皆吹き飛ばされたのであらうか。二時間ほど登つて見たが雪が激しく降つて來たので舟窪の手前から引返した。此の雪は夜に入つてからパツタリ止み風も收つて、空には冷い星まで見えた。

さて八日の朝は麗かな天候だつた。風は强かつたけれど身に泌みる程の蒼空だつた。食事も急いで六時には小屋の中からアイゼンのまゝで外へ出た。荷物はパンと輪樏と豫備の防寒具だつた。ザイルは初から持つて來なかつた。尾根にかゝつて見ると、前日の雪は皆吹き飛ばされてゐて、爪跡が明瞭に認められた。小澁川やフク川の水音は聞えない代りに、風の樹々を鳴らす音が耳についた。前日引返した地點から三十分も登ると急に積雪が增して然もフカ〳〵雪なので輪樏を穿いた。舟窪近くでは、それでも、太腿まで埋つて動きのとれない事が度々だつた。金光さんは六尺もある長い杖の先を樹の枝に引かけて、それを引寄せる要領で深雪の中を切り拓いて進んだ。舟窪での雪の量は、彼に言はせれば十五尺以上との事である。あれから夏道通り尾根を左に切れて六聖寺平鞍部への直登高に移る所から上は、再び堅い凍つた雪になつて居た。所々雪を透して岩の見える邊は蒼氷に變つてゐて眞劍な登高を要した。三人は銘々自分だけの努力で登つて行く。不注意にもアイゼンと輪樏とを併用したまゝでゐたので、

中途で輪樏を取去ると、其處は最低鞍部よりも拜み所に幾分近い中途半な所だつた。氣が付いて見ると何時のまにか周圍は一面ガスで包まれ強い西風が吹きまくつて我々を惱ませた。時計は十一時に近い。三人は全く無言でゐた、然し多少の無理は侵しても赤石をやつゝける事に言はずとも考は一つた。段々にガスは濃くなつて視界は極端に狹くなる。強い風の中でも一際激しい烈風に襲はれると三人は一樣に身をかゞめて是に堪へる。小赤石への尾根筋は東側に連續して大きな雪庇が突出て居て、其上を歩いてゐると所々に幅五六寸の罅が入つて居る。雪庇の高さはガスと風とで覗いて見る事も出來ない。自分は此の登高でクタ〳〵に疲勞してしまつた。幾度となく屈んでは息をついた。毛皮のオーヴアーの襟を立てゝ顏に當る風を幾分防いでゐたものゝ、雪を伴ひ始めてからは其風が堪らなく苦痛であつた。自分の足許をみつめながら歩一歩登りつめると、Iと金光さんが突立つて居た。それが頂上だつた。三千百二十米突赤石岳の頂上だつた。東寄りに風を避けてから時計を見ると零時四十分。廣河原から登高高距千六百米突、時間で六時間半。三人は初めて顏を見合せて微笑した。雪は一時止んだがガスは依然として濃い。たつた一度聖岳の一部分が十秒足らずの間眺められたゞけで周圍は再び虛無に還つた。寒さに慄え乍ら堅いフランスパンと凍つたジヤムを食べて、我々は一心にガスのはれるのを待つた。聖の淨白な全貌を凝視したいのが念願であつた。然しそれは空しかつた。一時二十分に景觀を後日に讓つて頂上を去る事にする。歸途は風の方向が變つて、稍々追風氣味のせいか自分のコンデイションは大分良くなつた。所がそれに反し、どうした事かIはひとり非常に疲れて足が兎角遲れる。唇の色も疲勞の程度を示してゐる。自分は

或る心細さを感じ始めた。それでも大聖寺平まで約一時間で下りられて、三人は風蔭で一休した。チヨコレートを三等分して食べたり、やつとの思で蔑に火を付けたりして、何かと疲労の恢復に努めた。シュタイグアイゼンの紐を締め直してから、金光さん、自分、Iの順序でガリ〳〵の急傾斜を一直線に下降し出したのは二時半であつた。未だ十歩も出ない内に突然に事故が起つた。五六尺うしろにゐた筈のIが聲もなく、全く突然に自分の左を抜けて落ちて行く。突嗟に自分は無意味な聲を立てたまゝ左手で慥にIの片足を摑んだのだつたが速力の差で遂に離れてしまつた。空に泳いで自分がIと同じやうに頭を下に俯向いた姿勢で滑落すると同時に先頭の金光さんも足が拂はれて仰向に倒れた。ルツクサツクが頭の先にブラ下り、その隙間から先に落ちて行くIが見える。金光さんが全身でもがき乍ら飛んで行くのも見える。頭の中は全理性と全感覺とが走馬燈の様に廻轉してゐる。Iが露出した岩の上を左右に躍つて、そのまゝ急傾斜の蔭へ落ちて行く。金光さんはもう見えない。どの位落ちたのか判らない。頭が下ではどうにもならない、唯々飛んでゐる。自分がどうにかピツケルで止つた時には近くに他の二人は見えなかつた。胸の中を熱い血のやうな物の通るのが感ぜられた。大聲で叫ぶと、下で聲がする。三十歩も下りて更に一段と急な傾斜を見下すと十米突餘り先に金光さんが居た、岩に杖を突込んで止つてゐた。ピツケルで彼の足許を安定させてから見ると大した怪我もない。更に五十米突も下ると危い所にIが辛うじて止つてゐる。何處からか血も出てゐる。然し元氣のよいのには助つた。三人が思出したやうに上を仰ぐと傾斜の加減で鞍部は見えない。少し登り氣味にトラヴアースして舟窪に着くと、急に三人共足腰の痛みを感じ始めた。三人の涙の出る程の協

力。廣河原の小屋に戻つたのは五時半であつた。事件は三人全體の不注意に在る。其夜は色々と考へさせられた。關節や胸に、それぞれ幾分かの痛みをもつ三人はそれでも薪を充分にくべて暖く眠つた。靜かな淋しい晩であつた。

サロメチールやメンソラや沃度の綜合的効果か知れないが翌日のコンデイションは必しも悪い方ではなかつた。天候の素晴らしさを豫想させる夜明だつた。Iに自重を强ひた自分は食料の關係上滯在日數を有効にする爲に、金光さんと二人で荒川岳或は惡澤岳の登高を企てた。即座に用意を始めて六時半には出發が出來た。ひとりで野望空しく小屋に殘るIの顏は暗かつた。本當を言へば惡澤よりも荒川よりも聖が我々の重要な對象だ。我々は是非とも之をやらねばならない。然しIの總べて南の山に對する熱情は强かつた。それを知つてゐる自分には、暗い顏をしてゐる彼を思ふのは苦しい。一時間半も大聖寺ヅルネを登りかけた二人は、その儘、氣を變へて小屋に殘つて呻つてゐる彼を思ふのは苦しい。一時間半も大聖寺ヅルネを登りかけた二人は、その儘、氣を變へて小屋に引返した。その日は麗かな春の日であつた。フク川の奥から幾つもの雪崩の音が續けさまに聞えたりした。ガラス窓を開け放すと、穩かな煙の流れがモヤ〳〵と渦を卷いて立昇つた。屋根から行儀よく羅列した氷柱がポタ〳〵と水を滴らせて居る。たわわにしなつてゐた白樺の枝がボサツと雪を下して名の知れない小鳥を飛び立たせる。眼前の魚無河内岳が奇怪な斷崖をギラギラと太陽に輝かせて我々を威壓してゐる。

Iの負傷はどうも膝の捻挫らしい。痛みが段々增して來ると言ふ。最後のオゾも塗り付けて、彼は元氣らしく歌を唱つてゐるが到底これでは聖も見込はない。食料は二日分に少々足りない。食料は小澁湯に近いからよいとして

も、無謀な登高は愼まねばならない。即ち翌日小澁湯まで引上げと決定した。最後の夜は物語に更けて行つた。

皮肉な天候だ。昨日以上の清朗さをもつて太陽は輝いてゐる。Iの腫れ上つた足に草鞋は付けられて小屋は再三清掃された。七時過に小屋の大戸は閉められて荷物は二つに造られた。金光さんのそれからの活躍はキビキビとしてゐて然も溫情があつた。渡渉も三回で濟ませて豫定よりも一時間早く十一時前に小澁湯の主人に迎え入れられた。羚羊が去日對岸に現はれた話を名古屋辯に近い土地の言葉で聞かされて、其處で晝食をとつた。意外に良いIの具合に慾が出て、そのまゝ大河原まで歸る事に極つてからは、氣もせいて冷い飯に湯をかけて呑んだりした。白い雲が往來して、和かな風がタンポポの花を搖らせてゐた。冬がジワリ〳〵と山奥に逃げて行くのだ。

（七・六・七）

"Vom Leben auf der Almen"

(Wanderfahrten in den Bergen, von jos. Schätz)

吉澤一郎譯

我々はよく外國の本や寫眞で次の様な風景を見る事がある。それは陽當りの良さ相な廣々とした山の斜面に擴つてゐる牧場に半ば傾いた、煙に燻された様な山小舍が夢の様にポッツリと置かれてゐる狀景である。全く我々はさうした場面にジッと視入る時、そこに人の心を和やかにする物語りだとか、詩が漂つてゐるのを感ぜずには居られない。事實そこに流れる無限の寂寥には我々が持ち得る最も快き憩があるのだ。その淋しさの中からは晨に夕に牛や羊の群から大空に向つてメローデイシュに響いて行く鈴の音を耳にする。又鄙びた粗野な牧夫の歌や、浮々した羊飼ひの聲が休日の靜けさの中へ融けて行つたり、時にはお腹のくちくなつた牝牛が暢びやかに鳴くのを聞く事もある。

近くの森からは樵夫の振ふ鋭い斧の響きが傳はつて來る。その獵師は獵師で昔と同じ様に同じ森へ這入つて行く。又こんな風な牧場が國境監視人や密貿易者、山林官や密獵者が一緒になつてやる村芝居の舞臺や背景になる事さへもある。

アルプスの奥にはこんな風に昔の儘な、廣い世界からそして又その惶しさから離れて悼朴さを失はずに居る淋しい谷がいくらも残されてゐるのである。

山の端の一番奥の高い所には三四百年も經つたと思はれる様な雨や風に晒された牧場小舎が散在してゐる。その周圍には大概、イラクサやトリカブトなどの雑草が生ひ繁り、小舎の附近は又家畜の出入りで目茶目茶に踏み躙られてゐる。此處に住む山の人達は自分達の祖先もかうして苦しい日々の勞働をやつて來てゐたものだと思つてゐるのだ。

牧場小舎の設計とか組立の中に我々は單純ではあるが爽快さを持つ鄉土藝術を見る。あるものは石で積上げた様な場合があるし、あるものは申し分なく陽やけのした重い自然の儘の材木で組立られてゐる。それが皆獨りでに地面からでも生え出て來たかの様に、點々と花の咲いてゐる牧場の上に憩ふが如くに立つてゐる。全くそれは周圍の崇高偉大な自然畫とつくり調和してゐる。自然の景をぶち壞すどころか却つて、之あるが爲にその美を高め、ヨリ生彩あるものとしてゐるのである。小舎の屋根には日本の山國でも屢々見る様に石が載せてある。之は勿論暴風雨や殊にアルプス特有のフエーンに具へてあるのだ。山の牧場には若干の小屋の他に日々の營みをするに必要な空地とか家畜小舎がある場合が多い。此の内最後のものは天候の悪い時などには家畜にとつて無くてはならぬ庇護物となるのである。

さうかと思ふと又バリヤやチロールにある山の牧場には——例外のあるのは勿論だが——人をして全く故鄉に

歸つたといふ感じを懐かせる様な清らかさと秩序とが流れ漂つてゐる様な所もある。それ等は南方に向ふ程、殊にイタリーの山の中で見られる現象で全く世間からは顧みられずに居るのである。そして偶々その方面に旅行した人などは、殊に雨の降る様な日には其處にある埃だらけの無料休息所に一夜を過して見たいといふ誘惑を感ずるのである。

×

山の牧場(Alm)は大別して二種類とする。即ち Rinderalm（牛牧場）と Ziegenalm（山羊牧場）とで、その他ケルンテンとかシュタイエルマルクとか瑞西には所謂 Saualm（豚牧場）といふのがある。又普通の羊も山へやられるがそれ等は夏の初めから秋まで殆んど勝手に放たれてゐるのであつて、轉々と轉がつてゐる石ころの間に秋まで殘された最後の少し許りの綠草を羚羊と一緒になつて食べてゐる情景は屢々見受ける所である。誰でも此の地方を歩いた者はか弱い羊の身でどうしてこんな岩や雪のある所へやつて來たかに驚ろかされるのであるが、これは羊達が本能的にこの高所に自分達にとつて最も美味しい草が生えてゐる事を知つてゐるからなのである。從つて所謂 "Sehnsteigen" と云はれる危險な場所に迷ひ登つてしまひ生命を失くす旅行者が時にあるのである。

山羊の牧場は大部分、牛の行けない様な絶壁がいつた急峻な山地にある。といふのは山羊は羚羊に似て非常に勇敢な、又巧みなクレッテラーであるからだ。山羊にも亦二種類あつて、一つを Herdgeissen（群居山羊）、他を Alpgeissen（アルプ山羊）といふ。前者は朝、牧場（Weide）にやられ、夕方、再び村へ連れ歸へられるもので、後者

は夏中を山の牧場で過すものである。

彼等の世話を見る牧童(Geissbub)は傍で考へる程樂な生活をしてゐるのではない。毎日彼は三時には床を出て、山羊を集める爲に大きな聲で唄つたり、"Schalmei"を吹いたりして村を通つて行く。頭數が全部揃ふとそれ等は一團となつて鈴を鳴らしたり或は咩いたりして山へ向ふ。午後になると牧童は直ぐ家畜の群を連れて再び谷に向ひ、夕闇迫る頃村に這入る。こんな風にして彼は夏の間中、その輕快な動物と一緒に毎日八時間から十時間の山登りをやつてゐる譯なのであるが、山羊の番人として自分でもそれを氣樂に思つてゐるらしい。又山の上で彼はよく牧歌をそのまゝ繪にした樣な格好で斜面に寢轉がつてゐる事がある。然し此の牧童の傍に少しでも佇んで居たら、彼をノラクラ者として咎める事は出來ないといふ事が解つて來る。

彼はミルク製造の手傳ひをしなければならぬのは勿論の事、時としては危險な斷崖壁絶に迷ひ込んでしまつた山羊を連れ戻す樣な事もある。それに登り降りの途中に森であつて小枝や若芽と見れば手當り次第嚙みとつてしまふ。それは山羊といふものは非常に美食家であつて、特に此の厄介な四ツ足共に注意を拂ふ必要が起る。そしてもあらうものなら、全く樹にとつては不倶戴天の仇だからなのである。

山中では山羊程飼料の方から云つて氣難しい動物は居ない。食へる植物と見たら何んでも嚙みとつてしまひ、誰が何んと云つたつて其處から離れやうとはしないのである。殊に旅行者が思はぬ時にパンの樣なものをやつたら最後である。然し此の食料を選り好みするといふ事は山羊の働きと密接に結び着いた性質であつて、上等な山羊にな

ると年に八百リツトル以上の乳を出す。そしてそれはバタやチーズに製造される。牛の乳が小兒にいゝとされて居るが手を加へない山羊の乳も美味いもので危險もないのである。榮養の爲とか、變色病、貧血、腸カタルなどには持つて來いのものであるが、特に小兒の榮養分として適してゐる。Saaner :: の山羊乳チーズと :: Roquefort :: は有名である。

尙序に云ひたい事は牧場山羊は非常に頭のいゝ動物で、主人が如何に自分達を理解してゐるかといふ事を觀察する實際の性癖があるといふ事である。牧夫が有名な「口笛」を鳴らすと山羊の群はサツと立停り、振られる鞭や杖で主人は一體、何つちの方へ自分達を向かはせるのかといふ事を知るのである。

然し乍ら眞の Alm といふのは男女の牧夫達が各自受持ちを分擔して經營して行く牛の牧場を意味するのである。そこは多くの場合前述の牧場よりは廣く、谷からも遠く離れて居り、且つ其處に居る人々は一人々々牧者とか、搾乳婦とか掃除人と云つた風に各自一定の仕事を持つて居るのである。そして牧場やそこの住人達は可なり穢らしいけれども、ミルクの桶とかその他商賣上の道具は實に清潔にしてある。それは彼等が可なり以前から細菌學なるものを知つて、バタやチーズの品質がこれを忠實に護る事にあるのを心得てゐるからである。

此處に於ける彼等の勞働も相當激しいもので時間的にも長いものなのである。最初のモルゲン・ロートが周圍の峰頂や岩壁にこつそりとかゝりはじめる灰色の黎明の頃にはもうその日の仕事に手をつけなければならない。一番初めは搾乳である。チーズ製造の場合はバタの時と異つてミルクの中に

あるチーズ素を利用する。即ちミルクは爐の上に掛けられた大きな釜の中へ入れられ乳漿に分離されるのだ。アルプスのチーズには Brie, Gervais, Camembert, Neuchatel その他 Emmentaler, Schweizer 等がある。

午前中の大部分は道具を綺麗にしたり、ミルクからバターを製造したり、あちこちの小舎や家畜の柵の修繕、薪作り等に費される。十一時頃になつてやつと食事にありつけるのだが、これが亦極く粗末なお粥の様なもので濟まされてしまふ。以上の他にもまだ〳〵厄介な仕事がいくらもある。強情な牛の惹き起した事件の仕末、迷子になつてしまつたのや、病氣にかゝつたもの〻世話、犢の飼育、それに毎週谷の村へミルク製品を下ろすといふ事も重大な仕事の一つなのである。これには大きな牧場では大概騾馬を使つてゐる。夕方には又牛乳の仕事と絶えず續くので充分に安靜するなんていふ時間は少しもない。

高山岳地方にある牧場は屢々その場所を更へる。斯くして初夏とか秋、或は惡天候の長續きする様な時には「下方の小舍」(Niederleger, 山の斜面に深く横はつてゐる小舍をいふ)に移る。眞夏には往々一千米突以上の所にある簡單に造られてゐる「高所の小舍」(Hochleger)を訪れる。多くの牧場の所有者は谷の方の屋敷は戸閉りをしてしまふか、老僕とか又は Austragstüberls (村の使ひ走りをして小錢を稼ぐ人達の事か)に賴んで、夏中を全家族と共に山上の牧場に過すのである。

次に世間といふものから全く忘れられてしまひ、下の村までは多少なりとも文化の流が漂つて來てゐるのに、そこから少し〻か離れて居ない所にその片鱗さへも殆どなく、都會の氣紛れ者がこの淋しい場所に迷ふ事が滅多にな

いといふ様な牧場がまだ存在してゐるといふ事は次に物語らうとするアルプ、ラリーデルで演ぜられた事件が證明出來る所なのである。

Sonnenspitz の北側の難場を降りて來た時、私は同行者と共に石崩れに出遇つてひどい出血傷を受けた事があつた。その時私達は長時間のクレツテライから、やつとの事で直立何千尺の岩壁の脚下にある Sandreisse に達した。と向ふを視ると暴風雨の前兆が近づいて來るではないか。そこで友のアントンは痛傷の爲に非常に弱らされてゐるので、今夜はこゝから尚一時間あるラリーデルの牧場へ行つて一夜を明かさうと相談一決し、その夜八時頃グショ濡れの姿で辿り着いたのであつた。

非常に疲れて無感覺になつてゐるアントンが一番近い小舍でドシヤ降りの雨を除けてゐる間に私は小舍から小舍を馳け廻つたがふと其の一つから青い煙の立ち上るのを見て、今夜の宿を交渉しなければならない當の牧夫が居ると考へた。で私は「今晩は」と云ひ乍ら中へ這入ると三人の若者が火の周圍に坐つて居るのを見た。一人は木管で火を吹いて居り、一人は木切れで何か彫りものをして居り、他は鍋を火の上に翳して中にある捏粉を焦さぬ様にあつちこつち動かして居た。誰もか何も云はない。私が友達と一緒に今夜此處へ寢かして貰ひたい事を云ふと彼等は頭を振つたが、それから十五分も經つてから一人が

「俺達(オラチ)の家は宿屋ぢやねえだよ。泊るんなら外へ出て避難所へ行つたら良からう。」と云つた。

兎や角してゐる内にアントンも前よりひどく血を出し蒼めた顏をしてやつて來たので、「一體君達はクリスチヤン

として、吾々がかういふ有様で居るのに、此の閻と雨の中を尚三時間も歩かせ様とする積りなのかい。」と詰つては見たが一向反響はなかつたし、やらうとした金も受取りはしなかつた。然し尚の事自分は一生懸命頼み込んで見たのであつたが、彼等は突然風の爲に曲つてゐる戸をピシャリと閉めてしまつた。さてかうなつてしまふと良策も浮んで來ない。それに雨は又猛烈に降つては來るしリツセルフアルケンの下の方では尚、電光が閃いて居た。その時ふと救ひの名案が出て來たので、閉められた戸を叩いて呼んだ、否、叫んだ。

「吾々は元來君達を明日寫眞に撮つてやらうと思つて來たんだよ。」

するとどうです、見給へ、忽ち一人が頭を出して云つたものだ。

「寫眞さ撮つて呉れるんけえ、そいつあ豪氣だ、ぢや鞍に覆ひをかけてる所を一つやつて貰はうかはどうだね。」

こんな譯で私の思ひ付きが偉大なる功を奏した結果、三人の男の中へ割込んで悠くり腰をおろし、大きな甕の中から一緒に、その所謂「ミユルク」なるものを匙で呑みながら、その場に合つた様な冗談を云ふと彼等もいつかそれに惹き入れられてしまふのであつた。

次の日には又ド偉くミルクやバタを出して呉れたので、それを二人で分け、いよ〳〵最後の別れをする時に、

「寫眞が出來たら一體何處へ送つたらいゝだらう。」

といふと彼等はまづ以て自分達が何といふ名前なんだかを思ひ出して見なければならない様な仕末であつた。然

しまだ多少はこのラリーデルの最近までの有様の様に文化に浴して岳ない牧夫の居る牧場がある事は事實だ。

假令、牧場にはアルプスにある様な避難所はないものと考ふべきであるとしても、風流な旅人達は何處の牧場へ行つても氣持ちのいゝ待遇をうけるものである。そして人間や家畜が一緒に住つたり、開き窗に素晴らしい火がパチ〳〵と燃え松材から出るいゝ具合の烟が部屋の中に一種夢の様な氣分を織り出すと云つた様な小舍の內外で過した時間といふものはいつも思ひ出す毎に愉快なものなのである。又お祭の夜に自然の儘の、粗野な然し、氣立のいゝ牧夫達と小舍の前に腰を下ろし、星の煌く大空を打眺める事もあるだらう。又牧夫の歌や、鐘の音に耳傾むける事もあらう。或は轟く雷鳴に小舍がギシ〳〵となる時に——牧人達が、家畜が安全な所に居る事を知つてゐる場合には——悠つくりと何もかも忘れて竈の周圍に腰をかけ乍ら焚火に陽燒けのした顏を朗らかに輝かすのを見る事もあらう。かうした時に山に關する小說や詩が何時でも此等の山上の牧場と結び付いてゐる譯を悟るであらう。

牧場に於ける生活行動の全部は家畜を中心としてゐる。そして彼等牧夫はよくその勞苦、不自由、孤獨に堪えて行く。おまけに之等が又いざ山上へ驅り立て樣とする時から始まるのだからやりきれない。よくものゝ本に描かれて居る樣に着飾つた牧人の男や女が愉快相に唄ひつゝ、元氣一杯な、嬉々として戲れる牝牛や犢や、中には吠える牡牛なんかも混つてゐる群を山上に引き連れて行く樣な事はさういくらもある事ではないのである。

アルプスに關する卓越したる著作以上に個人としても有名な H. A. Berlepsch の語る所に依れば、高山に於いては家畜遠征？といふものがある。こんな時には牧夫達は厄介な進行を巧みに操縱しなければならぬ許りでなく、腕

力や判斷力を用ひ、屢々生命の危險に曝される事もあるのである。これは殊に一つの氷河の反對側に牧草のある樣な場合に起る事であつて、シュパルテやシュルンドを隱してゐる所の平滑なる氷の面を越へて行かねばならぬのだ。それには特別に大工の樣な眞似もしなければならぬ、ピッケルやアックスで小橋や階段を拵へて見たり、氷の迷路の上に途を付けたり、其處へ又石ころや土を撒いて家畜にとつて本能的に好まぬものを除去してやる。實際、家畜はこんな滑つこい氷面を通る事に反抗する時もあるが、こんな時には止むなく强制手段に訴へなければならない。たとへば一つ一つの家畜を高い岩壁の上から見す〳〵起重機の複滑車の荷包の樣に落してしまふ 必要に迫られる山にぶつかる事もあるのだ。

牧場の人達にとつて鬱陶しいのは天氣の惡い日である。それはよく一週間も續き、ミルクやチーズは駄目にして了ふし、家畜も亦直ぐに痩せて小舍の中で空き腹を鳴かせられて居る。その他ひどい暴風の場合も心を痛めるのであつて、これに付いてはv. Tschudiがその著書の中で非常に旨い觀察を下して居るからそれを述べやう。

「家畜の群はまだ小舍の近所に橫になつてゐるし、牧夫は一日の暑熱と勞苦に疲れて最初の眠に這入つて居る。……その時、遙か水平線の彼方でピカリと光る。と近くの雪原は一瞬間炎の如きラヴアを注ぎ込まれた樣になる。峰々の上には雲が重々しく擴つて、次第にその黑さを增し、西方からは微かな閃きを持つた黃ろい雲の一團が薄氣味惡く押寄せて來る。下界を瞰れば又其處はまるで死の靜寂である。からなると最早牛達は落着いて居られなくなるのだ。生溫い突風が岩峰を越えて襲ひかゝり、段々と山バラの茂みや下方の銀松を吹き拂ふ。氷河の水は奔放に

なり、遠くでは雷が殷々と鳴り響き、上空は攪亂され、最も高い峰頭にはいよ〳〵劇しい火の閃光を見る。牛は立上り、一團となり重々しく叫ぶ親牛は出發の合圖をする。まだ平原の上には壓迫する様な鬱陶しさが横はつてゐるのだ。然しそろ〳〵ポツリ〳〵と重い雨滴が、まだ中で牧人達が氣樂に睡りを續けてゐる小舍の屋根に、斜めに落ちて來る。そこへ又、近くの明るい雲から炎蛇の如く硫黄色の閃光が岩壁に燃え上つて行く——毒が眼を刺戟する如く——はつきりとした爆音が後の方で轟く、雲は至る所で燃え上り雷は益々劇しくなり、空はゴー〳〵と咆へ、小舍は搖れ、スフイルンも震動する。猛烈な霰が明瞭な線を描いて牧場を打つ様に落ちる。上の方では間誤ついた動物が鳴き出し、お互ひに尻尾を振り上げ、眼をきつくつぶつて暴風雨の方向へ身震し乍ら走り出す。

こんな風になつてしまつた頃、やつと半裸體の牧夫達は飛び上り、手桶を頭にひつ被り散々（チリヂリ）になつた畜群の中へ只物凄い聲を出し呻き鳴くが如くして眞直に頭を突き出し盲滅法に走り廻る。それは全く恐怖と心痛の時であり、牧夫も爲す術を知らぬ時なのである。眞の闇と思ふと忽ち炎の如き火が現はれふ、霰は彼等に飛びかゝり、剝き出しの腕や脚をこつぴどく打ち責める。全く總てが暴動の渦中にあるのである。やつとの事で一部の家畜が集められる。風は危險な雲を雷雨分岐點（Wetterscheide）の向ふへ追拂つて了ふ

霰の次には土砂降りが來るのだ、牛は膝まで泥だらけになつて立つて居る、雷は小舍の周圍や、岩壁から岩壁へ

と分れ〳〵になつて反響して行く。然し最も立派な牛の中でもその一二匹は全く絶望の淵に打のめされてしまつて居る。――ひどい暴風といふものはさう不意には來るものでないので牧夫は注意深く家畜を集める。これをやる時には一種特別の光景が出現するのである。牛は鋭い眼付をし、頭を前に出し、押しあひへし合ひして立つて居る。牧夫はそこら中を歩き廻り、親しげに話しかけたり褒めたり、へつらふ様な眞似をする。その間にも電光は鳴り閃き、霰も亦前よりもひどく地面を打つ事はあるが、最早その場から離れる様な牛は一匹も居ない。それは宛も此の哀れな、氣のいゝ牛共は只自分達の主人の聲を聞いたゞけで絶對に安心であるといふ事を心得て居るかの様に見える。

最後に又、此の地方に住んで居る人達に傳統的な美しい性質のあるのは實に不思議な程である。彼等は決して家畜を粗末に取扱はない。まるで自分自身の様に保護し世話をする、これはつまり彼等が「家畜」といふものがどんなに重要なものであるかといふ事をいつも考へて居るからに外ならない。彼等の頗る狹く限られた、そして純眞な、從つて又それ故にこそ徹底した世界觀の中に、世間一般の日々の出來事よりも尚一層親みあるのがこの「牛」なのである。だからこそ彼等の語り合ふ話題と云へば家畜の事に限られてゐるのに不思議はない。

山の牛は平地で永久に、せゝこ小間しく飼はれてゐる様な怒りつぽい、無智な、猜疑的な牛とは遙かに違つてゐるのである。アルプス地方を訪れる人は屢々其處の牛が非常に優れた聰明な性質を澤山に持つて居る事を認めるだらう。例へば次の様な事實がある。牛の中でも一番大きな立派なのが絶對的に仲間を支配して――牛耳をとつて――牧場の往復や、牧草のある所へ行く様な場合先頭に傲然と立つて誰もその前に歩るく事は出來ない。牧夫も之を良

く知つてゐてその親方には大きな風鈴を着けてやる。此等の牛には一匹々々名前があり、
く知つて居てその時が來ると喜んでやつて來る。又牧草の豐富な所、綺麗な水の流れる所も知つて居れば、危い場
所や食べられない毒草等も熟知してゐる。天候に對しては至つて敏感で、天氣の變り目や暴風の來襲を直ぐに豫知
する。家畜達は殊に暑い日には一日中涼しい所を求めて歩く、午前中でもいざ暑くなると思ふと牡牛牝牛と云は
ず仔牛までが皆尻居を立てゝ、小舍に向つて飛んで行く有樣は全く面白い光景である。彼等は野つ原では暑さも暑
いし、おまけに蠅に攻められる事を知つてゐるのである。

偶然にやつて來た登山者が自分の行くべき道を一時間以上も牛が草を食ひ乍ら塞いでしまつて心細くなつて居る
樣な事をよく見懸けるが、丁度其の場に牧夫が居合せても彼等は只此の「都會の禮裝者」の不安を朗らかな微笑を以
て見送る許りである。これは無理もない話で、此處に居る牛位柔和な動物は何處にも居ないといふ事を知つてゐる
からだ。夜、途を歩いて其處に横になつてゐる牛に躓いても決して心配はない。然し時によると又牡牛の中でも、
年とつて怒りつぽい暴君が居て、うつかり揶揄はうものなら大變な目に遇ふ。それが手の下し樣もなく暴れ廻らう
ものならどうにも鎭め樣がないのである。

此處に記載して注意を促し度い事は多くの中には家畜を嗾しかけたり、驚かしたりして一般旅行者に對する牧夫
の感情を害するに至らしめる樣な登山者の居る事である。

埃太利や瑞西のアルペン地方には約四百万頭の牝牛が散布して居るが、褐色で角の短いのが一番多く、且つ此の

種類のものが最も多量に牛乳を出す爲珍重されて居る。經驗によれば、平原に飼はれて居る牛は乳の量こそ多いが質が惡く、山の方のは量こそ少なけれ、これが爲に質の方は至つて良いとされてゐる。年齢と種類に依つて相違もあるがアルプの牛は日々八から十二リツトルを出し、特に優良種になると日々の量が十六リツトルに達するのも珍らしい事ではない。

ずつと古いアルプスに就いての報告の中にも牧夫（Sennen）――此の名稱はケルト語の „Sejniun“ から出て居るらしい――の山上の營みの事が書かれてあるが、歴史以前既に長い間、石器時代に於て山上の家畜經營といふものが行はれて居た事は考へられぬ事でもなく又事實さうであつたらしいのである。十七世紀から十八世紀にかけては牧場經營に就いて大きな飛躍が行はれた。今でも多くの地方では昔の古い慣習が殘つてゐる、例へば西アルプス地方に於ては多くのスキス村で年に一度農民達によつて制定された牧場の經營に關する特種の法律、所謂 „Alpbri-efe“ が大勢の前で讀まれるのである。原始的獨逸憲法には一般の共有地を認め、„Allmendbesitz“（牧場所有物か）に關する章があつて、それにより農民は「アルプマイスター」を選び、斯くして選ばれたるものは善良なる管理者の注意を以て之を保持すべき責任があつた。彼は權利なき者の牧場侵入を防ぎ、牧場掃除人を監督し、當時にあつては少なからざる勞役であつた高所に於ける道路監修をもする山の世話役でゝもあつた。

然し乍ら當時アルプスの人達は餘り注意を拂はなかつた爲か、牧場の維持及改良には森林の監理が最もよく、且安價なものであるといふ事に氣が付かなかつた。さもなければあれ程自分勝手に森を火や斧で伐り倒して了ふ樣な

事はなかつたであらう。今日では山の住民達はその被害及經驗から昔よりは餘程悧巧になつて居り、によつて現在では森林監視人が居て、以前の様に自由な行動を農民にとらせなくなつてゐる。
最良の牧場は上半囘を森林に圍繞されて居る。それは崩石や雪崩を防ぐし、地面を肥沃にし草の成長を助長するからなのである。然し主たる理由は乾燥及び飲料水の缺乏を防ぐ事からであつて、殊に後者は以前の様に早朝、下の方へ水汲みに行く勞苦を除く結果となる。
山の牧場の生活は毎年、天候の安定後の五月末から九月のはじめまで續き、それから後四週間は前出の Nieder-leger で行はれる事が多い。
そしてやがて、酷寒と共に霜が地面に降り、高い峰々が愴惶しく新雪を戴く様になると、いよ〳〵アルムから別れを告げなければならない。多くの場所に於いては此のお別れは祭禮の型をとり、牧夫は「山の火」を擧げる。然し屢々起る早雪の時にはこんな事はして居られない。
晩秋の最後の暖い日には家畜は尙、村の周圍の草地で遊んで居る。けれども山の上は最早淋しくなつて行く許りである、鐘の音も牧夫の歌も沈默し、次第に冬がその護りの衣を牧場に、そして靜まりかへつた小舍の上に擴げて行くのである。（七、七、一四）
槇さんの『山行』にはスキスの村人の生活の事が美しい筆を以て描かれてゐる。就いて見られん事をお願する。

鹿島鎗ケ岳

堀岡清

昭和五年十二月二十四日　曇

有明の故中山彦一の家で御馳走になりながら、炬燵を圍んで、中山、高橋、近藤の三人の荷上げの苦心談を聞いてゐて、お神輿を上げたのは二時半だつた。夜は對山館でお見送りに來て下さつた方々へと葉書を澤山書いた。十時頃立教の堀田氏と大町の櫻井一雄が扇澤から下つて來られた。磯野さんと彦さんが話しに下へ行つたらしかつたが僕等は明日の事を考へながら布團の中にもぐり込んでゐた。

二十五日　晴

町の中には雪はなかつたが中學校を過ぎてしばらく行つた所からスキーが穿けた。白澤の出合で、うつかりウイスキー一瓶をなくしてしまつたのは殘念だつた。畠山の小舍へ入つたのは六時過ぎでもう暗かつた。

二十六日　晴

行ける所迄道踏みに出掛けた。雪は重く、約一尺位もぐつた。奥小澤にはデブリがあつた。彦さんの話に依る

と、荷上げした時から既にあつたそうだ。流石に本谷の出合からは粉雪になつた。本谷にも谷一杯にデブリがあつたが、此處の雪崩には注意が必要だと思ふ。本谷との出合より少し上（俗稱アカヌケ）迄行つて引返した。南、八ケ岳等が雲の上に美しく浮び上つてゐるのを遥に眺めながら、空身を幸に一氣に滑り降りた。

二十七日　晴後曇

荷上げした時から小舍が雪に埋もれてゐる事が分つて居たので、今夜は幕營の豫定で出發した。ラツセルはしてあるし、汗を絞られる位に天氣は好いし、呑氣に登る事が出來た。アカヌケから上は可成の急傾斜で三十度から三十五度位はあつたらう。晝過から空模樣が變になつて來たので、幕營が氣になり出した。風の吹きまはしで小舍の屋根でも出てゐる樣にと、賴りにならぬ空賴をロにしたりなどして見た。尾根筋へ出た頃は、冷たい粉雪を混へた風が顏と言はず吹きつける。勿論小舍は埋もれて居た。夏道には小舍へ登つて來る約二十間位手前に高さ五尺位の標柱があるそうだが影も形もありはしない。持小屋澤側の針葉樹の工合から見當をつけて、皆でピツケルやストツクを突込んで小舍の所在を探した。偶然にも唯の一回目に僕の人一倍長いストツクがリングの所で止まつてもう入らない。「此處堅いぞ、もう入らないぜ」と風の中で怒鳴つた。隣へ來た近チヤンが、持つて居たピツケルで突刺す「ゴトン、ゴトン」と音がする。どうやら堅い雪の塊でもなさそうだ。さあ事だ益さんが矢場にスコツプで掘り出す。十四の目玉が雪を掘つてゐる益さんの足許をじつと見まもる。小舍であれかしと願ふ心は誰も變りはない、一尺二尺三尺わつと上る歡聲、屋根が出て來る。誰かゞ便所の屋根でないかなどと要らぬ心配までもし

て見る。眞正眞銘の小舎に相違ない、一同幸運を喜びつゝ小舎の東側（祖父岳側）を破つて屋根裏から入る。小舎の内部には雪は入つてなかつたが蒸れて濕つぽく變に黴臭い。床が黴てゐたので有合せのトタン板を敷き、その上に蓙を敷きその上にテントを敷いた。雪の重みに、梁が危なつかしいので一本つゝかひ棒を立てた。それでそうでなくてさへ狹い小舎が益々狹くなつてしまつた。それでも幕營の事を思ひ浮べて何の文句もなく、殘りの握り飯とパンを嚙つてゆつくり寢ころんだ。

夕方から空は晴れて來たが、霧が卷いて來た。いゝ月夜で月も星も美しく見えたが、月は笠を被つてゐたので明日は先づ駄目だと思つた。月の光に照し出されて、祖母祖父から冷池を越えて布引鹿島と連なる尾根は銀色に輝き鹿島の頂上には風に吹き曝された岩が處々に黑く光つて居た。

二十八日　晴後雪

朝燒が美しかつた。昨日と違ひゆつくりした氣持で眺めた。劍立山又は鹿島鎗は一層魅惑的に見え又遙か南方には憎らしい位高く富士が頭を出してゐた。

彦さん達は十日程前に附近の木の根元迄上げて置いた荷を取りに行つた。僕等は寫眞機片手にぶらりと出掛けた。スキーを穿いて行つたんだが尾根がカンカンに堅かつたので、直ぐ脫いでしまつた。アイゼンを持つて行かなかつたので風に危險を感じたので祖父はあきらめて祖母から引返してしまつた。

二十九日　晴强風

夜明頃の天氣が悪かつたのでゆつくり寢坊した。午後から寒いのには閉口した。

三十日　終日吹雪

目が覺めると小舍の入口も風穴も完全に塞がつて居たので皆頭が痛い〳〵と騷いでゐた。勝れて鈍感なのか僕はさまで感じなかつた。一日中酷い吹雪で小便の外は一歩も外へ出られない。

元々小舍へ簡單に入れる積りで來たのではないから、二十七日に登つて來る時は、色々な美味しい物は皆畠山へ殘して來た。それで小舍にある食料としては豫め上げて置いた米、味噌、醬油、漬物の外は鹿島鎗へ行く爲めのパン、バタ、ジヤムが少しある切りで紅茶は愚か番茶も無い。連日の白飯、實のない味噌汁の繰返しを、米茶、醬油飯等で避ける事は出來たが辛かつた。醬油を使つたものと凍つてゐる漬物のバタイタメが一番嬉しかつた。

三十一日　曇後晴

天氣が好くなつたので晝頃からスキーに外へ出た。昨日一日の籠城で體がふら〳〵してゐる。黒部側は風が強かつたので、昨日からの風でクラストになつてゐて良くはなかつた信州側を滑つた。クラストがブレーカブルだつたので廻轉には困難を感じた。

「明日は天氣です、だが午後から惡くなるかも知れませんね。」と言ふ彦さんの豫言で明日こそ思ひ切つて鹿島鎗行を決行することにした。本當の處、肝心な木炭が明日一日分位しかなかつた。石油とアルコホールは、わんさあ

爺小屋より南望　　磯野計藏

るんだが、アルコホール厨爐は畠山の小舍で留守番をしてゐるか、どつちかしなければならなかつたのだつた。皆で「テルテル坊主」を歌ひながら、昭和五年を此の小舍の中に送つた。

昭和六年一月一日　曇後吹雪

人の氣配に目を覺すと握り飯やパンを燒く香がプンと鼻を衝く。「お天氣はどうだね。」と首だけ持上げて早速聞いてみる「え、好い様です。」元氣な彦さんの聲が煙を通して答へる。外へ出て見ると、月夜廻りになつた三日月の光にあたりの山々は薄ぼんやりと照し出されてゐる。東南に開けた安曇平が薄靄の中に寢てゐる。大町の灯か追分の灯か二つ三つ鈍い光を放つてゐる。鹿島鎗には一片の雲もかゝつてゐない。六時一切の準備が整つた。今日は小舍からアイゼンを穿いて出た。東の空は祖母岳の頂上で赤くなり始めた。祖父岳の上では八ケ岳の北から昇る初日を拜んだ。雲海を突破つて昇る眞赤な崇嚴な初日だつた。

祖父を過ぎて長いこと〳〵下りの尾根のブツシュの中では、雪が急に柔くなり腰までもぐる。遂にスキーに穿き換へた。八時十分、西俣下口の手前で二米に四米位の雪庇が落ちたのに驚ろかされて約一時間を費した。此の邊は尾根の脊まで木があるからうつかり油斷は出來ない。

布引岳を過ぎた頃から再びアイゼンに穿き換へた。此頃から空模樣が怪しくなりだして今迄の薄日もなくなつてしまつた。布引岳から鹿島鎗まで相當長い。行つても〳〵も先がある。雪が降り出す前であつたので變に風も酷く

ならず薄氣味が悪い。頂上に近づくに從ひ石コロや這松が出て來る。頂上に着いたのは十一時四十五分。小舍を出てから約六時間だつた。

丈の高さ位ある積石の頭がチョツピリ覗いてゐる。此の頭の所に用意の木の枝を挿し込んだ彦さんと磯野さんが「お目出度う御座んす」と新年の挨拶を交してゐるのが如何にも嬉しそうだつた。頂上では眺望は全然無かつた。十五分間で頂上に別を告げる。スキーデポでゆつくり飯を食ひ、冷池附近の雪庇も無事に通つたが、祖父岳の登りに掛る頃からはとう〳〵横なぐりの風に見舞はれた。祖父祖母は共に少し黒部側を巻いて通つた。小舍の入口が黒く見えた頃には僕等の足元はふら〳〵してゐた。

一月二日　雪

荒れ模様で出掛け度くない様な天氣だつたが、木炭が全部無くなつて飯が炊けないので仕方なく畠山へ降る。小舍の附近で小さな板狀雪崩に出合つた。二十七日の登路は、スキーの衝撃で上層の新雪がなだれ落ちて危險を感じるし又アカナギ谷の雪崩を警戒する爲めに途中から此路よりは東寄の澤へ入つた。急傾斜のブツシュの深い尾根を降るのには相當骨を折つた。（此登路及降路は山岳第二十六年第一號一一三頁の地圖を參照され度し）本谷の雪崩も恐かつたが何事もなかつた。

畠山の小舍で、久し振りの御馳走の爲めに罰が當つたのか、濡物を乾す枠が落こつたり、おまけに彦さんが煮湯で火傷したりさん〳〵の目に會つてしまつた。夕方から妙に暖くなつて來た天氣は雨をさへ伴つて來た。そしてそ

こらの崖で落ちる小さい底雪崩の音がしんみりしてしまつた畠山の小舍にも響いて來た。

一月三日　晴

鈴木歸京。寢不足を取返す爲めに一日中寢てゐた。

一月四日　晴後雨

彦さんの火傷で豫定を變更し下山する事にした。それで今日は種池の小舍へ小舍じまひに行けたので道がはかどつた。空身でデブリの上をチヨン〳〵と登つてギ谷にも大きなデブリが出て居て谷一杯に埋つてゐた。本谷にもアカナたのと氣がすゝまないのも手傳つて岩小舍澤へ行くのを止めて、二三日來急に親しみを増した鹿島鎗に惜しい別を告げ、二十七日の登路を眞直ぐ降つた。此の澤には雪崩の跡は見受けられなかつた。小舍からゴルジユまでの滑降は可成足應があつた。

一月五日　雪後晴

彦さんに無理だつたが大町へ下りた。途中から雪は殆んど無かつた。

附　記

此紀行は先輩磯野氏が書かれる事になつてゐたのでしたが、同氏の都合に依り僕の所に、急にお鉢が廻つて來た

もので、同氏の代りに書く様な破目に陥りました。文才もない僕が十分にその代役を務むる事が出來ないのを思ひ冷汗を流しつゝ此の一文を書きました。期日も切迫して居りましたので纏りのない此の一文でお役目を果す丈は果しましたがその足らざるを思ひ慚愧の念に堪えません。

僕の不足の所は「爺小屋を根據とする冬の鹿島鎗岳」磯野計藏記（山岳二十六年第一號）に補つて戴ければ幸甚です。

北信三日の山旅

吹原二雄

一まへがき

自分はかういふ山歩きは毎年でもやつて見たい。もう秋も末頃になつてやうやく大氣も澄み渡るやうになり、からつと晴れた紺青の空が毎日々々續くやうな頃に、新雪に飾られたアルプス連嶺の豪華な姿を仰ぎながら景色のいゝそして人氣のない山や谿を氣の向く儘に放浪するやうな山旅を。

ある年の秋には親しい友を語らつて所謂奥秩父に出掛けた。其時は幸ひに快晴續きで瑞牆山とか金峰、國師の峰々を面白く歩き廻つた。そして甲信の國境尾根に立つて遠く波濤のやうにうねり延びる北アルプスの連嶺を遥かに望んで自分の心は喜びに燃えた。だが其の時は雪嶺は餘りにも遠く隔つてゐたので、たとひ山々の名は指示し得ても輝かしい氷雪のもつグラデーションといふものは味へなかつた。

其翌々年の晩秋には更にもつと間近く新雪に粧はれた嶺をと望んで上高地に出掛けた。島々の谿は文字通り燃ゆるやうな紅葉の眞盛りだつた。見上げた眞赤な山の肩から六百山の白い峰が覗くやうに突出して居た。然し此行は

天候に惠まれず、殘んの雪を踏んで上高地についた朝の內だけは降雪直後のまばゆいばかりに陽に輝やく穗高、燒、霞澤、六百の峻嶺を仰ぎ得たが其午後からはずつと天氣が惡かつ、紅葉はゆる谿を、又霜枯れた丘を、そして新されるやうにして元來た道を戻らねばならなかつた。

斯くして始めて連日好天氣に惠まれて、白銀の嶺を近く仰ぎつゝ雪の山を味つたのが昨秋の山旅だつた。三日ばかりではあつたが宿題通りに步き廻つた時の輕快な氣分は今でも想起すと心の底から滲み出て來る。

其時の豫定はかうだつた。先づ最初の日は車窓から北アルプスの素晴しいパノラマを心ゆくばかりに味ひながら大糸線の神城に至り、それから姫川に沿つて白馬でも仰ぎながら乘合に搖られ、下り瀨から中谷川の谿をはいつて緣側から白馬一帶が望めるといふ小谷溫泉に一泊、第二日は乙見山峠を越えて頸城アルプスと呼ばれる山々に圍まれた笹ケ峰牧場の高原を彷徨して池の平まで、三日目は妙高山に上つて新雪の快味を喫し、合せて其絶大な眺望を得やうといふ計畫だつた。さて出掛けて見ると小谷溫泉附近といひ、笹ケ峰牧場といひ、如何にも親しみ深い處で豫期した以上に愉快な山旅を續けることが出來た。

二　小谷溫泉まで

十一月一日　晴　松本——大町——神城——四家——下り瀨——小谷溫泉

暫く振りで土曜の夜行で新宿を發つた。車中は押すな押すなの山黨で、網棚ははち切れさうなルツクサツクがず

らつと目白押し、尚アルペンの新雪を味ふのかショートスキーも幾つか見受けられた。それも大月、鹽山、甲府、韮崎と登山者に親しみ深い驛を過ぎると、段々に乘せた山黨も降りてしまつて、やがていつもの通り長々と足を伸すことが出來た。睡ろむこと暫し、豫期したやうに日本晴の朝が明け始める。鹽尻を離れて松本平をひた走る頃になると冷氣のたゞよふ澄みきつた碧空に北アルプスの連嶺がくつきりと一つづゝ低い前山越しに顏を見せる。陽を受けて薔薇色を呈した新雪が胸にきらめいてゐる。夏には全く見ることの出來ぬ鮮やかさだ。何時ものことながらすつかり嬉しくなつてしまふ。

松本から電車で大町に近づくと、蓮華岳、爺岳、鹿島槍が一きわ目立つて壯嚴な感じを與へる。大町で省線（大糸線）との連絡惡しく一時間餘も待たされてゐる間に二三枚寫眞を撮る。然しピントを覗くと山の壯嚴さが見た目の半分も映じないのには情けなくなる。やはり肉眼を通して心の中に刻みつけるのがいゝ。それで居て二枚ばかり寫眞を撮つた。

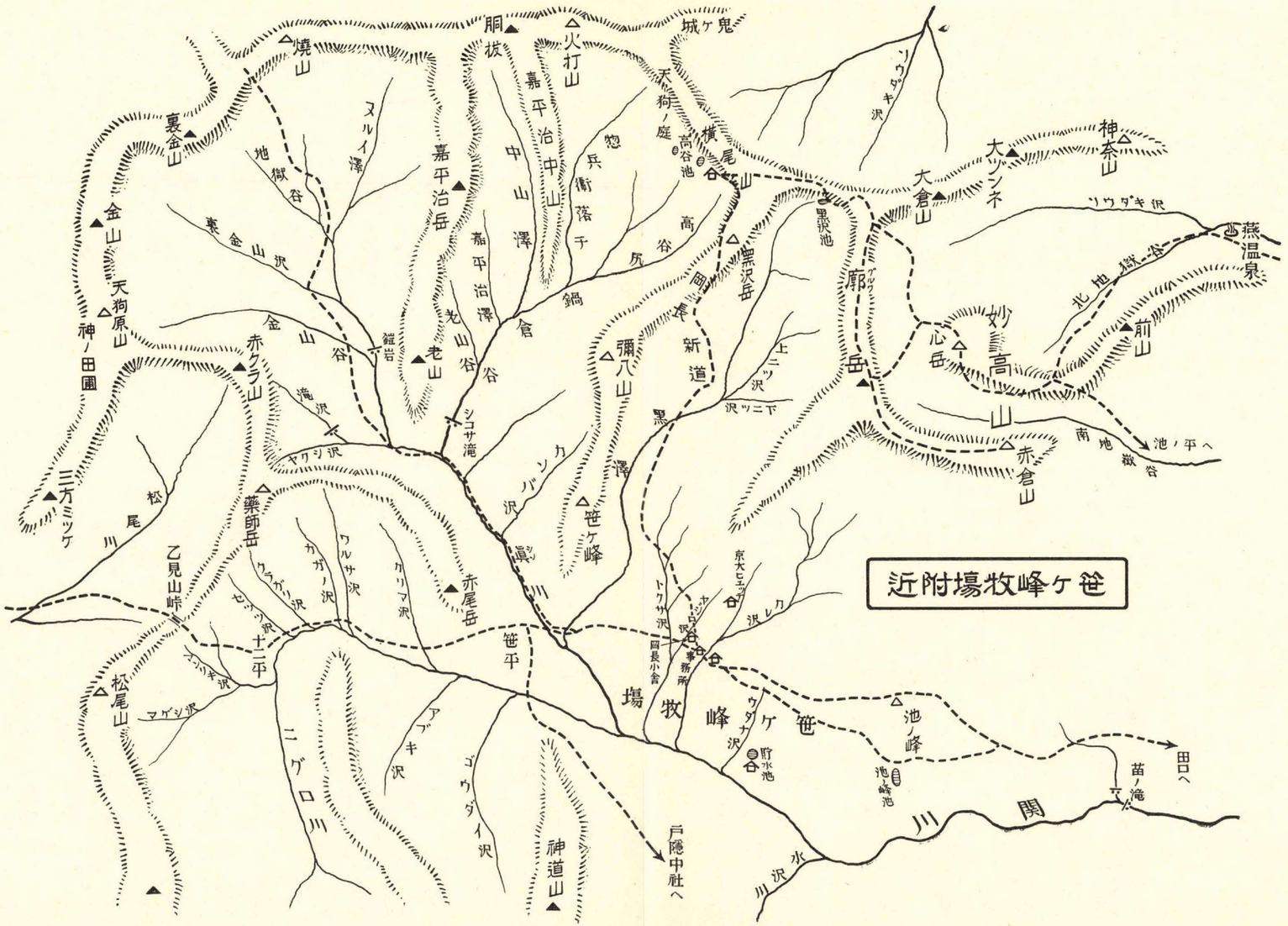
大町を出ると汽車は木崎湖を左に眺めて緩やかに進行する。小熊山を埋めた黃葉紅葉と其の下に靜まる木崎湖の綜合した秋色は仲々明るい派手やかなものだつだ。鹿島槍の眞白なスピッツエが時々燃える紅葉の上に閃めく。これは街道を忙しく馳せるバスでは容易に味へぬ景色だらう。靑木湖の景色も同樣に美しかつた。白銀を粧ふ白馬連峰が視野にはいつて來る。終點の神城驛で下りると、バスは四家から出るんだといふ。幸ひに白馬に上るといふスキーを擔いだ獨りの登山家と乘合せて、兩側に刈入れた稻を高く干してゐる街道をとばして高山館の前で下り瀨行

の乘合を待つことにした。

手早く晝飯を濟ませて、街道端れの田圃みちに腰を下ろして山を眺めて居た。見上げる山波は豐饒な新雪を被つてゐて、尾根は輝き、谷は其合間に鈍い銀色に沈んで居る。唐松、大黑岳邊りから鹿島槍方面にかけては夏には到底見得られぬ華麗な姿を見せてゐる。山麓の村はやつと刈入れが濟んだばかり、老いも若きも總出で稻の取集めに忙しい。褐色の家、黄ばんだ丘、白と黑の階調を畫く雪嶺、其上に廣がつた天蓋のやうな蒼空は渾然と一體をなして山に入る者の心に限りなき感激を與へる。ぶらさげて來たカメラを取出したのは暫く後だつた。憎らしや白馬のピークは後から後から押し流れて來る雲群の爲めに仲々姿を現はさなかつた。

十二時過ぎになつて、ひどくスプリングのよくないフオードに乘る。下り瀨まで五十分搖られて卅五錢取られた。糸魚川街道は姫川の谿谷の左岸に沿つて地肌を出した切立つた崖下をゆく。春になると雪崩が出さうな處が隨分ある。對岸の低い山は一面に紅葉して明るい感じに充ちて充ちて居る。十二三丁も行つて中谷川が姫川に出合ふ處で釣橋を渡る。街道は平倉山の腹を削つて姫川に沿ひ、小谷溫泉へは又すぐ中谷川を渡つて其右岸に沿ふ。地圖のやうにすぐ右岸に渡るのではなかつた。

中谷川の谿に入ると對岸の山々は一きは明るく紅葉黄葉に彩られ、其の上から大渚山の唐紅に染んだ高まりが見えて居る。行く程に、やがて大渚山の右手に奥深く天狗原山の黑く茂つた姿が見え出す。村役場のある市場を過ぎて右岸に移つてからは、地圖ではよく分からないが、小さな澤が非常に多く、岨路を一々爪先上りに廻つて行くの


笹ヶ峰牧場附近
鬼ヶ城
胴抜
火打山
焼山
裏金山
嘉平治中山
嘉平治岳
中山澤
ヌルイ澤
地獄谷
裏金山沢
金山
天狗原山
神ノ田圃
金山谷
赤クラ山
滝沢
ヤワシ沢
三方ミッケ
松尾川
薬師岳
乙見山峠
カガノ沢
ワルサ沢
カリマ沢
クラガリ沢
セバッ沢
十二平
赤尾岳
笹平
松尾山
マゲシ沢
アブキ沢
ゴウダイ沢
二ゲ口川
神道山
戸隠中社へ
天狗ノ庭
横尾谷
高谷池
惣兵衛落
高所
鍋倉
老山谷
シコサ滝
カバソ沢
彌八山
笹ヶ峰
黒澤
周遊新道
黒沢岳
上ノ沢
二ツ沢
黒沢池
廊下
ソウダキ沢
大ツンネ
大倉山
神奈山
燕温泉
北地獄谷
前山
妙高山
心岳
赤倉山
南地獄谷
池ノ平へ
京大ヒュッテ
トクサ沢
四長小舎
事務所
ウツナ沢
貯水池
池ノ峰
池ノ峰池
苗ノ滝
田口へ
関川
水沢

は歯がゆい感じがする。とはいへ葛草（クヅウレ）連邊りから益々景色はよくなつた。小暗い林を抜けて出ると四邊りは萬片の錦繍と化してまばゆいばかり、中谷川は深く足元に沈んで流れは殆ど見えない。

迂回してアツユ澤を過ぎるともう小谷溫泉、山の傾斜地を切開いたやうな處である。下り瀬から三里半、午後四時を過ぎて居た。一番奥の山田旅館に著いて、二階の部屋に通されると、成程聞いて居た通り緣側から白馬連嶺が見える。一休みしてから宿の下駄を借りて散歩に出た。湯峠に上る徑はすぐ裏手の畑の處から分れてゐるやうだつた。時間さへあれば鎌池と鉈池を見て峠に行つても見たかつたが、そういふ餘裕もないので止めた。葉を踏んで谷沿ひに四五丁行くと韓藉たる瀑の響が谿全體にこだまして居る。眼を上げると尾丸瀑が暗い樹叢の中に眞白く奔下して一條の太い白柱をなしてゐるのが見えた。そろ〳〵暗くなつて來たので髯剃瀑は見ずに宿に戻つた。此二瀑はいづれも高さ二十丈を越え、水量も仲々豐かで日本中でも一流級ださうだ。

客室百に及ぶといふ大旅館も、もう降雪を二度も見たといふ今日は殆どお客がないらしく、二階には自分の部屋だけ電燈が明々ついてゐるに過ぎない。浴室に行つて見ると、湯瀧がぢやーぢやー落ちてゐる。輕い旅疲れは廣い湯槽に浸つて長々と身を伸すと忽ち失せてしまふ。

此處の若主人は早大を出たとかで、スキーにも熟達してゐるとか聞いて居たから、晩飯が濟むと此邊の地理を訊かうと帳場へ出掛けた。若主人の話しに依ると、溫泉の北方に聳える岩峰雨飾山には其西南方の八百平（ヤヲ）（湯峠を一里半も西北に下つた附近）から上れるやうだし、又犬狗原山や金山から尾根傳ひにでも行かれさうだが樹叢で容易

ではない。尙天狗原山に上るには乙見山峠路が松尾川を渡る少し手前から左に分れる林道があるが、それから三方ミツケに上り、尾根を辿つて神ノ田圃といふ沮洳地に上ればいゝ。徑はないが踏跡はあるでせうと云つて居た。然しわざ〳〵一日を割いて遊ぶ氣にはなれなかつたから、翌日は笹ケ峰牧場を拔けて池の平に出ることにした。

三、笹ケ峰牧場へ

十一月二日　晴　小谷温泉——乙見山峠——笹ケ峰牧場岡長小舍

山に出掛けて最も心配になるのは天氣具合だ。緣側に出ると未だ陽の射し込んで來ない暗い谿に白馬連峰がほんのり紅く浮び上つて居る。宿を出て六七丁も行くと、前に赭む[けになつた崩壞地を見て中谷川が髣髴瀧となつて落ちるすぐ上手を渡つた。間もなく紅葉黃葉の重なり合ふ奥に黑々と空を突きさす雨飾山の岩峰を見出した。高さこそ低けれ、如何にも豪壯な感じがする。關西のクライマーには尙少しく上つて後を見返ると白馬連嶺が眼を悅ばせた。左手から鹿島槍、大黑、唐松から白馬鎗、杓子、白馬岳とずらつと並んで高さを競ひ、峻嶮を爭ふ。其壯觀にはひどく心を打たれた。近くの大渚山もスビッツエを屹てて滿山錦を粧ひ、中谷川の谿になだらかな山脚を引く、雄姿も遠景に對照して雄大な風景を形づくつて居る。こゝでスケッチをして見たり、寫眞を撮つたりして彼是四十分も費した。だら〳〵上りに松尾川の左岸の山腹をめぐつて行く。山の鼻に出る毎に谿の上に白馬一帶が望めるのが嬉しかつた。三つ目の小澤を股いで小さな崖の上に出ると大渚山の右に朝日岳が現はれ、大黑岳等は左の山の端に沈んだ。小暗いまでに茂つた樹林にかゝると道に標杙があつて天狗原國有歩道を左に

岐つ。天狗原山に上るにはこゝからだらう。間もなく巾一間半に狹まつた松尾川を渡つて愈々上りになる。（九時廿五分）此邊から上になると紅葉は盛りを過ぎて枯葉ばかり樹にしがみついてざわめいてゐる、四邊りは陰森として日蔭には處々に消えかゝつた殘雪が見受けられた。ヂグザツグに上りゆく內に梢越しに三方ミツケから天狗原山にかけての樹林の淺い岩の多い尾根を仰ぐ。やがて樹林が明るんで來る。古びた石鉢に滴り落ちる清水で咽喉を濕ほして間もなく乙見山峠に出た。峠には大きな楢の樹があつて石の地藏さんが鎭つて居る。

峠には豫期した眺望はなかつた。繁茂した樹林越しに天狗原山だの白馬以北の連嶺が斷片的に透かして見えるに過ぎない處だつた。落葉の堆かい峠路を小春日和の柔かい光を浴びて下りて行くと、右手に高く地藏山が逆光線に薄れて見えた。十分も小走りに下り切ると、打開けた十二平の笹原、行手に妙高山の廓岳（グルワ）が大きく蒼穹を區切つてゐる。ニグロ川の向ふには地藏山、乙妻山、高妻山の峰々が屛風の如く折重なつて居る。これらは北側だけに樹林の下に殘雪をかなり有つてゐるやうだ。

十二平からニグロ川について疎林の中をゆく、霜どけの故もあらうが處々ぢく〳〵とぬかる。十二平から五つばかり小澤を過ぎ、何時しか川と離れて赤尾岳の南腹を上り氣味に林を抜けると、やがて一面に極く丈の短かい笹原に開放された。笹平である。大きな圖體を橫たへた妙高山の廓岳から眼を左に移すと、赭茶けた樹林を被る彌八山と笹ケ峰とが低く伏して居る。其左肩から抜出て新雪に飾られた優美な姿を現はして居るのが火打山で、手近の老山の左手に雪まみれの大鐵兜を差上げてゐるのは燒山だ。其怪偉な山容は上高地からの燒岳に似て更に勝る。こゝ

から眞川に下る手前から戸隱中社に至る徑が右に分れてゐる。標木には其距離五里と記してあつた。

樹林越しに燒山を見ながら、眞川に架る危げな橋を渡つて又すぐ黑澤を涉る。此邊で眞川沿ひに燒山に登る徑を左に見送つて牧門を拔けた。四邊りは氣持のいゝ白樺の疎林で、一筋の小徑が短かい芝草の中を貫くつけられて居るのも牧場らしい。トクサ澤を過ぎて地圖の事務所の邊りに出ると、そこは妙高山が西南に長く垂れた樹林から開放された廣々とした草原で、古めいた田舍家の手前に眞新しい小舍が建つてゐる。こゝで一休みさせて貰つて晝飯でも喰ほうと中に這入ると、大體出來上つてはゐるが若い大工さんが造作に餘念がない。小舍の主はかねて其名を聞いて居た岡田長助さんだつた。しきりに何もないがよかつたら泊つて行かないかと薦める。然し自分は明日は妙高山に登りたいと思つて居たからこちらからでも登れるかと聞くと、徑が出來て居るといふ。だが分からないといけないから高谷池まで案內して貰ふことにして此處で泊ることに決めた。

食後に牧場氣分を味ひながら足觸りのいゝ茶色に塗りつぶされた芝つ原を漫步してゆくと澗澤の向ふにもう一軒、「笹ケ峰の小家」(田端家經營)としてあつた。木立の奥に小祠のある森を左にして、だら〳〵上りになる、池の峰の西斜面を東南に上るとこゝにも牧門があつた。木立の方の植林地の中に相當大きな池がある。池ノ峰ノ池といふさうだ。其邊から下り氣味になつて十數分でペンキの殆ど剝げた標杙があつた。そこから草むらの中に徑らしいのが見えたが、餘りおぼつかないので、尙五分ばかり下ると、今度ははつきりした徑が左に白樺の疎林に這入つてゆく。これがてつきり地圖の徑か

と思つたから上り出すと不思議なことにどん〳〵北に進む。途中で木樵に遇つたから聞いて見ると是は昔峠のしるべに植えたのだと聞いた。こゝから牧場はまるで箱庭の如く愛らしい。峠を下りてゆくとこゝにも牧門があり、下生えは刈られてあるのでさう歩き難くはない。卅分程で往きに通つた小祠の森の裏を通つて「笹ケ峰の小家」の前に出た。

まだ小舎に這入り込むには早いので芝生に寝轉んで平和な牧場の風景に見入つた。前方には焼山、天狗原山からコバルト色にくすんだ山波が西の空に長々延びてゐる、左手は樹林の深い神道山、地藏山等で其上から五地藏岳がちよつぴり覗いてゐる、背後には黒姫山が淋しく裾を引いてうづくまつてゐる、といふ山に圍まれた如何にも靜かな和やかな牧場だ。

小舎に歸つて見ると長さんは晩飯の仕度だ。大工さんは明日は是非歸りたいと薄暗くなつた小舎の中で造作に餘念がない。小舎は南向きで疊を敷けば十疊位の豪所及び水洗便所付きの爐邊の間と客室は奥に六疊と八疊とある。南の窓から外を覗くと乙見山峠から堂津岳に續く低い山波が右手に、低く小さな佐渡山と黒姫山が左手に、眞正面

には蒼黒い地藏岳などが重疊としてゐる、見上げた空には刷毛で撫でたやう薄くひいた雲が散つて居たが、それが夕陽に照らされて紅に輝いて居た。そして薄紫に變り、やがて灰色にぼけてしまつた。西の窓から外を眺めて見た。手近の笹ケ峰の右手にお椀を伏せたやうな恰好で金平糖のやうに岩塊を鎧つた焼山は未だ輝いてゐたが、金山、天狗原山等殘雪をもつ山々はうす明るい空に鈍く横はつてゐた。

暗いランプの下でさゝやかな晩飯が終へると爐邊に火を慕つて地圖を擴げ此邊の地理を尋ねた。さすがに二十五年間も此邊を繩張りとしてゐるだけに山の様子でも澤の名でもなんでもよく知つてゐる。こゝは昔は笹ケ峰新田といつた開墾地で、丁度菅平のやうに馬鈴薯の産地だつたさうだ。明治初年の頃には相當人家もあつたが其内に不作が何年も續いたのでやがて部落民の離散となり、牧場に變つたのだと。それから此小舍設立の趣旨も聞かされた。毎年冬になると裏手の疎林中にある京大スキーヒュッテには合宿が始まる、一般スキーヤーも小谷溫泉から又は池の平などから此邊に遊びに來ることがあるが、どうかすると短かい冬の日は豫想外早く暮れ勝ちである。又都合で其日の内に戻れなかつたりしてヒュッテの御厄介になることが屢々あるそうだ。するとヒュッテ側でも迷惑するし、お客を案内する長さんなどにとつても仲々心苦しいものだ。それだもんで愈々自分で小舍を作る氣になつたのだと。だから長さんの考へでは一般のスキーヤーが又登山客が何時でも好きな時にやつて來て氣輕に泊まれるやうにしたい、だから宿泊料も三食で冬は一圓位夏は八十錢位で安直に便宜を圖る積りだと語つた。

寢床にもぐり込んでからも色々と話がはずんだ。其夜は割合に溫かいといふので翌日の天候を氣遣ひながら寢に

就いたが仲々寢つかれない。天氣具合が心配になつて起きて外を覗くといつも星が一面にまばたいて居て、三日月が弱々しい光で牧場を照らしてゐる。如何にも寒さうな景色だつた。

四　高谷池まで

十一月三日　晴　小舍——黑澤を渡る——高谷池

心配した天候もいゝ塩梅に快晴が續きさうだ。牧場は一面に眞白く霜がおりて居て寒い寒い。六時過ぎになつて長さんがのこ〳〵起き出して圍爐裏に火を燃しつける。小舍の中をあかく照らす粗朶の火は何とも思つたが、やつぱり火が見えないと淋しいので大きく圍爐裏を切つたと話して呉れたのも文句なしに頷ける。山に行くには頑張らにやいふを過ぎ駄目ですと半强制的に四杯飯を喰はされてしまひ、すつかり後始末をして出掛けたのは七時半。例の如く雲一點もない空を戴いて霜柱をさく〳〵踏んで小舍の裏手を北へと疎林の間を縫ふ。五分位で槍石といふ徑は西北に廻つた。小澤をいくつか渉つて小舍から約卅分でトクサ澤を過ぎる。林間の小徑をゆるく上る中にいくつも徑をふさげて係蹄が懸つてゐる。針金を輪にして樹枝にぶるさげたもので、長さんの獵友達がかけたのだと云ふ。長さんに聞くと兎は近眼なので輪が見えない。だから兎の通路に仕掛けておくとたわいもなくかゝる。かゝると奴さんは大あわてにあわてゝ益々針金の輪がしつかり喰入つて逃げられなくなるのださうだ。かう講釋をしながらゆくと間もなく左手の叢に係蹄にかゝつた大きな兎を見出した。人が來たのに氣付いてじつと潜んでゐたが、むんづと長さ

んに捕へられ、大暴れに暴れて見たが首の根をぽん〳〵手で鉈打ちされると忽ちぐつたり半死の狀態になつてしまふ。「此奴は隨分でかいが持つて行きますか」と云ふが妙高越えもあるし面倒だから辭退すると、では歸りに小舍に持ち歸らうと叢に投げ込んで貉に捕れないやうにとお呪ひなのか落葉を其の上におつかぶせて又歩き出した。

トクサ澤から十分もして十字路になる。廓岳から下りて來た徑が南に牧場へ下りてゆくのと交叉した。尙十分で徑は黑澤を丸木橋で渡る。長さ四五間もあつて澤から一二丈の高さの處に架つてゐる。これから小尾根の南側の上りとなる。樹林越しに松尾山一帶の山の彼方に壯嚴なアルプスの氷壁が連つて居り、頭上は彌八山から笹ケ峰に續く樹林の茂つた而して上の方は黑木の疎立に笹原をとり交へた高まりである。登路は尾根の側面から尾根筋に上つて暫くはぐい〳〵と高度を上げてゆく。

此邊から長さん自慢さうに此徑（彼に因んで岡長新道といふ）を開いたときの模樣を物語る。長年の經驗から此斜面をゆくと彼山のどの邊りに出るなと見當をつけて樹林を十四五人も人夫をつれて切開いて行くと、やがてくの字形に曲折するときになると、カーブだぞと號令を下す。順次に其聲は後へと傳へられ人夫が一人で少しづゝ樹枝を切拂ひ、叢を刈つて徑が作られてゆく。だから先頭に立つ者程仲々ゑらい。こういふ風にして四日間でトクサ澤の邊りから高谷池まで切開いたといふことだつた。

傾斜が緩やかになると、深い樹林の中を主尾根の東側を縫つて黑澤岳（茶臼岳）の南鞍部に出る、とすぐ西斜面をからむ。殘雪が現はれて徑は五六寸から一尺近くの雪だ。昨年六月此邊を切開いた時

火打山と焼山

吹原不二雄

は最後の四日目の午後で、長さんに續いた人夫衆は根曲竹の物凄い密生に惱まされて、べそをかゝんばかりにてこづつてゐるのを彼は先頭に立つて頑張れ〳〵と激勵してやうやう切開いたといふ難所？　切殘しが竹槍のやうに鋭く雪の中に潜んでゐるから用心しながらに渡つてゆく。もうこれ以上新雪が積ると上から竹がおつ被さつて來るからすつかり籔が雪に埋れるまでは駄目だと云ふ。實際うまい時にやつて來たと心に喜んだ。こゝを抜けると疎らな白檜の林になる。左を見やると高谷池の下方のなだらかな斜面が一面に灌木に蔽はれて樹海の如くペンキで記したのを目じるしに西北に下りてゆく。やがて前面に新雪を被つた火打山、燒山の雄姿を望む氣持よく打開けた處に出た。高谷池も間近だが樣子の分からぬ登山者が此處で天幕でも張らうやと來さうな處だから、「此處より十五分にして高谷池に達す、小舍あり」とした標木がある。灌木の疎らに生える中を標木を辿つてゆくと、黑澤池方面に行く分岐點を經て手前高谷池の處に下りつく。

こゝは横尾山の南、ぐるりと築山のやうな丘に圍まれた盆地になつた濕地で、火打山は池畔からは見えない。小高い處に小舍が建てゝある。長さんは「こゝは天然のお庭見てえで」と云ひながら好きな煙草をすぱ〳〵やつて居る。靜かな落着いた處だ。

五　妙高山越え

高谷池——廓岳乘越——妙高山頂——光善寺池休息所——燕溫泉——關山

先刻の分岐點に戻つて郡界尾根に出る。平らな尾根で（此邊一帶を横尾山といふ）、下には惣瀧澤が深く入り込ん

で居る。此谷から容雅山にかけては 春になると長さんのグラウンドで夢中になつて熊狩りをやる懐しい處ださうだ。

顧ると赭く崩れた鬼ケ城の絶壁が右手に連なり、眞正面に火打山、胴抜（ドウヌケ）、焼山の三山がドウムを並べて偉容を示し高谷池一帯の灌木帯が高原のやうに擴がつてゐる。全く胸のすつきりする大きな眺めだ。此處で寫眞を撮つて長さんと別れた。

自分は注意された通り、暫くは尾根を辿り、小さな凋れた澤を傳つて殘雪斑々たる黒澤池畔に下りた。こゝでは未だ行手の妙高山の心岳は見えず、唯だ尨大な廊谷池と同じく小さな水溜りが數多くある濕原である。暫く休んで腹をこさへてから又上り出した。

が前方を高く遮つて居るのみである。

こゝから大體郡界尾根について東南に行くらしい。新雪が相當積つてゐるので仲々樂ではない。ボコ〳〵もぐり込むのに苦しみながら斜面を左に捲くやうに上つて行くと十五分ばかりで稍々平らになり、尚五分にしてやつと廊岳の上に出た。丁度妙高山の外輪山で大倉山の西南に當らう。前面は火口壁となつて急傾斜で惣瀧澤に落ち込んで居り、谷底から高く心岳が城塞のやうに兀々とした岩で固めた怪奇な姿をそゝり立ててゐる。此處で登路は分れ、傍のブリキ板には右は「赤倉山連峰に登り妙高山に至る、尾根筋なり。左は妙高山に至る、近道なるも危險に付き注意。」としてあつた。後者をとると、こゝから直ちに眼下の谷に下るので實に急な下り、おまけに殘雪があり、其下は土が柔かいので閉口した。僅かに兩側に匐生する矮樹にしがみつき、岩を頼つて愼重に下りて行つた。下の方になると足場が落着いて樂になる。廿分もかゝつて眼の下に覗き込んだ谷底に下りつく、凋れ澤に沿つた巾狹の平

地で、一面に残雪に蔽はれてゐるが下手に小さな池が目についた。

頭上にぬつくと聳えた心岳を仰ぎながら鉈目を頼りに澤沿ひに南へ進んだ。處々雪から露はれた岩に標が方向を示す。東南にそして次第に急に上つて行つた。谷に下りてから一時間ばかりで廊岳を經由して來た徑が右下から上り合せる。ぐんぐん岩の間をあへぎ上る。先刻下から高く仰いだ巨岩塊がすぐ間近に峭立して居る。夜の寢不足と一尺近くの新雪に惱まされて仲々苦しい。三時七分やうやく山頂の稍北方に上りついた。そして十分足らず岩の上を歩いて愈々一等三角點を踏むを得た。

空は飽くまで紺碧に澄みきつて居るが、下界は漠々たる雲海に閉されて全く見えない。遠くアルプスの連嶺が島の如く雲の波に浮び、火打、胴抜、燒山の三山は間近に新雪を粧つてゐるが、逆光線に稍々霞んで居る。山頂は廣くて岩石磊々として散亂し、頂上から南にかけては巉巖數多屹立し、東面は切つて落した岩崖となつてゐる。此雄大な眺望と快よい靜寂の氣分を泌み〳〵味ふために、晩秋の陽脚短いのも忘れて、廿分も遠くを望み近くを眺めて四邊りを歩き廻つて見た。尚こゝには「頸城アルプス登山口、黒澤池、高谷池、火打山を經て燒山に通ず、一一二一九米」とした高田營林署の導標があつた。

どうかすると見失ひ易い踏跡を求めて、南に岩を傳ふと岩蔭に神祠がある。寛政七年奉納の鐘が傍に吊つてある。それから岩の間をどん〳〵下つた。途中にいくつかの赤く錆びた鐵鎖が懸つてゐる。靜かな山に鎖の音がガランガラン響く。ぐん〳〵東に下ると光善寺池休息所に出る。（頂上から一三二七米）左を見上ぐると薄暗くなつた夕方の

空に心岳の東嶂壁が物凄くそゝり立つてゐる。間もなく天狗堂茶屋跡で池ノ平に下りる徑と燕へ下りる徑が分れる。どつちも驛まで十二粁としてあつた。

雪中に靴跡が亂れてゐる燕への徑を急いで行くと、北地獄谷に下る。河原に出ると徑が分からなくなつたが、やつと地圖のやうに右岸をからむ徑はなくて左岸の山腹の徑を見付けた。落葉で埋れた細徑は林に入つたり涸れた澤の中を通つたりして次第に迫り來る夕暗の中で時々見失つた。燕の少し上手の釣橋の處へ出るまでの一時間は實に心細かつた。

淋しい燕溫泉や關溫泉を素通りして、坦々たる而かも石のごろついて歩き難い徑を電燈が列になつてちか〳〵する關山の村をさして行つた。振返ると星が空一ぱいにまはたいてゐて、其下に妙高山が黒く怪物のやうに靜まつて居た。

追記——時間は記錄を參照せられたし。

寫眞說明——上は黒澤池西方の尾根より天狗の庭一帶を隔てゝ仰げる火打山(右)、胴抜(中)、燒山(左)の初冬の雄姿。

下は笹ケ峰牧場の笹平より北方に新雪を粧つた火打山(右)と燒山(左)を望む。

北ノ又川入り

高見要

「魚沼駒から中ノ岳、平岳、そして尾瀬へ」と云ふ春山のプランが大體決つたのは二月の中旬であつた。それから三週間の間、雪に蔽はれた、美しい上越國境の山々の姿は、絶えず頭の中を往來し、學年試験に苦しむ自分をともすれば幻想の世界へと誘ひ込むのであつた。試験も終了し用意も整ひ、三月十七日私達四人は晴々と都を立つた。しかしトンネルを抜けた越後の國は、三月も末と云ふのに未だ天候定まらず、毎日のやうに雪は降り風は唸つて私達を惱ました。そんなわけで最初のプランは慘々に歪められ、北ノ又川白澤出合の小舍から、僅か二日の晴天を摑んで、駒ケ岳と中ノ岳肩までの登高しか出來なかつたが、しかし目のあたりに見た魚沼三山の堂々たる雄姿と上越國境の山々の美しさは、豫想に違はぬものであつたし、又北ノ又川に於ける八日間の生活も極めて感興多いものであつた。

三月十七日　晴

凡らく連日打ち續くであらう激しいアルバイトに備へる爲、山に入るまでは出來るだけ樂に行かうと、上野發午前九時と云ふ晝汽車に乘り、上州の山々を眺めつゝのんびりと行く。水上は積雪二寸程、空は晴れてゐるが國境山脈から吹き下す風は、雪を混じてとても冷い。トンネルを拔ければ完全なる雪國だ。石打驛に下車。驛前に宿をとり、早速附近のスロープへスキー練習に行く。雪が深くて氣持よい滑降は味へず。夜に入つてしん〳〵として雪降る。

三月十八日雪

石打驛發九時半、小出驛着十時十五分。殊によつたら途中まで自動車が行くかも知れないと思つてゐた當は大はづれ、その上昨夜から積つた三尺餘の新雪は橇さへ通はせない。人夫を一人賴み、テントその他を持つて貰ひ大湯に向ふ。藁靴の踏跡を行くのであるが、凸凹で狹くて頗る歩きにくい。おまけに各自五貫位の荷を背負つてゐるので、能率のあがらない事甚だしい。四里の平坦路を八時間費し、申し分なくへばつて、夜に入り大湯の東榮館に着く。早速溫泉に入つて人心地になる。今日は全く越後の馬鹿雪なるものをしみ〴〵味はせられた。

三月十九日曇

十合が腹痛を訴へるし、それに一同昨日の疲勞もあり、今日は滯在と決める。午後一寸晴れたので、川向ふの突ノ岐山へ登りに行く。駒ケ岳、守門岳など美しく眺められた。

夜、かねて賴んでおいた人夫二人やつて來る。渡邊嘉吉（三九歳）と星鶴松（三七歳）。嘉吉は無口溫厚な男、鶴

松はよく話す愉快な山男、熊捕りの名人だと云ふ。東榮館の主人、嘉吉、鶴松の三人と種々プランを相談する。彼等は駒ケ岳、中ノ岳の尾根はとても行かれぬと云ふ。又、今年のやうに天候不順では、とても雪中の露營は出來ぬと云ふで、兎に角白澤出合にあると云ふ小舍を根據として附近の山に登り、調子がよければ澤の奥にテントを張り奥の山をやると云ふ事にする。尙、山形高校の人達が五名、人夫三人を連れて五日程前から、コツナゲ澤出合の小舍に入つて居る由。

三月二十日　雪

朝から雪降り止まず。何しろ明神峠（枝折峠）越と云ふ難關があるので、こんな天候ではとても出かけられない。今日も滯在とする。

三月二十一日　雪

今日も早朝からさかんに降りしきる。彼岸になつて、から毎日降るのは近年にない事と主人は云ふ。とに角此のやうに降り續いてはたとへ止んでも、一兩日は新雪が深くて、何時までも峠越は中々大變と思はれる。と云つて、何時までも此處にのびてゐる譯にもいかないので、明日は雪が降らない限り出かける事にして荷造りをする。僕達は大體四貫位持つ事にして、他の荷物と米二斗を人夫に賴むのであるが、雪が深いので少し荷が重すぎると苦情を云ふ。結局峠を越すだけに、もう一人を賴む事にする。上重次郎作と云ふ餘り感じのよくない男であつた。彼等は夏山七貫冬山四貫と稱して居る。信州の人夫達に馴れてゐる僕達には一寸氣にかゝる程荷の重さをブツブツ云ふ。

三月二十二日　曇

湯治客達のさも呆れたと云つたやうな顔に見送られて、八時半頃宿を立つ。佐梨川に添ふて大體平坦な路を行くのであるが、新雪は如何にも深く、坂本の小舍に着いたのは既に午後であつた。既に豫定の時刻も大分過ぎたし雪は深し、今日は此處で泊る事に決める。一休みした後尾根までラツセルをしに行く。

坂本の小舍と云ふのは茅葺の小さなもの、場所は地圖の須原から八海山へ移つたあたりと思はれる。七人はとても泊れないので、次郎作は大湯へ戻つて明朝出直す事になる。此の夜、久しぶりに星空を眺めつゝ、寒い夢を結ぶ。

三月二十三日　晴　明神峠越へ

良い天氣だ。直ぐ眼の前に駒ケ岳が雄々しく聳えてゐる。大體昨日ラツセルして置いた跡を辿つて、南斜面を登る。此の邊は陽だまりなので、暑さが甚だしい。顏面の雪やけしてぢり〳〵と硬ばつてゆくのが感じられる。駒ケ岳から西北に連る尾根は、岩と雪との實に物凄い大屏風だ。雪道澤、金山澤の雪溪が黑々とした岩壁と鋭いコントラストを示してゐる。時々、雪崩の音がにぶく響いて來る。

十一時頃、三角點下と思はれる所で晝食をとり尾根に出る。守門岳、飯豐山など特色ある山々が見參に入る。此の尾根傳ひは小突起が十幾つとあり、雪庇は東側に二米程出て居り、西斜面はブツシユ繁くまく事も出來ず、ほんとに難儀をした。峠に着いたのは三時半頃、お堂は半ば埋つてゐた。

峠からの下りは、稍ゆるやかな起伏がつゞく。しかしスキー經驗一合宿の僕にとつては中々容易のものでなく

中ノ岳　　鈴木英雄

頻繁なる轉倒は大いに一行のスピードを減じ、人夫達よりずつと遲れて、六時頃北又川コツナゲ澤出合に着く。早速川の畔の小舍に山形高校の人達を訪ふ。聞けば毎日吹雪かれ通して、今日やつと駒ケ岳に登つた由、明日大湯に下る豫定との事であつた。

白澤出合の小舍は、此處から三町程上流にある。雪が三尺の餘も吹き込んでゐたさうであつたが、山形高校の人夫衆も手傳つてくれて、僕達が着いた時には既にかき出されてあつた。やがて薪も威勢よく燃え上り、山形高校の方から貰つた兎二匹を料理して夕食を濟し、何となく落ちついた氣持になる。明日晴天なら駒ケ岳に登ると決め、ポタリポタリと屋根から落ちる水滴を氣に病みながらシュラフザツクにもぐりこむ。

三月二十四日　晴　　駒ケ岳へ

人夫達は小舍に殘し、山へは僕達だけで行く事にする。小舍の直ぐ西に來てゐる尾根にとりつく。昨日登つた山形高校のシュプールがはつきりとついてゐる。あたりは一抱へもある樅の疎林だ。大體尾根通しを行く。雪質はかなりよい。一二〇〇米のあたりで相當のクレバスを見る。深さ三米程、下を覗くとかなり太い樹が薙いだ樣に折り敷かれてゐる。雪でもなければ絶對に登れない路だ。一二八七米の地點に出た。霧にまかれて一寸明神峠の方へ行きかけたが直ぐとつて返し、小倉山に向つて尾根の南側を行く。吹き溜りと見えてかなり深い。小倉山からは實際十人位並んで滑れるやうな、幅の廣い緩やかな尾根だ。但し頂上近くには、かなり急な斜面もあり、深い凄い谷を見降してのキツクターンなど、思はずひやりとさせ

られる。頂上直下のカールを登りつめ、雪庇を破つて上に出れば、三角櫓は目の前だ。まともに吹きつける西風は、脳髄まで浸み透るかと思はれる程冷い。北の方はやゝ晴れて、守門岳など認められたが、南の方は霧の去來激しく、はつきり判らない。凍りついたシールをとり、匆々にして頂上を辭す。

登りに苦しんだ深雪のカールは、絶好なる斜滑降場だ。やがて、例の幅廣い大尾根に至れば、直滑降に、ボーゲンに、スキーの快味を滿喫しつゝ忽ちにして小倉山まで來る。一二八七米の突起を南にトラバースして、クレバスの上に出る。此の時、折からの夕陽に見ゆる限りの山々眞紅に燃え立ち、云はうやうなき美觀を現出し、一同感激に打たれしばし陶然として佇む。それよりは頻りなるキツクターンに少しく疲勞を覺えながら、樹間の滑降をつゞけ、日の暮れんとする頃小舍に歸る。

鶴松が打つて來た兎を料理し、今日も亦兎汁に舌鼓をうつ。山に入つた翌日、早速第一目的の駒ケ岳をやる事の出來た嬉しさに一同思はず氣を樂にし、明日は北又川流域偵察と、輕いプランを立てゝ寢に就く。

三月二十五日　吹雪

連日のアルバイトに思はず寢過して、九時頃目を覺す。鶴松に聞くと雪が降つてゐると云ふ。それではと、又シユラフザツクにもぐり込む。

雪は止む樣子もなく、午後からは風も加はり、やがて物凄い吹雪となる。小舍の諸所からは一吹き毎に、ピユウピユウと粉雪が吹き込んで來る。此の小舍は、口柳澤と奥柳澤とが合して、白澤となり、北又川に注ぐ々々上流に

在るので、地圖に奥柳澤が單獨で北又川へ入つてゐるのは誤りである。之は一二八七米の突起から東南に走る尾根の裾をまいて、口柳澤と合して白澤となるのだ。小舍は最近營林署と下折立とが共同して建てたので、二間に三間のかなり大きい板圍ひ茅ぶき屋根、村人が岩魚、ぜんまいなどをとる爲に使ふのださうだが、その爲か頗る夏向きに出來てゐて、板と板の間は五分位開いて居り、晴天の日には屋根から陽もさし込まうと云ふ始末、風通しのよい事は終日生木を燃してゐても絶對に烟くないのでも判る。尤も建築費總額三十圓と云ふのだから無理もないが、と に角目下吹雪が吹き込むのには閉口で、荒澤岳がゴーと鳴る毎に、一同首をすくめて觀念の眼を閉ぢる。

夜に入つて吹雪は衰へ、やがて星さへ輝き出した。明日はいよ〳〵中ノ岳に登ると決め、しん〳〵たる冷氣に、ある限りの防寒具を着てシユラフザツクに入る。

三月二十六日　快晴　中ノ岳へ

目を覺したのが四時頃、物凄い寒氣だ。外へ用を足しに行つた嘉吉が、悲鳴を擧げて爐端にとんで來る。人間を除いて凡そ水氣のある一切のものが凍つてゐる。三分間と火の傍を離れられない。しかし滿天の星は絶好の快晴を約束し何より心強い。それに風も無い。

何かと手間どり、小舍を出たのは此の谷にも陽のさし込む六時五十分であつた。兎を打ちに行く人夫達と一緒に行く。小舍の背後の林を行けば、疎林を透して朝日に輝く駒ケ岳、中ノ岳の崇嚴な純白の姿に僕達の胸は自から高鳴る。疎林の果から、駒ケ岳より眞東に走る尾根へとりつく、此の尾根は正面に駒ケ岳、中ノ岳を望む實に氣持よ

い尾根である。一二三五米三角點の先の鞍部で人夫達と別れ、瀧ノハナに降りる。之は瀧ノハナ出合の下に岩魚止の瀧がある爲、わざ〳〵此の尾根に一度登つたわけである。雪橋を渡り對岸をへつゝて芝澤出合に出る。此處で第一回の食事をとる。

さていよ〳〵中ノ岳への尾根にとりつくのであるが、そのとりつきの東北斜面は大變な吹き溜りで、深い新雪に踏み固めは効かず、杖は効かず、非常な苦勞をする。二時間半を費してやつと尾根の上に出る。相變らず無風快晴で、目指す中ノ岳は直ぐ眼前に聳えてゐる。良好なる雪質に喜びながら、大體尾根通しを行く。一六〇〇米邊よりやゝ急峻となり、頻繁にキツクターンを繰り返す。サカクラノ澤に時々雪崩の音を聞く他はたゞスキーの下でクーと雪が鳴くのみ、まことに穩やかな天候だ。いよ〳〵駒ケ岳へ連る尾根にとりつくと云ふ所で、又深い吹き溜りに出遭ひ、氣は焦れど登高ははかどらず、大いに惱まされる。肩に五十米程の點でスキーを脫ぎ靴で登る。肩に達したのは三時半頃であつた。頂上は眼前だが、しかし尙一時間餘はかゝるであらう。此處で一同協議した結果、歸途の時間も考へ、殘念ながら登頂を斷念する事に決める。

此處から見ると、當初の目的であつた兎岳、平ケ岳、燧岳など手にとる如く、たまらない魅力を覺える。中ノ岳、駒ケ岳の縱走は成程困難らしいが、時間さへあれば出來ない事はあるまい。僕達は約四時間と見積つた。芝澤出合にあたりに露營出來れば、中ノ岳、駒ケ岳をかけて白澤出合の小舍にかへるのは容易であらう。

日の暮れない中に芝澤出合まで行かうと頑張る。雪は既に大分クラストしてゐて、時々ひつかけられては滑落し

さうになる。登りに苦しんだ新雪の吹き溜り斜面を、雪まみれになつて滑降又滑降、芝澤出合に來た時は、將に黄昏の頃であつた。一杯に擴がつてゐたラテルネをつけて瀧ノハナ出合に來れば、既に夜のとばりは一面に垂れこめ、空にはオリオンがかし紅茶を沸かし。パンを喰つて十分腹ごしらへをする。どうせ夜になつたとあれば落ちついてと、幸ひ天候も心配ない事とて一同腰を降し、雪を溶

三十分程休んで、最初の尾根への登りにかゝる。降りる時既にクラストしてゐた此の斜面は夜に入り一層固く、エツヂは効かず大いに苦勞する。一時間半を費して尾根に出る。思つたより風當りも少いので安心する。ラテルネを振り〳〵、シュプールを辿つて小舍に歸つたのは十時半頃であつた。待ちかねてゐた人夫達に迎へられ、溫い兎汁に滿腹し、充たされた氣持で寢に就く。

二月二十七日　晴後雨

ぐつすりと寢て九時頃起きる。今日もよい天氣だ。外へ出ると中ノ岳が一際美しく輝いて見える。南風が吹いてゐるのでとても暖かだ。人夫達は兎を打ちに出かけたが、正午頃七匹ぶらさげて來た。野澤などにスキー合宿に行つてゐる時は、少し位雪が降つても練習に出かけるが、山に入つてゐるとその樣な勉強心は少しも起きない。午後からは雨が降り出した。

兎岳への登高、及び中ノ岳から駒ケ岳への縱走は此の小舍からはどうしても不可能だ。しかし雪中露營は此の樣な不順な天候では困難だ。そこで僕達は、既に山を二つやつた事でもあるので、他の計畫を放棄して、快晴の一日

を摑み荒澤岳に登る事にした。鶴松は五月頃熊狩りの時、中荒澤をかなり詰めた事があると云ふが、種々相談の上一〇一三米三角點のある尾根にとりついてみる事にする。

夜に入つても雨は止まない。此の分では明日も駄目らしい。遅くまで鶴松の語る熊狩りの話に興がる。

三月二十八日　雪

朝からしん〳〵と降りしきつてゐる。退屈しのぎに各自腕を振つては珍妙な料理を作り、胃の腑を驚天させる。

小舍の生活に就て大體述べれば、人夫達の仕事は薪とりと兎捕りと炊事である。偃松など〻違つて一寸も烟くない。尤も之は小舍の風通しがよい故もある。こんな太い木を切ると信州あたりでは問題にならうが、山の中の別天地なのだ。水は三十米程北を白澤が流れてゐる。兎はけだし無數で、鶴松の腕を以てすれば半日に五六匹は易々たるものだ。兎はとつて來ると先づ腹をとり去つてしまふ。此の爲小舍の附近はまるで兎の住處の様だ。皮は頗る簡單にべろべろとむけてしまふ。此の操作以後は爐端でやるのだが、餘り血の出ない爲か少しもむごいと云ふ氣が起らない。或は兎は先天的に僕達の食物となるべく存在してゐるのかも知れないなど〻勝手な事を考へたりする。背部の一番よい肉は鹽燒にしたり、生のまゝで喰つたりする。時には腦髓を生ですゝる事もある。四肢の肉はカレーに入れたり、バタでいためたりする。骨は切斷して兎汁に入れる。此の様にして兎は毎日二三匹位喰つた。汁の中の骨は暇な時

の間食だ。ニチヤリにパンを用ひた。兎ヤリ〳〵とやつてゐると、一つ終へるのに三十分位かゝる。米は一日に二升八合、但し僕達はお蔭で小舎にゐる時は大概口を動かしてゐる。からして雪の降る日は圍爐裡をかこんでニチヤリ〳〵とやりながら、銀山平の珍しい風習に就て、又は熊狩りの話など人夫達と語り合ふのだ。

三月二十九日　曇　吹雪村杉へ

夜中にふと眼を覺した折、非常な寒さに「占めた」と思つたが、朝起きてみると餘りよい天氣でもない。とに角行けるところまでと出かけたが、コツナゲ澤出合に至る頃既に猛烈な吹雪となつた。そこで荒澤山行は斷念し、村杉まで米の補給に行く人夫達と一緒に川に沿ふて下る。凍つた丸木が一本渡してある石抱橋を苦心して渡り、凄い吹雪に追ひかけられながら十時頃村杉に着き、鶴松の友人の家と云ふのをこぢ開けて入る。此の村杉と云ふのは約三十戸程の部落で何れも佐梨川流域湯の谷の村人が夏期移住して來て半年働く爲の家で、今は殆んど人が住んで居ない。米を五升程借りて早速かへる筈であつたが、如何にも吹雪がひどくて出られない。今夜は此處に籠城かと淋しい氣持になる。

三時頃遂に小舍へかへると議一決し、眞正面から襲來する吹雪を突いて敢然出發する。目も口も開けられない。睫毛も凍る。猛烈な吹雪の中をラツセルに苦しみつゝ猛進し、六時半頃小舍に着く。しかし懷しの小舍は吹込む雪で眞白だつた。

吹雪は夜更けても依然として靜まらない。一同物を云ふ元氣もなく、シユラフザツクの口を固く閉して寢に就

く。

三月三十日　雪、晴

そつと首を出すと、小舎の中は眞白、シュラフザックの上にも雪が積つてゐる。風は止んだらしいが雪は相變らず降つてゐる。朝食を濟せた後、今後の方針に就て協議する。米の補給をつけて飽くまで荒澤岳行をへたが、日數も大分經た事故、晴天になり次第直ちに里へ下る事に決める。

午後になると雪は止み、陽さへ照り出した。いよ〳〵里にも雪が積つてゐると何となく殘り惜しく、一日間の此の谷の生活は必ずやよき想ひ出とならう。明日は晴天確實と云ふので、夜は貯藏食糧品の一切を擧げて豪て附近を逍遙する。山々に圍まれた此の北又川流域は丁度上高地を想はせる。清き流、櫛の疎林、人スキーをはいて遊をする。

三月三十一日　晴

明神峠越へ

風はあるが空は全く晴れてゐる。すつかり小舎の仕末をつけ、來た時の通りコツナゲ澤出合から尾根の上では盛んに風が唸つてゐるが、樹木の多い此の斜面は幸ひ風當りが弱い。しかし尾根に出ると、果して凄い北西風が吹きまくつてゐる。頭の上はかん〳〵に照つてゐるのに、一〇〇〇米邊を風雲が矢の様に走つてゐる。荒澤岳の頂が先づゴーと鳴ると、やがて物凄い風が雪を飛ばして吹きまくる。暫らくは立ちすくんでしまつて息もつけない。がそれも一分間位で、後はけろりと鎭まり、陽は燦々と照り輝いて

ゐる。二三分たつと又物凄い一吹きが暴威を振ふ。こんな調子では峠はさぞかしすさまじいだらうと進んだが、峠の直下に來た時幸ひ風も大分鎭まつて來た。雪庇を破つて峠に出た時は、既に無風快晴、流石に三月の空はあくまで碧く、殊に樹氷の隙より仰ぎ見るその澄んだ碧色は、何とも云へない美しさだ。之だけの爲にも、三月の山は全く堪え難い魅力を持つてゐる。そして僕達はどうしてもやつて來なければならなくなつてしまうのだ。

北又川に最後の一瞥を投げ、大湯に向つての滑降にかゝる。しかし往きに苦しんだ小うるさい此の尾根は歸りも依然として僕達を苦しめた。増山は雪庇を踏み抜いて首まで埋り、僕は遂に左スキーの先端を折つてしまつた。幸ひ折れた先は見つかつたが、シーシュピッツエにより不自由な滑降をしなければならなかつた。七八七米三角點のあたりから南斜面を搦み、ブツシュを縫つて頻繁なるキックターンを繰り返し、三時頃坂本小舍に着く。それよりは呑氣な平地滑走をつゞけ、懐しい大湯東榮館に着いた。

久しぶりで背負つた重い荷に肩も相當疲れた。早速湯に飛び込み十日間の疲勞を癒す。山に居た間、常に他人の顔の惡口ばかり言つてゐたが、浴室の鏡で十日ぶりに自分の顔にお目にかゝり、吾ながら黑くなつたのに呆れる。宿の主人から僕達の留守に明大のパーテイーが來て明神峠のお堂に二日籠り、尾根傳ひに駒ケ岳へ登つたのを聞く。

四月一日　快晴

良い天氣だ。こんな日が山にゐた時あつたらと今更ながら思ふ。橇が通ふと云ふので荷物で滑つて行く。橇曳は嘉吉だ。雪はもうすつかりしまつてゐる。行程もはかどる。小出の町かれてあり驛までスキーをかつぐ。半月ぶりで大地を踏むのだ。驛に着いたのは正午。約二時間で來たわけである。

十二時半、嘉吉に別れ上野行の汽車に乘り込む。車窓からは八海山、中ノ岳、駒ケ岳が群峰を壓して堂々鼎立してゐるのが見える。見れば見る程立派な山々だ。田圃の雪も半ば消え、何とはなしに春の氣配を感ぜしめる。やがてトンネルを抜けて上州に入れば、既に一片の雪もない。麥は青く、菜の花は黄色く、桃は咲き、水は溫み、まさに春酣だ。それもその筈もう四月だ。東京では殊によると櫻が咲いてゐるかも知れない。

記　雜

早春の麓

小川竹夫

しろがねの雪に小鳥のあしあとのなどかそかなる春のにほひは

春まだき雪のあしたはしんしんと松のしげみにさむさしみいる

猫やなぎ雪のさむみにえみ居たり木のくれにさく白き花なり

ふるさとのゆふべおどろきて雪ふみしきつはしりき歸り

ぬれ道をこゝろ静かに山行けばおのづからなる辛の涌き來る

（奥羽船形山）

山小屋に行者のむれのしみじみと祈する聲あやにくすしき

山あれに岩にかくれてくつろげば煙草の香り君嬉しからず

（山の憧れ）

遠山のあたまの白き見まもれば如何にぞやせんこの情熱を

ふりあふぐみねのしらくも動くをりこゝろのうつろなるあり

はるかなる茅野の彼方には裾野うれしもなだらなるみゆ

『山十夜』

村尾金一

一　小河内温泉　大正十一年九月

雲取からの下りは長かつた。頂上では握飯を頬ばつたのだから、まだ午刻を少し過ぎてゐたのだが、地に落す自分の影が段々伸びて行くにつれ、長く長く續いた下りの爲に、膝の油がきれてガクン〳〵して、平の徑や、僅かの登りの方が好ましい位だつた。

多摩川の對岸が次第に高く眉に迫つて來て、松の木立の間をぬけて、最後の下りを鴨澤へ出ると、青梅街道だ。

左へ折れて川沿ひに下る。反對の方を指してNさんが「此の奥を何處までも行くと大菩薩峠へ行くんですよ。」

と教へてくれた。まだよく知らぬその山の名は妙に神に感じられた。

靜かな秋の夕闇が迫つて、殘つた多摩の白い瀬の頭もハツキリ見えなくなつてから暫らくしついた。それは溫泉宿と云ふよりも、木賃宿とでも云ひ度いお粗末なものだつた。

同勢六人、部屋に通される。瀬の音の聞こえる湯槽にひたりながら汗を流す。御飯がすめばいランプの下に地圖をひろげる者、今日の旅の失敗を語るもの、明日の天氣を占星術の道士の様に、星を見て來て、部屋は煙草の煙で一ぱいだ。

寢ころびながら、床の掛字や、額の繪をボンヤリ見てゐると襖の裾に、小さく拙い字で狂歌が書いてある。

このやどは、牛ときつねの　なきわかれ、
もう〳〵こん〳〵　もう〳〵こん〳〵

おう方、旅の商人がものしたものであらう。つれづ

れなるまゝに矢立の筆をとつて書きつけたのか、それとも、宿帳でも書いて——筆とらばものかかんことを思ふ——筆のついでに書いたのか何れ大した動機のものでもない筆のすさびだ。うす汚いのも、無愛想に思へるのも一面、質實な、素朴な、山宿の常なのだ。二度と來まいとも思へないな——と一人立上つて部屋を出る。それにしてもあんな事を書いてそのまゝにしてる主人も瓢逸なものだ、と、考へながら帳場に來て見ると誰も居ないで古い大きな柱時計が三十分以上も遲れて、カタンカタンと動いてゐた。

二　祖母谷温泉

大正十二年十月

大きな地震のすぐ後で、人の心はまだ搖いでた。まだ愛本邊までしか來てない黒部鐵道を下りて黒部に入る途中、この越中の土地でも關東の大地震に追はれた〇〇人の群が信濃から山越えして黒部の奥に來てゐると蜚語してゐた。然し祖母谷溫泉に來て見ても人の影は無く、唯青い空の下に薄が招いてゐるばかりだつた。僕達三人は當分この人のゐない宿の客なのだ。否、完全に主人になるのだつた。

五六日分の食糧で、毎日日　ぼつこをしたり、川原で湯に浸つたり、白雲の様な悠々自適だつた。

夜が來ると備へつけられたランプに灯を入れる。澤山ある筵を、寢る時の用意のを除けて餘つたのを窓や扉の隙にかけて、寒さとそれから薄氣味惡い闇の忍び入るのを防ぐ。實際途中で聞いた祖母谷の由來は物凄い。越中の何とか云ふ寺の傍に一人の老婆が孫の守をして留守してゐた。まだ赤ん坊でスヤ〳〵ねてゐるのが食ひつき度い程可愛いい。婆さんは文字通りそれを林檎の様な頬ぺたからアングリやつちやつた。婆さんは血を見て一そう猛烈に柔い肉を貪つたがやがてそれが鎭まると激しい悔恨の情が湧き起る。憑かれた様に、婆さんは徑もない所を黒部の川を上へ上へと溯る。行きついてパツタリ玉の緒の切れた所が今の祖母谷。家へ歸つた爺さんが驚いて探ね探ねて川を上つたが谷を一つ間違へて婆さんの姿も見ずに、これもはかなくなつたのが祖父谷。傳說とは云へ恐ろしい話だ。まことに鬼哭啾々たるものがある。

食糧と云つても毎日馬鈴薯のお汁や、コーンド・ビーフでは鼻について來る。

昨晩は晝の間、暇にまかせて摘んだその邊の蕗を煮て見たがすぢつぽくてたべれないで捨てちやつた。

「今夜はわかめを味噌で煮て見ようか。」

大きな鍋にわかめを少し柔かにして、それから味噌を入れて友の一人は丹念に箸でかきまわしてゐる。繪の好きなも一人の友はスケツチブツクを取り出して「その手附ぢや甘栗屋にもなれないな」と云ひながら鉛筆を走らしてその姿を描いてゐる。

「明日は一つ、來る時途にゐたあの赤い腹の蝮でも御馳走しようか。」

「蝮は精力がつくつて言ふからね。」

眞黒な影が三つ。爐の火が赤く燃える。鍋の中ではおいしそうに煮えて行く。

三　八ケ岳製板の小舍

大正十三年十二月

前屈みにリユツクサツクの重みをそのまゝ肩と背に受けて、暗くなりかけた坂道をタタ、タタと駈け下りた。その邊は、もう雪は斑らに殘つてゐる丈けだつた。

身體は疲れてゐたが心は急いでゐた。木立を抜けた。小さな橋を飛ぶ樣に渡つた。ヤツト製材小舍に辿りついた時は、中の灯りが、障子に黄色くうつつて「此處に人が居る」ことを示してゐる外は何もかもが眞暗な闇だつた。

その扉がガラツトと開けて土間へ片足入れる耳にウーと低く唸つてけたゝましく吼える。突然の闖入者に犬ぢやや甘栗屋にもなれないな」と云ひながら鉛筆を走らしてその姿を描いてゐる。

そう丁度四日前だつた。僕達二人は此處を出て南澤を東に、奥の行者の小舍を過ぎて、二尺から三尺、四尺と深くなる雪を、一歩一歩もぐりながら眞直ぐに横岳の尾根へ取つついて、日が暮れるまゝに雪の吹き込んでゐる赤岳の小舍で泊つたのだつた。その夜半から吹き出した烈風は朝になつても雪を捲いて止まなかつた。眞近の赤岳の裾さえ見せない。尾根の上に五分と立つて居られない。午後になつたら靜まるだらうと待つた。矢張り止まない。夜はまた吹雪の音を聞いて眠つたきり、他は皆燃料となつた。鉈で柱を削つても見た。羽目板を外そうとピツケルを振つたが手應えもなくビツケルが眞中からポツキリ折れた。長い一日。荒れてる日は長い。夜が來る三日目の朝相變らずの荒れ。晝。夜。滿三晝夜荒れに荒れた空は四日目の朝になつて切つて落した樣に晴れた。風いだ。荷物をまとめて逃げる樣に下りたのだつた。

圍爐裏の邊に上り込んで、二十何年も此處に棲みなれ

た末吉爺さんの好意の暖い御飯と御汁に舌皷をうつ。パチ〳〵と直徑一尺もある大きな乾いた木が威勢よく燃える。部屋の中が溫まつて、固くなつたゲートルの先からポタポタ滴が落ちる。

はな緒の氷りついた様な下駄をはいて外に出る。すかして見ると土は氷つてゐて歩く度にカラコロと響く鯨の背の様だと云つた。御嶽、木曾駒が遠く白んで波うつてゐる。

四　秩父破風の小舍

大正十四年十月

秋とは思へぬ柔らかな日射しだつた。暮れ行くまゝに四邊の栂の梢が金色に輝いてゐて、その幹を傳つて中程から下へ見下すと、もうその邊は夜への一歩を踏み入れてゐて、たゞ澤山切り散らされた鉋屑が、鋭く高い木の香りと一しよに黄色くハツキリ殘つてゐた。

みんな樂しそうに木を小屋に運んだり火を起したり、持つて生れた掟が當然の様に、その泊りの仕事をする。誰が歌ひ出すともなく何かロ吟さむとまた皆がそれに和して歌ふ。皆の心と空と地とが一つの諧調をなして、その宇宙が一つの亂れも起さずに進んで行く。水を汲んで炊事の準備をしなければならない。西は木賊山から東へ破風山と繋ぐこの尾根の上の小屋では北、眞の澤の方へ水を取りに行くのは大分遠い。昨日は釜澤の河原でねたのだから水は近くて便利だつたが、今日は一寸辛い。一人が米の袋と飯盒をブラ下げて鼻歌うたひながら谷へ下りて行く。

小舍で栂の葉がパチ〳〵燃えて——それからさつき下りて行つた男が飯盒から滴をたらしながら、ユツクリした足取りで歸つて來る頃は、眞赤な焔がメラ〳〵燃え上るのが外からでもハツキリ見える様な暗さになつてゐた。「どうも御苦勞さん」と飯盒を受けとつて爐にかける。ジユー〳〵と御飯がたけてお汁が出來て簡單な然し樂しい夕餉が終る。焚火にあたつて暗い中で、栗を燒いたり鯣の足を千切つたり、饒舌つたり、唯ロばかりを動かしてゐる中に夜は大分更けて來た。喰が重くなる。外は枝も鳴らさぬ靜けさだ。煙と中の溫氣を一寸避けて扉を排して外に立つ。「山へ來ると空が近くなる」と誰もが云ふ、その空一面に星屑だ。一寸見ると一つ一つ拾つても拾ひ切れない、ばらまかれた南京玉の様でありながら端正なペガサス、これがアンドロメダ、あれが勇士のペルセウスといつも變らぬ姿をクツキリ夜空に鏤めてゐる。腹一ぱい、胸一ぱいに冷たい空氣を吸ひ込んで小屋

に入る。

と、――大熊の様に背をかゞめたり、蝎の様に兩腕を伸ばしたり、思ひ思ひの星座を象つて皆ねころんでゐた。――この小宇宙は行儀が悪い。――

五　有峰

大正十五年八月

晝の間はカン〳〵照つてゐても流石に山に圍まれた有峰の高原は夕方からズツと涼しくなつて來た。一週間ばかりを一人で氣樂に歩いた山旅の別れを藥師岳に告げて西に向つて此處に下りて來た。明日は北へ千垣に出てそれから先はまた炎熱の街へ出るのだ。

夜、小川の緣に立つて見渡す。月は雲をとほしてうすら白い光を地上に投げかける。過ぎて來た上ノ岳、太郎山の邊りに雲が低く逼つて僅かに裾が見えるばかり。大多和へと遮ぎる尾根は黒く靜まりかへつてゐる。東谷へ注ぐ幾筋かの小川が、この夜では底も見せず、空の色も映さずたゞ淙々と清らかな音をたてゝ流れる。茂るにまかせた夏草の間を、程よく踏まれた小徑が右に左に疎らにたつた家々を繋いで行く。それ等の家々も大方は人も居なくて戸を閉ざしてある。山から下りて來た時も何處も閉つてゐて人が居ないのに困つて、そこいらを歩いてる中に一人の老婆が庭を掃いてるのを見かけて泊めて貰ふ樣に賴んだのだつた。その家は他の家もそうであらう樣に古くガツシリしたものだつた。梁は太いのが高くかゝつて居り、板戸は一枚の大きな板でその黒さは何百年か、白に青い線を描いた柱の樣なのもが横たえてあつた。

このお婆さんはお爺さんと二人、夏の間丈け涼しいこちらに來てるのだと云つてた。土地の人達は皆地面を賣つたり、財物を金に換えては富山や船津の方へ出て仕事を始めたがうまく行かないそうだ。

僕が一人飯盒に殘つた飯をたべ終へる頃に岩魚を釣りに行つたお爺さんが歸つて來た。その上ノ岳、太郎山の邊りに雲が低く逼つて僅かに裾が見えるばかり。大多和へと遮ぎる尾根は黒く靜まりかへつてゐる。東谷へ注ぐ幾筋かの小川が、この夜では底も見せず、空の色も映さずたゞ淙々と清らかな音をたてゝ流れる。茂るにまかせた夏草の間を、程よく踏まれた小徑が右に左に疎らにたつた家々を繋いで行く。それ等の家々も大方は人も居なくて戸を閉ざしてある。山から下りて來た時も何處も閉つてゐて人が居ないのに困つて、そこいらを歩いてゐ

この爺さん達の靜かな安住の地までヒタ〳〵とおしよせて來てるのが感じられた。武陵桃源の此の地にも「現實」に生きねばならぬ人の世のすがたがあるのだ。

「幸ひ」は何處まで行つても、いつも山の彼方に丈けしか無いのかも知れない。

六平の小舍

昭和二年三月

あまり咽喉がかわいて眼がさめた。何だか頭がボンヤリして總てが夢の樣だ。うす暗い灯りで見ると友達は皆健康な睡りを貪つてゐる。水がほしいなと思つたが、それらしいものも見當らない。

白いカーテンを除けて硝子窓に額をあてるとヒイヤリとして——月の照つてる雪の河原をボンヤリと眺めてゐると、頭の中の澁みが段々沈んで、隱れてゐた記憶が少しづゝ浮び來る。——

昨日——それは遠い遠い昔の樣に思はれる——大澤の小舍を朝出て晝早く針木峠について、針木谷を下る。低くなつた夕陽を眞正面にうける頃は谷も大分廣くなつて流れが出てゐて右に左に渡らねばならなかつた。

疲勞やら、早く小舍に着き度いと云ふ望みやら、春の雪の重さやら、一日照らされた顏のヒリ〳〵する痛みやら、ゴッチヤに感じながら行くと、一番先に行つた人夫が「ヤツホホー」と叫ぶ。あゝ小舍だ。小舍が見えたのだ。

小舍から四五人出て來て手を振つてゐる。こちらも杖を高く擧げて振る。吊橋を渡ると犬までが尾を振つて迎へてくれる。

初對面やら久濶やらの挨拶がすむと、もう里の話、村の話、山の話で花が咲く。每日此處日本電力の小屋では——水の流れを見て暮す——のが商賣で、その外は、降り積む雪と、空と、飛んで來る小鳥の外は生活に交涉のあるものはないのだから、去年の秋に入つてからは、大正が昭和になつたのも、丹後の地震も知らないで——悠々太古の生活だから、話さへすれば話がはづむ譯だ。

黑部の水でわかした湯に入つて、一先づ爐のまわりに落着くと、皆が來るのを待つてしまつてあつたと云ふ酒を、しかも、御飯茶碗になみなみと注がれて、皆の前に出される。咽喉がかわいてゐるまゝに一口二口と飮んで行く中に、好い氣持になつて、あまり嗜まないIの分までを引受ける。疲れてゐるのと、湯上りとでアルコールのきゝめは三乘されて、段々怪しくなる。一寸用をたしに行つて歸らうとすると、勝手のわからぬ

のも加つて、馬鹿に廣い家の中が、段々傾斜して來て、スツコ道を島島まではどうしても行く様がない様に思はれたり、一人殘つて此處に泊ることにする様に思はれたり、仕「もう一つどうだい」友達と別れることは旅路の終りでさとすゝめられて一人になるのは淋しいことだなあ」「もう澤山だ、そんなにすゝめたつて。驢馬を川へつれて行くことは出來ても」にも行けない。とは出來ない」

「……」泊るとなれば落着く。上りこんで「川を驢馬へつれて行くこ草をふかしながら往來する人達を眺「……」人、踵を接して一時は賑はつたが段々少くなつて來る。

いつか他愛もなくねこんぢまだそんな時間でもないのに餘程暗やつたのだつた。——雪の上に落ちる木々の黑がて冷々した空氣が夕闇と一しよに飯をたべないで暫く横になつてゐた。

七　德本峠

昭和三年七月

みんなは吉城屋の力餅のたべ過ぎたと云ふ。自分は長旅の爲だと思ふ。嬬の傍で山の話を交してゐたが、雨に腹を冷した爲だと思ふ。毎日毎日の雨に氣を腐らしりに皆床に就く。床に入つたが眠られない。風が木の葉て、濡れて重いテントを疊んで上高地から、德本峠にかをザワ〳〵鳴らし、雨がパラ〳〵屋根を打つて通る。眠ゝつた時、お腹がキリ〳〵痛んで來て、脂汗が出て、身れぬ身に物悲しい響だ。思ふともなに峠の今昔を思體の底から寒けがする。堪えに堪えて少し行つては腰をふ。

昔——と云つても十年を單位として一昔か二昔前の此下し、少し上つては休む。それでもどうにか頂上にたどの峠は至つて閑散なもので猿や狐やをよく見たものだそれが今では夏ならば人の通うだ。らぬ日は無いと云ふ

開け方だ。そしてまた、茲一二年で奈川渡から中ノ湯へ自動車が通る様になれば、峠を越えて、上高地に入る人の數も再び減ることだらう。島々谷にある誰とか奥方遭難の話だとか六百山の話などは、武士道華やかなりし頃の物語りであるから、此處と人の世との交渉は隨分古くから始まつたものだ。その長い歴史には色々變つたこともあつたらう。古人が考へた様に峠の神が此處に在したならば一日一日の、或は毎年毎年の、風や雨や、雪や霧やの自然現象の千變萬化よりも、稀にしかない人との交渉でありながら、人の世のうつり、かわりの方が、どんなにか激しいものと、驚かれたことだらう。

一寸風が靜かになつた。ランプの芯がジジッと燃える。かすかな鼾が聞こえる。

八　鎌ケ岳

昭和四年十一月

勢江の境を走る鈴鹿山系の、南の端をガッシリ受けとめる御在所山、そこから一段二段と落して、名もなつかしい鈴鹿峠となる。その御在所山の頂上に着いたのが午前十一時。このまゝ歸るのもつまらないから、向ふに鎌首を擡げてる鎌ケ岳に登らうかと湯之山越を西に近江路に入つた。一人旅の呑氣さに草の上に横になつて雲の徂徠を眺めてつい／＼と晝寢をしたり、磧に下り立つて汗を流したりして鎌ケ岳の頂上に着いたのは五時少し前だつた。秋の日は暮れ易い。傾いた陽の光を山の背に受けて立てば、伊勢灣が大きく開いて、三瀧川をまん中に、朝明川、海藏川、内部川、鈴鹿川が同じ方向に綺麗に並んで海に注いでゐた。やがて段々暗くなつて來る夕霧は舞ひ上る。湯ノ山へ直接下り度いと思つたが分らないし、元來た道も嫌だから、内部川の方へ下りる。川へ下りた頃はラテルネをつけねばならなかつた。七時少し過ぎ、山之坊の部落へ出る。此處から北に向つて四日市機關鐵道——と地圖に書いてある——の何處かに出るつもりだ。

暗い田舍道をテク／＼歩く。田舍道を歩くのはなかなか六ケ難しい。山の中で道を見付けるのなら、人の歩く處は一條で大ていきまつてゐるし、踏跡が一寸消えてもその消えた所からヂツと見つめると、同じ方向の何處かに輕く踏まれた跡が判る。所が村に入ると道が左右に分れてゐる。ウツカリすると他人の家の庭に入り込んだり、廐の横や、牛の鼻つ先に出たりする。それにまだ時間が早いのに戸をしめこんで——寢てるのか——音もしないので道も聞けない。やつと道を聞いても、二三丁

と云ふのが半里程もあつたり、話す方では分つてゐるのだらうが、太郎作の家の前を南へ指して少し行くと橋があるから渡つて東へ行けと云ふが、第一その目標が分らない。それから橋を渡つてと云ふがいつまでも橋らしいものがないので考へて見ると先刻幅二尺位の溝に石を渡してあつたのがどうもそれらしい、と云つた様なことになる。好い加減の見當で歩いてるんだが、なか〳〵電車線路に出ない。

夜道は涼しい筈なのに、固い路に登山靴を叩きつけて歩くのでは、蹠がほてつて氣持が悪い。肩から先にブラ下つてる手が妙に重く、咽喉が渇いて來る。

八時、八時半。何處をどう歩いてるのか一向わからない。地圖を見るのも嫌になる。

九時、九時半。四日市へ行く最終の電車ももう通つちまつたらう。

十時、十時半。やつと明るい所へ出た。——後で考へれば孤野らしい。自動車屋を見付けて、目をこすりながら出て來た運轉手に汽車の時間に間に合ふかと聞いたら後三十分だから間に合はぬかも知れぬがやつて見ませうと云ふので飛び乘る。

すぐエンヂンをかけられた自動車は、ヘッドライトを

九　涸澤、岩小舍

昭和五年六月

涸澤の入口で急にうす暗い雲が雨をパラ〳〵落したが三十分もたゝぬ中に晴れて、今度は西の空が赤く照つて來た。夕映えが、樹に、岩に、まだ谷一面に殘つてる雪に、金色に燃える中を一歩一歩岩小舍に向つて登る。

先客があれば僕達四人の人數では殊によれば外に寢なければならないがと心配してゐたが來て見れば誰も居らず、岩の下にはまだ深く雪が殘つてゐた。シヤベルの用意がないのでピツケルで雪を起しては鍋コツヘル等で掻き出す。坐るに差支えない程度になると踏み固めて偃松を切つて來て敷きつめる。こんな作業をしてる中には低い處から暗さが段々這ひ上つて來て茜の空が一瞬の蒼黒さに變つたが、やがて一番星、二番星がハツキリ輝いて黒漆の空に銀の象嵌を入れる。

穴倉の様な小舍への入口に石を疊んで火を起す。風も無いから、中で坐つて一段高い速成の爐の生木の燻りも

夕餉が終ると皆、毛布か何かを持ち出して、岩の露臺の上で煙草をふかす。

月はもう餘程上つたが、覆ふ一點の雲さへ無く皓々と照つて、岩小舍を圍む山々は、岩と雪とでたゞ白と黒の世界だ。北尾根の第一、第二、第三と數えるピークの鮮やかさ。

奥穗高、涸澤岳の大きく根を張つた峭壁。

頭を廻らせば、北穗との鞍部に形こそ小さけれ、姿整へた角錐の一峰は、全身をピンと張り切つて月下に戈をかゝげる。

更に後に北穗の崔巍。

その峰々の、胸から、肩から、高く殘雪を懸けて、末は一つに絞つて、屏風岩の裾へと北に向ふ。

鳥も鳴かねば、石も落ちぬ。此の谷の中は今、水の底の様な靜寂だ。いつもの様しやべりは斥けて、唯沈默が望ましい。皆、月の光と山の氣に浸つて何がなしにねころぶ。人間の末梢的な感覺は此の場合いらなくなる。大空と大地とを貫く電氣の中に存在する人間。自分は意思さへ捨てゝしまひ度い。無始無終の山の中に意思の彼方に唯自分の在る幾時かゞ過ぎる。

フト起つて小舍に下りる。爐にかけた飯盒の蓋をとれば沸々とたぎる湯に、星の影が、崩れ、碎けて映つてゐた。

十

M T・E——一九四〇年五月

後頭部がヅヅ——ヅヅ——と何か崩れる様に痛い。疲れた兩足にやつと身體の重みを支へて低く張られたテントの支柱に凭れて、行つて來た跡をふりかへる。巓は鈍い明りの中に風が雪を飛ばしてゐる。

麓から三週間毎日テントを一歩一歩運び上げてそして最後のテントを此處へ張つた。頂上へは距離にして二粁高距にして七〇〇米。二日間、充分休息をとつて出發したのが今朝七時。

頂上へ向つての登攀は死と取組むものであつた。冷氣と強風は全感覺を奪つて、意識を攪亂する。呼吸の切迫と極度の疲勞は全身の運動を妨げて平衡を失はしめる。

十歩の前進。休　息。

八歩の前進。休　息。

五歩の前進。

全意思は唯踏み出す一歩にあつた。あらゆる努力と緊張は岩の上の足許に集中された。絶間ない激しい苦闘の續けられた後、辛ふじて頂上に到達することが出來た。

頂上に立ち得たのだ。

人類の足跡の達し得る最高の個處に。

世界の最高處、海拔八、八四〇米の個處に。

MT・Eの頂上に。

この二本の脚でシッカリ踏みしめることが出來たのだ。曾て過去半世紀に亘つて人類はあらゆる努力を盡してこの登攀を企てた。そして尊い犧牲は幾度か捧げられた。その中でもM——とI——との犧牲は高價過ぎる程高價なものであつた。この畏敬すべき二先人は確かにたピツケルがそれを物語る。自分達はこの二先人の靈を尊敬する意味に於て一段低い處に、持つて來たピツケルを樹てた。

餘り落着いては居れないので倉皇歸路につく。疲勞の增加はまた一層步行を困難にする。身體中が痛んで油のきれた機械程にも動かない。その上懶さと襲つて來る睡さと闘はねばならなかつた。足許の昏くなる頃ヤツとテントに辿りついた時は、今朝が今朝まで考へてゐた登頂の歡びはスツカリなくなつてゐた。

樂しみ盡きての哀愁だらうか。いやそんなものさへ感じないのだ。疲勞しきつた身體と疼痛のある頭——そして妙に何處かその一部の冴え冴えしたのだ。

深く呼吸をすると輕く空氣が胸に入る。石に腰を下す。星の光がこれ程までに明るいものだらうか。月のない空から投げる星の光が。

近くの谷々は象牙を彫つた様に鮮やかに、見渡す遠くの峰々は白い波頭の様にはるかに連る。その涯を限る空は暗黑だ。深い奥知れぬ黑さだ。その闇を破つて光る星の鋭さは、瞳を徹して腦髓を刺すのだ。極度に緊張した爲か、顳顬は鑿る様に疼き、後頭部は積み重ねた煉瓦が何かゞ崩れる様に痛む。

それでも自分は頂に立つたのだ。

確かに。

そして——」

と、ほんとうに、書き得る日の來ることをどんなに待ち望んでゐることか。

そして、たとへ、こう書きながらも筆を持つたまゝ息がきれても、自分は自分の生涯を決して短いものとは思はないだらうに。

山で拾つた話二つ

ある山案内人の人生觀

丸茂平造

蒸し暑い夏の宵も更けて、暗い電燈の下で、彼は淋しい人生觀を語つた。彼の兄はその一ヶ月程前、赤石と荒川の殘雪を溶して流れ下る小澁川の淵に溺れてこの世を去つた。

「すべては前世の約束です。山で死ぬとか、河に溺れるとか、谷に落ちるとか、俺達がどんなに考へても及ばねえことだ。兄さもあんな所で逝くとは思はなかつた。俺と同じで釣が好きで、あの位の瀬はいつも渉つてゐたのだが、それがどうして……」と彼の聲は曇る。

「お客さんを案内して千枚澤から惡澤を越して、廣河原から小澁を渉る日は雨後で水嵩が增してゐたといふわけでも無かつたといふに、河床の石に脚を滑らして、河に流してあつた材木の下にはまつてしまつたといふのもをする。何時だつたか、白根の北岳を降つて、大樺の御

「目に見えねえ約束さ、それが解つたらこの世なんて面白くも、おかしくもねえ。解らねえが、俺達の行先にや、ちやんと待つてゐる運命で、どうしようもねえ。俺なんかもかうして皆さんの御伴をして山へ入つても何時何處でやられるかわかりやしない。だから常々好きな酒でも飲んで、好きな事でもし様といふものでさあ」きつい燒酎を冷でぐうつととばかり胸も燒けよと飲みほす。

彼の人生觀は徹底してゐる。

彼はどの山へ入る時も、酒と煙草と釣道具はきつと忘れずに持つて行くといふ。小舍に着いてぐうつと飲みほすヒヤの味を彼はうれしそうに語る。

「大武川には岩魚がゐない」と言つて、彼は浮かぬ顏

池の小舎に一泊し、翌日廣河原から白鳳峠を越して、鳳凰を御座石の湯に降ろうといふ日も、廣河原の小舎に一休する間もなく、「まだ早いづら、ちよつくら釣つてくるから」と言ひ残して一人河原の石に腰を下して一時間餘もぢつと釣糸垂れてゐた彼だ。

冷たい酒が腹の底へヂリ〳〵泌み込む時と、ぢいつと釣糸垂れて岩魚の感覚を掌に握りしめる時こそ、すべてを忘れた彼の法悦境であるのだろう。あの世の約束を堅く信じて、此の世の悦楽を少しでも多く楽まふとする彼、幾筋かの皺を深く刻むその風貌の何處かに人生の寂寥を物語るあるものを感ぜずには居られない。

漱石が「草枕」の書き出しに、

「山路を登り乍ら、かう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角人の世は住みにくい。」

と、短い言葉の中に複雑な人生観を織り込んだ。漱石は「住みにくさが高じると、安い所へ引き越し度くなる。どこへ引越しても、住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。」といふ。

山の案内人たる彼にも、住みにくい世を歎ずる時もあるだろう。然し彼には漱石のやうに簡單に引越しは出來ない。住みにくい世の憂さを山に、或は谷川の沿りに逃避する。漱石は「住みにくいと悟つたとき、詩が生れて、畫が出來る」といふが、彼には詩も畫も出來ない代りに甘い酒があり、谷川の流に垂れる釣糸がある。

かくて淋しくも亦樂しく、彼は獨自の人生觀を抱いて山峡ひの村に靜かな生活を續けてゐる。

駒ケ岳の遭難者

寒暖計の水銀が九十度を遥に越えて、百度近くにまで上昇する眞夏の幾日かゞ過ぎ、夕の風に僅か乍らも、秋の涼しさを感ずる頃になつて、SとMとOの三人がK市の僕の家を訪れた。駒へ行かないかと出し抜けに言はれて、ちと面喰つたが別に大した用事を持つ身でもないので快よく引き受けた。

夏の暑さも絶頂を越したとは言へ、まだ日中は裸體でゐても、ネツトリと汗ばむ程なので冷たい水を呑み乍らコースの事など話し合ひつゝ、涼しくなるのを待つてゐた。尾根歩きは暑いし、それに第一面白くないといふので敬遠する。結局大武川を遡つて駒へ、歸りは尾白の渓谷を下るといふ事に大體落ちついた。

庭木の松に涼しい風を呼んで、縁先に吊した風鈴が靜

かに鳴る。隣の土藏の蔭が段々と延びて來て、縁側は完全に日蔭になつた頃、四人は支度をして家を出た。

その夜は柳澤泊りと決めたので、至極ノンビリした氣持だ。牧原から坦々たる田舍道を歩いて行く。時折濛々たる砂塵をあげて通り過ぎる自動車を憎惡に似た氣持で眺めたり、或はトボ〳〵と馬の手綱を引き乍ら歩いて來る年老いた百姓と話したりして、宵逼る柳澤の部落に、薄暗い電燈が灯る頃、村の宿屋に入つた。

室の數も三つか四つしか無い賤びた田舍の旅山宿だ。彼はそれ以前餘り山へ登つたことは無かつた。それが表は雜貨を賣つてゐるので、裏口へまわる。と緣側に大勢集つて、ドヤ〳〵何かどうして、山へ登つたのか、その邊の事情は解らない。有力者のやうな男、巡査、その他人夫が四五名ゐるらしい。その場の空氣で、七月も末、僅かな食料を、小さなリユツクサツクにつめた。その三週間程前、京都帝大生が駒で行方不明になつて、早川尾根を北澤の小舍までは同行の一人があつたといふ。北澤に泊つた翌日は朝から天氣が惡く、かすかな雨が降りしきつてゐた。二日の旅を共にした彼の山の友は聞で見たので、その死體でも發見されたのかもしれないと思つたが、荷物も重かつたといふ。然し彼は友の忠告も押し切つて極力出發を留めたといふ。然し彼は友の忠告も押し切つし、それに途中で大分埃も浴びて來たので、一先づ案內された室に通つた荷物を下して輕い浴衣に着換えてから宿の者にきいてみた。矢張り推察した通りだつた。

以前の事情を僅かにも知つてゐた私には、今彼の死體が發見されたといふ話をきいて、一入感慨深いものがあつた。

×　×　×

京都帝大の印度哲學科にその年の四月入學したばかりの彼だつた。彼の父は早く世を去つて、か弱い母の手一つで彼と弟の二人の兄弟は育て上げられた所が、昨年の春フトした病がもとで彼の唯一人の弟は他界した。その後の彼の一家は親一人子一人の生活であつた。

情があつたかわからないが、彼はどうしても今日中に七丈まで行き度いからとて、一行と別れて霧深くこめる駒ケ嶺峰への徑を辿つた。其の時の一行に加つてゐた案内人某は簡單な運命論で、その自づと明かである。然し乍ら依然として、その死體は幽烈しく降つてゐたし、身體も相當疲れてゐたやうです。七丈の小舍までの道を聞くら留めても駄目です」彼は彼が家を出てから一週間を經た或る夜彼の母は不思議のは無理だと思つて、極力留めたのですが、仲間の者がな夢にうなされた。茶褐な砂原の上に、彼は安らかに寢七丈まで來てゐる筈だからといつて登つて行つてしまひつてゐた。彼女はうれしさに我が子の名を大聲に呼んだ。ました。あの時に危いなと彼は起き上つて、ニツコリ笑ひ乍ら「お母さん御心ですね。そうなつては、いと言つて再びゴロリと横になつてしまつた。彼女は飛び付き度い衝動にかられ氣の毒な事をしたといふ面持ちで口を噤んだ。

それから一切の音信は杜絶えた。

唯一人家に殘された彼の母は、一日千秋の思で、彼の便りを、否、彼の歸りを待つてゐた。然し五日過ぎ、一週間を經ても彼からは何の便りも無かつた。母の心配は極度に達した。親戚との相談の結果遂に警察への捜索願となつた。地元登山團體及び各案内人組合等の活動が始まつたのはそれからだつた。

一日、二日、一週間、十日と月日は遠慮なく流れて逝つた。熱意に燃える捜索隊の努力も空しく彼の行方は依然として不明だつた。麓登山口からの報告で、彼が山を下つた形跡の無い事は確められた。山にゐるとすれば、僅か二三日の食料しか持つてゐない彼のその後の生活は自づと明かである。然し乍ら依然として、その死體は幽窮な大自然の懐に抱かれて、探し求める人の目にも、嗅覺の鋭い犬の鼻にも感じられなかつた。

彼が家を出てから一週間を經た或る夜彼の母は不思議な夢にうなされた。茶褐な砂原の上に、彼は安らかに寢つてゐた。彼女はうれしさに我が子の名を大聲に呼んだ。と彼は起き上つて、ニツコリ笑ひ乍ら「お母さん御心配なく、もうすぐ歸りますから」と言つて再びゴロリと横になつてしまつた。彼女は飛び付き度い衝動にかられめいた記事が夏の新聞の三面を、ヂヤナリステイツクに彩つた。その爲めばかりでもないだろうが、駒の北側、赤河原附近は、殘る隈なく捜索隊の足跡を殘したといふ。あの切り斷つたやうな、又眞に地獄の底までも落ち込んでゐるかのやうな地獄谷の岩壁へも、ザイルを下げて降つて行つた人もあつたといふ。然し依然として、死體發見の目鼻も附かなかつた。人々の興味？も失せ、捜索隊の熱意も冷めやうとする頃、偶然にも駒の頂上近く這松の一群繁る中に、リユツクを枕に死んでゐた彼を頂

上に甘酒を賣る爺さんが水を汲みに行く途中見付けたのだといふ。

×　×

私達が柳澤へ着いた時は、丁度死體發見の翌日で、巡査や村の有力者や、人夫達が集つて、夜を徹して現場へ行く下相談の最中だつたのだ。その翌くる日、死體は現場で火葬に附せられ、面窶れした彼の母もこの山の頂き近く老いの身を運んで、我が子の變り果てた姿を受け取りに行くといふ話であつた。

私達は翌朝早く柳澤を立つて、大武川に沿ひ、大岩下の石室に一泊、更にその翌日地獄谷を七丈の小舍に着いた。仙水峠から駒をめぐつて、此處でも山に逝いた若者の此處で思ひ掛けずも、私達は麓のK村とS村の人々の間に わる不快な數々の言動を見せに思ひ及んで、痛々しい彼の かつた。

彼が遭難したといふ報導が索に參加した人々も相當あつ二十日を過ぎても、その死體

この捜索には主として麓のS村とK村の案内人が當つてゐた。そしてどちらも俺の村で發見しなければ、といふ勢ひ競爭的な氣持が働いてゐた。この死體發見が村の名の爲めに、又俺の名譽の爲めに、といつた氣持も潜在的に人々の心を支配してゐたのも事實らしい。

かくて遭難後約一ケ月を經た頃、頂上の甘酒屋の爺さんに依つて死體は、思ひ掛けない所に發見出された。その日爺さんは、いつもの如く明日の支度の爲めに、水桶さげて岩小舍を出た。幕遠い夏の陽も漸く西に傾き、登山者の姿も山には見えない頃であつた。

いつもは大きなヂイツクザツクを畫いつけられ、同じ山に登る身その日は眞直ぐ頂上目指して登つて行くのにに思ひ及んで、一掬の涙を禁じ得なつたのである。一面の眞白な砂山の中に一坪程の這松の繁みがある。その中に人の脚らしきものを、かすかに認めた彼はギョッとして立ち止つた。が然しそれが一ケ月も探し求めてゐた人の屍であることを知ると、彼は眞面目にてさへ、眞面目に く僅かであつた事幾度か捜索隊を組た。その頃死體發織したが、すべては空しい試みに終つ見者に懸賞金がかけられたのだつた。

な感じに打たれた。だが山には既に薄闇が逼つてゐる。翌る朝早く麓の村に知らせればよいと思つた彼は、そのまゝ小舍に歸つて行つた。

同じ日の同じ頃。S村の案內人數名は、最後の捜索隊として、六方石から頂上へ向つて登つて行つた。そして這松の繁みの中に彼の死體を捜し求めたのだ。彼等は急ぎ山を降つて麓の村人に告げた。一方、遭難者の家族にもその旨打電した。

この二つの話を聞いた私達は、何れが先きであつたか神ならぬ身の知る由もない。Kの村人は自分達の村で最初に發見したのだと言ふことを強く主張し乍らも、甘酒屋の爺さんの胡亂さを口汚く罵つた。幾日かの努力にも拘らず、今死體發見のその時になつて、金と名譽の二つ乍らも失ひ去らんとしてゐるSの村人にとつては、それも當然の事かもしれない。然し乍ら遭難者の家族の身にしてみれば、逸早く待ちに待つた報知を打電して呉れたSの村人に對して喜びと感謝を捧げるに不思議はない。殊にいとしい我が子の屍骸だけでもと思つてゐた彼の母は、この報知をどんなにか喜んで眺めた事であらう。

と同時に變り果てた我子の痛々しい姿を現實に見せつけられる時を思ふて、氣も狂はんばかりであつた事と思ふ。そうした彼女の心理的な氣持も察せずに、唯當面の問題のみを語る人々の言葉に私達は言ひ知れぬ不快と憎惡を感ぜずにはゐられなかつた。

× × ×

山の朝は朗らかに明けた。美しい雲海の中に、ポツカリ浮ぶ小島の樣な、八ケ岳や秩父の山々を眺めた。やがて東雲破る朝の光が、雲の海一面に擴がつてくると、あちらでもこちらでも、むつくり〳〵と白雲が浮き上る、と見る間に美しい雲海は破れて、幾つかの斷雲の群に分裂し、その切れ間に、ぼんやり霞む下界の村里や、薄絹の布を引いたやうな鎌無の河原が、谷の底深く光つてゐた。

醜惡なる人間の功利を、二間と三間の小舍に、閉ぢ込めて、大自然は靜かに、侵すべからざる存在を續ける。

（七、六、五）

Tの死を憶ふ

吉澤一郎

規定以上の荷を負はされても何一つ文句も云はず、默々として従つて來たTの無邪氣な顏、人一倍強かつた彼の責任感、ある時は烈風吹き荒び暴雨狂ふ「肩の小舍」の中で向ふ鉢巻で踊つても吳れた彼、その彼が最早此の世には居なくなつたのだ。

「透岳院勇賢良忍清居士」

之が彼の永遠の姿なのだ、此の十字、何と彼を餘す所無く云ひあらはしてゐる文字なんだらう。

×　×　×

A溫泉に動養に行かれたE大先輩に呼ばれて行つたその日の午後、燕小屋の「定九郎」此三人して有明村のTの遺族を弔問し、その墓に詣でた。その日は午後から大變な烈風となり、雨さへも混つて、借りた傘も役に立たず、二千米突の雪の山稜に吹雪と闘ひ、その強い責任感から從容として死を選んだTの墓參には實に相應しい天候であつた。

E先輩に從つてまづTの家に行つた。誠に文字通り、いぶせき賤ケ家である。老母一人、弟、妹、そして未亡人、E先輩は只一個の老登山家、老山男として來られたのであつたが家の人々は、殊に未亡人は衷心からの感謝の涙を流して居た。Tは此の大人し相な貞淑な妻を殘して敢然として死んで行つた。生前、彼は此の妻を非常に愛し、勞はつて居た相である。身體が弱い爲か、まだ子供が無かつた。親類の中でも、子供の生れぬ樣な女は出してしまへとまで極言してゐた者が居た相であるが、彼は總てを排してその妻を庇つて居たとの事である。そのTが死んだのだ。世に杖とも柱とも賴む主人がいよいよ遭難した事が確實となり、山から下されて來た變り果てた姿を見た時、涙より先に卒倒してしまつたといふ事を誰が胸を痛めずに見もし、聞きもし得た事であらうか。

E先輩は圍爐裏の奥に貧しげに飾られたTの位牌の前に立たれ粛然として頭を下げられた。Tは遙かの方から只嬉し泣きに泣いて居た事であらう。E先輩は家を辭す時「何んでも困る事があつたら自分に遠慮なく云つて來て貰ひ度い、及ぶ限りの事をして上る積りだから」と云つて居られた。之も皆、Tの人格の賜であらう。

墓へ行く時は又一層風雨は劇しかつた。然しTの死を思ふ時、この位の事が何んであらう。E先輩もこう考へて居られたに違ひない。Tの墓は只土が新しく盛り上つてゐるだけであつた。田舎道を通る時に、よく出つくはす淋しげな置き忘れられた様な墓場、その墓場の一隅に彼の亡軀が葬られて居るのだつた。素燒の茶碗が二つ、小さな木箱の蓋の様なものの上にのせてあり、御飯がシヨンボリ雨に濡れて盛られてゐる。只それだけだ。風も雨もひどかつたが未亡人の持つて來たお線香には火がついた。未亡人も喜んだ。E先輩も喜んだ。線香をたてるものもない、盛り上げられた土の傍に直接地面にさして置く。紫の煙は雨に唆かれ、風に飛ばされては行つたが、私達の心はいつまでも此の盛土の上を離れ去る事は出來なかつた。振りかへれば常念の連脈は怪雲に包まれて、小屋のある鞍部附近さへも顯れては呉れなかつた。

×　×　×

私は次にTの死をして意義あるもの、當時の有様の概略をあの時、捜索に從事された人々の言葉を基本にして書きつらね、併せて一般登山者の反省を促し度いと思ふ。E先輩の句に曰く

落紅非是無情物
化作春泥更護花

×　×　×

N、K、Tの三人は前日穂高小舎から非常なアルバイトをした後降りて來て、一ノ俣小舎に泊つた。N、Kの休暇は最早餘す所少なかつた。翌日三人は越へを主張した。Tは從ふより外なかつた。止むを得ず彼等は常念吹雪を犯して小舎を出た。雪は餘りにも深かつた。澤通しにはとても歩けぬので尾根へ尾根へと進んだものらしい。そして常念小舎を目指して兎も角も、小舎と常念岳頂上を結ぶ山稜に出たのである。何處を如何に登つて來たかといふ事は玆では問題にしないにする。Tの事であるから最も合理的な登路を選んだのは事實であらう。

山稜に出はしたものゝ、時間は可なりに遲かつた。それに吹雪は益々劇しかつた。小屋までの距離がさうないといふ事もTにはわかつて居た筈だ。然し彼等は極度に

疲勞して居たのでとても行く元氣がなく、そのまゝ三人抱合つて動かず、翌日を待つ事にした。と九死に一生を得た幸運？のNは云つてゐた相だ。

翌日十時頃、Nはふと眼が覺めた。朝の陽の溫味が彼に感じたのらしい。眼が覺めて周圍を見るとKもTもまだ寐てゐる。起したが起きぬ。最早固くなつて居たのである。Nは百方手を盡したが駄目なので諦めて、死にもの狂ひに小舍に辿り着き、布團をしきその中に入つて、念の爲との死體の位置を記し、遺言を書き、以來數日の間只々死を待つて居た。

といふのがNの口から出た遭難顚末なのである。

× × ×

次に捜索隊の發見した事實を書いて見やう。

（發見された當時のNの狀態）

まづ第一にNは一行三人の內で最も身體の弱い質であつた。之は本人も云つてゐる。然もそれが唯一の生存者である。之は抑々何を物語るのであらう。

布團を二枚下に敷き、五枚かけてその中に寢て居た。

Tは首にシヤツを卷いてゐる。此のシヤツは何處から持つて來たのだらう。Tの持物でないとすれば小舍から持つて來るより外はない。して見ればTは一度小舍へ行つてゐる。すれば何の爲に小舍へ行つたか。當然此處へ出場しなければならぬのがNである。一番弱かつたNである。生存者のNである。

（Kの狀態）

凍傷は足指の先少々。元氣は勿論無かつたらしい。

額を打つた跡あり。リユツクサツクは背負つた儘、山稜中にある大岩の下で落ちたといふ風に死んで居た。その岩の一部に血が附いて居た。

（Tの狀態）

次にN、K、Tが抱き合つて夜を明し、翌朝朝陽で眼が覺めたのは一番身體の弱いNだけである。Nにして眼が覺めたとするならばそれより強いK、尙更Tはどうし

て起きられなかつたか。

次に疑問なのはNの凍傷の程度である。如何に道具は具つて居たとするもあの高さで、あの吹雪である。一晩明かしてあの程度の凍傷だけとは變である。然もその朝は山は荒れて居て、陽が出様筈がない。

斯くして信州の人々は次の様に結論してゐる。

三人してやつとの思ひで山稜上の岩上に達した。然し吹雪は益々劇しい夜は更ける。こんな所に居たらとても助からぬのはわかりきつた事だ。然し小舎の近い事だけは知つて居ても見當が付かぬ。見當が付かぬからとて行かぬ譯にもならぬので、TはNのリュックを背負ひ、Nを引張つて荒れ狂ふ吹雪の中を小舎まで辿りついた。布團は皆、天井からブラ下げてあるので、一人でか或は二人して下ろしたものらしい。(前にいふのを忘れたがこの點も疑問なのである。身體の極度に疲労した人間があの布團を一人で下せるかどうか。)Tはこれを前に云つた様にして、そこいらにあつたか、或は布團の中から出て來たか知らぬが、シヤツを首に卷いてKを連れに吹雪の中へさまよひ出た。程の者も自然の前に

次に待たされて居たKは多少身體も强かつたので、一人で小舎に行くべく決心し、リュックを背負つて歩き出した。先が見えぬので忽ち岩の上から落ちてしまつた。岩角に額を打つたのが致命傷となり、そのまゝ逝つてしまつた。

× × ×

之で終りである。事實は山の神祕につゝまれてゐる。否Nの胸の裡に嚴存する。Nの言が正しいかも知れぬ。又信濃の人々の言ふのが事實かも知れぬ。私は全然第三者である。いづれが是でいづれが非であるといふ事を斷言する事は出來ない。結論は自分各自の胸中に決るであらう。

然り而しておこがましき事乍ら私の登山者に反省を求めんとする事は次の事實なのである。N、K、Tの遭難の爲に、日本アルプス有數のガイドたるHとEをなくしてしまつた事である。遠からず山で命を落す筈であつたかも知れぬがまだ死なせてはならぬ人達であつた。之等が一寸した登山者の無理或は我利に原因してゐる事を思ふと、どうしても此處で現在の、又將來の登山者達は充分反省しなければならないのだ。

極言すれば由來日本の若い登山者達は二三年も山に入り、穗高の一つも縱走すれば一つぱし「山通」になつた積りで直ぐ案內者なしで分不相應の所へ不用意で出かけて見たり、スキーの三四度もやれば之亦飛んでもないアルピニズムの領域に這入らうとする。偶々案內者乃至はポーターを傭つたといふ心持ちがある內は駄目だ）としてもそれ等のいふ事をきかない。桶屋は桶屋といふ眞理を覺らない。斯くいふ私自身にしてもさういつた事からの苦い失敗があるけれども二度とさういふ事はしてない積りだ。何も一から十まで案內者のいふ事を聞けといふのではない。其處には程度のある事勿論であるが、その程度は登山者自身の反省によつて悟り得るのではあるまいか。

E先輩は、これから各登山口に關所を置いて其處を通るどんな登山者達にも、入山より町に出るまでは案內者のいふ事を良く聞きますといふ宣誓をさせたらどうかと極言されて居つた。何等かの形式によつてさういふ事が實現されたら非常にいゝ結果を齎すのではないのかと思ふ。現在の樣な或る意味に於て過渡期の時代にある登山界、乃至は登山者心理を匡正する上に於て、實際有用なる企圖であると思ふ。然して

いつまでもこんな事をして居らねばならぬ樣では日本登山界の爲に悲しむべき事である。眞面目なる登山家達も當分の間は犧牲となつて斯の如き擧に贊成して戴かねばならぬ。

現在の登山界には餘りにも單なる「ファン」が多過ぎる。リファインされた登山者が少な過ぎるのだ。

今回の如き重大なる又餘りにも悲慘なる事實を一期として之からの登山界の實質に於ける進展、飛躍を望んで止まぬものである。

之を要するに私如き若輩が以上の如き暴言にも似た言辭を書き連ねて來たのも、敢へてTその他の名案內者をして犬死に終らしめざらんが爲のものであつたのである。

乘鞍を越えて飛驒へ

鈴木英雄

一月三日　昨夜來る様に頼んで置いた彦さん、その夜は音沙汰無く、今朝早く久し振りの元氣な顔を見せる。噂の通り、昨日は近くに祝言があつてすつかりよばれちまひました。昨夜から斷食ですが、今日も餘り良くありません。ワツハハヽ、」と、お目出度い話などを聞かされる。甲府から來る松本を出發する。チエーンを付けてゐない自動車は梓川の右岸に掛ると日蔭に殘つた雪の爲スリツプする事數度大分膽を冷す。之以上は入れないと前川渡で降されたが、先の方が却つて路は良く、番所迄遂に雪を踏む事なく、菊屋に着く。殘りの金山平も南側の夏路を捲いたが、例年ならこんなことが上つてゐる。いくと積雪は一米もあはないさうだ。それでも冷泉まで來るらうか。關西の人達も大勢居てなかなか賑かである。今此夜の彦さんの健啖晩だけと、二階に追ひ上げられたが狹だ。

四日　盛に降つてゐる、風もある。土間で搾りたてと言ふ牛乳の熱いやつを御馳走になつて九時半に出發す。

五日　今日は附近逍遙の積りだつたが、餘り天氣が良いので頂上に向ふ。肩の小舍で穗高をやつた立教の諸兄と遇ひ、中食をする。鈴蘭、冷泉總出の連中で、頂上へ絡繹と續く有樣、夏でも斯程までではと思はせられる。三角點に着いた時は實に暖かで、煙草の輪も吹ける穩かさであつたが、Tはどうしたのか意氣頗る擧がらず。下でスキーをやつてゐるからと言ふ連中と別れて、ベビーと荒次郎と僕は彦さんと一緒に權現池を一週する。雲間に

見え隠れする九藏の方面を指し乍ら「只迷信だと言つてしまふ人もあるが、それだけでは片付けられませんよ」と前置きして彦さんは飛驒の傳說などをポツリ〳〵話し出す。谷を埋めてゐた雲もいつか次第に散つて視界は擴がるばかり。ピツケルも小脇に抱へたまゝで肩に戻つた。デコボコのシユカブラは靈神を樂む。滯在者も大半下迄で、後は小舍迄氣持よい粉雪階下の廣い部屋へ移轉して小舍はヒツソリしてゐた。

六日　肩の小舍下にてスキー練習をする。夕方、効能灼然（アラタカ）と言ふ靈泉の風呂に入る。是だけは全く意外だつた。

七日　午頃迄降つてゐたが、それも束の間。ウヰ呂を沸してくれた。

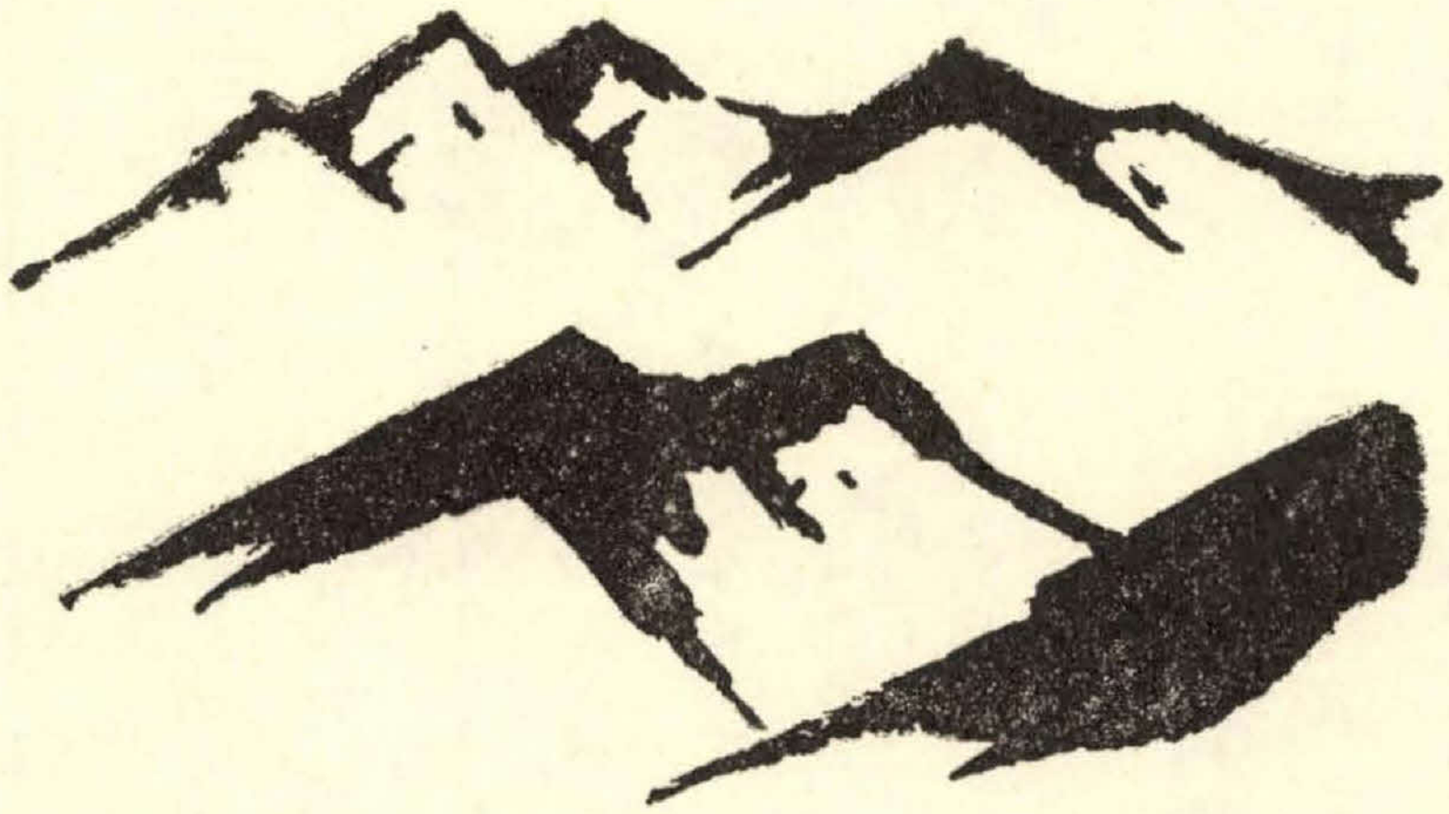
八日　午前中から出かけて位原附近を滑り廻る。夕紅に映ゆる穗高に見とれて夕方小舍に戻つた。明日は愈々飛驒へ下るので、夕食後爐端へ集り汁粉など作つてゐたら筒木老人がお別れだからと餅を振舞つてくれ、一口だが一本つけたから廻してくれとの事なので、當方でも默つて居られず、ウヰスキーや葡萄酒など持出して返盃すりや、時ならぬ宴が始まり、深更迄話し込んでしまふ。外では霧の様な粉雪が靜かに落ちて居た。

九日　寢不足な眼を摩り乍ら三時に起床。淡紅の朝燒を氣にし乍ら小舍を後にした時は六時を過ぎてゐた。今朝は先發隊が無いので、初めてラツセルをして進む。森林帶は穩かだが上は非道いなと思ふ間もなく位原に出て風と濃霧に包まれてしまふ。肩の小舍に入つて天候を心配して居たが、十時頃、時々薄陽が射す様になつたので出發する。鞍部の眞中で、僕のシールが脫れ、それを直す間にストツクが飛ばされるやらスキー帽を透して頭にまで浸みる寒風中の數分間は相當辛かつた。鞍部を過ぎれば風は無く二八〇〇米の等高線に沿つて火口を半週したが、霧は再び濃くなつて見透しは全くつかず、二六六二米の三角點を見出した時はほつとした。彦さんも「千町原まで登つた事があるから此處まで來たが、それでなかつたら先づ引返したね」と言つて居た。もう下るばかりだ。一時半金の方面が見えたが、それも束の間。ウヰンドクラストが絕えると間もなく森林帶に入り二三五七米の處で中食にする。此處まで來ると微風だになく、先刻の極寒も何處へやら、汗ダク〳〵で、帽子も手袋も脫ぎ捨てゝ堅くなつた餅を嚙る。千町原附近は實に良いゲレンデだが是を過ぎると目に見えて雪が減り、笹がうるさくスキーに當る。此の邊から、時々密林に迷ひ込んだり、谷に降りかけたりし、一八五米の三角點下でも、も

う少しで小俣谷へ下る所だつた。此の時分からそろ〳〵暗くなり足も鈍つて轉倒の度を増す。皮肉にも星が一つ二つ輝き初め、突起を越した所でラテルネを點けて、中食以來忘れて居たカタパンやドロップスを取出して腹を作る。幸に手袋も不用な程の暖かさなので、今夜中には九藏へ着けるだらうと、遙かに岩井邊りの點々たる灯を眺めながら、いやに落着いてしまふ。暗中でも夏道が明瞭になつて來たので、スキーを折らぬ要心だけで、後は暢氣だ。尾根も末尾らしく、木谷であらう、瀬も聞えて來る。道も急になつたのでスキーを脫ぐ。雪は一尺位しかない。所々土の出てゐる急坂を下つて、小俣谷の橋を渡り、休んだ時の氣付けの味は未だに忘れられない。炭燒路に出ると氣は緩み睡魔に襲はれる。半ば夢の中で九藏に入り山本方の戸を叩いた時は、十日も二十分程過ぎてゐたらう。

十一日　半日を眠り通して、午後九藏を辭し、昨日を忘れ顏に夕陽に映ゆる乘鞍を見返りつゝ、泥道を青屋川に沿ふて下る。近くに親戚があるから休んで行かうと言ふ彦さんの提言に從つて甲に至る。九藏と共に、雲ちやんに大いに吹込まれた處だ。小憩の積りで居たのが、留められて見れば當方には斷るだけの理由もなし、快く饗應に預る程に、高山泊りの豫定などは消滅してしまふ。

十二日　十五貫位なら平氣だと言ふ主人に六臺のスキーを賴んで美女峠さして出かけたのは正午に近かつた。此の邊ではスキーは珍らしいと見え、道行く人まで立止まる騷ぎである。天氣は良く背に滲む汗も快い。益田川の清流も殊に美しく澄んでゐた。見座沼を前景とする白衣の乘鞍、それよりも、御岳から穗高、笠、藥師と打ち並ぶ白の殿堂は美女峠ならでは求められない大觀であらう。山口から見た黒部五郎の圓頂には、圓岳の別名も成程と頷かれる。江名子で「右えどみち」の道しるべを見夕刻高山に入る。



錄　記

昭和六年

手稲行

奥野綱重　堀岡清　外一名

三、二九　輕川――パラダイスヒユツテ――手稲山――輕川

昨夜からの雪で附近は氣持よく眞白であつた、パラダイスに到着するまで二三回吹雪になつたし、その上に小さい弟を連れて行つたので、輕川の驛を九時半に出てヒユツテに着いたのは十一時半だつた。弟をヒユツテに殘して手稲山に登る、ヒユツテより約一時間半の登りである。下りはブツシユが多かつたが粉雪で相當面白かつた。

奥手稲行

奥野綱重　堀岡清　外一名

四、三、晴　錢函(七・〇〇)――奥手稲山の家(一一・三〇)――錢函

天氣が好過ぎて汗をしぼられること甚しい。流石に南向の雪は溶けてゐた。ヘルベチユアの方へ行く積りであつたが途中一寸道を誤つたので山の家へ行く。此の山の家は鐵道省で建設した小舍で美しいタンネの森の中にある。四十人位は泊れる。食器も新らしいので氣持がよい。

奥手稻山の家　　堀岡　清

歸りはクラストで困つた。

大雪山

芋川　稔

九、一〇、午前中曇天、午後晴（一時ガスかゝれり）　旭川驛（七・一七）——上川驛（九・〇二）——乘合自動車（賃銀一圓）——層雲峽（一〇・一〇）——大雪山登山口（〇・五〇）（此處にて登山票を貰ふ）——途中、中食の爲め約二十五分休憩——層雲峽を見物する——七——二・〇〇）——黑岳頂上（五・一〇——五・二〇）——石室（五・三五）

九、一一、終日晴天なり　黑岳石室（六・五五）——有毒溫泉分岐點（七・三〇——七・四〇）——北鎭岳分岐點（八・〇五——八・一〇）——北鎭岳頂上（八・二〇——八・二五）——北鎭岳分岐點（八・三五——八・四〇）——中岳（八・五〇）——北海、旭岳分岐點（九・二五——九・三〇）——旭岳頂上（一〇・四五——一一・二五）——姿見池畔旭岳石室（〇・〇五——〇・四〇）——幣の瀧（一・四七——二・〇〇）——瓢沼（三・〇〇——三・一〇）——松山溫泉（四・〇〇）

九、一二、午前中雨、午後一時晴れたれども三時頃より再び雨となる　松山溫泉（八・一〇——九・〇二）——橋を渡る（八・三五）——美瑛忠別直線道路の東端（一〇・一〇）——忠別小學校（一〇・四〇——五・三〇）——東十號自動車待合所（二・四五——五・三〇）——乘合自

動車（賃銀三十錢）――東川（六・〇〇）――電車（賃銀三十五錢）――旭川（七・〇〇）

九月十日、層雲峽から黒岳までの登りは平凡な道で面白くない。頂上の三四丁手前にアイスクリーム屋がある（但しこの時にはもう人は下つてしまつて屋臺が殘つてゐたゞけだつた）のには一寸驚いた。さすが北海道で一番有名な山だけの事はある。

黒岳の石室は、三間に六間位の可成り大きなもの。この夜は小屋番と僕と二人きり。北海道の山の話や、熊の話は僕には珍らしく面白い。廣い小屋の中でたつた二人、蒲團を四五枚も積んで、暖く眠る事が出來た。

九月十一日、雨男の僕が、この日は又珍らしく上天氣で、この石室から旭岳の石室まで、實に愉快な山上の獨りぼつちの散歩を享樂する事が出來た。無氣味な有毒溫泉を其の中に擁し、雪どけの灰色の水が大きくうねつてゐる舊噴火口を取り卷く黒岳、凌雲岳、北鎭岳、中岳、北海岳や、其の他、比布岳、愛別岳、永山岳、白雲岳等、すべてやはらかな山の線を波うたせてゐる。其の上、これ等の山には皆、良い道が附いてゐて、初秋の朝陽に綺麗に輝く山上の色どりの中に、くつきりと見える。實際、こゝらの山を一日中、歩き廻つてゐたら、さぞ良いだらうと思はれる程に、なだらかな丘陵がいくつも續いてゐる。

旭岳の石室から松山溫泉までは、北と南とではかうも違ふものかと驚かされる位に其の感じがまるで今までとは異つてゐる。一體に傾斜がなだらかで、トド松やエゾ松の茂みも濃く、其の下地の根曲り竹の色も晴やかに若々しい。一丈餘もある根曲り竹の中の道を、彈力のある土を踏みながら、熊の出現も忘れて、一人悦に入つて下つて行

つた。羽衣の瀧の上にある瓢沼の附近からは、今通つて來た旭岳が針葉樹の間によく見えて、あのえないが噴煙が白くたなびく。瓢沼から松山溫泉への道は、地圖上のものは今は廢道で、今の新しい路は、忠別川へは直ぐ下らず、絶崖の上を松山溫泉の眞上まで行つて、直接溫泉宿へ下る樣になつてゐる。松山溫泉は豪遊でもする心算で行くと落膽するが、原始的な仲々いゝ溫泉だ。

九月十二日、忠別川は層雲峽までの石狩川などとはまるで比べものにならぬ靜かないゝ川だ。石狩川の上流もきつとこんなに靜かで原始的なにほひがあるに違ひない。この日は雨で、ぽた〳〵木の雫の落ちる叢林の中を忠別川に沿つて下つた。河原には鷸が立ちこめて、この落着いた川をして猶更ら、印象的なものたらしめてしまつた。

地圖に大岩とある所は、今日では大の字の東南の突起の下の鞍部を廻つてから尾根を通つて美瑛忠別の道路へ、眞直ぐに下つてゐる。この附近の新しい二間幅位の道は、高い木の間を飛び廻つてゐるカケスの鳴聲でもきゝながら、目をつぶつても歩ける程立派に出來てゐる。

美瑛忠別の農場へ出た時には、まるで目がさめる程、豆の畠が綺麗だつた。

しつとりと降る雨の中を小學校歸りの子供達に會ふ。『コンニチハ』の挨拶も嬉しい。この部落の中心にある小學校へ行つて休みながら若い先生と話した。この部落四十戸ばかりから七十人程の小學生が來てゐる。共の七十人の生徒を教へる先生も仲々大變だと思つた。この附近は大低長野縣の人ばかり。皆可成り困つてゐて、子供の教科書

も買へないさうだ。それからそれへと、こんな事を先生と話してゐたむくひには、東十號で乘合自動車に乘りおくれて、三時間近くも次の自動車を待たなければならなかつた。

空沼岳

奥野綱重　芋川稔一

九、一三、晴　豐平驛（〇・三五）——藤の澤驛（〇・五七——一・〇〇）——丸重吾部落（一・五〇——二・四五）——石切山よりの道に合す（三・二五）——鳥居澤を渡る（三・三五）——湯の澤への分岐點（三・五〇）——小沼（無名のもの）（五・二〇）——萬計小屋（五・三五）——空沼小屋（五・三八）

九、二四、晴　小屋（七・二五）——眞簾沼（七・五五——〇・五五）——土場小學校（一・四二）——石切山驛（三・三〇）——自動車——札幌。

萬計沼への道は、五萬分の一地圖によると、萬計澤に沿つてゐるが、現在の道は直に萬計澤へは這入らずに猶も本澤を溯つて、地圖上の次の分流點から右へ、尾根を一直線に萬計沼へ進んでゐる。

空沼小屋は、秩父宮家のもので北大のスキー部で管理してゐる。借用するには一々北大の大野氏に申込み、其の許可を得てから同大會計課へ行つて鍵を借りる等、可成り煩瑣な手續を要するから、一、二日前から北大へ交渉を

しないと出發に間に合はぬ恐れもある。だが、一寸借り難いだけに小屋は綺麗で氣持が良い。よる。食器、寢具、燃料等は云ふ迄もなし、時計、晴雨計まで完備してゐる。丁度當夜は月の良い晩で、小屋の窓から見た夜景は、太いエゾ松、トド松等の針葉樹、其の木の間を透しての月の光、それと窓から見下す萬計沼の靜寂さとで、未だに頭にはつきり焼き附けられてゐる程、印象的なものだつた。實際この小屋は良い位置にある。萬計沼は決して雄大ではないが、小じんまりとまとまつた良い沼だ。だから夜の闇の中では、如何にも沼本來の幽玄さをもつてゐるが、朝となつて陽を一度び浴びるならば、まるで變つた晴れやかな澄んだ明るい小沼に生れ變る。

小屋から空沼岳の頂上までは樂な道で、輕い山の散歩には、この上もなくふさはしい。其の上途中眞簾沼の明朗な姿は、狹薄山、札幌岳方面のなだらかに波打つ尾根の形相とよく調和して、冬のこの附近のスキー登高の素晴しさを思はせるに充分だ。

頂上からは漁岳、風不死岳、樽前山や支笏湖が間近に見える。西と北の丘陵的ないくつかの山塊は、スキー登山の對象として有名なものばかり。

この頂上からあたりを見下してゐると、如何にも山が淺い事を感じる。だがさすがに北海道の山には、或る原始的な靜けさが含まれてゐる。

（芋川記）

昭和六年スキーの旅

手塚晴雄

一、一　新潟縣東蒲原郡兩鹿瀬村で新年を迎へる、此附近赤崎山及び津川のスキー場があるのであるが、何しろ今年は何處も雪は少いのだから仕方がない。

一、二　福島縣猪苗代湖畔の押立溫泉のスキー場まで行く。翁島驛にて下り北へ約二十町、積雪約二尺、溫泉は微溫くて駄目だが、雪が多い時だつた良いゲレンデであらう、磐梯山へは譯なく登れる様だが上の頂上近くの溫泉は冬は人が引上げてしまつて居ないと云ふ話だ。

一、三　滯在不明

一、四―一、七　兩鹿瀬村滯在、北國の物凄い吹雪を始めて經驗する。山小屋の中で聞く嵐の様だ。又其れだけ炬燵の味をしみ〴〵と味へる譯だ。

一、八―一、一一　新潟より信州野澤溫泉へ向ふ、途中乘換四ケ所にて一日仕事とは驚いた。新津、宮内（信越線）越後

川口（上越北線）、十日町（飯山鐵道）。途中流石に雪の多い越後だと思はせる様な白く輝いた澤山のスロープが見えた。餘程清水トンネル北側の湯澤へ訪ねて見ようかと思つた。

一、一三・一四　野澤溫泉滯在

飯豐山

安達泰三　外一名

八、六、晴　長岡（七・三三）――德澤（二一・三五）――極入（三・三〇）――彌平四郎（五・四五）

德澤より彌平四郎迄トロ道あり。

八、七、晴　彌平四郎（六・〇〇）――長坂登口（七・四五）――小澤（一〇・〇〇）――三國岳（一・二〇）――種蒔岳（二一・二五）――宿泊地

小澤は飯豐登山中最も注意を要する所。三國岳より飯豐山までの間に番人の居る小屋はなし。小屋合して十以上あり。その一に宿泊す。

八、八、晴　宿泊地（四・四〇）――飯豐頂上（五・一〇）――西ケ崎岳（五・二〇）――大日嶽トツツキ（七・三〇）――大日嶽――三國岳（〇・三〇）――宿泊地（四・〇五）――川入（三・一〇）――一の戸――山都驛

――前日の宿泊地――三國岳（〇・三〇）――血の池（一・〇五）――川入（三・一〇）――一の戸――山都驛

大日嶽へ登ることは登山路に大熊が遊び居たりしによつて中止す。大日嶽への路は登山者少きを以つて途中に於

て絶えて居る。登山者中には行者が多く、彼等は魚肉類を食べると怒るとのことなり。

船形山

園山徳三郎

芋川稔一　小川竹夫

九、二、晴後霧雨　奥羽本線東根驛（八・四〇）——自動車——高崎村新田（九・一七——九・二五）——岸より左岸へ渡る（一〇・五五）——林道記念碑（一一・一〇——一一・三〇）——黒伏林道分岐點（一・四五——二・〇五）——営林署小屋（二・〇〇）——御所山參詣小屋（二・三五）——野川を右（四五）

土地では船形山では通じない、御所山と云へば解る。船形山にはもあるし、芋川の北海道への旅ついでもあり呑氣に登る事とした。あつて立派なものだが鍵がかけてあつた。

御所山參詣小屋は別稱柳澤御所山小屋又は行人小屋とも云ひ五間半に三間半の廣さ、小屋其ものは非常に良いのだが此處の蚤の襲撃には全く閉口した。

九、三、雨　小屋（八・四五）——御寶前分岐點標木（九・四五）——定義への分岐點（一〇・二〇）——船形山一等三角點（一一・四五——〇・四五）——小屋（三・三〇）

御寶前とは大瀧の事である。登路は總體的に至つてなだらか、頂上近く稍急傾斜をなすが樂な登高である。

頂上には社殿あり、大きさ屋根ごと一間四方、内部三尺半四方。御所神社飯豊神社合併幣殿と拝殿に記してあつた。此處から陸羽二州の山河悉く一望に收める事の出來るは勿論、遠く太平洋金華山沖の白帆をも指呼する事が出來るとの事だが、我々は二百十日直後の雨と折柄の寒さにうんざりして何物の眺望も得ずして下山した。

九、四、雨後晴

二一〇・一七）——高崎新田（一・四二——三・〇〇）——自動車——東根溫泉（三・四〇）——小屋（一〇・〇〇）——營林署小屋雨宿り（一〇・三〇——一〇・四五）——林道記念碑（一一・三

要之船形山行は全然氣分的な山行と云へる。船形本體が僅々千五百米そこ〳〵の山だが、這松や高山植物なども有り出來過ぎた山である。黒伏の斷崖を初め仙臺カゴ、最上カゴの二奇峰は見事な岩場を見せてくれる。殊に一帶は凡て濶葉樹だから紅葉の頃は素晴しいと思ふ。それから最後に追記したいのは附近至る所絶好のスキーゲレンデを提供してゐる事である。東京から大分離れてゐるから態々出掛けられぬとしても宮城、山形兩縣を通過する愛山家は訪ねて損はない。（T・O）

上越國境・日光方面

昭和五年

魚沼駒ケ岳

關守三郎　吹原不二雄　他一名

七、二四、曇夕立　長岡（八・四三）——小出——茗荷澤村役場——荒山上村忠太郎氏方發（一・四五）——水出合（四・四五）——モチガハナ澤出合（五・〇〇）——五合目（五・〇五）

暑熱にへばり乍ら水無川に沿ふて進むと、朝からの雨雲が上つて、駒ケ岳の西面、痩せた卷グラノツルネの赤白い岩壁、オツリ水ノ澤の瀧二三、殊に中腹に光つてゐる神樂瀧等が、時々顏を出して吾々を迎へてくれた。

五時、モチガハナ澤を涉る。それより二三分で五合目の合目石の立つてゐる大きな楡が四五本生えた所に着く。その陰濕な感じが一寸立山の楡坂の小舍の邊に似てゐる。こゝから四五間本流に下ると大岩の陰にゼンマイ採りの小舍がある。雨も完全にしのげる。冬も使用に堪える山である。又これより奥にも炭燒の小舍があるらしい。

七、二五、雨　滯在、ゼンマイ小舍に移る。

ゼンマイ小舍は蚊がひどい。蚊とり線香を持つて來るんだに等と思ふも愚なりだ。

七、二六、曇時々晴及雷雨　五合目ゼンマイ小舍（六・三〇）——モチガハナ右岸大雪渓を見る（八・四〇）——七合目（九・五〇）——晝飯（一〇・〇〇——一〇・五〇）——九合目（〇・五〇）——頂上（〇・三〇——二・〇〇）——南へ下つて天幕（三・〇〇）

蚊と絶緣して、折角熟睡を期待した山頂の天幕のこの晚も、折からの雷鳴に恐怖と興奮とが腦神經を尖らして、雷の遠ざかるまでオチ〳〵眠れなかつた。テントのホールから放電する音をきいた。（但し之には異說あり）

七、二七　天幕、九・三〇）——獨立標高點（一〇・三〇）——中岳三角點（一一・五〇）——中岳頂上へ戻つて晝食

（一一・〇〇——〇・三五）——標高點（一・四〇）——下山——雷雨にて立佇む（三・二〇——四・二〇）——小倉山（五・四五）——天幕（二・三〇——三・〇〇）——獨標（六・一五）——明神峠（七・一〇）——炭燒小舍（七・五〇）——明神峠の北より出る澤の手前にて天幕の上にゴロ寢する（一一・〇〇）

七、二八　大湯着（四・五〇）　終日東榮館にて伸びる。

七、二九　東榮館（六・三〇）——長瀨澤（七・〇五）——シンゴ澤鑛山事務所跡（七・四五——八・〇五）——シンゴ澤鑛山跡（八・三〇）——郡界尾根を乘越す（一一・〇〇）——晝飯を食ひ、岩小舍を見てくる——歸路出發（一二・〇〇）——大猪名澤上渡渉點（二・二五——二・五〇）——東榮館（四・二〇）——小出——歸省

駒ケ岳の頂上の三角點の所に、朽木に大湯に至る道として明神を廻るもの及佐梨川を下り鑛山跡に出るものとの二つが書いてあるが、この場合の鑛山は地圖の鑛山のマークの入つたものではなく、シンゴ澤の鑛山跡をいふものだそうである。

郡界尾根の乘越は頂上からオツリ水ノ澤について四十分許り下つた所で澤の流れが四つの瀧の連續を以てS字形を畫きつゝ、北向きから急に西向きに方向を轉換する所がある。この方向轉換の瀧の連續の三間川上から、右に郡界尾根の凹みへと二三十間を登れば、この凹みがそれであるが、餘り明瞭な印はついて居ぬが、手紙の切れつ端が乘越の所の立木にしばつてある丈である。又更に降りて行けば針金を下た所があるから確認する事が出來る。郡界尾

根に就て云へば二ノ越澤ノ頭からズーツと下つた郡界尾根が明瞭に Concave する最初の凹みがそれである。佐梨筋の路はオツリ水の曲り角から、この凹みを乘越して、二所許り針金のついた所のある急傾斜の草付きを、シンゴ澤ノ頭の邊りに向つてヘヅリ下つて、鑛山跡の尾根へ取付くのである。

岩小舍は十數年前、東榮館の主人が偶然發見したものださうで、乘越から郡界尾根を、オツリ水ノ澤の右側をへづつて、三十間も下りて行くと南面して小さな岩穴がある(氣をつけて見ねばそれと分らぬ位)。平たい所は一坪足らずもあらうか、高さは三尺位。岩小屋故少し濕つてゐるが、草でも敷けば朗々である。三人位なら寢泊り出來よう。一時の雷雨しのぎなら十人位はつまらう。焚木は特に豐富とは云へぬが、すぐ上に幾らでもあるから事を缺かぬ。雨は降つても入口の所の岩がうまく庇狀になつてゐるから傳つて來る心配は絶對にない。東榮館の主人は近く之を改善するさうであるから、そうしたら結構なものになるであらう。(關)

越後から日光までの山旅

七、二九、晴　大湯溫泉東榮館(六・四五)——枝折峠(一一・〇〇)——石抱橋(〇・一五——〇・三〇)——(三・一五)——須原口(四・一五)——浪拜銀山寺(七・一〇)——百足橋(八・四〇)——大津岐峠(一一・五五)——麒麟手(四・一五)

七、三〇、曇後雨　浪拜銀山寺(五・〇五)

——檜枝岐丸屋(五・〇〇)

七、三一、雨　滞在

八、一、曇後雨　檜枝岐丸屋（七・〇〇）――駒ケ岳頂上（九・四五）――一〇・〇五）――沼山峠（五・四五）――長藏小屋（六・二〇）

八、二、小雨後雨　長藏小屋（九・二〇）――沼尻平（一〇・一〇――一C・三〇）――少しく燧岳に上りかけたが降雨ひどく引返す――沼尻平（一一・四五）――尾瀬ケ原東電社宅（一、五〇）

八、三、晴後濃霧　東電社宅（八・〇〇）――檜枝岐小屋（八・三〇）――山の鼻小屋（一〇・四〇――一一・二〇）――カラ澤を下る――山の鼻小屋（九・三〇）――至佛山頂上（一一・〇五――三・〇〇）

八、四、晴後半晴　山の鼻小屋（七・四〇）――檜枝岐小屋（九・三〇）――カラ澤を下る――山の鼻小屋（六・三五）

燧岳頂上（〇・五〇――一・〇七）――沼尻平（一一・〇七）――長藏小屋（一一・五五）

八、五、晴後曇　長藏小屋（七・三〇）――小淵澤の田代（八・一七――八・三〇）――引馬峠への分岐點（一〇・四〇）――鬼怒沼濕原（〇・三〇――一・一〇）――鬼怒川畔（二一・〇〇）――八丁湯（二一・四〇）――川俣溫泉清湧館（五・〇〇）

八、六、晴後曇　清湧館（七・四〇）――西山金山跡（九・五五――一一・一〇）――金田峠（〇・三二）――湯元湯乃家（一・四五）

八、七、半晴　湯乃家（六・二五）――外山肩部の小平地（九・二〇）――前白根（一〇・〇〇）――五色沼（一〇・三

○)——奥白根頂上(一一・三五——〇・〇五)——白根小屋(一・一〇——一・四〇)——新道分岐點(二一・〇五)
——菅沼畔(二一・五〇——三・一〇)——丸沼上利根運輸の發着所(四・〇七——五・一五)——白根溫泉白根館
(六・〇〇)

八、八、晴　白根館(九・二〇)——追貝——沼田驛(一二・〇〇)

第一日、魚沼駒行に續いた此行も可成り天候不良に惱まされたが此日の出掛けは上天氣、枝折峠途上からの魚沼駒は壯大な感あり。銀山は石抱橋から須原口までの邊り、上高地に似てゐるが俗化せざる點で勝る、荒澤岳は魚沼駒から望んでも好かつたが北の岐を前景にして大空に浮ぶ姿は何とも言へない。浪拜には銀山寺(通稱山のお宿)が新設され、宿屋をなす、感じよし。

第二日、早朝小雨なるも出發、大津岐川は渡渉四回にして急な上りにかゝる。峠は風雨で何も見えず、どこが頂上やら見當付かず、下りには足許に出た兎の數二十有一、但し一匹も捕れず。

第三日、小雨の時を覗つて駒ケ岳に登りに出掛けたが登り口を間違え、一五二四米三角點に猛進し、上に至りて非を悟り下山す。村で標柱を立てるとの事だが注意を要す。

第四日、丸屋で登山口をよく聞いて出掛けた、上りにつけば一本道、上に出てからは氣持がいゝ、花には遲過ぎ、雨で眺望を得られざりしは殘念なりき。夕方沼山峠より雨に煙る尾瀬沼附近の景色は墨繪の如く頗る美はしかりき。

第五日、天候思はしからず、同行者關節を痛めたる爲め、頼んで社宅に泊めて貰ふ。

第六日、カラ澤を上り、草地を登る頃より濃霧、歸りは東方にからみ過ぎて簸こぎをやは岩魚釣の爺さんが居て岩魚の鹽燒にありつけた。

第七日、此日も午後から天候一時惡化し遠雷に脅されて燧岳は早朝下山す。尾瀬沼附近つた。

第八日、小淵澤の田代は仲々南方の眺望に惠まれてゐる、八丁湯までは渡渉四回程。川澤に出會ふ毎の上り下りは閉口した。

第九日、一二ケ處西澤金山跡への途路が崩壊してゐた、西澤過ぎる、金田峠へは地圖の徑とは異なり、二〇二〇米三角點の北面をうねつて峠上に出る。湯元で同行者に分れてから獨り小田代原から湯川林道を散策、人一人にも出會はず、靜寂の林を歩む、林道は連日の降雨に大半水浸しなりき。

第十日、此の一週間は午前はどうやら晴れてゐるが午後になると必ず曇つて雷を聞き、も頂上では雲霧に包まれてしまつた。白根小屋は大日如來の北方稍〻平らな處、新しいが新道は六地藏の手前邊りから北下し、笑崖邊りをうねつて菅沼西南岸まで行く。丸沼尻より乘合が沼田まで通ず、目下菅沼及丸沼は水電の爲ひどく風致は害せられてゐる。

武尊牧場

八、一八、晴　花咲（七・四七）——イオノカヤ洞穴下（九・〇五）——東俣を溯行——代八瀑（一〇・四五）——瀑の上手七八町にて右岸の籔を上る——武尊牧場三號平（〇・四〇）——牧場事務所（一・三〇）——花咲（三・三〇）

東俣の模様と代八瀑を見る目的で行つた。東俣は徑はないが溯行割に容易、明るい感じがするうだ。代八瀑は六七丈あらう、澤が東南より南に流れる曲り角にあるから斜横に見るのみ。右岸の籔を掻き上ると一時間にして尾根上稍〻小廣き處に出で、それよりブナ林の間を漫歩して牧場に出た。

九、二、晴　花咲（七・四五）——牧場事務所（九・二五——九・四五）——高山平（一〇・三〇——一一・三〇）——牧場事務所（二・〇〇——三・〇〇）——花咲（四・五〇）

武尊山・玉原越・迦葉山

吹原不二雄

八、二三、快晴後曇　花咲（七・五〇）——背嶺峠（八・五五——九・一五）——川場口登山道入口（九・三五）——一行小屋（九・五七）——不動岳（一一・四七——一二・〇〇）——前武尊頂上（〇・五五）——御澤（一・三〇）——不動坂下（二・〇五）——花咲（三・二五）

九、七、快晴　花咲（六・〇二）――不動坂下（七・二五）――御澤（七・五七）――前武尊（八・三二）――
〇〇）――イヘノグシ峯（九・四〇）――沖武尊頂上（一
――ハタタテクボを下る――武尊川畔（一・二〇）――
（三・五七）

九、八、快晴　打上柳淀旅館（七・一五）――玉原越頂上（一
六――一一・五二）――透門（一・一〇）――七谷越――
八・三〇）――鹿俣（九・四〇）――迦葉山頂上（一一・一
――川場湯原（三・二五）――逆川林道――花咲（六・三〇）

八月二十三日、背嶺峠は武尊連峯展望に最もよし、峠より下ること廿分にして右手に川場道入る、石標あり、行小屋は、薄根川上流に懸崖の川に沿へるものの上手末端附近、川畔にありて一間半に二間位、外に草葺の小屋掛あり。登路はこゝより前武尊より眞南に派出する尾根を上る。地圖少しく誤りあり、途中に不動岳の岩峯二三あり、前武尊の西を捲きて前と劔ケ峯との鞍部に出づ。

九月七日、武尊山は武尊川に出るまで水場は大品川・御澤・中ノ岳中腹一ケ處のみ。登路は大品川に沿ひて一三五〇米位まで行きて西北に上る、沖武尊頂上にては眺望頗るよく富士・南アルプス・乗鞍等を望む。藤原徑は頂上より西に下り、稍〻西南下して不明となる。ハタタテクボは傾斜急、土崩れして少しく危險、大分下りてウノクビ澤を下行し武尊川に出づ。武尊川下りは徑稍〻不明なれば注意を要す。裏見瀑稍〻上手にて右岸に上る徑あり、神社下を捲きて點線徑に出づ。寶臺樹山南の相生原は後ろに劔ケ峯山を、前に谷川連峯を望む一面に薄の氣持よき原なり。

九月八日、玉原越は眺望なく笹の下生、一面に濶葉樹林、峠上に一間に一間少しの萱葺小屋あり、發知川に沿ひて開かれたる大道なり、玉原は現在通らず。迦葉山裏徑を上り、迦葉山東南尾根につけられたる登路は胎内潜岩・奥の院を抜けて頂上に達す。武尊山及び南方一帯の眺望あり。木賊手前より入る逆川林道は景色よく紅葉の頃可ならん。

日光白根山

久保田禮治　他數名

八、二七、曇　上野（八・二〇）——日光（一〇・四〇）——自働車——湯本（一・〇〇）——蓼の湖往復——湯本板屋泊（四・一〇）

八、二八、小雨後曇　湯本（八・一〇）——白根澤——天狗の遊び場（一・〇〇）——前白根頂上（二・三〇）——五色沼——前白根（三・四〇）——湯本（六・一〇）

八、二九、晴　湯本（八・四〇）——兎島——戰場ケ原三本松（一二・〇〇）——馬返（二・〇〇）——自動車——日光（四・二〇）

牧野富太郎先生には吾等の爲朝早くより夜おそくまで親しく指導せられ深く感謝する次第である。東大理學部の理學博士辻辰雄君他東京植物同好會員の方々との採集旅行の爲時間が普通のより多くなつてゐる。採品は多かつたが其の中興味ある二三の事を次に記します。純粋な高山植物は日本アルプスの夫には及びもつかないが灌木帶以下

の植物の豊富なのに驚いた。白根山頂にはタウヤクリンダウ、ミヤマヤナギ、クロマメノキ、グラ、イハヒゲ、コバノエーランタイが生じてゐる。分布上興味あるもの、近頃發表されたものには、白根笹、根アザミ、日光アザミ、アカマフウロ、富士アザミ、深山笹、ウラジロハナヒリノキ、オホバ柳、日光オトギリ、ツルカハラニガナ、日光ギシギシ、シウリ櫻、日光アザミ、オホカニカウモリ、アイバサウ、ヒロ ハノテンナンセウ、ケロバナロウゲ、ホソバトリカブト、タイミンガサモドキ等である。

皇海山

吹原不二雄

九、三、快晴

花唉(七・一〇)——平川(八・二〇)——奈良(九・四〇)——平瀧(一一・三〇——〇・一五)——津室(一一・一五——一二・〇五)——延間峠(三・二〇)——不動澤の谷氏小屋(五・〇〇)

九、四、曇屢〻驟雨　小屋(七・〇〇)——皇海山南方最低鞍部(七・三五)——皇海山頂上(八・五〇——九・五五)——最低鞍部(一〇・一五——一〇・二五)——谷氏小屋(一一・〇〇——一一・四〇)——八丁坂上(〇・一七)——砥澤林業部事務所(〇・三七——一・二五)——源公平(二・三七)——追貝(四・三八)——花唉(六・〇〇)

第一日、奈良より藥行商と連れになり、奥の方の模様を聞いた、大體土橋徑を行くから下りは樂だ。津室で林業部で地圖を借りて谷氏小屋に泊まつたが非常に歡待して呉れた。砥澤の名を知つた。津室から不動澤までは谷老人と連れになり、お蔭で同氏小屋に泊まつたが非常

第二日、皇海山へは佐久澤（地圖の不動澤）を舊トロ徑を上り、皇海山南方より出づるカラ澤の右俣をとつて南方鞍部、樹林が薄くなつて立枯木のある處まで上ると、一縷の徑あり、見失ひ勝なれば注意を要す。頂上下に高さ六尺位の銅製の大劒あり、更に山（主三角點）を經て二等三角點に達す。眺望は樹林に妨げられて極く小なり、中小屋に下る徑ありと聞きたるも殘念乍ら見出し得ざりき。元の徑を戻り、谷氏方にて衣服を乾かし飯を喰ひ、八丁坂を經て砥澤に至る。夕立に盛んに遇ふ、こゝにて地圖を借用し、澤名を知る。砥澤からは川沿ひに源公平に至る。途中眺めよきも夕立猛烈なりき。

谷川岳

十合健二　堀岡清

九、一九、快晴　上野（一一・三〇）——谷川溫泉（五・三〇）

九、二〇、快晴　溫泉（六・一〇）——高壺澤（七・五五——八・〇五）——天神峠（八・四五——九・三〇）——一五五米獨立標高點（九・五五）——谷川岳（一一・三〇——〇・三〇）——奥の院（〇・五〇——一・一〇）——谷川岳（一・三三——二・〇〇）——西黑澤への分岐點（二・四五）——尾根を離る（二・五〇）——西黑澤に出る（三・三〇——三・五〇）——土合（五・一五）——湯檜曾（六・〇〇）

お天氣がよかつたので伸びて行つた。谷川富士の方へ行く積りだつたが時間がなかつたので奥の院から十分程進んだ後、引き返した。

西黒澤へ下る道は谷川の頂上の少し南寄りから東に出てゐる尾根を一五八〇M邊まで下り、それから右手の急な歩き難い空澤を下る。この澤は西黒澤を上つて來る場合には一つ東の澤と非常に間違ひ易い。下から來る場合には九四〇M邊から左手に深く天神峠と一五二五M獨立標高點との間の尾根に食ひ入つてゐる澤との出合を過ぎてから、右に數へて二つ目の澤である。もつとも僕等が通つた時は澤の入口にスタインマンや白旗が立つてゐた。なほ此の澤の入口の右岸及び土合から來て最初に西黒澤を渡つた所に小舍がある。が併し前者は人間の宿る所じやない。

なほ西黒澤への分岐點には五尺位の標柱が立つてゐた。それから少し天神峠への道を下ると水がある。

九、二一　湯檜曾——水上驛——池袋　（十合）

谷川岳

吹原不二雄

一〇、一八、晴後半晴　谷川溫泉谷川館（六・四〇）——高壺澤（八・〇〇）——天神峠（八・四三——九・〇〇）——谷川岳（一〇・五〇——一一・〇〇）——天神峠（〇・一〇）——高壺澤（〇・三〇）——谷川溫泉谷川館（一・三〇）

天神峠まで徑は急で、餘りにも單調だ。然し紅葉百パーセント、天神峠で久し振りで谷川岳の全容に接したが矢張り殘雪がかゝつてゐる方がいゝ樣だ。頂上近くの笹の斜面、狐色をした草地は見た目になごやかな感じを與へ

た。頂上では雲霧がかゝつて眺望が餘りなかつたので眞下の岩壁をしばし眺めてから下山した。

昭和六年

谷川岳

大友亮藏　堀岡清　中島孚

一、二五、晴

谷川溫泉——保登野澤——天神峠——谷川

前日に保登野澤高壺澤出合まで下見に行つておいた。

夏道はブッシュがひどいから澤を登つた。雪が少い爲澤も完全には埋つて居らず、大きな石の間を全く苦辛して登つた。皆意外にへバつたので途中の岩蔭に荷物を半分程置いて登つた。天神峠では鈍重な灰色の空の下に雪煙を上げて聳立しねてる谷川岳を威嚇されるやうな氣持で見た。時間が遲いので一瀉千里に澤を下つてきた。

谷川岳

村尾金二　近藤恒雄　磯野計藏　園山德三郎

五、二一、晴　上野(後五・四〇)——水上(九・四四)——谷川館(一〇・三〇)

五、三、晴　谷川館(六・五〇)——高壺澤(九・三〇)——天神峠(一〇・三〇——一一・四〇)——谷川岳(一・二〇——一・五〇)——土合(四・〇〇)——湯檜曾(五・一五)——水上驛(六・一〇)

天神峠以上は殆ど全部殘雪あり。歸路の大きな雪溪は下まで一氣にグリセードした。自動車の都合が惡く水上まで歩いた。

初春の尾瀬

鈴木英雄

五、九、雨後雪　上野——沼田——鎌田——戸倉

五、一〇、曇　戸倉(八・〇〇)——硫黄澤橋——田代原(一〇・四〇)——富士見峠(三・〇〇——三・三〇)——八木澤——東電社宅(八・〇〇)

五、一一、晴　社宅——景鶴澤——ヌウ岩——社宅、午後十合健二　大友亮藏

五、一二、雨　滯在、鈴木歸途につく

五、一三　社宅——白砂——沼尻——燧岳——沼尻——長三丈瀧往復

五、一四、晴　燒山峠附近にてスキー享樂

五、一五、曇　小屋——尾瀨峠——尾名澤——戸倉——鎌田——沼田

十日には早く戸倉小屋を立つた。麗かな春陽を一面に浴びた谷合からひつきりなしに聞えるけたゝましい鶯の聲を聞きながら歩いて、まだ三時間も立たない中に達する田代原は三尺餘も雪に埋れてゐた。眞白な菖蒲平にはこんな時期には想像も出來ぬ樣な雪庇が今にも落ちさうにかかつて居た。でも固過ぎずもぐらずの絶好の積雪は八木澤の下

りを飛ぶ様にはかどらしてくれた。

僕は瞬間眼前に展開した銀世界の尾瀬ケ原を見た時のあを睥睨して聳立してる景鶴至佛の山々の雪渓は淡紅の夕陽に祝福されながら輝いてた。原には横に走つて居る。

社宅の炬燵の暖い樂しいまとゐ。

朝の冷氣にぞつとして起きて見ると至佛や燧の頂には新雪が降つてゐた。

景鶴へ登つた時も燧を極めた日も絶好の天氣で新鮮な空の青さを白い強い一線で限つた無數の重疊たる遠くの山々を、疲勞の後の快いほのかな氣持で何時迄も見てた。歸りは頂からおぼつかないグリセードで下りた。

長藏の小舍では陽が隱れてあたりに夕靄が立ちこめる頃迄も燧や至佛の頂を眺めて居た。

燒山峠では半日スキーを享樂した。

そして恰度六日目に尾瀬峠での眺望を最後として尾瀬の總てに別れたのである。その日も朝から陽がかん〳〵照りつける初夏の様な暑い日だつた。雪がもう消えてる所では長い〳〵かげろうが涯もなく續いて春の意識をいやが上にも燃してくれた。

我等は冬の尾瀬から再び春酣の戸倉の里へ下つてきた。

（大友）

日光志津小屋（新入生歓迎旅行）　増山清太郎　打橋壽郎　宮川雄二郎　伊藤文平　賀井善智

五、一〇、曇後晴　清瀧（一一・一五）——キノミ平（〇・三〇）——志津小屋（九・三〇）——小眞名子山、太郎山鞍部（一一・三〇）——太郎山（一・一〇）——志津小屋（五・一〇）——志津小屋（五・五五）

五、一一、曇　志津小屋（一〇・〇五）——御澤（一一・四五）——戰場ケ原三本松（一一・四五——一〇・五〇）——中宮祠（二一・四五）

五、一二、雪

志津小屋は期待してゐた通りの氣持よい、綺麗な小屋であつた。樹林を透して男體や大眞名子を見上げた趣はなかなか良い。

太郎山へは、大眞名子の山側をめぐつて川俣へ行く途を傳ひ、小眞名子との鞍部から御澤の源流を登り、地圖の途を歸つた。

三日目には、雪のため男體越へを止めて、戰場ケ原を霙に叩かれながら歩いてきた。（増山）

尾瀬沼より八丁の湯を經て日光湯元へ

加藤安吉　他一名

七、一八、晴雨　沼田（七・三四）——追貝（九・〇〇）——鎌田（一〇・四〇——一一・〇〇）——追貝圖幅東北端神

社（一・〇〇―一・三〇）――利根電力戸倉出張所（三・〇〇）――大清水小屋（四・〇〇）――長藏小屋（七・三〇）

此の日一時頃に小雨あり後三平峠に差しかゝつた時は猛烈な雨に遭ひ、加之日暮迫つて四圍暗くなる。

七、一九、曇雨　小屋（八・〇〇）――沼尻（八・四〇――一一・三〇）――雪渓（一・四〇――二・〇〇）――燧岳三角點（二・五五）――小屋（五・三〇）

沼尻で霧の晴れるのを待つて上つたけれども、十二時半頃から雨が降り出し三角點は突風にさらされ直ちに下向。

七、二〇、曇雨　小屋（七・三〇）――黒岩山三叉路（一一・〇〇――一一・三〇）――鬼怒沼（一一・三〇）――日光澤温泉（四・〇〇）――八丁ノ湯（四・三〇）

此の日も亦晝頃から雨に降られ唯足に委せて歩く。日光澤の下りは倒木惡徑に惱され、この澤を登る者の苦勞を思ひやりつゝ下る。

七、二一、曇雨　八丁館（八・〇〇）――噴水塔（一〇・四〇――一二・〇〇）――西澤金山（二・三〇）――湯元（五・三〇）

噴水塔にて中食中より雨に見舞はれ廢鑛西澤金山を經て金田峠にかゝり完全にこの所でへばる。

庚申山、皇海山、男體山、太郎山、ミカサ岳（中禪寺湖をめぐる山旅）　吹原不二雄

九、二、曇後霧雨　原向驛（〇・三五）——銀山平（二・一五）——一ノ鳥居（四・〇〇）——庚申山社務所（九・一五）

九、三、霧雨　社務所（九・一〇）——奥ノ院（一〇・五〇）——社務所（一一・三〇）

九、四、晴後曇　社務所（六・一五）——庚申山第二高點（七・一五）——鞍部（七・四〇）——鋸岳最高點（九・五二

——一一・一五）——大鞍部（一一・四五）——皇海山頂（〇・四〇）——大鞍部（一・〇五——一・五〇）——庚申山頂（四・三四）——鞍部（三・五〇）——社務所（五・〇〇）

九、五、晴後曇　社務所（九・〇二）——銀山平——舟石峠（一一・二〇——一一・三六）——足尾町間藤（〇・三〇

——一・〇〇）——初ノ茶屋（二一・二二——二一・五〇）——深澤峠（四・二〇——五・一五）——半月峠（六・〇〇）

——狸窪（六・三〇）

九、六、曇後雨　狸窪（九・三〇）——中宮祠（一〇・二〇——一〇・三五）——三本松（一〇・五五——一一・一〇）

——御澤に下る（〇・四〇——一・〇〇）——太郎山への分岐點（一・三五）——志津小舍（二一・五〇）

九、七、晴　小舍（七・一〇）——賽ノ河原（八・五〇）——男體山頂（九・〇〇——一〇・〇五）——小舍（一一・

〇〇）

九、八、晴後曇　小舍（七・二二）——太郎山への分岐點（八・〇〇）——空澤を離る（八・二〇）——野門・川俣道へ

の分岐點（八・五〇）――新雍（九・五〇）――御花畑――太郎山頂（一〇・一二）――一〇・三七）――山への分岐點（一一・五二）――〇・三五）――三本松（一・五〇――二・〇五）――赤沼より林道に入る（二・一五）――小田代原（三・二〇）――外山澤に沿ひて――千手ケ濱（四・五〇）

九、九、曇小雨　千手ケ濱（九・一五）――菖蒲ケ濱、龍頭ノ瀧見物（一〇・一〇――一〇・五〇）――千手ケ濱（四・五〇）

一・五五）

九、一〇、曇後雨後快晴　千手ケ濱（七・〇〇）――西ノ湖（七・三〇――七・四〇）――クラヤミ瀧（八・一二――八・二五）――瀧入澤溯行――國境尾根に上りつく（一〇・三五）――ミカサ岳（一一・四〇――一〇・一〇）――瀧入澤下行――小瀧上（一・四〇）――西ノ湖（二・二〇）――千手ケ濱（二・五五――四・〇〇）――菖蒲ケ濱（五・〇五）――中宮祠大尻橋（六・一〇）――狸窪（六・五〇）

九、一一、晴　狸窪（八・五〇）――半月峠（九・二三）――深澤峠（一〇・〇〇――一〇・一五）――足尾町間藤驛（一一・五〇）――桐生――新宿

五五――一一・一〇）

此行は始めの豫定としては庚申山から皇海山と尾根を傳ひ、一旦平瀧部落に下りて三重泉澤を溯行し錫ケ岳を極めてから又赤岩澤を下行し、千手ケ原附近を歩き、更に志津小屋を中心として日光の裏山を三つ四つ上るといふ尾根傳ひ、澤歩き等を織り交ぜて、深山氣分を味ふ積りであつたが、天候不良其他のため上記の知きワンデルングになつてしまつた。尙三重泉澤溯行は天候惡しき時は危險、錫ケ岳は同澤よりは樹叢繁茂のため登攀困難との報知を

平瀧林業部事務所より受取つた。

第一日、驛より社務所まで約三里、銀山平よりは庚申川の眺め頗るよし。

第二日、天候不良の爲め山内名勝めぐりを行つたが危峯怪岩頗る多し。岩登りもなし得やう。尚山中には野猿多く棲息し、其の山名に背かずとの事なり。

第三日、皇海山への登路は庚申山頂上から尾根を傳ふ。國境の一九八〇米峯は眺望頗るよし。鋸岳最高點に休んでゐる内に霧が捲き上つて來て遠望はなくなつたが皇海山に往復して見た。展望更になく急いで戻る。鋸岳の各キレツトからは松木澤の深い溪谷が面白く下瞰された。水場は庚申山と鋸岳との鞍部の大樹（トラノオ？）の處より南方ミオ澤源頭に下る事五分の處だけである。

第四日、舟石峠は男體山、太郎山が見えて稍ゝ眺望に惠まれて居る。足尾より日光に抜ける路としては大正九年に作つた半月峠路よく、阿世潟峠路は廢道とか。半月峠路は赤倉と間藤との間の栃本屋傍より入り、一里ばかりは深澤に沿ひ、それより一四四二米三角點に相對する東方の尾根に上り、一五一一米獨立標高點下の深澤峠（見晴の茶屋あり、白根、皇海、庚申山方面に廣き眺めを有す）を過ぎて山腹を捲き、半月山の西方鞍部たる半月峠より湖に向ひて下りると狸窪なり。漁家二軒ありて泊まるを得。一泊六十錢位の廉價、しかも氣持よい待遇なり。總じて半月峠路は景色よく極めて歩き易し。

第五日、三本松には山王峠路より右手に、志津へ行く徑があつた。伐材の無人小屋で左折し、澤に下る。御澤の中で男體山からの空谷と分れる點は積み石によく注意すべき處二三あり。小舍につくと間もなく雨となる。心細く夜の仕度をして居ると淸瀧から村人一名上つて來て泊まり合はす、大きな圍爐裡に火を焚いたが夜中は稍ゝ寒し。

第六日、霧が晴れて來ると快晴だ。大眞名子と太郎山との間に遙かに遠く殘雪斑々たる飯豐山を望む。山頂は案外廣くて樹木がよく茂つてゐる。關東平野は雲海の下なるも奥上州の山々はよく見えた。燧も至佛もそれに武尊等が懷しく。午後には林の中をぶらついて深山の氣分を味ふ。

第七日、太郎山頂で眺めてゐる內に雲が湧いて來た。三本松附近から見た男體山はスフインクスの如く原に君臨してゐる。赤沼の處から氣持よき小田代原に拔け、外山澤に沿つて千手ケ濱までは案外長い。

第八日、どうも天氣惡く時雨模樣なる爲、米其他補給に湖畔道を傳つて菖蒲ケ濱に遊ぶ。龍頭瀑を眺めて又雨に降られて戻る。尙湖畔道は湖南にもあり、此の方が景色變化多しと。

第九日、こゝに來たのは錫ケ岳行の爲めだつたがこちらからでは時間がかゝるし、誰も詳しく知らないので、この邊の山で景色がよいと稱せられるミカサ山（一九八〇米三角點）（木暮氏の三俣岳）に漁師淸さんの息子と行く。クラヤミ瀧は天の岩戸の如き岩壁に隱されて直接見えぬ。廻り込んで間近く望む、高さ四丈足らずず。ずつと迂回して小瀧の近くまで步道あり。小瀧上から澤の中を行く。時々利根に越える者があると見え、樹枝を折つたり石を積ん

だりしてある。尾根に取り付くと流石に藪は物凄い。ミカサ山三角點は三村界と稱するも稍〻南方で、丈の高さ位の笹に矮樹ありて眺望なし。下りにはヂヤン〳〵降られた。菖蒲ケ濱に行つたらバス既になく湖の夕景を樂みながら狸窪に泊まる。

紅葉の丸沼、鬼怒沼と尾瀬

一〇、一六、快晴　沼田（七・四〇）——伊香原（一一・〇〇）——花咲（一二・四〇）——花咲（六・〇〇）

〇〇——三・四〇）——花咲（六・〇〇）

一本松迄は街道をぶら〳〵歩く。牧場は何時行つても氣持がいい。紅葉黄葉も相當。尚最近牧場から武尊山に尾根通しでカワゴ岳を經る縦走路を開いたとの事なり。

一〇、一七、曇　花咲（八・〇〇）——宇重田峠——鎌田（一〇・〇〇）——白根溫泉——丸沼上（一一・〇〇）——武尊牧場（三・一五）——四郎峠（四・五〇——五・〇五）——根羽澤溫泉（八・二〇）

鎌田で乘合既になく溫泉まで歩く。天氣次第に惡化。白根館で晝食し、不動瀧を見物し、乘合にて丸沼上へ。丸沼の沼畔路なし。渡し船の賃金は十錢。澤傳ひに四郎岳の東鞍部の四郎峠に通ず。峠から大ナギ澤に急下し澤の中をヂヤブヂヤブゆく。溫泉までは一里半、隨分長かつた。極くぬるいラヂウム含有の鹽類泉、新しくて氣持よく、愛想のいゝ婆さんが一切やつてゐる。場所は地圖の根と羽の字の間らしい。

一〇、一八、曇

根羽澤溫泉（六・三〇）——物見山頂（九・一七——九・四〇）——鬼怒沼（一〇・一〇——一一・二〇）——根羽澤溫泉（一・〇五——一・四〇）——三平峠（四・二五）——長藏小舍（五・〇〇）

溫泉より三丁で大ナギ澤と分かれ、尚三丁でカラノマタ澤と本澤の出合から間の尾根を東へと上る。尾根上割に廣からず、樹間より四郎岳、荷鞍岳を望見す。物見山への上り甚だ急なり。山頂まで湯より一里、眺望樹林に妨げらるるも鬼怒沼少し見ゆ。鬼怒沼まで小半里、東に少し下り、後倒木を傳ひ笹中を南下し澤に出で又東して沼の西端に出づ。靜寂だ。然し腰の下ろせないのが缺點なり。物見山頂からどん〳〵下る。湯より楓が紅葉して美はしき井戸澤平を通つて、大清水平に出づ、其間十八丁。街道に一軒家ありて自炊客歡迎す。すゝきの原に秋の愁寂を感じつゝ峠へ上る。峠下から溪谷一帶は秋色頗るよく、沼に出づれば狹霧が這つて來て四邊りを蔽ふ。小舍は既に長藏爺さんを失ひ何となく物足りない。夜半雨しきりなり。

一〇、一九、曇後小雨　長藏小屋（七・〇〇）——沼尻平——白砂濕原——檜枝岐小舍（九・一五）——尾瀨ケ原——山ノ鼻小舍（一一・二〇——〇・〇五）——カツキリノボリ附近（一・一五）——山ノ鼻小舍（二一・〇五——二・四〇）——鳩待峠（三・二五）——土出（七・〇五）

沼尻平邊りでは天氣がよくなりさうだつたが白砂濕原まで來ると又元の木阿彌となる。然し皿伏山其他原を圍む山々は薄く霞んでゐるが黄朱とりどりで見事なり。大堀川で腰までの渡渉をしたが隨分冷めたい。山ノ鼻から湯の

小舎に越えんとしたがカツキリノボリの邊で徑が全く不明、おまけに氷雨が落ち出す。止むなく引返して鳩待峠へ急ぐ。やがて氷雨は小雪に。笠科の溪谷は誠に幽邃なものだ。土出の片品川畔の三松館は感じよく、待遇よく、安價で氣に入つた。

一〇、二〇、晴　土出（七・一〇）——鎌田——摺淵（一〇・〇〇）——追貝（一一・〇五——一一・五〇）——沼田（〇・四五）

早朝に起きて見ると、西山や荷鞍山は初雪を薄く被つて居る。しかも未だ降り足りぬらしく山々は雪雲でまとはれてゐる。初雪の武尊山の雄姿を見に摺淵まで寄つて見たが矢張り頭が隠れてゐた。

谷川岳

吉澤松次郎

一一、二二、晴　水上驛（四・三〇）——土合（六・四五——七・一五）——蛇紋瀧（七・五〇）——小屋跡（九・〇〇）——尾根に出る（一一・〇〇）——晝食四〇分休憩——頂上（一・三五）——天神峠（四・一五）——高壺澤（五・〇〇）——谷川溫泉（七・〇〇）

一二、二三、曇　谷川——水上——上野

昭和七年

北ノ又川入リ

高見要　鈴木英雄　増山清太郎　十合健二
人夫、星鶴松（宇津野）　渡邊嘉吉（大湯）

三、一七、雪　石打附近にてスキー練習
三、一八、雪　小出――大湯
三、一九、曇　滞在
三、二〇、雪　滞在
三、二一、雪　滞在
三、二二、晴　大湯（八・三〇）――發電所（一〇・〇〇――一〇・一五）――坂本小屋（一・〇〇）午後より道踏み
三、二三、晴　小屋（八・三〇）――尾根に出る（一〇・三五）――明神峠（三・三五――四・〇〇）――白澤ノ小屋
（六・三〇）――小屋（六・一〇）
三、二四、晴　小屋（八・四〇）――小倉山（〇・一〇――〇・三〇）――駒ケ岳（三・一〇――三・二五）――小倉山
三、二五、吹雪　滞在
三、二六、晴　小屋（六・五〇）――一二三五米三角點（八・二〇）――シバ澤（一〇・一五）――一二三七米三角點

（一・〇〇）——一九〇〇米峯手前引返（三・二五——三・四〇）——シバ澤（六・一〇）——タキノハナ（七・三〇
——八・〇〇）——一二三五米三角點（九・四五）——小屋（一〇・一五）

三、二七、晴　休養

三、二八、吹雪　滯在

三、二九、吹雪　滯在

三、三〇、雪　小屋——石抱橋——村杉——小屋

三、三一、曇後晴　小屋（八・一五）——明神峠（一〇・四五——一一・〇〇）——坂本小屋（二・五〇）——大湯（四・
四〇）

詳細は紀文中の「北の又川入り」を參照せられたし。

日光より武尊へ

宮川雄二郎　十合健二

五、一一、晴　日光——自動車——中宮祠（一二・〇〇——一二・三〇）——湯瀧（三・四五——三・五〇）——湯元（四・三〇）——湯元（六・二〇）——金精峠（八・一五——八・四五）——獨立標高一四〇二M（一一・四五——一二・
點（一一・〇〇——一二・三〇）——湯川（一・一〇）——外山澤よりの道合

五、一二、雨　〇・三〇）——白根溫泉（一・五〇）——上小川東麓館（二・五〇）

五、一三、曇後晴　上小川（九・〇〇）——鎌田（一〇・〇〇）——寺（三・〇〇）

五、一四、晴　山崎（七・〇〇）——大品原鳥居（七・三〇）——不動坂上（九・一〇）——九・三〇）——前武尊（一〇・四五——一一・二〇）——沖武尊（一・〇〇——一・三〇）——前武尊（二・三〇——二・四〇）——山崎（四・五五）

五、一五、晴　山崎（八・三〇）——十二社（九・二〇——九・三五）——牧場事務所（一〇・三〇——一一・〇〇）——三號平（〇・四五——三・〇〇）——事務所（三・五〇——四・五〇）——山崎（六・三〇）

五、一六、晴　山崎（一〇・二〇）——赤倉山東方鞍部（一一・一〇——一一・二〇）——サカサ川、薄根川出合（一一・三五）——川場（二・一五——五・〇〇）——自動車——沼田

谷川岳（懇親旅行）

吉澤一郎　村尾金二　高橋要二　太田又一

増山清太郎　堀岡　清　加藤安吉　豊田忠巍　清水達雄

五、二九、晴　湯檜曾（五・二〇）——土合（五・四五）——蛇紋瀧（六・二〇）——澤を離る（七・四〇）——尾根に出る（八・四五——九・二〇）——頂上（一〇・三〇——一一・四〇）——天神峠（〇・四〇——一・〇〇）——谷川（二・五〇——五・四五）——水上（六・二五）

新入生歡迎旅行と銘を打つたのだけれど豫科からの參加がなくて淋しかつた。前日の様子であやぶまれた天候も素晴しい上天氣となつて呑氣な一日の山旅をすることが出來た。慾をいへば頂上と天神峠との小雨がなかつたらと思ふだけ。

上信國境方面

關守三郎　外數名

昭和五年

神津牧場

一〇、一七、快晴

輕井澤（六・一四）——七・一〇）——八風山（一一・〇〇）——一一・三〇）——物見山（三・〇〇）——（四・〇〇）——初谷鑛泉（五・〇〇）

一〇、一八、快晴

初谷鑛泉（八・〇〇）——神津牧場（九・三〇）

一〇、一九、快晴

神津牧場（九・〇〇）——下仁田（二・〇〇）——歸京

餘りいゝ秋なもんで、とうとう我儘に一泊を牧場にもつて、十八日はほんとうに秋の山の幸に醉つた。輕井澤からほんの數時間にこんな所があるのに、何回も通り乍ら未だ訪れなかつた事が、くやしい様でさえあつた。

神津牧場

大友亮藏　間瀨正　十合健二　堀岡清

一〇、二一、雨後晴　信濃追分（五・一〇）——上發地（八・〇〇）——三五——九・五〇）——澤を下る——香坂道一〇二〇M（一一・一〇——一一・三〇）——尾根に出る（〇・一五——〇・三五）——物見山（一・〇〇——一・一五）——牧場（一・五〇）

追分で、上野を出發する時から降つてゐた雨の止むのを待つたが、晴れそうにもないので雨の中を出發した。併し八風山では雨もやみ、香坂道に出る頃には青空さへ見え始めた。八風、香坂間の尾根は踏迷つて、道のあるまゝに澤を下つて了つた。

一〇、二二、晴　牧場（一〇・一五）——晝食三十五分——俚稱内山峠（〇・一〇——〇・一五）——八八九M獨立標高點（一・一五——一・四五）——内山峠（一・四五——二・〇〇）——荒船不動（二・四〇——二・五〇）——星尾峠（三・一五——三・二三）——荒船山（三・五〇——三・五五）——經塚への分岐點（四・〇五——四・二〇）——初谷鑛泉（五・五〇）

この日牧場に伸びる積りだつたが、天氣がよいので荒船に行く事にした。荒船の頂上では、霧が卷いて來て何の眺望もなかつた。經塚は時間の都合上割愛した。星尾峠からの下りは、晩秋の北アルプスを眺めながらどんどん下つて、初谷鑛泉まで約一時間で來た。鑛泉では皆愉快な一夜を送つた。

一〇、二三、晴　初谷鑛泉（九・〇〇）——中込（一二・〇〇——〇・二四）——小諸

（十合）

昭和六年

熊野湯スキー行

園山徳三郎　小川竹夫

一、六、曇後雪　長野（六・〇〇——六・三〇）——湯田中（七・三〇）——沓野（七・四五——八・二〇）——原（一一・三〇——一一・五〇）——發哺との分岐點（〇・二〇）——丸池小舍附近（〇・四五——一・一五）——平床（四・一〇）——熊野湯（二・五〇）

一、七、晴　手マヘカラホリ附近、前橋街道附近にて練習す。三時頃より所謂ゲレンデにて遊ぶ。

一、八、雪　熊野湯（一〇・三〇）——松尾根附近（一一・四五）——附近練習（〇・二〇——三・二〇）——熊野湯

（四・一〇）

行けたら笠あたりと思つたが遂に途中で思ひ止まり、松尾根附近で轉がつて遊んだ。歸りは宿の西北、平床の原寄に降つて歸つた。

一、九、雪後晴　横笹尾根、鉢山方面へ。

時計を持たずに記錄なし。午後から下界が晴れて山がよく見えた。午前中は烈風ありしも午後から風止んで暖く て凌ぎ易かつた。

一、一〇、吹雪　熊野湯（后一・三五）——丸池古小舍（三・〇〇——四・一〇）——波坂の下（四・四〇）——長野（五・

二〇）——澁溫泉（五・三〇）——自動車——湯田中（六・四〇）

終日物凄い吹雪。呼吸困難を覺える程。殊に平床原、幕岩對岸附近は物凄かつた。丸池の古い小舍にて怪しげな食事をした。

恰好で怪しげな食事をした。

波坂、十二澤は勿論、長野から澁溫泉の橋を渡る迄滑つて歸つた。下界は熊野湯同然吹雪だつた。のみならず此の日の吹雪の爲に列車の運轉が亂脈を極めて居た。

一、一一　歸京

（小川）

神津牧場荒船山方面

四、七、吹雪後晴　輕井澤（四・五五）——和美峠（七・三〇——七・四五）——本岩（九・四〇）——牧場小屋（一一・三〇）

賀井善智

八・五〇）——一本岩（九・四〇）——牧場小屋（一一・三〇）

午後は物見山、寄石山往復

四、八、晴　牧舍（七・四〇）——初谷鑛泉（八・四五）——富岡街道（九・〇〇）——荒船不動（九・四五）——畫食——一二・〇〇）——荒船高原（一・三〇）——星尾峠（一・四五）——初谷（三・〇〇）——物見尾根（四・〇〇——五・〇〇）——牧舍（五・二〇）

山路分岐（一〇・〇〇）——三角點（一一・三〇）——

荒船近路分岐點からは一直線に澤を遡つたが雪が深くて弱つた。

四、九、晴　牧舎(八・〇〇)——香坂峠(九・二〇——九・四〇)——八風山岩上(一〇・四五——一一・〇〇)——昼食(一一・三〇——〇・四五)——上發地(一・〇〇——一〇・〇〇)——小淺間(一〇・四五——一一・〇〇)——峰小屋(九・三〇——一〇・〇〇)——小瀬溫泉(四・三〇)

四、一〇、晴　小瀬(八・〇〇)——峰小屋(九・三〇——一〇・四〇)——昼食——〇・二〇)——淺間牧場——北輕井澤(一・〇〇)——吾妻牧場——吾妻驛(二・〇〇——二・四五)

鹿澤溫泉

間瀬　正　他一名

一、五、晴　田中(九・三〇)——自動車——嬬津——地藏峠(三・〇〇)——鹿澤

一、六、雪　宿——角間峠——湯ノ丸の麓——牧場小屋——宿

一、七、快晴　宿(八・三〇)——地藏峠——三方ケ峯頂上(〇・一五)——宿

頂上からは北、中央アルプス、富士山がはつきり見えた。晝食後すぐ下の舊火山？で同行の從兄と眞裸になつて三十分ばかり遊んだ。

一、八、雪　出發(一〇・〇〇)——ゲレンデ——湯ノ丸(牧場小屋の方から)(一二・〇〇)——宿

猛烈な吹雪、木蔭で休憩して一氣に角間峠まで滑る。それから牧場の柵の中を斜滑降しながら出來ないので）下る。

一、九、雪　鹿澤（七・三〇）――角間峠――眞田（一〇・四〇）――上田――赤羽

降雪量多く、眞田驛の近くまでスキーがはき得た。

熊野湯と發哺

田中秀三郎　増山清太郎

三、一九、晴　湯田中――上林――熊野湯

三、二〇、晴　笠岳へ

出發（九・四〇）――小屋場（一〇・三〇）――頂上（一一・四〇――一二・〇〇）――小屋場（一二・二五――一・四五）――歸着（二・三〇）

三、二一、晴　志賀山へ

出發（八・五五）――鉢山（一〇・二〇）――向志賀山（一一・四五――一・四五）――歸着（二・五〇）

三、二二、晴　横手山へ

出發（九・一五）――草津峠（一〇・一〇）――横手山（〇・〇五――一・三五）――覗キ（一・五〇――二・一〇）

（僕はボーゲンが

——歸着(二一・二五)

三、二三、晴　　近所に遊ぶ

三、二四、吹雪　　滯在

最近熊野湯の經營者が變つて、以前より餘程居心地が良くなつた。豫科の人達が來るやうな話だつたので、心待ちにしてゐた所遂に誰も來ない。熊野湯もこの頃は雪質も案外良いし、上手な人がゐないので、吾々もあまり見劣りがしないで濟んだ。二十四日は猛烈な吹雪で氣溫も低く、また冬らしい氣分を味ふ事も出來た。

三、二五、晴後曇　　熊野湯(八・三〇)——草津峠(九・五〇)——赤石山手前晝食(一二・〇〇——〇・三〇)——發哺(四・五〇)

小屋峯(三・〇五——三・二五)——發哺(四・五〇)

雪の狀態が惡いのと、寺小屋から直接發哺へ下らず、東館、高天ケ原を經由したので、非常に時間を要して、二人ともすつかりへバつてしまつた。

三、二六、晴　　燒額山へ

出發(一〇・四五)——燒額山(〇・五五——一・〇〇)——高天ケ原(一一・四〇)　西館山で遊んで歸つた。

三、二七、雪　　滯在

三、二八、曇一時晴　　岩菅山へ

出發（八・〇〇）——寺小屋ノ峯（一〇・〇〇）——寺小屋、岩菅の最低鞍部（一二・〇〇——一二・五〇）——寺小屋ノ峯（四・〇五——四・一五）——歸着（五・〇〇）

三、二九、晴　歸京

岩菅山では寺小屋から先が條件に惠まれたので甚だ樂であつて、頂上で眺望があまり利かなかつたのは甚だ殘念であつた。

往きには十二澤からあつた雪が、歸りには、沓打茶屋で既に消えて、それからはスキーを擔いだ。朝は快晴であつたのに、途中で天候が變つて來た所も良いが、雪の消えた上林、澁あたりもなか〳〵に捨て難い趣がある。（增　山）

三方ケ峰から新鹿澤へ

吹原不二雄　他一名

五、二一、晴　小諸（五・四五）——天池（七・〇〇）——一ノ城戸平（九・三〇）——二ノ城戸平（九・五〇）——三方ケ峯（一一・四〇）——同鞍部（一一・五〇——一・〇〇）——地藏峠（二・〇〇）——新鹿澤（四・〇〇）

五、二二、雨　新鹿澤（八・五五）——古永井（九・二〇）——鳥居峠（一〇・〇〇）——澁澤（一〇・三五）——眞田

（〇・〇五）

第一日は朝のうち天氣好過ぎて、アルプス方面は霞んでゐた。三方ケ峯と籠ノ登山との間の凹原は氣持のよい處だつた。殘雪が日蔭にかなり見られた。小池の緣で心ゆくばかりに伸びた。新鹿澤の溫泉は稍ぬるくて、沸かし

て居つた。

第二日は雨だつたが、新緑の野山の氣分が充分味へた。

東京附近及富士山方面

昭和五年

茅倉尾根

七、二七　御岳驛（七・四五）——本社（九・三〇）——御嶽登山口（八・〇〇）——奥の院（一〇・二五）——大岳神社（一〇）

打橋壽郎　外一名

昭和六年

大岳山から馬頭刈へ

五、一、晴　御岳驛（九・〇〇）——御岳神社（一〇・四〇——一一・〇〇）——奥ノ院（一一・一五）——馬頭刈山（三・〇〇）——軍道（三・四〇）——五日市（五・〇九）

吹原不二雄　他三名

二〇——一・

日歸りのゆつたりした山歩きには適當なコースである。殊に大岳山から馬頭刈山までは廣々とした草原の尾根を

漫歩し、或は岩壁の下をへツつたり、或は又疏林を抜けたりして、變化あり、尚且つ眺望は至極廣濶なり。

大丹波川より川苔山へ

五、三　御岳驛（八・一八）——大丹波部落（九・三〇）——曲ケ谷入口（一〇・一五）——日向澤入口の分岐點（一一・三〇）——獅子口岩（一二・〇〇）——川苔山（一二・〇〇——一・〇〇）——棚澤（四・〇〇）

打橋壽郎　他一名

御前山、月夜見山

五、三一　御岳驛（七・四五）——氷川（八・二〇）——大澤入口（九・〇〇）——東京市造林小屋（九・四〇）——大澤峠（一〇・五〇）——御前山（一一・四五）——小河内峠（藤原から熱海へ越す）（一一・〇五）——月夜見山（一二・〇〇）——小河内峠（二・一〇）——多摩河畔（三・〇〇——三・一五）——氷川（五・一〇）——御岳（五・五〇）

打橋壽郎　他一名

大嶽から馬頭刈へ

六、七、曇後晴　御岳驛——御岳神社——大岳山——馬頭刈山——軍道——五日市

浦松佐美太郎　松木謙三　高橋要二

磯野計藏　鈴木英雄　堀岡清　外一名

日曜の事とて全山まことに賑かであつた。大岳神社前の茶店に坐り込んで 動かぬと言つたU先輩、I氏持參の桃罐で遂に三角點へ釣上げられる。茅倉尾根では晝下りの陽に照りつけられて一同汗を出し切つてしまつた。

高畑鞍岳

六、二八、晴　鳥澤（九・五〇）――アナシ峠――高畑鞍岳（三・〇〇）――鳥澤（六・〇〇）

久保田禮治　外一名

丹澤山塊

八、二四、晴　根小屋（六・〇〇）――鳥屋（六・四〇）――燒山（一〇・〇〇）――スベリ瀧小屋（五・四〇）

八、二五、小雨　小屋（六・〇〇）――蛭ケ岳（八・二〇）――九・〇〇）――三境――蛭ケ岳――燒山（五・一〇）――鳥屋（八・四〇）

久保田禮治　外三名

蛭ケ岳頂上に鳥屋村で小屋を作つたが水がないのが缺點である。原小屋澤のは水も燃料も豐富で、しかも大きいんで、丹澤山塊中第一のいい小屋だ。まだ報告されないと思ふが四國産のケサンカクヅルが早戸川源流滑り瀧にあるのは珍らしい。序に早戸川ではヂクオレシダ、ウテフラン、ヒメサジランを産する。又此の山塊にはトゲキクアザミ（久内先生に御たづねした）やエゾスズラン（小生鑑定）がある。此の山塊は四國と共通の植物の多いことは注目すべきで、オホモミヂガサ、テバコモミヂガサ其他種々あある。（以上二種以外の植物名のすべては牧野博士の鑑定による）

三國山から醍醐丸まで

吹原不二雄　外一名

九、二四、薄曇　上野原（七・五五）——上岩（九・三〇）——生藤山（一一・三五——〇・四五）——峠（三・四五——四・一〇）——和田（四・四〇）——上野原（七・二〇）

上岩から三國山道といふ標杭に導かれて右に上り、尾根に取りつくと後はいゝ道なり。三角点に上る徑は見出せず、その東峯に踏跡を辿つて上る。稍〻高く眺望あり。道は國境尾根の北側を暫く行きて檜原村に下る。踏跡を尋ねて連行山、茅丸の上を行けば徑はついて居るが兩側から茅薄、それにアザミやバラさては種々の雜木が丈より高く生ひ茂りて通行仲々容易ならず、從つて殆ど眺望なし。醍醐丸更に高岩山までの如き狀態は醍醐丸更に高岩山まで續く。到底お薦めし難き尾根なり。和田から澤井村へと靜かな山村を歩みて落合まで來れば與瀬驛まで八千米、上標す、後者を取れば細徑は小丘の畔中にて紛糾す。ぐつと丘上を西北に辿りて上野原町に出たちて燈火點々と眼下に散在し居りたり。時は既に夕闇の帳落

大岳山より馬頭刈山へ

高見要　外二名

九、二〇、晴　御岳驛（九・〇〇）——奥ノ院（一一・一〇——一一・三〇）——大岳山——馬

四・一〇）——軍道——五日市驛（六・〇〇）

三頭山

打橋壽郎

一〇、二九、晴　五日市（一〇・二〇）——時坂（〇・一〇）——敷馬（三・二〇）

一〇、三〇、晴　敷馬（六・〇〇）——小河内峠——三頭山（七・四五）——敷馬（八・四〇）

高見　要　外一名

大丹波川より川苔山へ

八、三〇、晴　御岳驛（八・一八）——大丹波部落（九・〇〇）——権次入澤——曲ヶ谷——踊平（一一・〇〇）——川苔山（一一・三五——一二・〇〇）——峰——棚澤（三・四〇）

大正橋迄はバスで行く。ひどく暑い日で、眞夏の陽光に灼かれながら、しかも風の通らないこの谷歩きには全く閉口した。

高見　要　外三名

大丹波川より川苔山へ

一一、八、晴　御岳驛（九・一〇）——大丹波（九・五五）——権次入澤（一〇・四五）——曲ヶ谷——踊平（一一・四〇）——川苔山（一二・〇〇——三・一〇）——峰（四・三〇）——権次入澤（一〇・四五）——御岳驛（六・四〇）

曲ヶ谷あたりの紅葉の美しさと云ひ、頂上の展望と云ひ申し分なかつた。獅子口岩からは一條の細路あり、直に右岸の尾根に急登してゐる。途中二度岐れるが最初は右をとり、次は左をとつて行くと狼新道の一寸手前の尾根に出る。踊平をまはるよりは時間も早く眺望もよい。

加藤安吉

川苔谷から大丹波川へ

一一、二二、曇　氷川（九・〇〇）――聖瀧（〇・二〇）――〇・五〇）――川
〇――四・一〇）――燧石（五・〇〇）
此の日完全に霧の爲に山容は隠れ踏跡や細徑の多岐に惱され終ひに燧石の下に露營。
一一、二三、晴後小雨　燧石（七・〇〇）――東京府造林事務所――ブナ山（九・二五）――獅子口（一〇・〇〇）――
一一・〇〇）――大丹波（一・五〇）――川井（二二・一五）――御岳驛（三二・〇五）
燧石から離岩の傍の東京府造林事務所へ至り東に向つて涸澤より登る日向澤の歌から西南々に走る尾根へ出て踊平を經てブナ山に至る此處で川苔山の全容を見る。川井部落を經る時分から小雨がぽつ〳〵降り出した。

丹澤山塊

十合健二　高見要　外二名

一一、二三、晴　橋本驛（七・四〇）――自動車――川苔山西端（三二・三
一一・三五）――燒山よりの尾根（一・一五）――鳥屋（八・四〇）――畫食（一・一五――
――四・〇五）――炭燒小舍（四・二〇）――井戸澤　水場（二二・一〇）――柏山峠（一〇・四〇）――笠置澤　入口（三二・三〇
鳥屋からは餘程注意しないと錯綜する炭燒路に誘ひ込まれてしまふ。村を出はづれ、平坦な杉林を抜けたら直ぐ左に急登する路をとるべきだ。僕達は之を見逃したので、柏山峠に出るまでずい分無駄をした。柏山峠と云ふのは、六三三・四米三角點の南で、此處からは頗る朗らかな路だ。

ヒメツギの高原が終つて明瞭な路が痩せ尾根を降つて行く所で、もうこの邊と原小舎澤の小舎を探したが判らず、丁度暖かさうな炭燒小舎があつたので泊つてしまつた。但し水は一滴も得られず、此の澤は笠置澤であつた。

一一、二三、曇雨　小舎（七・三〇）――笠置澤入口（八・〇〇）――蛭ケ岳（九・四五）――一〇・〇〇）――前鞍部、昼食（一一・一〇）――塔ケ岳（一・三五）――二・〇〇）――一本松（三・一〇）――（三・五〇）――五・〇〇）――澁澤澤（五・五〇）

丹澤山手前の鞍部には左側に「水あり」の立札がある。丹澤山頂には茅葺の小舎がある。

園山德三郎　鈴木英雄　丸茂平造　十合健二

富士山

一二、一九、晴　富士吉田（三・四〇――八・〇〇）――〇・五四）――四合目（一一・一〇）――五合目（一一・五〇）――馬返し（自動車）（八・四〇）――三合目（一〇・〇〇――一

五合目の小舎の持主池谷佐十の家で炬燵にあたつて八時まで休んだ。こゝの親爺は五合目まで一處に行くので、荷物も少し位なら持つて行つて呉れる。雪は三合目位から僅かにある。五合目小舎附近は五寸程の積雪だつた。それが表面ガチガチに凍つてゐた。

一二、二〇、晴　五合目小舎（九・〇〇）――小御嶽神社（一〇・四〇――一二・〇〇）――五合目小舎（〇・四〇）

今日は園山が來るといふので頂上へ行くのは止めて、小御嶽神社へ遊びに行く。天氣がよく非常に暖かな日だつた。社殿の屋根の雪もポト〳〵と溶けてゐた。神社の裏から見る南アルプスの山々も美しかつた。小舍に歸つてゐると間も無く園山が重いリュックを背負つて、一人雪の道を登つてきた。

一二、二一、晴　五合目小舍（五・一五）——七合五勺小舍（八・〇〇——一〇・二〇）——小舍（一〇・三〇）

三時起床、小屋の前へ出てみると、空には冷たく星がきらめいてゐる。風も殆ど無い。十合は昨夜から急に氣分が惡いといふので、結局三人で出掛ける。六合目の小舍を過ぎてから夏道を離れ、眞直ぐに頂上に續く雪渓を登つたが、雪がカチ〳〵に凍り、アイゼンの齒も立たないので、再び夏道に返つた。此の頃から風が烈しくなつたので七合五勺の小舍に入り、風の靜まるのを待つたが仲々おさまらないので結局降つてしまつた。

一二、二二、曇後雪　小舍（一〇・三〇）——馬返し（一二・〇〇——一二・三〇）——吉田（四・〇〇）

昭和七年

富士山

四、一二一　吉田——五合目小屋

四、一二三、曇　六合目へ往復

四、一二四、晴強風　七合目へ往復

堀岡清宮川雄二郎　伊藤文平　林俊介　他一名

四、二五　五合目——吉田——歸京

六合目から七合目に掛けては、夏スキーを樂むに絶好であつた。強風の爲頂上へ登れなかつた。

麻生山、權現山

昭和五年

瑞牆山

高見　要　外二名

四、二七、晴　猿橋驛（二一・四五）——駒宮への分岐點（四・四〇）——麻生澤入口（五・二〇）——麻生山三角點（九・三〇）——權現山三角點（一一・〇〇）——一一・四五）——扇山西側一一〇〇米（二一・四〇——二三・二〇）——鳥澤驛（五・〇〇）

楢原尾根第一ピークの手前にあると聞いて行つた水場が見つけられなかつたので水不足で苦勞した。扇山を南に二〇分程降つた所で谷川に添ふた時は實に嬉しかつた。天候は申し分なく富士は終日の友であつたし、權現山頂からは南アルプスも見えた。

秩父方面

澤井久五郎　他二名

一〇、二三　韮崎――八巻（二一・三〇）――黒森（五・一五）

一〇、二四　黒森（九・〇〇）――瑞牆山（一二・〇〇）

一〇、二五　増富（八・〇〇）――木賊峠（一一・〇〇）――黒平（〇・三〇）――甲府（六・〇〇）

昭和六年

大菩薩嶺、笠取山、雁坂峠、栃本

松木謙三（柳澤峠まで）　園山徳三郎

五、二四、快晴　鹽山（四・一七）――番屋（四・五〇）――上日川峠（八・二〇）――大菩薩嶺（一三〇）――丸川峠（〇・三〇）――柳澤峠（三・一〇―三・四〇）――落合（五・〇〇）

五、二五、快晴　落合（七・三〇）――高橋（八・〇〇）――上段林道に合す（一一・〇〇）――笠取小屋（一二・〇〇）

――バラトヤ　林道破壊の爲、引返す――笠取小屋（七・三〇）

五、二六、曇　滯在

五、二七、晴　笠取小屋（七・三〇）――古禮山（九・四〇）――雁坂峠（一〇・〇〇―一一・二〇）――栃本（八・二〇）――落合（一一・〇〇）――白久（一・二〇）

五、二八、曇雨

風邪の爲に十文字越その他の計畫を抛棄した。古禮山や雁坂山の北斜面には意外に殘雪が多かつた。バラトヤ林

道は釣橋の小屋の少し上の所で棧道が見事に落ちてゐて通れなかつた。

八ケ岳、美しケ原方面

昭和五年　　手塚晴雄

美しヶ原

五、二五、晴　下諏訪(五・三〇―六・一〇)―和田峠(一一・三〇―三・〇〇)―東餅屋(三・一〇)

下諏訪附近東俣川には、中川さんの知己の人が主人なる東俣御料林の官舎がある事を中川さんからかねて聞いて居たので、此處でなつかしき曾遊の霧ケ峰へ寝轉びに行こうかと思ふたが、一寸氣が憶したので其儘和田峠へ、山中の今は殆んど人氣なく淋しいが、然し此方に取つては反つて呑氣な道を登る。其れでも此の道は自動車が下諏訪、丸子間を峠を越して日に二往復位はして居るらしい。和田峠の凹所は風が強く薄ら日と共に寒くて居られないので、峠から東へ鷲ケ峰の方の草叢の中で空を眺めて居た。……何時の間にか寝入つたと見え、時計は三時を示して居る。呑氣に峠を下りて行くと約十町東餅屋に營林署の小舍があつて巡視が家族して住んで居たので、泊めて貰ふ事にした。

五、二六、晴　東餅屋(六・一〇)―三峰山(七・四五)―扉峠(九・〇五―九・三〇)―茶臼山(一一・〇〇)

——美しケ原（一一・二〇——一・四〇）——武石峰（二一・五五）——三角原（五・二〇）——鹿教湯（六・二〇）

東餅屋から西に澤を遡つて尾根に出ると、先づ凄い眺望に驚かされる。立科山のなつかしき富士山の嶺と裾野を東に、八ケ岳、霧ケ峰、富士が續いて居り、駒ケ岳、白峰、仙丈の南アルプス、木曾駒、御岳から西は乗鞍から起つて北アルプス全部が白雪をつけた屏風の如く眼前に朝日を浴びて輝いて居る。一點の雲なき青空、五月の朝の冷氣は身に滲みて寒い。武石峠からアルプスの眺望は凄いものだとは聞いて居たが、是程とは思はなかつた。

美しケ原は夢見るが如き美しさを具へた高原である。高原の美しさは優美な所にある、柔らかさにある。高山のエネルギイシュな壓迫を感ずるとは反對に高原の中にある時は、心の落付きと平安を感ずる。人間として高山より遙に自然に親む事が出來るのも高原であり、人類に取つて最も健康な地は高原である事は最近の科學が教へて居る。

一里にも餘る美しケ原の軟かい芝生、散在する白樺の疎林、悠久な青き空、空をかぎる地平線、夢の様に霞む立科、白く光る北アルプス、是程又大地に親しみを感じた事はない。芝生に横になり五月の陽光を思ふ存分浴びた。未だ五月とて牛の放し飼ひはなく、人氣なき高原の靜けさ、唯風にゆらぐ草のざわめきがあるのみ……。

五、二七、曇　鹿教湯滯在

五、二八、曇　鹿教湯（一〇・〇〇）——別所溫泉（一・〇〇）——上田——長野

昭和六年

八ケ岳

堀岡清　宮川雄二郎

九、二〇　小淵澤（六・五〇）――鐵塔（七・四〇）――編笠と三ツ頭との鞍部――權現岳（二二・四五）――赤岳（一〇・〇〇）――硫黄岳（一・一〇）――赤岳石室（一〇・三五――一一・一五）――避難小屋（三・五五）

九、二一　小屋（八・三〇）――夏澤峠――本澤溫泉（二一・四〇）

――二一・〇〇）――本澤溫泉――海尻――小海

九、二二　本澤溫泉――海尻――小海

氣も心も澄む秋晴れの山旅で、實に素晴しかつた。水のないのには然し、苦しんだ。二十一日に赤岳の小屋で地震に逢ひとても驚いた。

昭和六年

小谷溫泉、笹ケ峰牧場、妙高山行

妙高山火打山方面

吹原不二雄

一一、一、快晴　神城驛――四家（一一・〇〇――一〇・〇五）――下リ瀨（〇・五五）――小谷溫泉（四・一五）

一一、二、快晴

小谷溫泉（七・四五）——乙見山峠（一〇・二〇——一〇・三五）——笹ケ峰牧場岡長小舎（〇・五〇）

一一、三、快晴

岡長小舎（七・三〇）——黒澤を渡る（八・二〇）——黒澤岳南尾根（九・四〇）——高谷池畔（一一・五〇）——笹平（一一・五〇——一〇・三五）——黒澤池畔（一一・三〇——一一・五〇）——廊岳分岐點（〇・二五——三・一五——三・三〇）——天狗堂茶屋跡（四・一七）——燕溫泉（五・五〇）——關山驛（八・〇〇）

妙高山頂（三・一五——三・三〇）——天狗堂茶屋跡（四・一七）——燕溫泉（五・五〇）——關山驛（八・〇〇）

本項に就ては紀文中の「北信三日の山旅」を參照せられたし。

北アルプス

村尾金二　近藤恒雄　丸茂平造　太田又一

穗高涸澤岩小屋

昭和五年

六、八、晴　松本（七・〇四——八・三〇）——中ノ湯（一一・二〇）——小梨平幕營地（二一・五〇）

六、九、晴　小梨平（七・五〇）——德澤（九・三〇——九・四〇）——橫尾谷入口晝食（一一・〇五——一一・三〇）——橫尾谷を渡る（〇・二〇——〇・三五）——涸澤岩小屋（三・四〇）

六、一〇、晴　岩小屋（七・〇〇）――涸澤と北穂の鞍部（九・〇〇）――一一・五〇）――岩小屋（一・〇〇――二一・〇〇）――横尾谷を渡る（三・〇〇――三・一五）――徳澤（五・一〇――五・二〇）――小梨平幕營地（七・一五）

六、一一、晴　小梨平――中ノ湯――松本

岳川の雪は丸西のおやぢにいはせると七月の雪の量――それ程雪は少ない。が、併し涸澤の谷は本谷との出合あたりまで埋まつてゐた。岩小屋は最近誰も來た氣配がない。上高地や牧場で慶應の人が入つてゐるときいて懸念してゐたのだが、幸中の不幸か岩小屋の雪をかき出すのに寒くて骨が折れた。

翌る日は、朝から、夜中から雲一片も見當らぬ素晴しく晴れ渡つた日。こんな日は珍らしいだらう。

この頃は墜石が多いらしい。奥穂邊でその物凄い響を度々耳にした。（又一）

烏帽子槍縱走

田中秀三郎　十合健二　宮川雄二郎

七、五　田中葛宿泊、十合、宮川飯田町發

七、六　田中　宮川、十合葛宿泊

七、七、晴　葛（六・五〇）――濁小屋（八・五五――〇・三〇）――烏帽子小屋（七・〇〇）

七、八、晴　烏帽子岳往復　小屋（七・二五）――野口五郎・三岳鞍部（九・一五）――野口五郎岳（一一・〇〇――一一・三〇）――東澤乘越（一一・〇〇）

疲勞の爲東澤にて露營、夜中雨降り寢袋にボツ〳〵と音がして心細い。

七、九、曇後雨　出發（七・〇〇）——赤岳（七・五五——八・一〇）——赤岳野營地（八・一〇——九・二〇）

七、一〇、一一、雨　滯在

七、一二、雨　小屋（七・〇五）——双六小屋（八・四五——九・二五）——樅澤岳（一〇・〇〇）——肩ノ小屋（一・一五）

朝雨が止んで居た爲、危い天氣ではあつたが待ちきれなくなつて出發、霧深し。双六小屋についた頃にはひどい雨と風になつた。

七、一三　大槍往復　小屋（七・四〇）——赤澤岩小屋附近（九・二〇——一〇・〇〇）——一ノ俣（一・一八）——横尾出合（一〇・五五——一一・四五）——吉城屋（二・〇〇——二・四〇）——五千尺（三・一〇）　（田中）

涸澤岩小舍生活

園山德三郎　小川竹夫

七、五、曇後雨　松本（七・三〇）——中ノ湯（一一・二五——一一・四〇）——上高地（一・二〇——九・〇〇）——驚出發の時の晴天も松本で汽車を降りると間もなく怪しい空模樣に變つた。物凄い雨で自動車が澤渡、中ノ湯で大分ぐづつく。

午後から大骨を折りながらベースキャムプを小梨平に張る。

七、六、雨　滞在

七、七、晴　キャムプ（八・三〇）――牧場小舎附近晝食（一一・一五―一一・五〇）――横尾谷入口（一・四〇）―

―横尾岩小舎（二一・一〇）――屏風岩側への橋（三・四〇―四・〇〇）――池ノ平（五・二〇）―

四五）

目茶目茶にへばつた。荷が重過ぎたのだ。岩小舎には今田勝を連れた東京農大生三名、京都醫大生石戸君の五人が占領して居られた。窮屈さは我慢して貰つて入れて戴く事にする。

七、八、晴夕刻より曇　岩小舎（〇・三〇）――穂高小舎（一一・三五―一・五五）――奥穂高頂上（二一・三〇―二一・五〇）――穂高小舎（三・二〇）――岩小舎（六・一五）

農大の連中早朝、北尾根に出掛ける。小川のみ石戸君と共に重太郎の許に發つ。園山靜養。重太郎からスピリットを若干仕入れた。京都の連中は上高地を見に行つた。俺ものこ〳〵出掛けて奥穂へ登つた。上高地は見えなかつたが笠の眺とジヤンダルムの怪は充分味へた。穂高小舎からの歸途約百五十米の處で「いやつ」と云ふ程轉倒した。面の皮を少々すりむいたり、腰骨を痛めたりしたのは直ぐ恢復したが、磁石と地圖と、大事な帽子は此時何處かへ飛ばした切り戻つて來なかつた。ルツクサツクの中のスピリツトは不思議に壞さなかつたのを園山と苦笑し合つ

七、九——七、一二、雨　滯在

七、一三、晴强風　岩小舍（一〇・四五）——第六峰第五峯鞍部（一一・四五）——第五峰（一二・〇〇）——第四峰（一・一五——一・四五）——第四峰第三峰鞍部（〇・四〇——〇・五五）——第三峰（二・四〇）——前穗高三角點（三・〇五——四・一〇）——岩小舍（六・〇〇）

（一・五五——二・二〇）——第五峰第四峰鞍部員續々現はる。素晴しい天氣だし風も餘程穩かになつたので、斷然北尾根に行く事にする。

猛烈な風、各學校の山岳部員續々現はる。素晴しい天氣だし風も餘程穩かになつたので、斷然北尾根に行く事にする。

岩小舍から第六、第五のザツテル迄は型通り奥穗、前穗の裾を大迂回して容易に到着。此の日風强きも絶好のクレツテライ日和。槍も此處で初めて拜んだ。此處から第五峰には問題はない、ひねくれた倭生植物などを越えて行くと間もなく第五峰。八日に農大生が由勝と登つて以來、すつかり雨に叩かれたので這松の青味が素的だ。じめじめした土地からは蕨などを採つてルツクに收めたりした。第五と第四のザツテル迄も完全に容易、第四へは體をくねらして、丁寧に登ればオーバーハングの處も難なし。第四の上で頗る拙い晝食を取つた。大急造の然かも大量の、然かも又鍋飯と來て居るのでなか〳〵喉を通らなかつた。第三峰は相當凄そうだ。「あれは一寸ごつい」なんて石戸君が獨りごちでゐた。岩燕が蚊の樣に飛んでゐる。

第三への登り、痛いものに障る樣にしてチムニーの所を通り澗澤側を一寸へづり容易に第三峰に達した。第二、前穗頂上と結局オーネザイルで濟ました。歸りは縱走路を奥穗の方へ行き鞍部と覺しき處から岩場と笹を過ぎて岩小

舎へ歸つた。途中雪渓でウロ〳〵してゐた時、江口さん一行が縦走路を穂高小舎の方へ進まれたそうだ。

七、一四、晴　岩小舎（一〇・四〇）――横尾岩小舎（一二・〇八）――上高地ベースキャンプ（三・四五）

此の日、早朝小川の眠れる間に園山穂高小舎に登つて來た。浦松さんや吉澤さんにお目にかゝつて來たのが羨しかつた。俺達が此處へ來た時と今日とでは、夥しい雪渓の變化、大小のテントが一度に增した事（初めは一つもなかつた）が感慨にたえなかつた。（小川）

上高地天幕生活日誌

七、五、雨時々曇

午後一時、小川、園山着。晴間を見て大テントを小梨平に張る。惡戰苦闘す。氣溫相當に低し、自動車は澤渡附近折返運轉。

七、六、雨時々曇時々薄日さす。午後より雨止む。

陰慘なる天候なり。二名滯在。

七、七、晴、早朝寒冷、風無し。

午前八時半、小川、園山涸澤へ向ふ。

上高地は未だテント甚だ少く、東日、日醫、農大、駒大その他二三あるのみ。（以上園山）

七、一〇、雨

午後三時半、奥野、吉澤、浦松三氏着、清水屋泊。

午後六時五十分、丸茂、大友着、丸西泊

七、一一、朝雨、午後より次第に霽れ、夜は星を見る。

午前十時頃雨の霽れ間に學校のテントに入る。正午頃江口氏、浦松氏一行テントを訪ねて來る。午後大友、丸茂二人清水屋に江口氏を訪ふ。（丸茂）

七、一二、曇一時雨、雲低し。

久保田他二名着、溫泉ホテル泊。

丸茂、大友澗澤へ出發。（大友）

七、一三、晴

田中、十合、宮川槍より下る。三時着。五千尺泊。

七、一四、曇

田中、十合、宮川焼に行く。（以上田中）

午後三時、澤井常念より來る。

午後五時、小川、園山、丸茂歸着。

今晩より十合、宮川天幕泊り。テント宿泊者六名。久保田歸る。

七、一五、晴

午前六時半、小川歸京、飛ぶが如し。

午前八時半より丸茂、十合岳川より前穗へ行く。（別項參照）

午前九時より宮川、澤井霞澤へ行く。

午後二時、鈴木、小橋、打橋槍より來る。

午後七時、關、安達穗高より來る。

七、一六、晴、無風暑し。

午前六時半、安達、打橋歸京　（以上園山）

午後六時、燕槍の增山他大勢着、清水屋泊。

夜は園山、關、鈴木、丸茂、增山清水屋の浦松氏を訪問、歡談す。（增山）

七、一七、晴、無風、暑し。

田中、澤井涸澤へ出發。

午前十一時、丸茂、鈴木歸京。

午後零時半、大友、十合、小橋、宮川歸京。

浦松先輩と園山と關と三人で霞澤左俣を上り三本槍に登つて來る。（別項參照）

七、一八、晴

昨夜八時過、浦松さんが來られて、增山一行の前穗行が未だ歸らぬから迎ひに行くとの事。早速僕（園山）は丸西で食事し、人夫を連れてこられた浦松さんと一氣に岳川を遡る。で、テントにゐる關にはそれを告げる暇もなかつた。住友の一行が怪しい人夫をつれて下りて來た。ラテルネを貸してくれと云ふ。一蹴して登る。また譯の判らない京大阪の一行に逢ふ。次いで一杯水の手前で五千尺の人夫（早大生を迎ひに行つた）に逢ふ。上には誰も居さうにもないと言ふ。尚ほ登り岳川河原を横切り、雪渓近く遂に無事なる彼等に逢ふ。慈大の野村、吉田兩君共に在る。除行して下る。一行甚だ元氣で力強い。

清水屋に着いたのは今朝二時、食事入浴して眠る。

僕は浦松さんの部屋に一泊。（園山）（別項參照）

天幕移轉。上高地文化の中心小梨平の喧騒を捨てて、靜な落付いた玄文澤に移つたのである。

燕槍班の增山、大栗、中島の四人が清水屋を引上てテントに入る。

大友が先日涸澤で足に微傷を負つた事が、都の新聞に出たとか、高瀬から「看護賴む」旨電報が來た。但しそれは當人がその足で元氣に歩いて歸つてから後の事。

七、一九、雨後曇

今日は明神行の筈の處、雨のため中止。一日ブラ〳〵してしまつた。

田中、澤井涸澤から歸つて來る。

この日大友の父上、心配のあまりわざ〳〵上高地まで來られた。當人の歸つた後で眞にお氣の毒であつた。

七、二〇、雨、午後霽る。

豫科の若い人達、稍々ホームシツクの氣味で歸京。

午後五千尺新館の二階に關東學生登山聯盟の懇親會あり、園山、田中、增山出席す。

夕刻、槍から中島、磯野、横倉、芋川、太田到着。靜かになつた天幕の中がまたとても賑かになつた。

七、二一、晴小雨

浦松氏、中島、磯野、横倉、芋川、園山、太田、增山の大勢で明神の三本槍に行く。（別項參照）

澤井歸京。

七、二二、晴小雨

好い天氣なのに、昨日の疲れか誰も山に行かうとはしない。

堀岡來る。

七、二三、晴後雨

朝は天氣が良かつたので、霞澤岳に出掛ける。一行横倉、磯野、中島、園山、芋川、太田、增山、堀岡。一時間

ばかり登つた頃から雨になつたので、二三人づゝ岩蔭に
れた。
浦松氏又白谷に入る。
七、二四、曇小雨　今日も悪い天氣。
待つてゐた松木先輩は夕刻、東京の御馳走を一杯つめた新しいキスリングを背負つて來られた。來る筈の高瀬はオナカを悪くして來らず。
井嘉七氏も來られる。
七、二五、曇小雨
今日は皆で涸澤入の筈の處雨のため中止した。お晝頃には晴れたけれど、流石にそれから出掛る氣もせず、松木氏、酒井氏、磯野、中島、横倉、太田、増山、堀岡は明神池に遊びに行く。
七、二六、曇
好くない天氣だが、一寸晴れさうでもあつたので、みんな耐らなくなつて涸澤に行く。一行松木氏、酒井氏、磯野、中島、横倉、芋川、園山、田中、太田、堀岡。人夫一名。（別項參照）
後に殘された増山、晝頃獨り淋しく上高地を引上る。
（以上増山）
七、二九
横倉、芋川涸澤より下りてテントに泊る。途中浦松さんに遭ひ牧場で牛乳を御馳走になつた。

テントの中はよく片付いてゐたが白米以外に食料が何もないので手が付かない。明日は一番の自動車だから丸西の穂高餅で朝食の代りだ。（芋川）

八、五、晴

涸澤にゐた中島、磯野、太田、堀岡の四人。奥穂、西穂を經てまたしても上高地に舞ひ下る。寢て來たので清水屋の食堂の上の合宿所？に泊る。

八、六

四人歸京。長かつた、一月以上にわたつた上高地の天幕もこの日やつと疊まれて、清水屋にまた來る夏まで預けられた。涸澤へ行つて長い間天幕を明けてゐたので雙眼鏡を盜まれた。留守にする方も惡いのかも知れないが上高地も隨分開けたものだと思ふ。だがこんな開け方は困る。誰だかが泣くだらう。（編　者）

針の木、藥師行

七、六、曇時々小雨　大町（八・四〇）——大出（一〇・〇五——一〇・三〇）——瀧小舍（一・三〇——三・〇〇）——扇澤出合幕營（四・三〇）

關守三郎　鈴木英雄　安達泰三
小橋謙三　打橋壽郎

七、七、晴後曇　出發（六・四〇）——大澤小舍（八・二〇）——針木峠（一一・四五——一・二〇）——南澤（四・五〇）

——籠渡場（七・一五）

七、八、晴　出發（九・一五）——刈安峠（一一・一五——〇・〇五）——五色原幕營（三・〇〇）

七、九、曇後雨　出發（九・〇〇）——越中澤岳（一一・〇〇——一一・三〇）——數河頭（二一・一五）——小舍（三・三〇）

七、一〇、一一、風雨　滯在

七、一二、曇後雨　出發（五・四〇）——間山（六・四〇）——薬師岳（八・五〇）——上岳小舍（一一・一五——〇・四五）——黑部五郎岳（四・二〇）——五郎平小舍（六・一〇）

七、一三、快晴　五郎平小舍（後三・〇〇）——蓮華平（四・五〇）——槍肩小舍（三・三〇）

七、一四、晴後霧　出發（八・四〇）——双六池（一〇・四〇）——肩小舍——一俣——上高地（鈴木、小橋、打橋）　關、安達は穗高縱走（別項參照）

七、一五、晴　

七月六日　烏帽子入の宮川、十合兩君と大出で別れる時に一寸顏をのぞかせた太陽も、間も無く引込んで、畠山小舍を過ぎる頃にはパラ〳〵降つて來た。四時半、扇澤の丸木橋を渡つた處で幕營。夜には思ひ設けぬ大焚火を享樂した。

七日　大澤小舍を過ぎ、雪渓にかゝる邊に、早大生遭難紀念碑の案内標が建てゝあつたが、梵字を刻んだ天然石と言ふのは見落してしまつた。昨日からの重い荷に惱されつゝ峠を踏んだのは、正午に近い頃だつた。空は氣持よ

く晴れて眺望は申分ない。精々三四回で濟むと思つた針の木谷の徒渉にはすつかり當が外れ、入梅直後の雪溶けの爲もあつたらうが、殆ど兩岸を縫つて歩いた位。膝を沒する様な個處も少くなかつた。七時に、一年振りで黒部の流れを耳にし、釣橋の手前に岩魚釣の堀立小舍を見つけて此宵の宿とした。

八日　今日はどうせ五色泊りだとばかりに朝から落着き、出發は九時を過ぎてしまふ。刈安峠までの草いきれと背中に照りつける太陽は恰然蒸風呂の感があつた。峠から見た後立山の、紫に霞んだ姿には一同感嘆の聲を放つ。三時過ぎに五色原の東端にたどり着き、道に分れて鳶の麓に天幕を張る。

九日　五色小舍よりの道によらず、直接鳶の頂めがけて登る。空は何となく霞んではゐるが展望は相不變良い。越中澤岳から數河頭までは少からざる小突起の起伏にかなりへばつた。この時分から沸き出した霧は小舍に着く少し前から雨となつた。宗作をつれた慶應の人が先着して居り小舍も丁度今日開いた所であつた。

十二日　一面の霧たが幸に雨は止んでゐる。二日の滯在にあき〳〵した一行は出かける事に決定し五時四十分出發。時々霧の晴間から、遙か下方に黒部の上廊下が見える外は眺望全然無く、時々見舞ふ雨にずぶ濡れとなつて九時に藥師の頂上に着く。正午少し前に上岳小舍に着き、空腹を滿し着換をして、やうやくホツトした。小舍は雨漏りひどく床板も大部分はがされ、去年來た時に比べて、かなり荒された事が判る。上岳附近では相不變の不明瞭な積石に迷はされ、黒部五郎の登りでは寒さと饑にすつかりへばつた。見透のきかぬ爲にカールへ降る個處が判らず、止むを得ず東に尾根を傳ふ。こゝ暫くは巨岩を這松が埋めた相當な惡路で、途中夕立に會ひ、一同濡れ鼠とな

つて、六時十分、五郎平の小舎にもぐりこんだ。

十三日　久し振りの晴天、九時頃關は黒部五郎へ、小生は五郎澤を黒部との合流點まで降つて見る。午後蓮華平に居を移し澤で下り一時間上り一時間半を要した。今日は一日伸びる積りだつたが米の缺乏せる爲、午後蓮華平に居を移した。小舎のすぐ上手に幕營し岩魚や罐詰等を買つて久しぶりに豪遊な晩餐をした。

十四日　朝方少し雨が降つたので、躊躇し、出發は九時に近かつた。ルツクサツクもやうやく輕くなつたので道は捗る。西鎌に取ついてから時々雨に見舞はれたが、眞黒な密雲の中に現れた峙然たる小槍の尖塔は忘れ難い印象であつた。（鈴木）

高瀬川溯行、槍ケ岳（小槍、北鎌尾根）

七、一四、晴午後驟雨度々　大町（一〇・一〇）——大出（一一・四〇—一〇・三〇）——葛温泉（三・三五）

七、一五、晴　葛（六・四五）——不動瀧（九・〇〇）——濁小屋（九・一五—一〇・二〇）——東澤乘越分岐點（一〇・五〇）——第五發電所（西澤と高瀬川との出合より數丁上流、高瀬川の右岸に在り。）（一一・〇〇—一一・三〇）——燕岳登山口（三・四五——四・一五）——湯俣水俣出合（四・四五）野營

中島嘉一郎　横倉吟三郎　磯野計藏　太田又一

芋川稔一　人夫、菅澤久一（有明）

七、一六、晴　湯俣水俣出合（七・一五）――中東澤出合（七・五八）――天上澤の上と澤との間の地點（一〇・四〇――一二・〇〇）――天上澤乘越（五・一五――五・四五）――大槍小屋（七・四五）野營

七、一七、晴夕方より曇る　テント場（一一・一〇）――大槍肩（〇・三〇――一・〇五）――小槍ザツテル（一・二〇――三・五〇）――大槍肩（四・〇〇――六・一〇）――テント場（六・四五）

七、一八、晴午後時々霧　テント場（一〇・〇〇）――肩（一一・一三――一一・三〇）――大槍頂上（一一・四五――〇・二五）――北鎌尾根（いくら行つても同じ様につまらぬので、いゝ加減の所で引き返す）（〇・五五――二・〇〇）――大槍頂上（二・三〇――三・三五）――肩（三・五〇）――テント場（四・四〇）

七、一九、雨午後時々雲切れる　滯在、小屋に逃込む

七、二〇、雨午後晴　大槍小屋（九・三〇）――一ノ俣小屋（一一・三〇――一二・〇〇）――牧場（一・三〇――二・一〇）――玄文澤テント

（一）　濁小屋より天上澤乘越に至る道路に就て

濁小屋の前を走る道は、濁澤と次の同じく左岸の澤との中間で右岸に移る。又此處にダムあり。」以後湯俣水俣の出合迄道は終始高瀨川の右岸を通る。途中地圖上、傳兵衞ノ小屋記入の地點に第四發電所あり。次に西澤と高瀨川の出合より數丁上流に第五發電所あり。此の所には大なる貯水池あり、其の他數々の發電所の社宅を見る。湯俣水

俣出合附近にては、團惠谷出合の少しく下流に貯水池あり、又、湯俣水俣出合にはダムありて、第五發電所への取入れをなす。

この地點まで發電所のトロツコのレール敷かれ在る程なれば道平坦にして平易なるものなり。

猶、天上澤への道に就て記せば小屋の裏より水俣川を釣橋によりて左岸に渡る。この出合より下流數丁川に別れて水俣を右岸に渡る。この附近より 道は漸く急となる左岸を走る。これ高瀬川溯行中の最後の橋にして、以後道は左岸を走り、の字との中間にて再び左岸に渡る。これ高瀬川溯行中の最後の橋にして、以後道は左岸を走り、の中間附近よりは河原に出で、主として積石を辿る。二〇〇米突附近の最後の天上澤の出合迄左で、河原の石コロ道は晴やかにして、遠く高くアルプス銀座通りの豆人を眺め評するも面白し。

最後の五百米突桙の上りは後半雪渓にして、最後の乘越の直下は可成り急なり。此の處には左りてそこに蛇行路ありてそこに草附きの地あり。これを登る方遙に樂也。

（二） 北鎌尾根に就て

これと、小槍とは我等の期待し來れるものなりしが意外に平凡なりしを以つて失望せり。いゝ据ゑ意味なき山話の何時かを過して引返せり。（芋川）

前穗高岳

丸茂平造　十合健二

七、一五、晴　ベースキャンプ（八・〇〇）——一枚岩下（一二・〇〇——〇・四〇）——前穂高岳（三・〇〇——三・三〇）——一枚岩下（四・三〇）——上高地キャンプ（六・三〇）

穂高縦走

關　守三郎　安達泰三

七、一五、晴　槍肩小舎（五・〇〇）——大喰岳（五・二〇）——中岳（五・四五）——南岳（六・四〇）——涸澤岳（一〇・三〇）——北穂高岳（八・四五）——穂高小舎（一〇・五五——一一・二〇）——奥穂高岳（〇・〇五）——前穂高岳（二一・〇〇）——上高地（六・〇〇）

常念岳

澤井久五郎

七、一三　松本——豐科——常念小舎

七、一四　小舎——一俣谷——上高地

燕槍縦走、前穂高岳

増山清太郎　伊藤文平　賀井善智　中島正彦　他三名

七、一四、晴　有明驛（九・一〇）——有明溫泉（九・四〇）——中房溫泉（二一・四五）

七、一五、晴　中房（五・五〇）——燕山荘（燕岳往復）（九・四〇——一一・二五）——大天井岳（三・〇〇——三・三

〇)——西岳小屋(六・一〇)

七、一六、晴　西岳(六・三〇)——天上澤乘越(七・一〇)——槍ケ岳(一〇・〇五)——一ノ俣(二四五)——上高地(五・五〇)

七、一七、晴　上高地(六・五〇)——前穗高(二一・一〇)——上高地(翌午前二時)

恐ろしく元氣な人達ばかり集つたので、十六日に一ノ俣に泊り、十七日に燒に行く豫定を變更した上に、ぼや〳〵して道を知らない人夫に引づられたためである。月もない暗闇の中を、大勢であの道を下るのだから、すつかり時間を費して、一上高地から迎ひに來られた浦松、園山兩氏に會つた。負傷者を收容する用意までして、上高地から夜道を走つて來て下さつたのには何とも御禮の言葉もなかつた。

霞澤岳三本槍(左俣より)　浦松佐美太郎　園山德三郎　關　守三郎

七、一七、快晴　清水屋前(八・〇〇)——二俣(九・〇〇)——綱を使ふ(一〇・〇〇)——三本槍(一〇・一五——一〇)——一〇——一三・〇)——上りに綱を用ひた所でアプザイレンで下る練習をする(一・五〇)——二俣(二・一〇——三・二〇)——清水屋(三・五〇)

但しこの記錄は、餘り正確でない。と言ふのは德本をこえる時、當時の記錄の紙片を紛失して終つたのだ。雪は

二俣の前にホンの申譯的に一片殘つてゐた丈。岩はがつちりしてゐて面白い。一所肩をかす所、その他に一所一寸骨の折れる所があつた。左手を上る。三本槍と間違へさうな岩峯が、上つて行く途中に、二三チラついて誘惑する。結局ザラ場的の所を通つて三本槍の一番左端へ出る。アツ氣ない樣でもあるが穗高の全面的展開は樂むべし。雷雲に恐慌して下つた。三本槍からすぐ下の、清水屋前から望遠鏡で見える凹みを下つた。人が行かぬからバラしてゐる。心配に反して、天氣は平氣だ。出合では、上高地プロパーの雜踏から、完全に遊離されて、閑靜な夏山の眞晝時を、心地よき午睡を貪りつゝ過した。（關）

明神岳

七、二一、晴時々雨

浦松佐美太郎　中島嘉一郎　磯野計藏　横倉吟三郎
芋川稔一　園山德三郎　太田又一　增山清太郎

——三本槍の第一ピーク（三・〇〇）——ギヤップ（三・三五——四・一〇）——前穗の登路に合す（五・〇〇）
——河童橋（八・一五）——岳川林道二番目のゴツを登る（九・二五）——明神の尾根（二一・〇〇）
——河童橋（九・一〇）

唐澤生活

松木謙三　橫倉吟三郎　磯野計藏　芋川稔一
太田又一　田中秀三郎　堀岡　清
園山德三郎

七、二六、晴後雨　上高地玄文澤キャンプ（八・三〇）——横尾入口（一二・〇〇——〇・三五）——（一・四〇）——唐澤岩小屋下幕營（四・三〇）

七、二七、曇　午後驟雨

（A）前穂高岳、松木、芋川、太田、堀岡、中島　天幕（一〇・一五）——第五峯（〇・三〇——一・〇〇）——第四峯（一・四五——二・〇〇）——第二峯（三・〇〇）——前穂高岳頂上（三・一五——三・五〇）——天幕（六・一〇）

（B）奥穂高岳、横倉、磯野　天幕（一〇・〇〇）——奥穂高岳ジャンダルム往復——天幕（四・〇〇）

七、二八、霧深し、夕立、北穂高岳、唐澤岳登攀、天幕（九・〇〇）——北穂、唐澤岳鞍部（一〇・一五——一〇・三五）——北穂高岳（一一・〇〇——一一・一五）——北穂、唐澤岳鞍部（一一・四〇——一二・〇〇）——横尾谷の橋（一一・三〇——〇・四〇）——穂高小屋（〇・五〇——一・三〇）——天幕（三・一〇）　松木、園山　上高地へ下山　天幕（後四・一〇）——牧場（六・三〇——七・三〇）——上高地清水屋（九・一〇）

七、二九、快晴　休養

横倉、芋川、田中　上高地へ下山　天幕（一〇・〇〇）——上高地商大キャンプ（三・三〇）

七、三〇、濃霧、夜に入りて暴風雨　滞在

七、三一、雨

七月下旬は天候が全く定まらず、これだけ動いたのがやつとだつた。水は岩小屋より三十間程上の岩間から得た。殘雪は非常に少なくて穗高小屋や北穗も唐澤のカールの底の外は、雪の上を行く必要がない程だつた。前穗の北尾根の第六、五峯の鞍部へも唐澤の天幕に居たのは磯野、太田、堀岡、中島の四名である。園山は此の行の計畫者であつたが、身體の工合が惡くなつて、天幕の留守番ばかりして、早く歸つたのは殘念だつた。

北尾根の下からの縱走は非常に樂で、前穗には直接のぼつた方がよかつたと後で感じた。北尾根をやりたければ是非上からやると良い。

北尾根の呼方は前穗の頂上を第一峯として順次下に降るにしたがつて二、三……とする一般に行はれて居るものをとつた。狸岩のあるのが第六峯になる譯だ。第三峯の頂上は平になつてすぐに第二峯にくつゝいて居るから、二峯と三峯を區別するのは無理の樣に思はれるが、岩小屋附近から見るとちやんと別れて見える。

北尾根の記錄時間は非常に長くかゝつた樣だが、人數の多かつた爲だらう。普通これより一時間は少くてすむら

（中島）

奥又四郎谷より前穂高北尾根へ
穂高小舎より西穂高、上高地へ

中島嘉一郎　磯野計藏　堀岡　清　太田又一

八、四、晴時々霧　徳澤牧場（六・一〇）——梓川渡渉——奥又四郎谷落合（六・五五）——瀧下（九・四五——一〇・一五）——瀧上（一一・三〇——一一・五〇）——第五峯（一・三〇）——前穂頂上（三・三〇——四）——奥穂頂上（五・一〇）——穂高小屋（五・三八）

八、五、晴　穂高小屋（六・三〇）——奥穂頂上（七・〇〇——七・一五）——ヂャンダルム（八・〇〇——八・三〇）——西のキレット（九・四五——一〇・二〇）——天狗岩（一〇・四〇）——疊岩のあるピーク（一一・四〇——一一・五五）——西穂高頂上（一・一五——一・四五）——縦走路と合す（三・五五）——清水屋（五・三〇）

（第一日）

三十一日に涸澤から退却して來てから昨日まで雨の退屈な日を過して來た。昨日は山には霧がかゝつてゐたけれど下界は久し振りで太陽をみることが出來た。上高地に閉じこめられたらしい槍へ行く登山客で朝から牧場はにぎはつて居た、明日こそは奥又四郎へ行ける。

思つたとほり——それは當然かも知れない——朝から素晴しいい〻天氣、朝の光に前穂が美しく映えてゐる。奥又四郎から前穂へ直接にのぼる彦さんを連れた浦松さんと一緒に出かける。

梓川は牧場の出口の近くまで行つて三股に分れてゐるところを渡る。數日來の雨で増水してゐた梓川も昨日一日の天氣で豫想したほどのこともなく容易に渡渉が出來た。奥又四郎の白い石のごろごろ澤のせばまるところ、そこに大きな瀧がある。僕達は瀧と小襞尾根を境に平行した急傾斜の澤をのぼる。これをのぼりきると瀧の上へ出る。こゝで偶然にも岩小屋ともなるべき岩を發見した。位置は瀧の上部左側。こゝが岩小屋として使へたら奥又四郎の研究にはもつてこいであらう。

浦松さんと別れて、右手の草付きの傾斜を一寸した岳樺のブツシュをぬけるとハクサンイチゲやミヤマキンバイなどの群落してゐる緩傾斜、こゝから第六峯の狸岩がみえだした。右手は第五、第六の鞍部から澤。第五第六の鞍部に出る心算が出られさうもないので直接ものすごい這松と岳樺のブツシュの中の體操をやつて第五峯へ出る。こゝからは前穂と奥穂を經て穂高小屋へ。

（第二日）

今日は西穂から上高地へ下る日、昨日にましての素晴しい天氣。奥穂の頂上からは能登が見える、南がみえる。西穂まではほとんど尾根通しに行つて頂上の一つ先きの鞍部から岳川へ下る。この下りは全精力を消耗させられる程いやなものだ。縦走路へ出たときはほつとした。（又一）

鹿島鎗岳

磯野計藏　人夫、中山彦一

一〇、一八、晴　大町（一〇・五〇）——瀧ノ小屋（二・三〇）——畠山小屋（七・三〇）——扇澤出合（八・三〇）——口元小澤出合（九・三〇）——奥小澤出合（一〇・〇〇）——種池小屋（二・二五）

一〇、二〇、雨　滯在

一〇、二一、曇後晴　小屋（六・三〇）——大冷澤下口（七・三〇——七・四五）——鹿島鎗岳頂上（九・一五）——大冷澤下口（一〇・三五）——北俣西俣出合（〇・二五——一・三〇）——小冷澤出合（二・〇五）——鹿島（三・〇〇）——大町（五・四五）

十二月の鹿島鎗の下檢分に行つて來ました。籠川の谷は紅に燃え上つて綺麗でした。枯れた薄が細くふるえる中に夕の明星を眺めながらカサ〳〵と行く道は馬鹿に淋しかつた。扇澤の登口は別に道は無い様だ。左岸をいゝ加減に行けば間違はない。所々石に墨汁で道知べが書いてある。「道なり」等は愉快だ。さう斷はらなければ、とてもさうとは思はれない様な道だ。地圖で云ふと丁度澤の水のしるしが消えてなくなるあたりで澤は二分する。左の澤へ入つて瀧にぶつかる所で右手の尾根へ上れば道がある。それからは種池迄、地圖でも分かる様な急斜面に一直線に切開が出來て居る。何んとも恐ろしい道だ。無鐵砲道とでも稱す可きか。この谷は一體に上は比較的なだらかであるが下が惡い。上から見るとほとんど垂直に下の河原に落込んで居る様に見える。冬、これを荷を持つて登らうとすれば雪崩の事も考へねばならず、相當困難と云へやう。種池の小屋は小じんまりして居て眺望が實によい。十

人は泊れやう。劔の偉觀は既に定評のある所、爺から鹿島鎗の線を針葉樹の頭越しに望む景觀も見事である。又足下の籠川の谷が霧の中から夢の様にその錦繡を浮び出させる夕暮の眺、さては針の木の新しい小舍の屋根がピカピカ光る背後に雪をおいた黒岳の見えるのも捨難い眺であると云へやう。小屋から鹿島鎗への尾根は思つたより廣く、むしろ雪になやまされる怖の充分ある事を豫想した。時間は記錄の如く非常に早かつた。小屋から二時間四十五分は天候險惡で頂上では雪さへ降つて居たので早かつたとしても、尙、大冷澤下り口迄は荷を持つて居たのであるから、冬期に於てもこの一日往復は大して困難ではないと思つた。（その時の雪質により一概に云へないのは勿論であるが）途中に天幕を張る場所も風のあたらない様な所がいくらでもある。大冷澤は豫期に反して案外樂な谷で驚いた、傾斜の具合も下へ行く程ゆるく又瀧もなく、少く共下りはこの道を採る方が有利と思はれた。上りも雪質と雪庇の如何によつては扇澤より容易ではないかと思はれる。大冷澤と小冷澤との出合からすこし下つた所から對岸へ渡り黒澤を登つて簗場へ出る道は容易であるらしい。距離も一里半ばかりだし登りも百米程だ。然し鹿島の谷も歩いて決して損はない。殊に春や秋は。丁度昔の輕井澤の様な所だ。小熊山のすそをめぐる小熊原の道も仲々氣持のいゝものである。丁度その眞中にある林檎園の青い林檎の酸味の様な、冷々とした荒涼さがみなぎつて居る。勿論それが夏では論外である。

初冬の上高地

吹原不二雄

一一、一、晴後濃霧　島々（八・〇〇）――中ノ湯（九・三五）――中尾峠（一一・五〇）――溫泉（四・一〇）

一一、二、雨後曇　滞在

一一、三、曇小雪後雪　溫泉（六・三〇）――岳川谷一枚岩稍々下（九・三〇――一〇・〇〇）――大正池――上高地溫泉（一一・三〇――一・〇〇）――中ノ湯（二・三〇）――溫泉（〇・一五）

第一日は溫泉までは頗る天氣よく、大正池畔から穗高連峰が新雪化粧して見る目まばゆし。六百山及霞澤岳も同様。燒岳に上り出したが上るにつれ天候惡化、硬くなつた積雪二尺位の雪渓を岩壁間近まで登つて行つたが斷念望皆無なりき。

第二日は午後になり雨止むも泣きさうな天氣、明神池附近とそれから岳川のガレの邊をぶらつく。

第三日は期待してゐた獨りとぼ〳〵歸つて行つた時は寂寞が心を占領してゐた。

鹿島鎗岳

一二、二四、晴後雪風強し　松本（七・〇六）――安曇追分（八・〇〇――三・〇〇）――大町（四・三〇）

磯野計藏　中森長太郎　鈴木英雄　安達泰三
人夫（有明）、中山彦一　高橋益司　近藤一雄　堀岡清

二二、二五、曇　大町（九・三〇）――野口（一一・〇〇――一一・一〇）
――畠山小屋（六・一〇）――瀧小屋（三・〇〇）――白澤（五・五〇）――
二二、二六、曇後晴　小屋（一一・一〇）――扇澤出合（一一・〇〇）――本谷出合
屋乗越下（三・二〇――三・三〇）――扇澤出合（四・一〇）――本谷出合（三・四五）――扇澤出合
二二、二七、晴後曇　小屋（六・四〇）――扇澤出合（七・三〇――八・〇〇）――奥ノ澤（八・三〇）――
（九・二五――一〇・三〇）――棒小屋乗越下（一一・二〇――一一・四〇）――爺小屋（二一・一五）
二二、二八、晴後曇雪風強く溫度降る　小屋（九・二〇）――祖母岳（一〇・一〇）――小屋
二二、二九、晴後吹雪　滞在
二二、三〇、吹雪　滞在
二二、三一、曇後晴　滞在
一、一、晴後吹雪暖し　小屋（五・五五）――祖母岳（六・二五）――祖父岳（七・〇〇）――磯野遭難（八・一〇）――
――上つて來る（八・四〇――九・二〇）――冷池（一〇・〇〇）――
上（一一・四五――一二・〇〇）――スキーデポ（一・〇〇）――
一、二、吹雪後霽　小屋（一二・〇〇）――畠山小屋（四・三五）――爺小屋（四・三五）
一、三、昨夜から夜明にかけ暴風雪後晴　滞在

一、四、晴　小屋（四・〇〇）――扇澤出合（五・〇〇）――本谷出合（六・〇〇）――棒小屋乘越下（七・一五）――乘越と種池の間の尾根上（九・一五）――爺小屋（九・三五）――一一・四〇）――棒小屋乘越下（一一・五五）――畠山小屋（一一・三五）

一、五、雨後曇　小屋（一・三〇）――大町（七・三〇）――松本

一、六、雪　追分――安曇追分

詳細は紀文中の「冬の鹿島鎗岳」を參照せられたし。

昭和六年

涸澤及上高地生活

園山徳三郎

七、三、晴　島々（八・〇〇）――上高地丸西（〇・三〇）

七、四、雨　滯在

七、五、晴　河童橋（七・四五）――涸澤岩小舍（三・四五）

涸澤の殘雪量豐富。この日京醫大の石戸氏外一名、甲南出身の田口氏外一名と協同し人夫一名同伴の上、スコップで岩小舍を堀り出させた。小舍の屋根の岩面とその前の五六坪の岩地が露出してゐた丈けだつた。

七、六・七・八　雨　滞在
七、九、雨　岩小舎――横尾岩小舎
七、一〇、雨　横尾――徳澤牧場
七、一一、雨　滞在
七、一二、雨　牧場――上高地丸西
七、一三、雨　滞在、高瀬、太田の二君來る。
七、一四、雨　玄文澤にテントを張つて移る。
七、一五、曇
七、一六、晴　滞在
七、一七、晴　霞澤左俣へ。
七、一八・一九、雨　滞在
七、二〇、雨　玄文澤（一一・〇〇）――中尾峠――中尾（一三・一〇）――蒲田溫泉（四・〇〇）
小橋君遭難の事を知る。
七、二一、雨　後曇　蒲田（六・五〇）――栃尾――猪谷驛（〇・一〇――一・〇〇）――富山――宇奈月溫泉（五・三〇）泊

高瀬進三　太田又一　増山清太郎
山案内、中山彦一

七、四、雨　松本——大町——四ツ谷
七、五、曇後晴　四ツ谷（六・五〇）——二股（七・一〇）——猿倉（九・四五）——白馬尻（一〇・三〇）——小雪渓（三・〇五）——雛山小屋（五・二五）
日沒頃に頂上へ遊びに行つて、御來迎を拜む。
七、六、雨　小屋（七・〇〇）——鑓ケ岳（九・〇〇）——天狗平ノ頭（九・五〇）——奥不歸手前鞍部（一一・〇〇——一一・五〇）——八方小屋（三・二五）
七、七、雨天　滯在
七、七・七・八・九・一〇、雨
七、一一、雨　小屋發（七・三〇）——八方池（八・三五）——細野（一一・四〇）——空峠（〇・三〇——一一・三〇）——猿倉（一一・四五）——松本
例年になく雪の多いのを喜んだ（中山は大正十年以來だといふ）のも束の間、八方の小屋に四日も降りこめられて、食料は底を見せるし、氣分は腐るし、五龍以南はまたの日に讓る事にした。（増山）

笠・藥師縱走立山へ

高見要　十合健二　大友亮藏
人夫、大倉辨次（笠岳まで）

七、七、晴　松本――中の湯――細池――安房峠――平湯――栃尾
七、八、雨　栃尾（九・〇〇）――鐵索の上――笠谷岩小舎（一一・一〇）
七、九・一〇、雨　滞在
七、一一、曇後雨　岩小舎（六・三五）――本谷（七・一〇）――岩小舎
七、一二、曇後雨　笠小屋（六・三五）――抜戸岳（七・四〇）――弓折――双六池（一一・〇〇――〇・二〇）――笠小屋（一一・一五）
華小屋（三・一五）
七、一三、雨　滞在
七、一四、雨　蓮華小屋（七・一〇）――五郎小屋（八・五五――九・三五）――中の俣岳（一・〇〇）――赤城岳――上ノ岳（三・三〇）――上ノ岳小屋（三・五〇）
七、一五、雨後曇　滞在
七、一六、曇　上岳小屋（七・〇〇）――薬師岳（九・五五――一〇・五〇）――数河乗越小屋（一・五五）
七、一七、晴　数河乗越小屋（六・三〇）――数河の頭――越中澤岳（九・〇〇――九・二五）――奥大嵩（一〇・五〇――一一・五五）

自動車を中の湯で下りた我々は、上高地を眼前に見ながら直にそれとはあらぬ方向の急傾斜のブッシュの中を登り初めた。途中廻り道して細沼へ出て見た。安房峠を下りたら青い毛氈を敷いた様な原つぱへ出た。もう平湯が目

の下に見えてる。急にいゝ氣持になつて晝寢をして終つた。お蔭で平湯では船津行の自動車に乗りおくれ車のテールを恨めしく路上の彼方に見送つた。高い山が兩側から迫つた谷間に沿ふて、道が坦々と青空の彼方にどこ迄も續いてる。鄙には稀なる此處栃尾の立派な橋の上で、これは栃尾又山の野性の權化の樣な人夫大倉に遭つた。その夜は栃尾の谷村友次郎方に泊る。

昨日の快晴も何處へやら例の雨に、防水の上着を引つかけて出かける。谷は相當增水して此處では濁流と化してる。急な三百米程のインラインの石を登ると鐵索の上に出た。後は谷を右下に見た山邊りのトロ道についてどん〳〵行けばいゝんだ。岩小屋は二十人程の伐採の人夫が居るのが二つある。

翌日は滯在。雨の霽れ間を見て人夫は伐採に出來けたがすぐ又びしよ濡れになつて歸る。本谷の橋が流されたの事。

三日目に霧の中を出發。初めは尾根道を辿りそれからも可成りの所迄伐採の人夫が通る道らしいものがある。それが終ると谷の兩側の此處の歩き易い所を上る。その中に谷が細くなつて石もごろ〳〵露出してゐる。そろ石を傳つて成る可く淺い所を選んで歩く。岩小屋から少し行くとやがて谷は二つに分れ、左の方を辿る。その谷も左曲する所からもずつと谷を行ける所迄上りつめた。上りながら、冬この谷をスキーで下る壯快さを想像して見た。大きな長い石が二つ、ニヨツキリと出てる所を目がけて上る。共處が笠からの尾根だ。蒲田側には大きな雪庇が出てた。小屋へ着くと戸建築者大倉は、床に吹き込んで溜つてる水を恨めしさう一枚紛失してる。この小屋の

に見てゐた。

明ければ空は青空。槍から穂高へのあの忘れ難い尾根も見えた。弓折に下る所は凄い雪渓だ。双六小屋は荒れて終つて、小屋の中には大きな雪の塊が轉り込んでた。この頃からは實に鷲羽も見えぬ程の雨となつて終つた。

蓮華の小屋に滯在した一日中は兎の肉を食つては蒲團の中にもぐり込んでた。

蓮華から尾根へ出る迄の道は殆んど一面の雪渓でそれに霧が深いんで分り難くかつた。若し天氣が良ければ行く筈だつた蜘蛛の平がとてつもなく大きく、のさばつてゐた。五郎の小屋からは尾根には出ないで右に巻いて雪渓の谷を上る。黒部五郎の下のカールの所では細引を出して荷物と人間を別々に引つぱり上げるアルバイトをやつた。尾根は凄い雨風だ。上の岳の小屋は實に風當りのいい所だ。朝醒める頃は小屋ごと下の太郎兵衞平の方へ行つてるかも知れない。

薬師の頂上では霧に包まれて何の眺望もない。青い空の下に黒光りしてる針の木に續く峰々の黒い岩壁と薄綠色の曠漠たる彌陀原はとても印象的だつた。

次の日はずつと鹿島槍の雄大な尾根を眺めながら歩いた。茫漠として前面に擴つてる五色原と、その向ふにいきなり迫つてる立山連峰とが作り出す構成派の畫材の様な所をピツケルを確り握つて、じつと立山のピークを仰ぎながら歩く友の姿がとても非現實的な存在に思へた。この日、こゝで立山から劔へ向ふ十合と別れを惜しむ。彼は遠

く佐良峠迄見送つてくれ、何時までも峰の風に吹かれながら動かなかつた。
我々二人は何日か振りで里に出た。宿帳を見て數日前豫科の連中が此處に泊つたのを知り、彼等のやりそうな事共を色々と微笑しく想ひ浮べて見た。（大友）

白馬岳

七、八、豪雨　猿倉小屋滯在　　關守三郎　勝田一郎　外二名
七、九、豪雨　滯在
七、一〇、雨後霧　猿倉小屋（一〇・三〇）——ウシロ澤（一一・二五）——葱平（一・五〇）——二・三〇）——村營小屋
七、一一、雨　滯在、ゾンメルシーを樂む。
七、一二、雨　村營小舍（后〇・三〇）——白馬尻（二・〇〇）——猿倉小屋（三・〇〇——三・四〇）——二股（五・〇〇）——〇）——松本

立山、劍岳

七、一三、雨　千垣（八・三〇）——芦峅——藤橋（一〇・五〇——〇・一〇）——鬼ケ城——立山溫泉（七・五〇）

打橋壽郎　小橋謙三　宮川雄二郎　伊藤文平　賀井善智

七、一四、雨　七、一五、雨後曇　滯在

七、一六、雨　溫泉（一一・三〇）——室堂（五・三〇）

七、一七、雨　室堂（六・四五）——一ノ越——雄山（七・五五——八・二〇）——富士の折立（八・五〇——九・〇〇）——室堂（五・三〇）——眞砂澤——劒澤との出合（一一・二〇——〇・二五）——三の窓——北俣（三・〇〇——三・一五）——池ノ平（四・〇五）

七、一八、雨　池ノ平（七・三〇）——北仙人山（一一・一〇）——折尾谷源頭（小橋遭難）

地圖上立山圖幅の終る一分位手前、道が黒部側をからんでゐる所で、最後にゐた小橋が道を踏み外して墜落、頭部、足に重傷を負ふ。

應急手當を施して後、賀井は池ノ平に引返して佐伯軍一と共に毛布、食糧等を持つて來、打橋は鐘釣に急を報せんとしたが、折から鐘釣への下山者に會つたので救援を依頼し、また池ノ平へ向ふ早大山岳部の諸氏から天幕を借りて一同此處に露營す。

七、一九、雨　打橋、賀井、鐘釣に救援を求め、賀井は日電の人夫、山本忠次郎を伴つて現場に引返し、打橋は小屋ノ平に一泊、人夫の狩集めを行ふ。

この間に佐伯軍一は池ノ平に引上る。

遭難現場（五・〇〇）——鐘釣（八・五〇）——一・〇〇）——遭難現場（翌日未明）

七、二〇、雨　現場――鐘釣――宇奈月
賀井、打橋の連れて行つた人夫に小橋を背負はして下山。途中救援に來た小橋家族、太田等に會ふ。小橋は宇奈月療養院に入院。
七、二一、小雨　早朝豫科學生主事阿久津謙二氏の御見舞を受ける。午後、園山急を聞いて蒲田から馳付ける。阿久津氏は夜行で歸京さる。一同休養。
七、二二、曇　早朝安達來る。午後小橋を殘して一同歸京。
七、二七　小橋歸神。
十九日午後、小橋遭難の報知を受け、針葉樹會員及部員は夏期中の假本部近藤氏方に集合し、太田、増山は同夜直に現場に出發し、浦松氏、磯野氏、芋川、清水は翌日午後上野を立つ事とした。（實際には幸にして第二隊の出る必要はなくなつた。）
太田、増山は二十日午後一時三日市に到着、この時は既に遭難パーテイー、小橋家族、警察署、分に救援の手筈が整へられた後であつたが、救援隊は醫師を伴つて行かなかつたとの事なので、太に向ひ、増山は宇奈月の日電囑託藤田醫師に交渉し、増山は宇奈月に行き、巡査部長派出所に腰を据えて東京との連絡に當つたのである。

烏帽子槍縦走

鈴木英雄　吉澤松次郎　外五名

七、一九、小雨　松本——大町（一〇・二〇）——葛温泉（三・一五）

七、二〇、曇驟雨　葛（七・三〇）——濁（一〇・一〇——四〇）——烏帽子小舎（四・四〇）

七、二一、曇驟雨　小舎——烏帽子岩——小舎（九・〇〇）——野口五郎岳（〇・一〇）——赤岳（三・四〇）——黒部の渓を經て——三俣蓮華小舎（五・〇〇）

七、二二、曇時々晴　小舎（八・三〇）——双六池（一〇・四五——一一・五〇）——槍肩小舎（四・三〇）

七、二三、晴　三俣蓮華迄は、ほんの快い半日を槍で享樂し午後下山。肩（一一、〇〇）——上高地（六・〇〇）

雪渓に一變し、祖父岳を廻つて流れる黒部の源流も廣漠たるを驚羽だなどゝ言つてゐる人夫も居た。三俣から双六池に至る間は、處々に土が出てゐたと言ふ有様だつた。天氣には餘り恵れなかつたが、元氣な豫科の人達と共に愉快な山旅をすることが出來た。

十合健二

森茂牧場

七、一九、雨　立山溫泉——藤橋——千垣——富山——猪谷

七、二〇、小雨　猪谷（九・五〇）——土（一〇・三〇）——青木峠（一・五〇）——下ノ本（三・一〇——三・三〇）——

―森茂牧場（六・〇〇）

七、二一、小雨　牧場（七・五〇）――山唉峠（八・一〇）――山唉（八・五〇）――中山――船津（二一・二〇）――猪谷――富山

安房峠を越して飛驒に入つた時、飛驒の明るい、併しどこか鄙びた氣分に魅せられて、雨に祟られた山行の終りに牧場へとやつて來た。

牧場は森茂村より約半里程奥にある。が併し牧場と云つても唯牛馬を放し飼ひにする草原と、番人の居る建物とだけの至つて簡單なものである。番人も森茂村の人が唯一人居るだけで、途中森茂の一番奥の家で、其の人がどうか聞いて行きなさいと云はれた程だつた。勿論牧舎も無ければ、從つて新鮮な牛乳などあらう筈が無い。牧場に行くには、土から跡津川の左岸についたトロ道をたどつて下の本に出る方が、青木峠を越すよりも近いさうである。實際どこが峠の頂上か分らぬ青木峠と、それからの下ノ本へのだら〳〵道にはうんざりした。これに反して、牧柵のめぐらされた山唉峠は明るい草原の氣持のいゝ所だつた。

併し兎に角降り續く雨にすつかり期待を失つて殘念だつた。天氣がよければ、もつとのび〳〵と旅行出來たらう。

七、一四、雨　清水屋に泊つてゐた後立山からの高瀬、太田、涸澤からの園山、三人が玄文澤に小さなテントを張る。近所には横濱高工が張つてゐるばかり。毎日よく降る。七月三日以來、雨の降らないのは五日と七日の二日に過ぎない。

七、一五、曇時々驟雨　高瀬、太田は田代池へ散歩、園山はスケツチ。雨があがると虫が多くて困る。

七、一六、曇　高瀬、園山は霞澤左俣へ。雪が殘つてゐるし、長雨のせいもあり、水が流れて瀧になつてゐて岩も面白くない。アプザイレンする岩の手前から引返した。午前九時出發、午後二時半歸營。所が意外にも太田は此の間に家出して歸京してしまつた。それと氣の付いたのは午後五時。書置に曰く、去日の夢見が惡いからだつて。高瀬意氣銷沈、はたで見るのも氣の毒な位。

七、一七、晴　毎日寢て居たのが急に昨日體の肢を動かしたので變に疲れたといふ理由で、快晴の一日をサボる。午前中園山洗濯。午後高瀬・園山明神池へ散歩。

七、一八、雨　高瀬盛に鈴木班の到着を期待するも彼等遂に來らず。前穗北尾根四、五峰間から奥又白に落ちて死んだ中野君の遺骸が上高地に着いた。僕たちも眞劍に死に就て考へなければいけない。

七、一九、小雨　高瀬雀躍として歸京。園山孤闘を守る。

七、二〇、小雨　園山午前十時、蒲田へ出發。（以上園山）

七、二三、晴　久し振りに陽をうけた我烏帽子槍班は半日を頂に過して夕方上高地着。部の天幕が一張ポカン

としてゐる。清水屋が満員なので寢具のない連中五名は天幕と夜具を借りて來て側に張る。多少窮屈だが屋を考へりや此處は自分の家だ。コンパで夜の更くるのも知らなかつた。

七、二四、晴午後曇夕立　朝清水屋で商大生小黒部で遭難云々を耳にし色々尋ねたが、十九日の新聞で見たとのみ。五千尺や丸西でも要領を得ない。午後燒に登り夕立に見舞はれる。峠の小屋で着物を乾かし乍ら、親父の漫言には、一同我が意を得たりと言ふ貌。

七、二五、曇　大平早朝歸京。數日居殘る積りの吉澤、鈴木も、小黒部班の事が氣に懸るので、兎に角皆と共に下ることにし、後片附けに半日を潰す。十二人用天幕は未だ大丈夫、六人用だけ手入の爲持つて歸ることにする。附近に天幕は松商と外に一張。此の日暗雲低迷。思へば今夏の玄文澤は靜かだつた。（鈴木）

立山

高見要

七、一九、雨　室堂―弥陀原追分茶屋滯在。

七、二〇、曇　室堂（五・〇〇）―室堂（九・〇〇）茶屋（七・〇〇）

七、二一、晴後雨　室堂―雄山（六・〇〇―七・〇〇）―室堂―追分茶屋（一〇・二〇）

七、二二、雨　室堂―藤橋―千垣

室堂は連日の荒天でキャンプを破壊され眞砂澤あたりから引きあげて來る連中で一杯だつた。

廿一日は曉の晴間に雄山頂上に立つたが氣まぐれな天候は忽ち雨さへ齎したので、大町へ出るのは斷念した。然し途中、一の谷で增水の爲徒渉場を探すのに一時間も費したりしたので、追分茶屋に來た時にはもう先へ行く元氣もなくなつて終つた。此の夜小橋君遭難の噂を聞く。

弘法茶屋からは二三日前に完成したと云ふ新道を行つたが、出來たての路は雨にぬかつて靴を沒する仕末。藤橋から千垣に至る間も三ケ所程道がぬけてゐた。

尙今年の彌陀ケ原は非常に雪が多かつた由だが事實鏡石から上は殆んど雪田の連續であつた。

昭和七年

乘鞍嶽

鈴木英雄　丸茂平造　清水達雄　田中秀一
增山清太郎　堀岡清　山案內、中山彦一

一、三、晴　松本——大野川——番所原

一、四、雪　番所(九・三〇)——鈴蘭小屋(一一・〇〇——一二・〇〇)——冷泉小屋(三・一〇)——肩小屋(三・三〇——四・〇〇)——頂上(一・三五——二・〇〇)——奥ノ院

一、五、晴　小屋(一〇・一〇)——肩小屋(一一・四五——〇・四五)——冷泉小屋(四・五〇)

(二一・二一〇)

一、六、晴　肩の下でスキー享樂

一、七・八、雪
一、九、雪　冷泉小屋（六・三〇）――肩ノ小屋（八・一五――一〇・〇〇）――千町ケ原（一・四〇）――二三五七米三角點手前晝食（〇・一五――〇・五〇）――一八八五米三角點（四・三五）――小俣谷の橋（一〇・四五）――九藏（后三・三五）――上ゲ見（四・五五）――甲（五・三〇）
一、一〇、晴　九藏（午前〇・二〇）
一、一一、晴　甲（一一・三〇）――見座沼（〇・三〇）――美女峠（一・四五――二三・〇）――高山（四・一五）
一、一二、晴　高山――萩原――名古屋

詳細は雜記中の「乘鞍岳を越えて飛驒へ」を參照せられたし。

南アルプス

鳳　昭和五年
鳳凰山塊　丸茂平造他一名

七、二一、晴夕立あり　韮崎（七・二〇）——祖母石（八・二〇）——水力發電所（九・〇〇）——九・田（一〇・四〇）——一一・〇〇）——鳥居峠（一一・三〇——一一・五五）——青木湯（〇・四五——一・〇〇）——南精進瀧（二一・四五——三・〇〇）——北御室小舍（五・三〇）

發電所から鷹ノ田までのヂツクザツクの登り道は雨後と馬の歩く爲め泥濘でひどかつた。ドンドコ澤の登りも相當苦しむ。青木湯から、湯を引く竹の樋に沿つて澤の右岸を登ると踏跡のある道に出る。燕岩の下を過ぎて暫らく行くと道は濶葉樹林に入り急坂となる。南精進瀧は道から約百米程南にそれて美しく瀑下してゐる。北御室小舍は水は近くに流れて居るし、附近に樹木も多いので焚木には不自由しないが古いので雨漏がする。ドンドコ澤には石室とまでは云へないが雨露を凌ぐ程度の石の洞が澤山ある。

七、二二、曇後雨　小舍（六・二〇）——賽ノ磧（七・一〇——八・三〇）——地藏岳往復——高峰（一〇・〇〇——一〇・〇五）——賽ノ磧（一一・三〇——〇・一〇）——北御室小舍（〇・四五）

一日此附近を遊ぶ心意だつたが午頃から雨が降り出したので半日を小舍に過す。

七、二三、曇時々晴　小舍（五・四五）——賽ノ磧（六・五〇——七・〇〇）——觀音岳（七・五〇——九・五〇）——薬師岳（一〇・一五）——鷹ノ田（三・三五——四・〇五）——舊青木湯（一二・〇〇——一・三五——二・一〇）——青木湯（一・三五——二・一〇）——祖母石（五・四〇——六・〇〇）——韮崎

ガスの多い日だつた。時折ガスの晴れ間に北岳、駒岳の姿を僅かに見た程度だつた。天氣のよい日だつたら此の

附近をぶら〳〵歩くのも面白いだらう。藥師から辻山へ續く尾根と別れて東南に下る道がある。これを中道と云つてゐる。到るところに倒木があつてひどい道だ。舊青木湯から小武川に沿ふ道はよい。折居の村から祖母石に出る所、釜無川が氾濫して小さな橋が流れ、思はぬところで渡渉の苦しみを嘗めさせられた。

昭和六年　園山德三郎　外一名　人夫、森上金光

赤石岳

四、三、晴　伊那大島——大河原

四、四、晴　大河原（後二一・四〇）——小澁湯（六・三〇）

四、五、雨雪　小澁湯（後〇・三〇）——廣河原（三・五〇）

四、六、雪　滯在、積雪五寸

四、七、晴　舟窪までラッセルと偵察を行ふ

四、八、晴、霧强風　廣河原（六・〇〇）——舟窪（九・三〇）——大聖寺平（一〇・五〇）——赤石岳（〇・四〇）——一・二〇）——大聖寺平（二一・二〇）——廣河原（五・二五）

四、九、晴　滯在

四、一〇、晴　廣河原（七・一〇）——小澁湯（一〇・四〇）——大河原（三・一五）

詳細は紀文中の「春の赤石岳」を參照せられたし。

甲斐駒ケ岳、仙丈岳、白峯北岳行

丸茂平造　十合健二
人夫、牛田重義

六、一、曇　日野春（四・二一〇）——牧原（五・三〇——六・一五）——柳澤（六・三〇——八・〇〇）——駒ケ岳前宮
（八・五〇——九・一〇）——笹ノ平・晝食（一一・〇〇——一一・四五）——屏
風小舍（三・四五）

牧ノ原から柳澤迄自動車に乘つた。昨年の暮から開通したのだといふ。怪しげな雲が低迷して、危い天候を氣にしながら柳澤の村を出る。笹の平を過ぎる頃からチラホラ殘雪を見る。黑戸山の上りにかゝると樹間の殘雪多く歩き難い。

六、二、曇後晴　屏風小舍（七・〇〇）——七丈小舍（八・三五——九・〇〇）——駒ケ岳（〇・三〇——一・三〇）——小松峰（三・一〇——三・三〇）——仙水峠（四・二〇——四・三〇）——北澤小舍（五・四〇）

七丈小舍附近には雪は相當あつた。小舍は半分程雪に圍まれてゐた。午前中曇つてゐた空は駒ケ岳頂上に達する頃俄然晴れ渡つて眺望絶佳。雪を載いた仙丈、北岳は殊の外美しかつた。北澤スキーヒュッテに泊る。

六、三、晴　北澤小舍（六・三〇）——小仙丈岳よりの尾根（九・三五——九・五〇）——小仙丈岳（一〇・三〇——

一一・〇〇）——前仙丈岳（〇・一〇）——仙丈岳（〇・四〇——一・〇〇）——奥仙丈岳・畚食（一・四〇——二・〇〇）——晩星平（二・五〇）——荒倉山（三・四五）——兩股小舍（五・四〇）

北澤峠より來る澤より二つ目の澤（北澤小舍より正面に見える澤）に雪が相當あつたので、それを登る事にする。澤の入口は雪崩の爲め倒木多く歩き難かつたがすぐデブリに出る。小仙丈から來る尾根へ出る手前の雪面に新しい熊の足跡が斜に走つてゐるのを見て餘りよい氣持はしなかつた。仙丈には思つたより雪が多かつたので案外簡單に下れたが雪が少なかつたら倒木が多いので困難だと思ふ。

六、四、晴一時曇　小舍（七・一〇）——左股を上る——瀧（一〇・〇〇——一〇・二〇）——畚食（一一・〇〇——一一・四〇）——北岳と間ノ岳との鞍部（一一・二〇——一二・〇五）——北岳（三・〇五——三・一〇）——大樺御池小舍（四・五〇——六・一〇）

瀧下あたりから積雪多くなり、アイゼンをつける。左股を上つて瀧上から右の澤を北岳と間の岳との鞍部に登る。始め間ノ岳農鳥岳へ行く積りだつたが北岳小舍も間ノ岳小舍も焚木の事を心配して北岳から廣河原に下る事にした。始めから北岳だけ行く積りだつたら瀧下からすぐ左の澤を北岳の北側（小太郎山への尾根）の鞍部へ出た方がよかつた。北岳を登り切る頃から天氣が惡くなり始め地圖市之瀬の北岳の下三〇〇〇米突附近で一面の霧に卷かれ、竟に襲はれ、やがて雪に變り約一時間餘焚火をして待つたので大樺池ノ小舍に泊る事になつて了つた。大樺澤は雪

が多くて愉快だつた。

六、五、晴後夕立　小舎（七・一〇）――廣河原小舎（八・四〇）――一〇・〇〇）――白鳳峠（二一・〇〇）――（二一・三〇）――燕頭山へ別れる處（四・三五）――四・五〇）――燕頭山（六・二五）――御座石鑛泉（八・〇〇）

廣河原小舎で連れて行つた人夫が岩魚を釣つたりしたので、一時間半程休んだ。高峰の上では天氣よく駒から仙丈、白根三山、鹽見、赤石方面及び西駒、御嶽、乘鞍方面まで美しく眺められた。燕頭山を下る頃から夕立雲現はれ、大きな雨がポツ〳〵降つて來た。御座石鑛泉へ下る頃には日はとつぷり暮れ裸蠟燭を灯す。十合が暗闇に熊を見たのは傑作の一つ。

六、六、晴　御座石鑛泉（后二一・三〇）――白樺林（三・四〇）――小武川の岸へ下る（四・〇〇）――六・三〇）――自動車――韮崎――歸京　（丸茂）

大武川より尾白川へ

丸茂平造　鈴木英雄　間瀬　正　澤井久五郎　人夫、牛田重義

八、二一、曇　柳澤（七・〇〇）――二ノ澤（一〇・〇〇）――瀧（一一・〇〇）――赤薙瀧（一一・〇〇）――二一・三〇）――勘五郎横手（二一・四〇）――地獄谷出合（三・四〇）――四・〇〇）――大岩下石室

（五・一五）

八、二二、晴なれど霧の往來繁し　石室（七・三〇）——仙水峠（九・三〇——一〇・〇〇）——六方石（一二・〇〇）——摩利支天鞍部附近逍遙（〇・四〇——三・三〇）——地獄谷をへつる——鳥居上（四・三〇）——七丈小舍（五・〇〇）

八、二三、曇　頂上往復（四・〇〇——七・〇〇）——小舍（八・四〇）——五合目小舍（九・二〇——一〇・〇〇）——尾白川へ下る、最初の澤出合（一一・三〇——一二・〇〇）——噴水瀧（一・四〇——二・〇〇）——不動瀧（三・四〇——四・〇〇）——前宮（五・〇〇）——駒ケ岳鑛泉（七・〇〇）

前宮から鑛泉迄は大迂廻をした爲斯く時間を費したが、一時間位で達し得る。

一塊の大花崗岩を誇れる尾白の谷は所謂奇勝に富む。兩岸は惡く、下りは不動瀧附近迄は谷の底を縫ひ登山靴は不向き、草鞋かゴム足袋が良い。（鈴木）

木曾駒ケ岳

昭和六年

六月の木曾駒行

林俊介他一名　人夫（上松）、生駒兼次郎

六、一二、風雨

上松――一合目（里宮）――二合目（德原）――三合目（敬神瀧）――五合目（金懸山）――八合目

露營（道の南側にガレのある所）

柱ばかりの未完成の小屋の傍で露營、終夜煙と雨と風と寒さに苦しめられた。

六、一三、北ノ風、快晴　八合目――九合目（玉ケ岳）――頂上――中岳（玉ケ岳）――寶劍岳――中岳――頂上

――馬ノ脊――濃ケ池の上部――將棊頭山――伊那小屋

八合目と九合目の間は雪崩の爲、道が不通で木曾前岳の尾根を上下した。

この日は一日中、雪と岩と這松の上を歩いた。雪溪の上部に雪の切れ目もあり、又濃ケ池は雪でうづまつてゐた。

六、一四、晴　伊那小屋――行者岩の下――內の萱――伊那、夜行歸京

四合五勺の邊まで雪があつた。

木曾駒ケ岳に登つて雪の多かつた事、見晴の良い事に非常に驚いたが、小屋の多い事にも驚いた。まるで富士山の様だ。そしてどの小屋にも中に雪がいつぱいあつた。

昭和六年

四國

横倉山

七、二八、晴　佐川（一一・〇〇）——楠神（四・三〇）——杉原神社——安徳帝御陵傳說地（六・三〇）——楠神——佐川（九・〇〇）

四國、土佐、仁淀川に沿つた最高も千米を一寸出る程の低山ではあるが、稀に見る原始林の晝尙暗い山と、石灰岩の山で面白い所だ。

久保田禮治　外一名

スキー練習

昭和五年

冬期スキー合宿（野澤溫泉）

期間　十二月二十日——三十日

参加者　部員——芋川稔一　太田又一　丸茂平造　增山清太郎　清水達雄　十合健二　大友亮藏　間瀨正
小橋謙三　打橋壽郎　宮川雄二郎　伊藤文平　澤井久五郎　賀井善智
東光武三　內田直作　石黒四郎　保田康雄　奥野純次　平岡清　荒木辰五郎　庵地安彦
橋本榮一　安田義一　前田弘　落合一男　正木俊助　小柳二郎　山崎弘太郎
部員外——東

本年は例年になく陽氣は暖いし雪は少く、全期間を通じて野澤まで自動車が通つてゐるやうな有様であつた。スキーに面白くなかつた事は申す迄もない。

毛無山も前毛無から先はひどいブツシュで、とても登れたものではなかつた。

昭和六年

春期スキー合宿（野澤溫泉）

期間　三月十二日——十九日

参加者　堀岡清　安達泰三　宮川雄二郎　伊藤文平　澤井久五郎　中島正彦

冬期スキー合宿（野澤溫泉）

期間　十二月二十二日——三十日

参加者　部員——勝田一郎　高見要　十合健二　間瀬正　堀岡清　安達泰三　中鳥孚　打橋壽郎　宮川雄二郎

部員外——俵田三郎　宮内德彌　岡本眞澄　河島平一　清水勝利　北野繁二　山中陽一　小林輝雄

伊藤文平

石川堅一郎　他數名

今年も昨年に劣らぬ位雪は少く、氣溫は高い、スキーの爲には甚だよくなかつた。但し上ノ平いコンデイションの事が多かつた。上ノ平の手前に避難小屋の出來たのは都合が良い。初心者の進歩の早いのが特に目立つた。

昭和七年

堀岡　清　安達泰三　他三名

野澤菅平スキー行

三、一三――一八　野澤溫泉滯在

十一日の雨で雪ゆるみコンデイションは惡かつた。十三日の夕方よりザラメ雪となつた。毛無見た。

三、一八、野澤――木島――須坂（一・三〇）――仙仁――菅平（四・〇〇）

三、一九、菅平ホテル（九・〇〇）――猫岳（一〇・四五）――（一一・〇〇）――ホテル（一一・三五）

三、二〇、菅平――上野

山小屋

今から十年前だつた

震災が大正十二年、私の入學が其前の年だ。今の山岳部の發祥は從つて大正十一年といふ事になる。あの頃旅行部といふものがあつたのかどうかはハツキリ覺えて居ないけれど、徒歩部といふのが確かあつた様に思ふ。

一橋の室のあつた所に二階建の各部の部室があつた、その二階の端れの部屋こそわが山岳部の發祥地、オノコロジマであつたのだ。軍艦、或は飛行船頭の金田氏 孫さん、坊主の奥野氏、その他雨森氏とか云つた人達が偉ら相な顏をして出入して居たものだ。所々にしか硝子のはまつて居ない硝子戸の中に一つか二つの山の本があり、教室で使ふ斜めになつた黒板が置いてある。薄ぎたない壁の一面に南北アルプスの位置を示す廿萬の陸測圖が七八枚繼ぎ合せてはりつけてあつた。

窓から下を瞰ると日淸戰爭の時にぶんどつて來たとか來ないとかいふ様な泥で出來た滿洲式食堂が見える。よく耳を澄すとその後の物置きからエイツ〳〵といふ親不幸なドラ聲が聞えて來る。そこにバツク臺があつたのだ。

ごみだらけの階段の下には大きな木の箱があつて、その中にはテニスのネツトや野球のバツト、マリなんかゞ入れてあつて、Sつた時の遊び道具になつて居た。その時分は假令ゝしても今の様に麻雀や撞球の如き亡國的遊戲には耽らなかつた。

何時、何處でどんな風に相談したか忘れてしまつたが兎に角山岳會なるものが出來上る事になり、日本アルプスへ行く事が先に議せられ、その後で一橋山岳會といふものゝ發會式が擧行されてゐる。こゝ等はどうも金田式らしいと思ふ。

大正十一年度の私の日記によると、六月廿日に私は第一班の第二隊に編入され、金田氏をリーダーに仰ぐ事に決定したと書いてある。そして面白い事にその翌日卽ち六月廿一日の放課後に化學室(木村さんの建物)で山に就いての講演會があり、一橋山岳會の發會式が行はれたとしてある 其の時は木暮さんが來て、額の横皺をのばしたり、縮めたり、ヒゲだらけの口をパクゝさせて秩父の話をして呉れた。槇さんも「山の彼方に幸ひがあつたり」する様な事を語つて私達をして非常にあこがれの彼方に導いて下さつた様に思つてゐるが日記にはどういふ譯か槇さんの來た事が落ちてゐる。

こんな風にして山岳部といふものは出來上り育つて行つたのだ。育つて行く間に進化か退化か知らないが獸にされたり、鳥にされたり、昆蟲に化けたりした。化けないものは仲間外れになつて消えて行つた。こうして一橋山岳部なるものは人間を人間以外のものにする機關ではあつたが私には學校そのものよりも世にも有難いものになつてしまつた。河合榮治郎がなんと云はうと私には大學といふが如きは二の次で山岳部あつての商大であつた。動物あつての一橋であつた。心からの友といふものは

山岳部以外では決して出來ないのぢやないかと迄考へてゐる。

（吉澤一郎）

◇

彼は元は快活な男だつた。その頃、山岳部の部員は米や味噌を持つて秩父へよく出掛けた。費用とては二三圓たらずの汽車賃だけだつた。

その後、世間では山登りが流行しはじめ、彼の屬する山岳部も對外的に有名になつてきた。夏は岩登りの練習に多くの部員は山の中へ長い期間閉ぢこもつた。冬はスキーでの山登りが盛になつて來た。多くの部員達は勇ましく一年中ぶつ通しに活躍した。

が彼は一人ボツチ取り殘されてしまつた。經濟的に皆のあとを追つて行く事が到底出來なかつた。曾ては大いに共に山を語つた山友達は、次第に彼だけをのけ者扱ひにする樣になつてしまつた。

併し彼の山に對する愛着は消えぬ。稀には少し位の無理はしても出掛けた。けれども、そんな貧弱な山行を、山岳部は認めては呉れなかつた。

彼をかう考へた人達も居やう。彼にはもう山への熱情がないのだ、眞劍さがないのだ、と。

× ×

彼は獨りボツチだつた。それでも山岳部から出て行く氣は毛頭なかつた。山への情熱は深く彼の腦裡に秘められてゐるのだ。（稔）

◇

玄文澤のテントを閉めて、中尾峠に向ふまでは大した雨でもなかつたのに、峠の茶屋で晝食をとる頃から雷雨が激しくなつてしまつた。峠から中尾までの長い下り道を丹念に濡れとほして、一人身の心安さから格別急ぎもせず、休みもせず單調なペースで歩いた。蒲田川の吊橋を渡つてからは、雨の中でも行き違ふ行商など二三人に出逢つて、兎角急ぎたくなつて來た。古い墓所や、流された家の跡を左右に見る頃は雨も下界の雨になつて、音も無く沫もなく、降ると言ふよりは漂つてゐた。一日で赤く錆びたピツケルをコツ〳〵と叩いても誰も出て來ない靜かな宿屋だ。未だ日暮でもないのに雨戸をたてて薄暗い入口には濡れた蓑笠が投げ出してある。

「誰か居ないかね」と呼んでみても返事もない。仕方がないから玄關に荷をおろして一服やる。溪向ふの山は穩かに煙つて白い雲を吐いてゐる。百姓が感情の無い顏で鋤を擔いで通る。風の加減でパラ〳〵と一時に雨滴が落ちる。入口の籠の中で小鳥が一羽、轉りもしないで首をかしげてゐる。これが蒲田の溫泉である。

やつと通された二階の角座敷は寒いけれど明るかつた。襯衣を着替て丹前にくるまつた自分は柱に倚りかゝつた儘、しばら

くはボンヤリしてゐた。淹れた茶もうまかつたし高野豆腐のやうな菓子も甘かつた。一緒に湯へ行かないかと勧める主人と、ヤンチヤな子供三人と傘をさして三四丁も川上にのぼると、河床に露天の風呂がある。四日前にセメンで塗り固めたばかりだが今日は多分入れるだらうと、主人は指でセメンを押して居る。岩の蔭に着物を挿入れて湯に入ると、それだけ湯が溢れる。蛞蝓が何匹も溺れてゐたが皆流れてしまつた。逞しい主人も、利かん氣の兄弟たちも我勝に湯につかる。肩や頭に大粒小粒の雨が降り注ぐ。岩の上を無器用に飛んで蒲田川の水で顔を洗ふ口を嗽ぐ。満足である。

夕食を終てから提燈を借りて又一人で湯に漬る。そして總ての役を果した自分は徐ろに明日以後の豫定を樹て始めた。フト氣が付くと部屋の隅に新聞紙が片付けられずに殘つてゐた、見ると驚いた。寢そべつてゐたのを急に坐り直して、改めて讀む。遭難。墜落。商大生。

呼び入れた主人に富山までの交通を聞き糺してから、自分は散らかした荷物を整理し始めた。今夜はもう晩い。明日は五時だ。無論、槍平も止めだ。南澤もやめだ。然し、金は足りるか知らん。せめて鐘釣までででも行かなくちや。死んだとしたら、いやそんな事もあるまい、新聞は大袈裟なんだから。でもメンバーは誰々なのだ、此の記事ぢやまるきし見當も付かないがである。

蒲田は忘れられない温泉である。

（園　山）

◇

僕が豫科二年の時だからもう大分前の事だ。其の夏を海岸で過したKさんから次の様な端書を貰つた。

御通信ダンケ、

君の山行を祝ふ、

僕はすつかり海にしけ込んでしまつた、然し

淋しい山男は山へ、これが本當だ。

寂を求むる山人、靜を追ふシユタイガー

海は決して吾人をして滿足せしむる事は無い、

自由なる君の山行を心からよろこぶ。

この短い文字の中に眞によくKさんの氣持が現れてゐる。だが之はKさん一人の氣持ではない。

『淋しい山男は山へ、これが本當だ。』

◇

Aはよく山へ出掛けた。天候其の他の事情で不成功をする事はよくあつたが成功する場合も亦澤山にあつた。Bは一年に一度か二度しか山へ行かなかつた。成功と不成功との割合はAの場合と同じだつた。

そして第三者は、二人を只其の成功の量のみによつて比較した。

Bは登山能力が低下してゐると云ふ結論を下された。

（TOTZÁN）

◇

一部の山ズレのした人達。チョツキ、帽子のリボン。休みたくても彼等は休み茶屋の前をツンとお高くとまつて通り過ぎる。

なぜもつと樂な氣持で山へ行けないのか。

凡てが不自然な作り事ばかりだ。

◇

一人は經濟的に恵まれてゐて一年中山登りばかりしてゐた。一人は其の反對で一年に一度か二度位しか山へ行けなかつた。前者は何時も山と云ふ大きな存在の中へ這入り込む事が出來た。後者は山へ行けぬだけ、又それだけ深く山を考へる事が出來た。

共に山によつて恵まれた二人である。（稔）

誰だ！　靜寂を亂すものは

小梨平の夜は靜かだつた。きこえるのは水車の物憂氣な低いそして間歇的なきしりばかり、白い小梨の匂も感じられさう。

あふむけに寢ころんで晴た空のきらめく星を木間越にみつめてゐると、いつしか心はおだやかに凪いで、靜寂にとけこんでいつた。

無——無——無。

空幻的な靜けさの世界。

と、突然響くラッパの音。で、全ては再び現實に引きもどされてしまつた。水車の軋、輝く星、etc

誰だ！　靜寂を亂すものは。

圖書館の塔

石神井に通つてゐた頃、線路の傍の火見櫓にいつかのぼつて山を眺めてみたかつた。しかし、その望もはたされないで國立へ通ふ身になつてしまつた。

國立には火見櫓より何倍も高い圖書館の塔があつた。その上からは巨鯨の様な丹澤山塊の山々も、端正な富士も、黑い冠の様な大岳山も、雲取のかやとも、兜の武甲も、すべて一眸のうちに眺められた。晴れた日幾度かこの塔の上にきて感嘆の聲を擧げただらう。

× × ×

山を眺めに圖書館の塔にのぼるには秋から冬にかけての晴れた日がいゝ。わけても晴れた雪のあしたがいゝ。白銀の男体や赤城の姿をみることの出來るのはこんな日だから。（DON）

雨　男

山に入つて隨分雨に祟られた經驗をもつてゐる。誰とはなしに雨男だといふ。さういはれても一言もない程の自分である。

山に入つて雨に祟られるものは兎角山を下ると——それは悔しい程素晴しい天氣となる。皮肉つたらない。

山らしい山に入つたはじめである。八ケ岳で雨と霧の旅をやつたのがそもそもの祟られはじめである。藏王でも藏王のぼりの藏王知らずでしまつた。刈田岳から熊野岳への尾根での吹き降りは當時中學生だつた自分の膽を冷してしまつたつけ。

山岳部へ入つて初めての山は谷川岳。こゝでも雨に無爲の日を過して三國峠へ拔ける縱走を斷念しなければならなかつた。梅雨時だからとはいふものゝ、ルツクサツクを背負つて谷川の湯に湯冷に來たつて型だつた。あきらめて引きかへす日、雪を斑に殘してコバルトブルーの空を背景にしたオヂカ澤の頭を村はづれで見たつきりの谷川だつた。

日川谷では土砂降りの一夜を臍まで濡らして明して、實質的に一〇〇パーセントの懇親旅行をやつたし、赤石では徹頭徹尾ヅブ濡れになつたし——あの時だつた、行方不明つて新聞に書きたてられて迷惑したのは。

昨年の後立山も最初から雨だつた。十何日といふ陽の目見ずの日を過して退却したのだつたある。餘り自慢にもならないけれから數へ擧げてみるとまだあるを選んだものだとも思ふ。どよくもまあ雨の降る日ばかりを

負け惜みかも知れないけれど晴また晴と雨の降らない日ばかり續く山旅よりもいゝと思つてゐる。誰だかの樣に自分も矢張り雨を讃ふ。祟られた雨に愛着を感じてゐる。

（堀　研　也）

◇

山に居る時——縱令單獨行でも——山びとの小さい社會を通ぜずに、「山」を考へる事は出來ない。山に入るのは、人の世を逃出るのではない、人の世を山の中に齎すのである。併し私はそれを悲まかくて山は、常に俗化せられつゝある。併し私はそれを悲まない。自然の悠久を前提として人の世が營まれる以上、人は自然を破壞しなければ、自然を味はふ事も亦出來ない。

古への、また今の世の、自然の中に躬自ら沒入した人に、如何に人間世界との深く强い交涉を見る事か。

山の持つ不可思議な魅惑、唯それだけが山と私達との結付きを解き明かしてくれる。（山の神の子）

冗言

郭公の寂しく迫つた啼聲をきくとき、山の深さを感じる。部室の窓——初夏の淡青色の空を窓越しに眺めるとき、無性に山に行きたくなる。

× × ×

秋といへば、秩父の秋を想ふ。

唐黍を軒にならべた人家、朱い柿の實、茅の原、etc。

× × ×

都會の欲念を避けて山に入るのではない。山に入ると全て都會の欲念を忘れてしまふのだ。都會の欲念を忘れるところ、ここにも山の好さがある。

（D O N）

報　部

昭和五年度

本年度幹事

代表　磯野計藏
庶務　太田又一
　　大友亮藏
記錄　增山淸太郎
　　十合健二
會計　淸水達雄
　　間瀨正
器具　丸茂平造
　　鈴木英雄
圖書　芋川稔一
　　園山德三郎

○**臨時針葉樹會**　六月四日　於如水會館
先輩吉澤一郎氏が上京されたので氏を圍んでの一夕を過した。

○**夏季登山計畫相談會**　六月七日　於一橋本科部室
今年は一般參加募集を燕、槍、上高地の一班だけとしてリーダーは增山(本一)に決定。何故か今年は北、それも上高地を中心とする計劃ばかりで主なるもの五班。

○**定例針葉樹會**　六月十三日　於如水會館
夏山を前にしての集り、先輩浦松佐美太郎氏よりの夏山に就いての注意があつた後、當夜わざわざお出下さつた松方三郎氏が幻燈應用であちらの山の思ひ出話をせられた。
(針葉樹會集會は毎月開かれてゐるが本部報欄には特別なるもののみを掲載することにした)

○**豫科夏季登山計畫相談會**　六月十七日　於石神井部室
出席者　(本科)中島嘉一郎、磯野計藏、横倉吟三郎、芋川稔一、小川竹夫、園山德三郎、高瀨進三、增山淸太郎、淸水達雄、鈴木英雄、丸茂平造、田中秀三郎、太田又一、(豫科出席者不詳)
豫科からの計劃はなかつたが、夏山計劃說明といふ名目で豫科へ行く。

○**臨時部員總會**　六月二十日　於部室
出席者　中島、磯野、久保田、芋川、園山、小川、高瀨、淸水、增山、田中、鈴木、丸茂、太田
對外的仕事が增加してきたので新に代表幹事を置くことにし、序に幹事の改選をやり前記の如くに決定した、但し豫科の幹事は從前通り。

○**針葉樹第五號發行**　七月一日
編輯委員及部員の月餘の努力で針葉樹第五號が生れる。

○**松倉榮司氏轉勤送別會**　八月十一日　於如水會館
出席者　(先輩)松倉榮司、浦松佐美太郎、奥野綱重、松木

謙三、近藤恒雄、村尾金二、（本科）磯野計藏、中島嘉一郎、芋川稔一、園山德三郎、高瀬進三、增山清太郎、清水達雄、太田又一

松倉先輩が日本郵船香港支店に轉勤されるので送別晩餐の宴を開く。

○臨時針葉樹會　八月二十九日　於如水會館

出席者　（先輩）渡邊、浦松、松木、奥野、矢作、村尾、赤城、近藤、曾田、高橋、（本科）中島、横倉、磯野、久保園山、清水、太田、（豫科）十合、大友、間瀬、先輩渡邊九郎氏上京歡迎の集り。今夏浦松さんが撮された穗高上高地の十六ミリを映す。

○九月十五日學校は住み慣れた一橋から國立へ移る。未だ部室は決らないが近日中に決定の見込。

（追記九月廿六日專門部舊教室の一部を一時凌ぎの部室としてふり當られた）

○定例針葉樹會　九月十九日　於如水會館

出席者　（先輩）中川、松木、村尾、赤城、近藤、高橋、（本科）中島、横倉、久保田、芋川、園山、高瀬、小川、吹原、關、中森、清水、增山、丸茂、太田、（豫科）十合、堀岡、小橋、安達、澤井

第三回のエヴエレスト探險に於てノエルの撮したものゝ複寫といふ The Epic of Mt. Everest. の十六ミリを映したので話題はヒマラヤの山におちて夜を更してしまつた。

○部報第二號發行　十月十八日

大正十五年第一號きりで中絶してゐたのを主として豫科及部員相互の聯絡に役立せるために再び發行することとし、こゝに增山の手によつて編輯發行された。

○部員懇親會　十一月二十一日　於新宿明治製菓

出席者　（部長）木村教授、（本科）中島、横倉、磯野、久保田、宇佐美、河相、高瀬、園山、小川、芋川、中森、勝田、鈴木、清水、丸茂、增山、太田、（豫科）十合、大友、間瀬、堀岡、小橋、宮川

木村部長さんを圍んでの文字通り和氣靄々の懇親會だつた。此の種の會合は例年持つてゆきたいと思ふ。

○奥野綱重氏轉勤送別會　十二月十日　於如水會館

出席者　（先輩）奥野、浦松、中川、近藤、松木、村尾、高橋、曾田、矢作、（部員）磯野、宇佐美、久保田、横倉、中森、芋川、丸茂、鈴木、小川、增山、清水、十合、堀岡、安達、大友、打橋、宮川、小橋、太田

一橋山岳部の生みの親である奥野さんが突然國際通運北海道支部詰となつて札幌へ行かれるので定例針葉樹會はその送別會となつた。時節はずれだがお別れにビールを飲んで上野驛までお送りした。

○**冬期スキー合宿準備會**　十二月十三日　於國立假部室

例年通り合宿は野澤の酒屋の三階。これもいつもの例だが準備會には四人の部員外申込みがあつたばかりだ。

○**第五セクシヨン會**　一月二十二日　於如水會館

出席校　本學（磯野、芋川、高瀬、中森、小川、增山、清水、太田、中森豫科）大友、堀岡、打橋、宮川）

早大、立大、東醫

左記の如き小講演と十六ミリの映寫とがあつて至極盛會裡に閉會した。

一、冬の鹿島槍ケ岳に就いて、（立大堀田君）

主として鹿島側登路よりの十二月における登行記錄の發表である。

二、十二月の鹿島槍に就いて、（本學磯野）

主として種池小屋を根據とした尾根筋の登行記錄の發表である。

三、白馬岳より黑部谷へ、（立大堀田君）

四、十六ミリ「秋と冬の鹿島槍」（本學磯野撮影）

（第五セクシヨン會の記錄に關しては本學司會のものに限り記載することにした）

○**部報第三號發行**　一月二十三日

第三號も引つゞいて增山がその編輯の任に當る。

○**定例針葉樹會**　一月二十三日　於如水會館

出席者　（先輩）中川、近藤、村尾、松木、（本科）磯野、芋川、宇佐美、高瀨、園山、小川、丸茂、清水、太田、中森豫科）大友、堀岡、間瀨、澤井

昨夜も映した「秋と冬の鹿島槍」を映して再びその美しさに陶醉した。

○**定例針葉樹會**　三月十三日　於如水會館

出席者　（先輩）森竹、中川、松木、赤城、村尾、近藤、高橋、（本科）磯野、金田、手塚、芋川、丸茂、增山、太田

先輩森竹五郎氏の渡歐送別會を兼ねて開かれる。中川さんの例の怪氣焰に時間を超越してしまつた。

○**卒業部員送別會**　三月十四日　於新宿中村屋

出席者　（卒業生）磯野計藏、手塚晴雄、金田一郎、河相薫、横倉吟三郎、宇佐美敏夫、久保田禮治、（部員）芋川、園山、增山、清水、田中、丸茂、勝田、太田、賀井、中島（正）、（先輩）松木、赤城

例年よりずつとおくらせて試驗の最終日にやる。試驗もすつかり終つたしといふのでおちつけた數時間菓子を頬張つて思ひ出に花を咲かせた。が、唯一つの殘念なことは病を得て鄕里に靜養中の中島嘉一郎君の顏のみえないことだ。

昭和六年度

本年度幹事

代表　高瀬進三
庶務　太田又一
記錄　小橋謙三
會計　増山清太郎
器具　打橋壽郎
圖書　清水達雄
　　宮川雄二郎
　　丸茂平造
　　芋川稔一

○定例針葉樹會　四月七日　於如水會館
出席者　（先輩）五十嵐夫妻、中川夫妻、松木夫妻、渡邊夫妻、村尾、近藤、矢作、赤城、高橋、曾田、横倉、宇佐美、金田、（本科）高瀬、芋川、吹原、關、中森、清水、鈴木、太田、間瀬、増山（豫科）打橋
松木、渡邊兩先輩の結婚披露と銘を打つた定例針葉樹會、――で、いつもの調子のでない、すつかりあらたまつた雰圍氣の裡に閉會した。

○昨秋來の專門部舊校舍階上の假部室より四月二十一日本館裏本科部室に移轉。これも一時凌ぎの假住居。この日圖書館裏雜木林中に新設しつゝある山岳部々室が上棟される。

○部員總會　四月二十二日　於國立部室
出席者　芋川、高瀬、園山、小川、増山、清水、丸茂
鈴木、間瀬、十合、太田

議事左の如し、

一、新らしい部室が出來るため その維持費の 捻出に部費の値上をすることに決定。（詳細は部報第四號を見られたし）

二、國立へ引越して來たので 專門部からも 積極的に部員を勸誘することにする。

三、昨秋着手されて一時立消の 型となつてゐた 部規則改正を新たに芋川、高瀬、増山の 三委員を擧げて 起草されることとなる。

○新入部員歡迎會　四月二十五日　於石神井部室
出席者　（本科）高瀬、園山、小川、清水、増山、太山、大友、間瀬、（豫科）堀岡、宮川、打橋、安達、伊藤、澤井、賀井
新入部員――中島孚（豫三）林俊介（豫一）　今年どかつと卒業された後、新らしい部員が二人とは 物寂しい。だけど 石神井のお菓子とお茶で暗くなるまで 話をはずませた。

○部報第四號發行　五月八日
第四號の編輯は小川、その 編輯後記振りで 一躍名編輯の名を喧傳された。

○定例針葉樹會　五月八日　於如水會館
出席者　（先輩）浦松、近藤 夫妻、松木 夫妻、村尾、中川、

磯野、久保田、冠木、（本科）芋川、高瀬、園山、小川、吹原、中森、増山、清水、田中、丸茂、十合、大友、間瀬、（豫科）堀岡、小橋、宮川、打橋、伊藤、賀井、澤井、林

磯野君の春の收穫　四月の乘鞍」（十六ミリ）を映す。集るもの三十三人といふ今までにない盛況さ。餘り集まりすぎてとまでいはれた會合だつた。

○臨時針葉樹會　五月十日　於國立部室

出席者　（先輩）磯野計藏、横倉吟三郎、松木謙三、村尾金二、近藤恒雄　矢作太郎、（部員）園山德三郎、高瀬進三、芋川稔一、小川竹夫、清水達雄、勝田一郎、間瀬正、丸茂平造、小橋謙三

本學國立移轉記念祭の日、中ば出來上つた山岳部室で開いた。天氣もよかつたし、ビールも豊富だつたし、兎に角晩春の一日を大いに飲んで樂しんだ。

○本科豫科合同相談會　五月二十四日　於如水會館

出席者　（本科）高瀬、芋川、小川、園山、關、中森、丸茂、鈴木、増山、清水、太田、十合、（豫科）堀岡、宮川

國立へ引越して以來、豫科との顏合せが少ないので一度でも多くしやうと本年度購入器具及圖書に就いての協議に名をかりて開いたが、急に日時の變更から豫科からの出席が少なくて、その意圖もおぢやん。

○新山岳部室落成披露會　五月三十一日　於國立部室

出席者　（先輩）松木　近藤、高橋三夫妻、浦松、村尾、金田、磯野、（本科）芋川、高瀬、園山、小川、吹原、鈴木、清水、丸茂、太田、勝田、伊藤、賀井、澤井、林

計劃してから一年、建築に着手してから一ヶ月餘の日數で去る二十八日悉く竣成した部室でその喜びを分つために在京先輩をお招ぎして心ばかりの披露の宴をひらく。若葉につゝまれた部室で電燈のつくまで愉快に談笑して散會。

○夏季登山計劃相談會　六月十一日　於如水會館

出席者　芋川、高瀬、小川、園山、吹原、關、中森、清水、鈴木、丸茂、増山、高見、大友、間瀬、勝田

今年も一般參加募集計劃を左の二班と決定。

1　燕、槍、上高地　リーダー　小川竹夫

2　烏帽子、槍、上高地　リーダー　鈴木英雄

部員の外の計劃は當日は決定をみなかつた。

○定例針葉樹會　六月十七日　於如水會館

出席者　（先輩）吉澤、浦松、高橋、村尾　近藤、松木、矢作、金田、磯野、手塚、宇佐美、横倉、久保田、（本科）高瀬、園山、小川、増山、清水、鈴木、十合、高見、丸茂、間瀬、太田

去日太平生命東京本社詰となられた吉澤さんの歡迎會を兼ねて開かれた。にぎやかなあの會もあの大きな地震で尻を

たちきられた型。

○豫科夏季登山計劃相談會　六月廿日　於石神井部室

出席者　不詳

今年も北が相變らず多い、劔を中心とした計劃の多いのも去年のそれと比べて頷かれる。北は九班、南は唯一班。それに北海道と東北朝日とが一班づゝ。

○部報第五號發行　七月五日

編輯者は鈴木英雄。

○定例針葉樹會　七月十日　於如水會館

出席者　(先輩)小栗、浦松、中川、松木、村尾、吉澤、近藤、高橋、手塚、金山、横倉、(本科)芋川、小橋、堀岡、宮川、賀井、(専門部)吉澤(松)、(豫科)伊藤、打橋、清水、鈴木、丸茂、(専門部)吉澤、手塚、金山、横倉、(本科)芋川、小橋、堀岡、宮川、賀井、(専門部)吉澤(松)、(豫科)伊藤、打橋、清水、鈴木、丸茂、高橋、磯野、宇佐美、久保田、(本科)芋川、高瀬、園山、小川、増山、太田、清水、宮川、賀井、伊藤

小橋の小康を得たので宇奈月の病院へ殘して一先歸京の夜、報をうけ、愕然、急遽在京先輩及部員夏季本部近藤氏宅に參集。集るもの浦松、近藤、松木、磯野(先輩)、清水、太田。その善後策を講じ同夜増山太田兩部員救援に上野を出發す。

○臨時部員總會　十一月五日　於國立部室

出席者　高瀬、芋川、園山、小川、増山、清水、鈴木、丸茂、大友　十合、田中、吉澤、加藤、太田

かねての懸案だつた部規約の改正草案が委員の手によつてなり、それを俎上に審議修正をする。(部規約に就いては部報第六號を參照せられたし)

○田中薫先生歸朝歡迎會　十一月十日　於如水會館

出席者　田中薫先生、(先輩)吉澤、近藤、磯野、金田、宇佐美、中川、村尾、横倉、高橋、久保田、手塚、(部員)園山、小川、増山、太田、清水、大友、鈴木、高見、吉澤(松)、林、太田

三年半の留學を終へられて最近歸朝された田中薫先生が出

席せられ定例針葉樹會は歡迎會となつた。
中川さんが前座だといつて先日の休みを利用して魚沼駒へ行つた話をされた後、先生のあちらでの三年間の感銘深いお話を拜聽して、十一時閉會。

○第八回第五セクション會 十一月十二日　於神樂坂紅谷
出席者　本學（芋川、園山、增山、清水、高見、十合、吉澤（松）、太田）、早大、立大、東醫、松高（代理）
いつも新宿ばかりではと思つて場所を變へ、氣分を變へる意味で神樂坂を選んだ。岳聯の總會を前に控へての集りだ。

○那須皓先生を圍む座談會 十二月一日　於國立部室
出席者　那須皓先生、高瀨、芋川、小川、園山、增山、丸茂、高見、鈴木、勝田、太友、十合、吉澤（松）、太田
「スイス日記」「ハイランド」の著者として夙に令名のある故辻村伊助氏の親友である那須教授をお招ぎして山の話をおうかゞひする。話は自づと辻村氏を中心としたものとなる。十二月九日

○一橋山岳部々歌出來上る
先輩近藤さんの斡旋で石川強氏作曲で出來上る。歌詞は針葉樹第一號所載の松崎武雄氏作詞「山讃賦」藤原敏氏作詞「一橋山岳部に寄する」

○定例針葉樹會 十二月十一日　於如水會館
出席者　（先輩）浦松、中川、松木、近藤、磯野、金田、手塚、宇佐美、（本科）芋川、高瀨、園山、鈴木、增山、丸茂、清水、高見、太田、大友、十合、（豫科）堀岡、安達、宮川、打橋、小橋、安達、林、（專門部）吉澤
一橋山岳部々歌披露を兼ねた集り。今夏小黒部で負傷した小橋が全快して出席した。

○卒業部員送別會 三月十五日　於銀座千疋屋
出席者。（卒業生）芋川稔一、園山德三郎、高瀨進三、小川竹夫、中森長太郎、關守三郎、（本科）增山、清水、太田、鈴木、丸茂、高見、勝田、十合、
今年もまた優秀なメンバーがどかりと出て行かれる、いつもながら送別會つて變な氣持のするものだ。
因に本年度卒業生は前記の諸君の他に吹原不二雄、（專門部）吉澤松次郎の二君。

○臨時針葉樹會 三月二十七日　於如水會館
出席者　（先輩）五十嵐、松木、吉澤、矢作、村尾、近藤、中川、手塚、磯野、金田、久保田、（本科）園山、高瀨、太田、清水
五十嵐數馬氏の上京歡迎晩餐會。磯野君が今冬十勝岳で撮られたものやその他の十六ミリ數種の映寫でさながら映畫會の樣だつた。

昭和七年度

本年度委員

代表　太田又一

庶務　十合健二

　　林　俊介

會計　大友亮藏

記錄　打橋壽郎

圖書　鈴木英雄

器具　堀岡清

○新入生歡迎會　四月二十三日　於國立部室

出席者　增山・清水、丸茂、十合、鈴木、太田

本科、專門部合同歡迎會とはいふもゝのすこぶるさゝやかなもの、新しい部員として豐田忠巍(專一)唯一人。

○豫科新入生歡迎會　四月三十日　於石神井部室

出席者　(本科)增山、高見、清水、鈴木、十合、堀岡、(豫科)澤井、林

山の十六ミリをわざわざもつて行つて映したりして宣傳こそれ努めたのだがはつきりした新入部員は一人もなし。

○部員總會　五月十二日　於國立部室

出席者　增山、鈴木、清水、高見、加藤、堀岡、小橋、打橋、伊藤、太田

本年度委員の改選を行ひ前記の通り委員の就任をみた。

「針葉樹」第五號紀文「東北朝日連峯雜記」の中、左の如く訂正す。

頁	行	誤	正
一四四	九	東、側	西側
同	十一	東、側	西、側
一四九	三	南、寒河江	北、寒河江
同	同	北、寒河江	南、寒河江
一五三	九	はくさんんらふう	はくさんぼうふう

「針葉樹」第三號及第五號の殘部が數册御座いますから御希望の方にお頒ち致します。定價は共に金壹圓五拾錢、書留で御送金下さい。

編輯後記

「十週年記念號」と銘打つたこの第六號が、それらしい記事も載せずに甚だ不徹底な形で、しかも非常に後れて出た事は、專ら編者の怠慢に出る所で、先づお詫びしなければならない。

田中薫先生の玉稿で巻頭を飾る事の出來たのは、編者の最も欣幸とする所で、厚く御禮申上る次第である。吉澤一郎氏の『今から十年前』の御寄稿は極めて貴重な文字であるが、短文の爲に本欄に組込む事が出來ず、止むを得ず「山小屋」の初頭に掲げた。

學窓を去る日の遠からぬ私は、十年の中の丁度半分ほど山岳部に籍を置く事になる。その短い間にも部の中に大きな變化を認める。それは玆に六册の「針葉樹」が最も雄辯に物語つてゐる。この第六號に、十年の變遷を織り込まうとした私達の企圖は始めから無理であつたのかも知れない。此の際六册の「針葉樹」を繙く事こそ、十週年を記念するに最もふさはしい事であらう。（增山）

編輯委員　增山清太郎　太田又一
　　清水達雄

昭和七年七月二十七日印刷
昭和七年八月一日發行

定價　一圓八十錢

編輯兼發行者　東京市外高井戸町中高井戸一六　增山清太郎
印刷者　東京市外澁谷猿樂町五十一番地　並河三郎
印刷所　東京市外澁谷猿樂町五十一番地　眞興社印刷所

東京府北多摩郡谷保村國立
東京商科大學內
發行所　一橋山岳部

『あゝ、實にいゝ心地だ！

山で知る サロメチールの快よさ！』

擦り込んで一休みすれば、清爽なる快感と共に
痛みも疲れも氣持ちよく徐々に消えてゆく……。

『リユックサックにサロメチール』それは打み、挫きに或は疲勞回復に必携藥とされ、旅行、登山の一常識である。

一管のサロメチールがあれば、疲れた足で強行する如き心配もなく、心ゆくばかり旅の愉悦を享樂し得る。

山に、旅に……必携の

スポーツ藥

サロメチール

一円と 五十錢と 藥店にあり

滋味強壯

肉鐵ドロップス

医学博士 岡田道一先生推奨

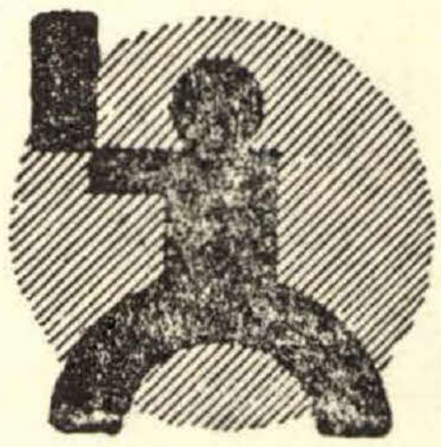
サクマ式

ドロップス

チョコレート

玉露

オレンチ



電氣製

コロイド鐵劑入

五大特色

1 甘味にして兒童に愛好さる。
2 吸收速かにして胃腸を害せず
3 茶 珈琲を併用すると差支なし
4 血液の改造增殖をなし身体を強壯にす
5 運動 旅行等の疲労を忘れ元氣旺盛となる

血を增し
疲労を恢復す
萬人愛好の
新滋養菓！

定價 大五〇錢 小二〇錢

サクマ式 ドロップス チョコレート 玉露 オレンチ 製造元

佐久間製菓株式會社

社會式株

高瀨商店

阪大・濱橫・京東

北アルプスへ

お出の節は是非お立寄り
下さいませ。
お待ちして居ります。

松本驛前角

鐵道省御指定者

飯田屋旅館

電話(局)二七番
大一四番

市外專用二番

夏は避暑 冬はスキー

一度來た人は其の味を
忘れる事が出來ません

上州

谷川溫泉

谷川館

ずま含を劑腐防に對絶

特製 月桂冠 壜詰

一本毎に衛生試驗所證明封緘付

『呑み心地、
醉ひ心地、
醒め心地、
よくも揃つた月桂冠』

宮内省御用達

株式會社 明治屋 發賣

宮内省御用達 大倉恒吉商店吟醸

斯界の權威者指導下唯一の

都天幕

ルツクサツク

專門製作店！

神田區今川小路二ノ四

神保町ビルヂ一階

片桐商店

森永ソフトチョコレート

新發賣（ポケット用）

十錢（二五瓦入）

このチョコレートには溫度の關係による變敗凝固の憂ひが絶體にありません

森永ソフト・チヨコレートは清新なチユーブに入れた最も近代的な「**やはらかいチヨコレート**」です。

用途

ケーキ
ジエリー
サンドウイツチ
アイスクリーム
ソーダ水
ソフトドリンク

靴山登と靴ーキス

——御申込次第カタログ贈呈——

登山家實用向

特價品金拾圓也

◆鋲 靴{ 登山と ーキス

圓五十……製革水防

圓二十……製革水防

◆ すまりあに富豐各 (錢六本一)ルーテンリク (錢五本一)ーニコリト

尚地方御注文の節は足形及足袋文數を御申越次第實費代金引換小包便にて御送附申上げます

各大學山岳部御用

店靴久布津

通車電地番拾六町肴區込牛市京東

○六四一(34)込牛話電

番四八八一四京東替振

登山用具は松坂屋

壯快な夏山の御用品は一切内外の優秀品を蒐めて陳列いたしました。猶ほシーズンの割引切符も上野店鐵道案内所にてお取扱ひ致します

上野◆銀座

松坂屋

大阪◆名古屋

泉溫澤野の雪

煙湯ぐ搖雪粉る昇ひ舞

郷想理のーヤーキス

飯山鐵道上境驛より三十町

雪質良好・湯量豐富

内湯

さかや旅館

電話十八番

登山と
キヤンピングの
用品
カタログ進呈
MOUNTING
&
CAMPING
川口屋林銃砲火薬店
運動具部
東京市日本橋區本銀町二丁目・電話日本橋(24)920-922-923

『春のピクニックに!!
登攀の好侶伴!!
國産パインアップルの代表品
スムース・パインありて
一抹の涼味と元氣を與へん』

製品等級
エキストラ（金線印）
スタンダード（青線印）
プローク（黒線印）

NSK

パイン
スムース
缶詰未品に優る

内外食品株式会社

山岳用SKI

ヒツコリー材とイタヤ材
優秀なる選材と
精密なる自然的
製作法に依る
ハガのスキー

山岳用ストツクと
スキー靴

芳賀スキー店
札幌市圓山六丁目
電話 385番
振替小樽 6860番

Tea Room

Blue Bell

Kunitachi

『渡り鳥（ワンダーフオーゲル）』の運動

ハイキングの樂み、ワンデルンの歡び

上信國境に展開された菅平と鹿澤の高原

獨逸を初めとして歐米諸國を風靡してゐる『渡り鳥（ワンダーフオーゲル）』の運動――青年男女が「旅人の歌」を合唱しつゝ渡り鳥の様に山野を跋渉して、簡單な旅舍に宿泊して歩く新しい旅――それは我國に於ては東京に近い上信國境に見出されました。

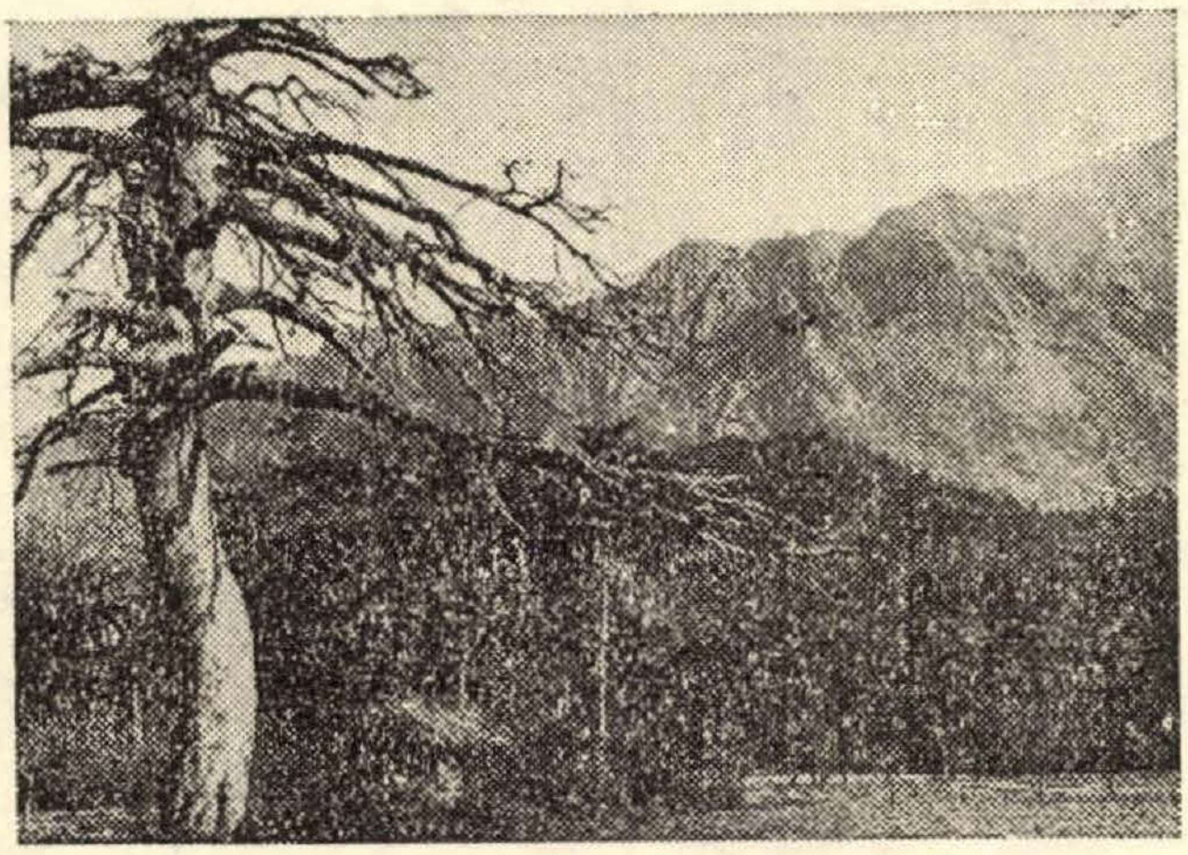
『渡り鳥（ワンダーフオーゲル）』の青年宿泊所（ユーゲントヘヤベルグ）として、菅平高原には**菅平ホテル**あり、鐵道省の「**山の家**」があり、鹿澤高原には「**渡り鳥**」があり、**新鹿澤溫泉**があります。

火の山淺間山麓の荒凉たる鹿澤牧場の一軒家に、淋しく宿つた夜半、大爆發の音響に驚いて眼をさますのも、上信國境に於ける「**渡り鳥**」の收穫の一つでせう。

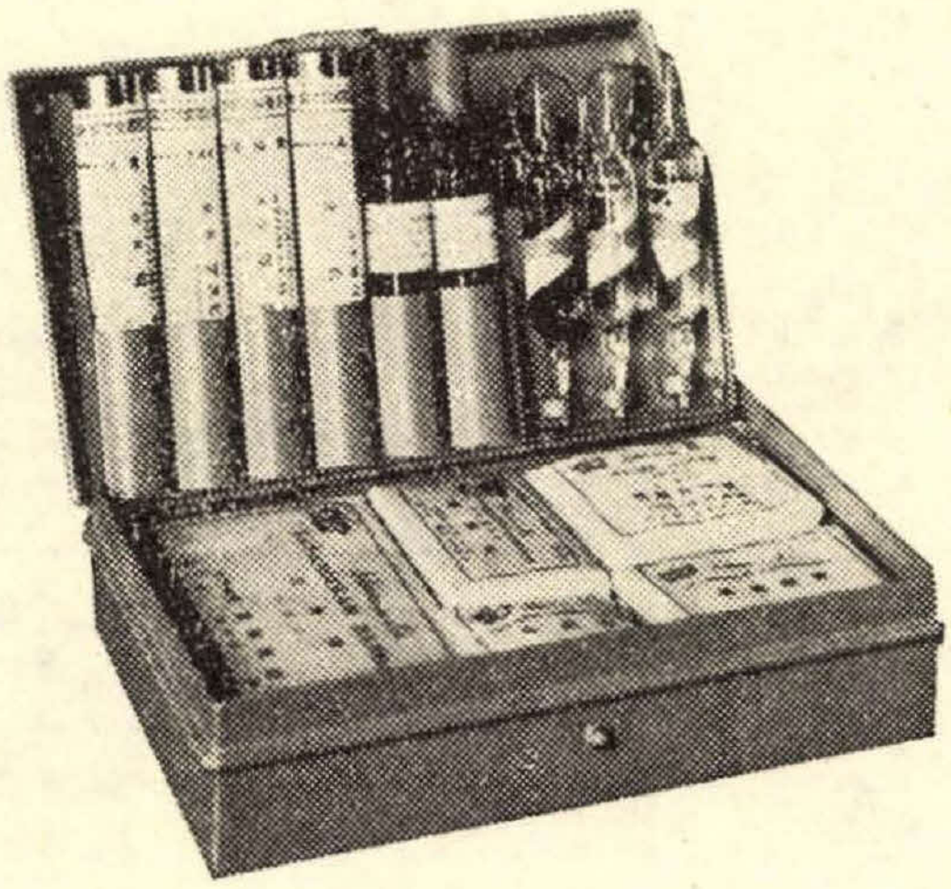
案内記は左記へ御申込次第差上げます。

信越線上田驛前　上田溫泉電軌株式會社

ALPINEKIT



アルパインキツト



——御申越次第カタログ進呈——

¥ 5.50

旅行に
避暑に
登山に

是非お忘れなく

輕くてスマートで
そして丈夫な容器

重量……525瓦
10糎
容積……16糎
4,5糎

合資會社 秋草商店
東京市淺草區柳橋

黒田初子著

婦人の山とスキー

數々の普通の山登りはもとより、岩攀りに、スキー登山に、男子の難しとする所の多くを成し遂げた女流登山家の第一人者が、特に女性のために書いた最初の山岳書。婦人に向く登山や舉げて示し、服裝・用具・携帯品等山やスキーへの仕度や案内人の事などを說き、登行中の色々の注意を與へ、歸つてからの後始末まで述べてあります。總て十年の經驗を基としたもので、女性の先輩のみが知る、從つて婦人の最も知りたい事が數多く含まれて居ます。他に十八篇の興味深い隨筆と紀行が收めてありますが、それ等は未經驗者には山やスキーの美くしさ壯嚴さ樂しさを教へ、經驗ある人には感激を新にするでせう。山を愛する男性も、姉妹に、夫人に、女友達に本書を薦めて下さい。

四六判一七〇頁　定價八拾錢　送料拾錢

菅沼達太郎著

山岳服裝近代色

山に行かうとする時、最初の問題は何を着、何を穿き、何々を持つべきか等々である。山行を重ねる毎に新に考へさせられるのも亦この問題である。それは山行の快適に、時としては計畫の成否、生命にも關するから。本書は山にスキーに多年の經驗を有し、自ら服裝マニヤ、道具マニヤを以て任ずる著者が、氏一流の快文と八十餘個の挿畫を以て、登山・スキー・キャンピングの服裝と用具を詳細に語れるもの。その變遷史であり、近代色であり、運動具店に行く前に、先づ本書の一讀を奬む。それ等は又、山仲間の望ましい常識であり、盡きぬ話題でもある。山の用品を商ふ人々にも參考に供されたい。讀物としての興味亦滿點。

四六判一九〇頁　定價八拾錢　送料拾錢

黒田正夫著

登山術（夏山）

新しき日本の登山界の要求を充たさんとする新しき登山術書である。先づ登山の精神と各種の山行に應ずる準備を述べ、登山の第一豫備知識とも云ふべき地圖の讀み方に就ては數種の寫眞と地圖とを對照して具體的に說明し、現代の氣象學と山間の住民の所言を併用して山の天候とその豫知法を示す。氷なき日本の登山の最高技術たる岩攀り術は、また本書の重心であるが、登山家の聖書と云はるゝヤングの『マウンテン・クラフト』に據り、原書になき多數の圖解を挿入してバランス・クライミングの精粹を傳ふ。雪渓滑降の快を滿喫せしむるグリセードの各種のテツニック、澤傳ひ、その徒渉、藪くぐり等に就ても說かれて居る。山の危難に就ては一々實例を舉げて注意を促し、最後に山の再現としての寫眞術と寫生法を述べてある。

菊判二七〇頁　定價貳圓　送料拾四錢

□高原と峠□　田部重治著　定價壹圓五拾錢　送料拾錢

□上越國境□　角田吉夫著　定價貳圓貳拾錢　送料拾四錢

□東京近郊の山と溪□　菅沼達太郎著　定價壹圓五拾錢　送料拾錢

東京市小石川區武島町拾番地　大村書店　振替東京四六九七五　電話小石川五一二四

朋文堂の山岳書

東京市麻布區笄町一八〇番地
振替東京六四九

書名	著作者	版數	定價送料	體裁	年月
山の寫眞のうつし方	手塚順一郎	最新刊	一・八〇	四六判 三三〇	七年 七月
山を行く	高畑棟材	五版	二・五〇	四六判 五〇六	五年 六月
東京附近の山々	河田楨 高畑棟材	十三版	一・〇〇	三六判 二八四	六年 六月
奥秩父と其附近	同	五版	一・〇〇	三六判 二七〇	六年 八月
南アルプスと其溪谷	平賀文男	五版	一・〇〇	三六判 二六六	六年 六月
近畿の山と谷	住友山岳會	八版	一・二〇	三六判 三八八	七年 六月
九州の山々	北田正三	三版	一・二〇	三六判 二八〇	七年 六月
祖母嶽	百溪祿郎太	限定版	一・五〇	四六判 二三〇	七年 七月
寫眞集山のスケッチ	富田通雄 丸山東美男	限定版	六〇	四六判寫眞二一	六年 六月
山の手帖	明文堂	初版	四〇	ポケット形	六年 六月
原色日本高山植物圖說	河野齡藏	三版	三・五〇 一四	菊判クロス製 原色版五一枚	六年 十月

賜御用命

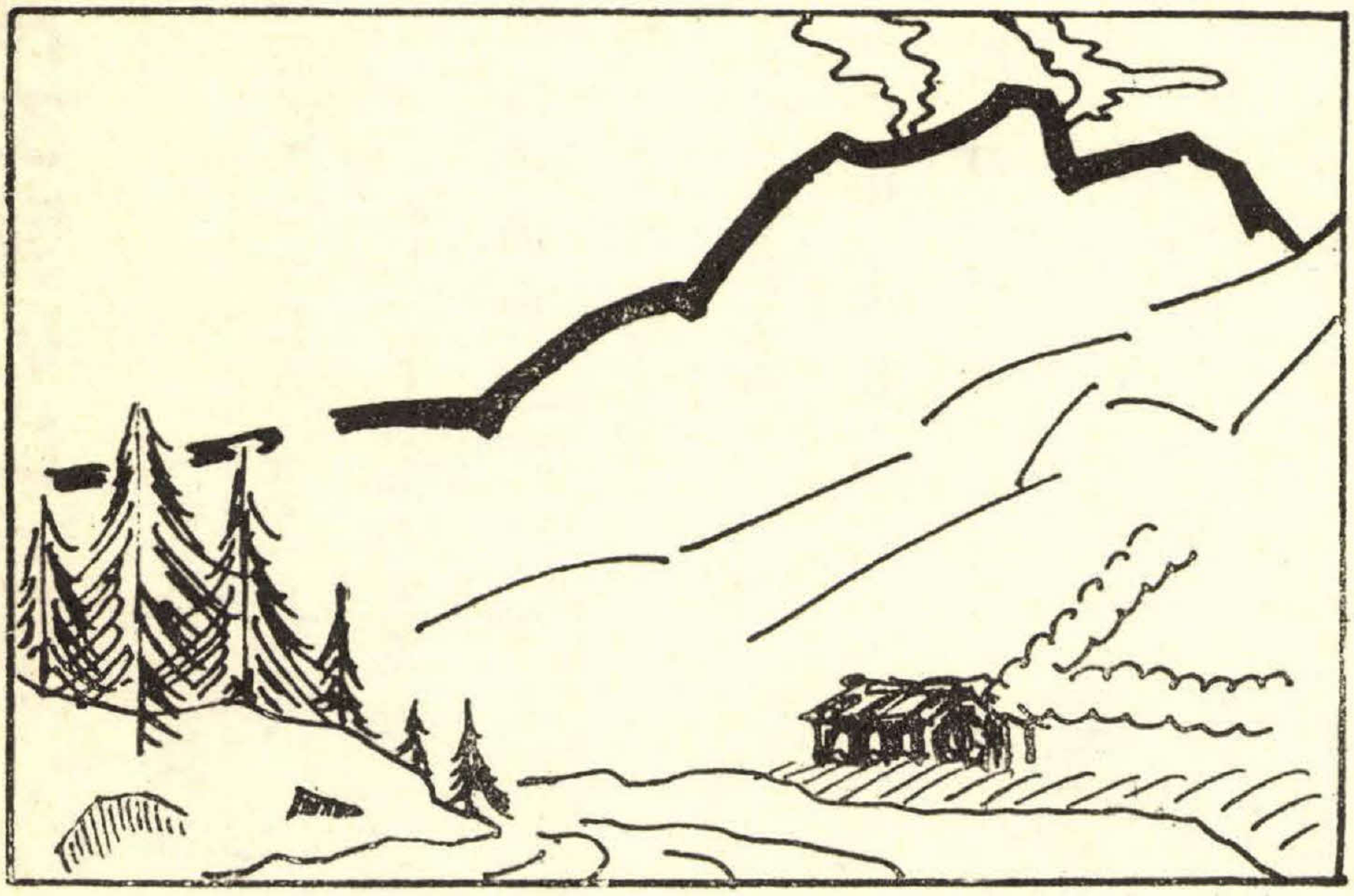
山岳大家の皆樣よりの御懇篤なる御指導の下に極力優秀品の製作に從事し居てすまり

登山靴とスキー靴專門

——御申越次第カタログ進呈——

山崎靴店

東京四谷大橫丁角



◇槍ケ岳、穂高岳へ

◇燒岳、霞澤岳へ

◇食堂と賣店がございます

◇案内人をお世話致します

上高地溪谷

ルテホ屋水清

養靜と樂行

箱根底倉温泉

高山園

蔦屋旅館

電話宮下六・五四・七六・一三七番

（辭拜代茶）

諸君、用意ありや？

野へ行くにも
山へ行くにも

常にカルケットの用意ありや？

僅か一個の **カルケット**も
多大の營養分を含む

一罐の用意は
一行の飢を脱し、元氣を増し、
キャンプの夕、團欒の中心をなす、

而も携帯に便なり

おいしい、じようのお菓子

カルケットの用意ありや？

全國到る處の百貨店 菓子店 食料品店に販賣す

（大、中、小罐各種あり）

大東京
大阪

中央製菓株式會社

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第１号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第１号～第６号は近藤恒雄氏所蔵本に，第７号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

『針　葉　樹』第６号　復刻

昭和60年７月25日発行

復刻版発行者　針　葉　樹　会
編纂担当責任者　佐　藤　久　尚
世田谷区船橋５-30-10

印刷所　㈱　平　文　社
豊島区南大塚２-35-７

男子用水泳着

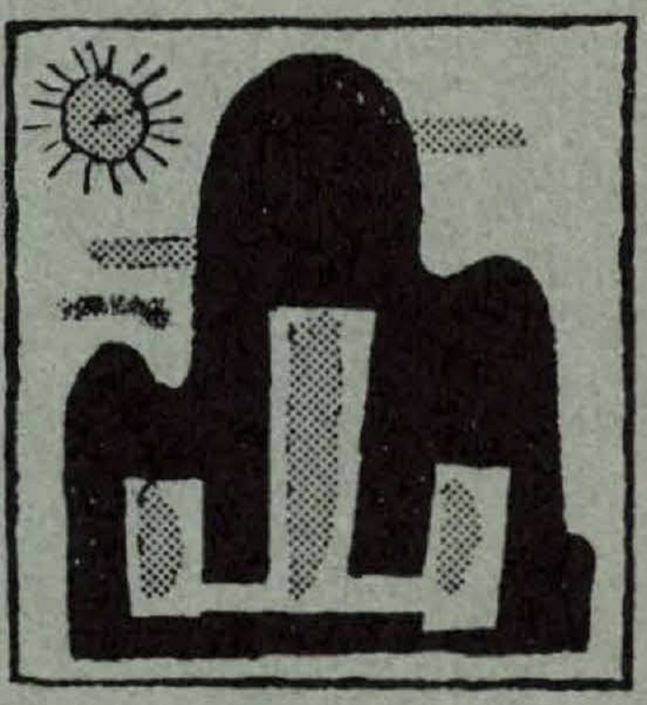
綿無地シングル…… 0.60ヨリ
毛　〃　…… 1.00ヨリ
本絹競泳用…… 2.00ヨリ
毛柄物…… 1.90ヨリ

女子用水泳着

綿無地ダブル…… 0.80ヨリ
毛無地ダブル…… 1.50ヨリ
綿柄物…… 1.50ヨリ
毛　〃　…… 3.00ヨリ

其の他海水帽、海水靴、**バンド**、**パラソル**海水用具豊富に取りそろへてございます。

海の用具



山の用具

リユツクサツク（スラゼンジヤー製）…… 12.00ヨリ
登山靴(和製)…… 12.50ヨリ
ピツケル(和製)…… 3.00ヨリ
ロープ（スキス製30米）
…… …… 14.00ヨリ
ランタン（和製）三角
…… 0.45ヨリ
〃　四角… 1.20ヨリ
コヘル　舶來…… 4.50ヨリ
〃　和製…… 3.80ヨリ
水筒(登山用)…… 0.80ヨリ
飯　盒…… 1.20ヨリ
鉈　斧…… 2.20ヨリ
鋸　(和製)…… 0.50ヨリ
キヤンプグレート（ヅツクサツク付）…… 1.00ヨリ
シヤベル　〃　…… 1.30
バケツ(ヅツク製)… 0.80ヨリ
ウオールポケツト… 1,50ヨリ

東京・神田・駿河台下

三省堂運動具部